

令和6年度  
ファカルティ・ディベロップメント活動報告書

玉 川 大 学  
大学 FD 委員会  
大学院 FD 委員会

## はじめに

### —FDの組織的推進をめざして—

玉川大学は、ファカルティ・ディベロップメント（FD）をマイクロ、ミドル、マクロの三層の立場から推進しています。マイクロ・レベルのFDの目的は、教員個々の授業と教授法の開発にあります。通常、多くの大学でFDの名のもとに行われるのがこうした活動です。本学でも、大学FD委員会および大学院FD委員会が中心になって行うFD活動はマイクロ・レベルが中心です。一方、ミドル・レベルは教務主任等によるカリキュラム・プログラムの開発が目的です。教務委員会や大学院教務委員会における全学カリキュラムの見直しや各学部・研究科の教務担当者会における専門分野のカリキュラム改善のための作業がこれに該当します。さらに、マクロ・レベルは、管理者による大学組織の教育環境および教育制度の開発が目的です。こちらもミドル・レベルと同様に、そのための具体的なFD研修会等が開催されるわけではありません。現行の大学部長会や大学院研究科長会の一環として定期的に行われる教育研究活動等点検調査委員会などの作業がFD活動に相当します。

ミドル・レベルとマクロ・レベルのFD活動は、その性格上、全学的な視点と学部・研究科的な視点が要求されますが、マイクロ・レベルのFDは、長いあいだ各教員の努力義務のように理解されてきました。したがって、ワークショップや講演会の参加についても教員の自主性に委ねられ、学部・研究科や全学が一体となって授業や教授法の開発に取り組んできたとは言い難い状況にありました。令和6年度は大学FD委員会、大学院FD委員会が組織的かつ体系的に関わり、教員の教育研究活動の向上、能力開発を恒常的に推進してきました。今回もそういった事例を報告いたします。

今後も引き続き、個々の教員がファカルティの一員として有機的にFDにかかわれる体制を堅持していきたいと考えています。

大学FD委員会・大学院FD委員会委員長  
教学部長 伊 従 記 章

#### 「求める教員像」

玉川学園の建学の精神を体し、その使命を自覚し互いに人格を尊重し、常に能力の開発・向上を目指し一致協力して本学の発展に寄与できる教員であること

1. 玉川大学学則第1条に定めるとおり、玉川学園建学の理想にかんがみ、「全人教育」をもって教育精神とし、広い教養と深い専門の学術の理論及び応用を教授すること
2. 学校法人玉川学園コンプライアンス方針に従い、教育・研究活動を推進すること

# 目 次

## I 大学 FD 活動状況と今後の計画

1. 大学 FD 委員会・大学院 FD 委員会	
(1) 委員会の目的 .....	1
(2) 委員構成 .....	1
(3) 今年度の活動計画 .....	2
(4) 活動状況 .....	3
(5) 活動の成果 .....	5
(6) 今後に向けて .....	6
2. 学部の活動 .....	7
3. 教師教育リサーチセンターの活動 .....	47
4. ELF センターの活動 .....	51
5. 授業アンケート .....	66

## II 大学院 FD 活動報告

各研究科の活動 .....	112
---------------	-----

## III 教員研修

### 新任教員研修会

(1) 研修プログラム内容 .....	140
(2) 配付資料・参考資料 .....	141
(3) 実施の成果 .....	142

### 参考資料

1. 大学 FD 委員会の議事内容 .....	146
2. 大学院 FD 委員会の議事内容 .....	148
3. ユニバーシティ・スタンダード科目「授業アンケート」様式 .....	149
4. 玉川大学 FD 委員会規程 .....	151
5. 玉川大学大学院 FD 委員会規程 .....	153

※本文中の記載内容について

・役職名称は、令和 6 年度当時の記載とした。

# I 大学 FD 活動状況と今後の計画

## 1. 大学 FD 委員会・大学院 FD 委員会

### (1) 委員会の目的

本委員会は、本学教員の教育研究活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的としている。また、FD 活動を行う目的を、以下のとおり明確にしている。

- ① 玉川大学の教育理念を実現するため。
- ② 21 世紀の玉川教育を支える教員を育成するため。
- ③ 大学大衆化時代に対応するため。
- ④ 競争優位性（受験生の大学選択等）を確保するため。

### (2) 委員構成

#### <大学 FD 委員会>

委員等	所属・職名	氏名
委員長	教 学 部 長	伊 従 記 章
委 員	文 学 部	中 嶋 真 美
委 員	農 学 部	肥 塚 信 也
委 員	工 学 部	三 木 秀 夫
委 員	経 営 学 部	矢 野 尚 幸
委 員	教 育 学 部	濱 田 英 毅
委 員	芸 術 学 部	長 裕 二
委 員	リベラルアーツ学部	中 山 剛 史
委 員	観 光 学 部	三 木 日 出 男
委 員	E L F セ ン タ ー	祐 乘 坊 由 利 ジョディー
事務担当	教 学 部 事 務 次 長	光 森 多 佳 子
事務担当	教 学 部 教 務 課 長	横 松 健 二
事務担当	教 学 部 授 業 運 営 課 長	中 山 靖 浩

#### <大学院 FD 委員会>

委員等	所属・職名	氏名
委員長	教 学 部 長	伊 従 記 章
委 員	文学研究科人間学専攻／ 英語教育専攻	長 谷 川 洋 二
委 員	農学研究科資源生物学専攻	南 佳 典
委 員	工学研究科システム科学専攻	加 藤 研 太 郎
委 員	工学研究科機械工学専攻	福 田 靖
委 員	工学研究科電子情報工学専攻	佐 藤 雅 俊

委員	マネジメント研究科マネジメント専攻	菊池 史光
委員	教育学研究科教育学専攻	原田 眞理
委員	教育学研究科教職専攻	伊藤 美紀
委員	脳科学研究科脳科学専攻 /心の科学専攻	高岸 治人
事務担当	教学部事務次長	光森 多佳子
事務担当	教学部教務課長	横松 健二
事務担当	教学部授業運営課長	中山 靖浩

(3) 今年度の活動計画

レベル	研修名	目的	内容	開催時期
全学	大学教育力研修 (SD・FD)	授業の内容及び方法の改善を図り教員個々の教育研究活動等のより一層の充実を目指す(FD)とともに、本学の運営に必要な知識・技能を身に付け、能力・資質を向上させる(SD)ことを目指す	<ul style="list-style-type: none"> <li>■基調講演 (SD 研修)</li> <li>■分科会 (FD 研修)</li> <li>・授業手法に関するワークショップ</li> <li>・現況の教育的課題に関するワークショップ</li> <li>・全人教育の実践に関するワークショップ</li> <li>・各学部事例報告 等</li> </ul>	2月21日
	授業手法に関する ワークショップ	学生の主体的な学びを促進する様々な授業手法の修得	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業時間内の学修を充実させる授業計画</li> <li>・授業時間外の学修を充実させる授業計画</li> <li>・授業改善につながるリフレクションの方法</li> <li>・教学 IR と授業改善の接続 等</li> </ul>	年1回
	ルーブリック指標による成績評価に関するワークショップ	授業を通して修得した能力を評価する体制を構築するため、ルーブリック指標による成績評価手法を修得する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ルーブリック指標による成績評価に関するワークショップ</li> </ul> <p>*新任教員対象</p>	年1回 (隔年) ※開催なし
	授業参観 (公開)	授業内容 (手法) の共有と授業改善	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業参観</li> <li>・授業参観にかわる研修会</li> </ul>	随時

職位別	新任教員研修	玉川学園の建学の精神、玉川大学の教育理念・教育方針を理解し、専任教員としての業務に必要な情報を修得する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・玉川大学の教育理念</li> <li>・大学教員の勤務</li> <li>・ICT教育の活用</li> <li>・教学システム</li> <li>・教学事項</li> <li>・学生支援 等</li> </ul>	3月中旬
	非常勤教員対象研修 (オンデマンド)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本学の授業を担当するにあたり、これからの高等教育改革を理解し、本学の教育が目指すものを確認する</li> <li>・授業評価の高い授業内容(手法)の共有と授業改善</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・玉川大学の教育理念</li> <li>・授業内容(手法)の紹介</li> <li>*オンデマンド</li> </ul>	8月～12月
学部	学部FD研修	教員個々の授業と教授法の開発	講演会、研修会、ワークショップ、調査、研究、学外セミナー等への教員派遣 等	随時
その他	FDer養成研修	実質的FD活動の推進のため各学部1名配置することを目的に養成講座を開催	FD活動の振り返り 等	要調整
	人事部 ハラスメント防止 研修	教職員がハラスメントについて正しい知識及び適切な防止・対処方法を身につけ、適切な行動がとれるようになること	ハラスメント防止研修	11月～2月

#### (4) 活動状況

<令和6年度>

5月16日	第1回 大学FD委員会 開催
5月22日	第1回 大学院FD委員会 開催
7月11日	第2回 大学FD委員会 開催
7月17日	第2回 大学院FD委員会 開催
9月11日	第3回 大学FD委員会 開催
11月15日	第4回 大学FD委員会 開催
11月29日 ～2月21日	ハラスメント防止研修 開催(動画視聴) (講師) 桑島 英美 本学園顧問弁護士
12月9日 ～1月31日	令和6年度 非常勤教員対象研修会(動画配信)
12月11日	第3回 大学院FD委員会 開催

1月24日	第5回 大学FD委員会 開催
2月21日	<p>令和6年度 大学教育力研修 開催</p> <p>基調講演「AI時代の大学教育」</p> <p>(講師) 愛媛大学教育・学生支援機構 教授 中井 俊樹 氏</p> <p>(講師) 東京大学大学総合教育研究センター 教授 佐藤 浩章 氏</p> <p>分科会</p> <p>① 「教育資源としての玉川キャンパス：労作教育を問い直す」</p> <p>(講師) 全人教育研究センター長・教育学部教育学科 教授 今尾 佳生</p> <p>② 「教職課程WS～新たな取り組み「学校体験活動A」「介護等体験」 の初年度振り返り～」</p> <p>(講師) 町田市立忠生中学校 校長 高橋 博幸 氏</p> <p>(講師) 横浜市立釜利谷中学校 校長 木村 典明 氏</p> <p>(講師) 川崎市立玉川小学校 校長 辰口 直美 氏</p> <p>(講師) 相模原市立藤野北小学校 校長 沼澤 俊宏 氏</p> <p>③ 「学生の主体的な学びを促進する授業設計ワークショップ」</p> <p>(講師) 芝浦工業大学教育イノベーション推進センター長・教授 榊原 暢久 氏</p> <p>④ 「授業の事例報告(グループ1)」【ハイブリッド】</p> <p>(講師) 文学部国語教育学科 講師 秋保 亘</p> <p>経営学部国際経営学科 教授 神谷 涉</p> <p>教育学部乳幼児発達学科 准教授 仁藤 喜久子</p> <p>観光学部観光学科 教授 コーテ, トラヴィス</p> <p>ELFセンター 講師 茂木 悠太</p> <p>⑤ 「授業の事例報告(グループ2)」【ハイブリッド】</p> <p>(講師) 農学部環境農学科 教授 石川 晃士</p> <p>工学部マネジメントサイエンス学科 教授 佐藤 健治</p> <p>芸術学部アート・デザイン学科 講師 栗田 絵莉子</p> <p>リベラルアーツ学部リベラルアーツ学科 講師 加茂 フミヨシ</p>
3月3日 ～3月7日	第6回 大学FD委員会 開催(メール審議)
3月14日	令和7年度 新任教員研修会 開催
3月24日	第4回 大学院FD委員会 開催
3月26日	第7回 大学FD委員会 開催

その他、学生による授業アンケートを、教学システム (UNITAMA) のアンケート機能を利用し、Webにて計画通り実施した。一部の集中科目を除いた全科目を対象として、通常学期の春学期と秋学期の期中および期末に合計4回、特別学期のサマーセッション (I期～II

期) およびウィンターセッション (I 期~II 期) に合計 4 回行った。アンケートの結果については、各教員が UNITAMA にて確認できるほか、科目群や学科・学部全体の平均値と比較できる授業別レポートを Notes データベースに掲載してフィードバックを行っている。また、大学 FD 委員会にてユニバーシティ・スタンダード (以下 US) 科目および学科専門科目の学部比較を資料にまとめて報告し、各学部での授業改善の取組に活用できるようにした。なお、各学部および US 科目のアンケート結果は本学のホームページにて公開している。

また、授業方法を共有し、自らの授業の改善につなげることを目的として、全学部および ELF センターにて、授業公開とそれに代わる取組を実施した。参加者数等の詳細は 2. 学部の活動に記述する。

## (5) 活動の成果

今年度の活動計画に基づき、教員と職員が同じスタンスに立って、教職協働のもと活発な FD 活動を行うことができた。

11 月から 2 月にかけて、人事部が主管となり、本学園顧問弁護士の桑島 英美氏を講師としてハラスメント防止研修 (動画視聴) を、全教職員を対象として実施した。

12 月 9 日~1 月 31 日にかけて実施した非常勤教員対象研修会は、昨年度に引き続きオンデマンド形式とした。この研修では、本学の授業を担当するにあたり、これからの高等教育改革を理解し、本学の教育が目指すものを確認することを目的として、教学部長による「本学が取り組む教育改革について」の講演を実施した。また、授業内容 (手法) を共有し授業改善の参考とすることを目的として、工学部マネジメントサイエンス学科 小酒井 正和教授と経営学部国際経営学科 田中 美和准教授によるそれぞれの担当科目の授業風景と本人による授業のねらい・解説の動画を公開した。受講者は 172 名であり、最多であった昨年度の 82 名を大幅に上回った。受講者からは「教育方針の理解が深まり、授業に活かせる内容が多かった」「学生の履修主義から修得主義への転換が重要と感じた」「授業外学習時間の確保が課題であると感じた」「学生の主体的な参加を促す方法が参考になった」「事前課題と授業デザインの重要性を再認識した」「学生が発言しやすい環境づくりが重要であると感じた」「本物に触れる教育の有効性を再認識した」「動画研修は時間や場所を問わないため便利である」「他の先生方の授業内容が非常に参考になった」といった感想が多く寄せられた。

2 月 21 日開催の大学教育力研修では、愛媛大学教育・学生支援機構 教授の中井 俊樹氏、東京大学大学総合教育研究センター 教授の佐藤 浩章氏をお招きし、基調講演として「AI 時代の大学教育」についてご講演いただいた。基調講演には 316 名が参加し、参加者からは「生成 AI の活用方法について具体的に学べた」「問いづくり力の重要性を再認識した」「AI の教育への影響を深く理解できた」といった感想が多く寄せられた。なお、基調講演について「とても充実していた」が 36.4%、「充実していた」が 52.2%であり、88.6%が肯定回答であった。午後は、5 つの分科会を開催し、全人教育の実践のためのキャンパスの再発見を目的としたワークショップや、教職課程をより深く理解するためのワークショップ、実務家教員を対象とした授業設計ワークショップ、各学部の授業事例等の情報を提供することができた。分科会では「玉川学園の自然や文化が豊かであることを実感し、教育資源を活用した授業の考案に役立った」「学校体験活動は事前・事後学習が重要であると感じた」「体験活動受け入れ校の率直な意見が参考になった」「学生の集中を保つ授業設計の技法について学べたほか、他学部の先生方との意見交換が有意義であった」「学生のモチベーションを高めるアイ

ディアが多く得られた」「他学部の授業方法を知ることによって自身の視野が広がった」「異なる分野の知見共有が重要であると感じた」といった感想が寄せられた。今後の授業実践等において活用されることが期待される。なお、昨年度に引き続き令和 6 年度も学外にも公開し、2 大学から 23 名が受講した。

授業参観については、令和 4 年度より各学部および ELF センターごとに「教員相互の『授業方法の共有』と『授業改善につながる取組み』」を目的とし、それを達成するための授業参観または授業参観に代わる研修へと変更し、今年度も計画通り実施した。

3 月に実施した令和 7 年度採用者向けの新任教員研修会の内容及び成果については、Ⅲ章の「教員研修」にて詳細を後述する。

## (6) 今後に向けて

授業アンケートは、各学期末に加え、令和 3 年度からは期中、令和 4 年度からは特別学期にも実施してきた。この授業アンケートに限らず、学生は年間を通して多くのアンケート調査に回答している状況であり、今までの実施から全体集計結果における概ねの傾向、課題を把握することができているため、令和 7 年度からの授業アンケートについては、各学期末のみ実施とすることとした。また、各学期末に実施する授業アンケートについても、より教育改善や学修状況・学修成果の把握に資する調査になるよう、令和 8 年度からの実施に向けて見直しを行い、高等教育に求められている「学修者本位の教育（何を学び、身に付けることができるのか、学修の成果が出ているのか等）」に対応する視点での検討を進めていく予定である。さらに、学生の回答率を向上させるため、実施方法や調査項目数の見直しも予定している。

生成 AI の分野については、今後の高等教育や教職課程での教育に不可欠であり、教員からの要望も多いため、大学教育力研修等、多くの教職員が参加できる研修で引き続き取り上げていく予定である。

非常勤教員対象研修においては、令和 6 年度もオンデマンド形式を採用し、多くの先生方に研修を受けていただくことができ、満足度も高かった。引き続き、より多くの先生方に受講いただける方法を探していきたい。

最後に FDer については、各学部に配置することで各学部の FD 活動が一層活発になることも期待できる一方、大学として、FDer にどのような役割を担ってもらい、今後 FD をどのように進めていくのか、を明確にする必要がある。FDer のガイドラインなどを示しながら、大学 FD 委員の役割と、これまでの各学部の FD 担当、新たな FDer の役割について、引き続き大学 FD 委員会を中心に検討していく。

## 2. 学部の活動

令和6年度における各学部FD活動状況一覧

学部	各学部 FD委員会 の構成人数	各学部 FD委員会 の開催回数	学部研修会	学生による授業アンケート※の実施	
				実施時期	公表
文学部	6名	2回	学内実施	春学期 (期中・期末) 秋学期 (期中・期末) 特別学期 (通信教育課程は スクーリングの都度)	学内外 (本学HP)
農学部	8名	2回	学内実施		
工学部	7名	2回	学内実施		
経営学部	5名	2回	学内実施		
教育学部 (通信教育課程含)	7名	2回	学内外実施		
芸術学部	7名	2回	学内実施		
リハビリテーション学部	5名	3回	学内実施		
観光学部	5名	2回	学内実施		

※授業アンケートはWebにて実施。

## § 文学部

### 1 FD 活動への取組理念・目標

大学生の学力低下や多様化、大学に対する期待とニーズの多様化、および技術革新を含む社会の急速な変化に対応すべく、普遍性と柔軟性を兼ね備えた大学教育を実現できるよう努めることを文学部のファカルティ・ディベロプメント（以下 FD）活動の取組理念とする。その理念のもと、ディプロマ・ポリシー（以下 DP）を意識しながら教員一人ひとりが主体的に各担当授業において改善に取り組むとともに、学部・学科としても組織的かつ継続的に FD 活動を実施することにより教育の改善を推進することを目標とする。

### 2 学部における FD 活動の組織構成と役割

文学部主任会（文学部長、文学部教務主任、文学部学生主任、国語教育学科主任、英語教育学科主任）、文学部 FD 担当、国語教育学科・英語教育学科の各学科 FD 担当代表（両学科ともに学科主任が兼務）の合計 6 名により、文学部長を委員長とした文学部 FD 委員会を組織している。文学部長が文学部 FD 委員会を開催し、文学部 FD 担当はそれを支援するとともに、大学 FD 委員会等で出された情報を文学部内で共有すること、文学部 FD 研修会等を企画・運営すること等により、文学部 FD 活動の実務的な取り纏めを行う。その他の委員は審議事項を審議するとともに、報告・確認事項を各学科で共有する。なお、文学部 FD 委員会は教学部授業運営課文学部担当とも文学部 FD 活動に関連する情報を共有する。

### 3 令和 6 年度の活動内容

以下、実施内容について項目別に記載する。

#### ■研修会

#### （1）文学部 FD 研修会「生成 AI とこれからの大学教育」

##### ①概要

昨年度に引き続き、近年著しい進化を続けている生成 AI は、ChatGPT の登場以降、その他のツールも含め、急速な広がりを見せるようになった。これにより、大学生の学修・研究にも様々な影響が生じている。具体的には、授業外課題として課されたレポートや英作文の作成において生成 AI の使用が疑われるような事例が散見され、対応に苦慮するケースも見られる。こうした状況を受け、生成 AI とこれからの大学教育についての最新情報の獲得および、その理解による授業改善を目的とし、講師の経験に基づいた知見の共有を行う機会として、文学部専任教員を対象に文学部 FD 研修会を開催した。

##### ②到達目標

生成 AI の基本を理解し、現在および将来的な大学教育への影響を考え理解するとともに、その観点から自らの授業を見直すきっかけとする。

##### ③活動内容

上記の概要・目標のもと、令和 6 年 11 月 28 日（木）14:00～15:00 に大学教育棟 2014 793 会議室において、本学部所属の工藤洋路教授を講師に迎え「生成 AI 活用の実践報告」と題した研修会を開催した。工藤先生ご自身のご経験から生成 AI 活用に関する基礎

知識や応用方法、留意点など、重要な事項に関する理解を深めることができた。今後の方向性の観点からは、生成 AI の問題点だけでなく教育における利活用の可能性について有益な情報が提供された。具体的な事例について情報交換を行うとともに、その情報をもとにディスカッションを行った。

#### ④評価

文学部専任教員 21 名中 16 名（国語教育学科 9 名中 8 名、英語教育学科 12 名中 8 名）が参加した（参加率 76%）。欠席者は長期研修派遣中の 1 名と当日授業重複の 2 名、公務のため 1 名、感染症罹患による欠席者 1 名の計 5 名であった。終了後に実施した参加アンケートでは、参加者 16 名のうち 13 名から回答があり、文学部 FD 研修を受けての有益なフィードバックを得ることができた。以下、簡略に主な意見を記載する。

##### 【主な意見／感想】

- ▶ 生成 AI に関する情報交換会は、年に一度開催されると有益であると感じた。
- ▶ ChatGPT の教育・研究・校務への活用方法について多くのヒントが得られた。
- ▶ データの定量・定性分析の活用可能性や、有料版の利点（画像生成など）についての理解が深まった。
- ▶ 学生のポートフォリオには日常的に生成 AI を活用している事例も多く見られ、今後の教育現場における誤情報の識別やリテラシー指導の重要性を再認識した。
- ▶ 研修を通じて、事実確認の習慣化やファクトチェックの手法を授業でどのように促進するかを考える良い機会となった。
- ▶ ChatGPT の基本や現状を理解することで、授業での活用を積極的に進められるようになり、研究不正の指導にも役立つ知見を得ることができた。
- ▶ 学生の AI 使用には慎重な対応が求められますが、「全面禁止」ではなく、正しく効果的な活用方法を指導する必要性を強く感じた。充実した研修会であった。

#### (2) 文学部 FD 研修会「学部内（両学科）教員間意見交換会」

学部内教員間相互理解による授業改善を目的とし、各教員の専門性の把握および教員間の相互理解促進のための意見交換会を計画したが、今年度については令和 8 年度新カリキュラム導入に伴う検討会の実施を通じて同様の理解促進が図られたという見解から、独立した形での研修会の設定は行わなかった。今後は専門性に関するより一層の相互理解と情報共有を通じて、両学科間の協力と支援体制を強化し、学部全体で取り組むべき喫緊の問題や課題に対して理解と連携を深め、その解決に向けた具体的な取り組みに役立てるべく、積極的に機会を用意していきたい。

#### (3) 研修会「国語教育学科 カリキュラム改訂に向けた検討」

##### ①概要

令和 3 年度以降、国語教育学科で行っている現行カリキュラムの検討を継続し、DP の達成を更に強化する CP の構築という目標を軸に、カリキュラム改訂案の策定を行う。具体的には、文学、日本語学、文化・思想系の深い教養や論理的・批判的思考力の育成

をさらに強化すること等による、より質の高い教員養成を含む、学生の将来のキャリア形成を見据えた新カリキュラムの構想について、複数のプロジェクトチームに分かれて検討を重ね、全体会での発表・意見交換を行う予定である。

#### ②到達目標

カリキュラム改訂の方向性や枠組みを学科で共有しつつ検討を重ねることで、令和 8 年度入学生以降に資する新カリキュラムを構築する。

#### ③活動内容

カリキュラム改編を視野に入れた学科専任教員全員参加の共同研究が継続研究 3 年目となる年度である。共同研究と並行して以下の活動を行った。

学科専任教員によるカリキュラム改訂ワーキンググループ検討会を、4 月（1 回）、5 月（1 回）、6 月（3 回）、7 月（3 回）、8 月（3 回）、11 月（2 回）、12 月（1 回）、1 月（1 回）、2 月（2 回）と、計 17 回開催し、AP・CP・DP の見直し、文学・日本語学・哲学系学科科目の整理・体系化、新設科目の検討、開講時期の見直し等を通じた学科カリキュラム全体の位置づけの検討を重ね、学科会にて随時共有を行った。

共同研究として、3 月末に学科専任教員による、研修行事を視野に入れた現地調査も行った。調査後に情報を共有し、更なる見直しを図る予定である。

#### ④評価

検討を重ねた結果、新カリキュラムに向けて、大幅に計画を進めることができた。令和 8 年度以降予定のカリキュラム改訂へと順調に進むことが期待される。

### (4) 研修会「英語教育学科 カリキュラム改正に向けた検討」

#### ①概要

令和 4 年度以降、英語教育学科で行っている現行カリキュラムの検討を継続し、DP の達成を更に強化する CP の構築という目標を軸に、カリキュラム改正の検討を行った。具体的には、DP に鑑み、4 年間のカリキュラムにおける留学の位置づけの再検討、グローバル社会における英語コミュニケーション能力の向上、問題解決のために多角的な視野を持ち、深い教養や論理的・批判的思考力の育成をさらに強化することをねらいとした。学生の将来のキャリア形成を見据えた新カリキュラムの構想案について具体的に検討を行い、令和 8 年度からの新カリキュラムの確立を目指した。

#### ②到達目標

カリキュラム改正の方向性や枠組みを学科で共有しつつ検討を重ねることで、令和 8 年度入学生以降に資する新カリキュラムを構築する。

#### ③活動内容

新カリキュラムに向けて、令和 6 年度 ワーキンググループ (WG) は、原則的には毎週 1 回定期的に参集し、また月ごとの学科会および臨時学科会の形式を取っての報告・検討打合せが定期的に実施された。主として WG では、AP/CP/DP および「人材養成等教育研究に係る目的」の再検討に始まり、それらをふまえての新カリキュラムのカリキュラムツリーや履修モデルの作成、ならびに前年度に決定していた留学期間の短縮に伴

う 4 年間の学びの流れ、留学の位置づけや、関連科目の名称の検討や配置、学科の軸となる内容の検討等、様々な観点から課題の洗い出しや対策案が検討された。

#### ④評価

令和 8 年度入学生向けであることを念頭に、定期的な検討機会を設定することにより、より具体的かつ現実的なカリキュラムの改訂、構築に至ったことは大きな成果である。本 FD 活動はカリキュラム改訂を現実的なものとするために不可欠な位置づけにあり、極めて有用であったと評することができる。

次に、調査については以下のとおりである。

#### ■調査

(1) 調査テーマ：「英語教員養成課程の学生の省察力向上のための授業・カリキュラム改善」

(実施時期：令和 6 年 4 月～令和 7 年 3 月)

- ・調査目的：英語教員養成課程の学生の省察力向上
- ・概要と結果：「教職実践演習（中・高）」を受講する文学部英語教育学科英語教員養成コース 4 年生を対象に、教育実習で行った指導に関する一連の省察活動を行い、それがどの程度深い省察を促すかについて分析した。詳細は、文学部紀要『論叢』を参照されたい。

(2) 調査テーマ：「留学経験が個人のキャリア選択・形成に及ぼす影響の経年調査」（実施時期：令和 6 年 4 月～令和 7 年 3 月）

- ・調査目的：留学経験が個人のキャリア選択・形成に及ぼす影響を明らかにする。
- ・概要と結果：留学が必修の文学部英語教育学科生と対照群の国語教育学科生を対象に、卒業時と卒業後 1 年目の経年調査を実施し、留学経験の有無や就職先（教員、その他）による違いを分析した。詳細は報告書（文学部紀要『論叢』）を参照されたい。

研修および調査に続いて、学外セミナー等への教員派遣については以下のとおりである。

#### ■学外セミナー等への教員派遣

(1) 大学コンソーシアム京都 第 30 回 FD フォーラム

開催場所：龍谷大学 開催日：令和 7 年 3 月 1 日（土）・2 日（日）

(2) 大学教育改革地域フォーラム

開催場所：名古屋大学 開催日：令和 7 年 3 月 8 日（土）

上記を計画していたが、今年度は（1）については各教員の公務出張時期と重複したこともあり参加が難しい状況であった。また（2）については詳細情報が乏しく、十分な事前告知ができなかった。いずれも FD に関する最新の情報を入手する貴重な機会であるため、今後は文学部 FD 活動において活用できるよう、他の学務、役務のスケジュールも勘案し、十分な情報収集にも努めながら事前の告知等を徹底していく。

#### ■授業参観

授業参観については、例年通り、文学部専任教員の担当する秋学期開講の文学部専任教員の担当する学科専門科目を、全学（玉川大学・玉川学園教職員）に対して公開とした。なお、

公開条件としては、授業担当教員に授業参観の1週間前までに連絡を課した。

今年度も最終的に授業参観の希望はなく実施はなかった。告知の仕方の点に問題が無いとは言えないものの、教員は授業や学生指導といった様々な教育活動が授業時間外にあり、職員は通常業務が授業時間帯にある。公開に際して科目に適/不適があるというよりは、実施に際して参加しづらい状況的な難しさが存在する。この状況は文学部に限ったことではなく、他学部や他部署も同様の状況があると考えられるため、授業参加の仕組み作りについては、上記の事情もふまえた上で、今後は全学組織による体系的な調整が必要な課題の一つであると言えるだろう。

#### 4 昨年度（令和5年度）に提案された予定・課題の達成度について

昨年度提案された2点の予定・課題の達成度は以下のとおりである。

- (1) 各学科のカリキュラム検討等を通して出てきた文学部の課題を文学部全体で共有し、改めて検討することで、各学科のカリキュラム改善を推進する。

上記については、令和8年度の新カリキュラムの実施に向け、両学科でそれぞれに、あるいは合同で課題の共有を行い、現行カリキュラムでは達成できなかった点を新規カリキュラムに盛り込み、改善を図ることが出来たと捉えている。

今後は、令和8年度に新カリキュラムがスタートした後で、都度の検証を行い、より良いカリキュラムの検討を継続していく。

- (2) 授業参観実施の可能性と、それに代わりうるFD活動の可能性について検討する。

上記については、すでに項目3で示したとおりである。参加に際しての状況的な難しさが存在するため、今後は全学組織による体系的な調整や参加のための制度化が必要だと考えられる。より活発な活動とするためには、例えば、オンライン型の授業参観などの実施も検討可能であると考えられる。

#### 5 今後（令和7年度以降）の予定・課題について

従来も積極的にFD活動を継続し、活性化を目指してきたが、特に令和8年度の新カリキュラムの導入という大きな節目を目前に、今年度課題として挙げた2点は次年度においても重要な位置づけにあると考えられる。従って、令和7年度は以下の2点を継続的な主要課題と捉え、取り組みを検討・実施する。ただし、(2)については、昨年度をふまえ発展的な形での取り組みを検討したい。

- (1) 各学科のカリキュラム検討等を通して出てきた文学部の課題を文学部全体で共有し、改めて検討することで、各学科のカリキュラム改善を推進する。

- (2) 授業参観実施の可能性と、それに代わりうるFD活動の可能性について検討する。

(とくに、代替的なFD活動として各教員の専門性の把握および教員間の相互理解促進の機会の検討を含む。)

## § 農学部

### 1 FD 活動への取組理念・目標

玉川大学の教育理念に基づいた教育を円滑に進め、かつ、改善を試みるために、学生の大学の学修及び生活状況を農学部教員が理解し、授業の内容および方法の改善を促している。農学部では実験実習科目が多いことから、講義科目との連携によって、学生が主体的に学修できる教育環境の充実を進めるとともに、新型コロナウイルス感染症対策で培ったハイブリッド授業、ハイフレックス授業、オンデマンド授業などの多様な形態の授業手法を、さらに向上する必要性を意識している。このことは、今後、遠隔地を使った実験実習や卒業研究などの科目の教育力アップにつながり、魅力ある農学部教育の新たな部分に成長させたい。また、生成 AI に代表される新しいツールの教育分野へ利用の検討が重要であると示唆されている。このことから、例年進めている授業アンケートの実施と授業改善への意識を高めることや、授業作成ツールとしての動画撮影などの支援体制の共有化やその利用をさらに図るとともに、新しいツールとしての生成 AI の教育利用の可能性の意識付けを続けている。これらのことについて、主任会メンバーを中心に各教員との情報交換を昨年度と同様に進め、引き続き、学生の学修環境の向上に努める。これらを通して、教員は自らの教育力向上に対する意識を高めるとともに、社会情勢に臨機応変かつ適切に対応可能なファカルティ形成を目指す。

### 2 学部における FD 活動の組織構成と役割

農学部長、生産農学科主任、生産農学科副主任、環境農学科主任、先端食農学科主任、学生主任、教務主任、農産研究センター副センター長および農学部 FD 担当の計 9 名が中心となり、農学部全教職員が目標達成にあたる。

### 3 令和 6 年度の活動内容

#### (1) 研修会

##### ① 概要

- 1) 令和 6 年 9 月 26 日 (木)、DTS のサービスについて (講師：DTS 西垣氏)

DTS が展開している教育サポート業務を把握し、より良い教育活動を展開する起点とする。これらのことから教育活動におけるサポートを利用する事で、より高度な教育が展開可能となると思われる。

- 2) 令和 6 年 12 月 12 日 (木)、法令改正に伴う化学物質の適切な管理及び安全教育に関する研修 (講師 筑波大学 環境安全管理室 室長 教授 中村修氏)、

化学物質の適切な管理と安全教育の重要性をあらためて把握するとともに、法令改正のポイントを学部教員内で共有する。これらのことから化学物質の管理の重要性を再認識し、事故・事件の防止が可能となる

- 3) 令和 7 年 3 月 12 日 (水)、教職員のメンタルヘルスに関する研修 (講師：保健センター健康院 カウンセラー 佐藤紀代氏)

教育研究及び学内業務を円滑に進める上で、教職員のメンタルヘルスの重要性は、ますます高くなっている。この件の重要性を共有するために、教職員のメンタルヘルスに関する研修を行った。

全ての研修は農学部専任教員を対象とし、また、事前質問アンケートや配付資料を配信や Microsoft Teams にアップロードし、受講者の理解が深まるように工夫を加えた。また、一部の講義は、講師の方々の許可を頂いた上で、ハイブリット形式で配信し、学外校地の教職員も参加可能な状況を作った。また、やむを得ず欠席した教職員については、期間限定の事後配信も設定し、教員間の知識の共有化を試みた。このことで、研修会の欠席者が、研修会の内容を閲覧できるようになった。

## ② 到達目標

- 1) DTS が展開している教育サポート業務を把握し、より良い教育活動を展開する起点とする。
- 2) 化学物質の適切な管理と安全教育の重要性をあらためて把握するとともに、法令改正のポイントを学部教員内で共有する。
- 3) 教職員のメンタルヘルスの重要性を理解知ることで、安定した教育活動を展開可能とする。

## ③ 活動内容

- 1) DTS が展開している教育サポート業務を把握し、より良い教育活動を展開する起点とすることを目標に、DTS 西垣氏に講演を依頼した。様々なサービス内容とその進め方、成果物を見る事ができ、非常に有意義であった。
- 2) 化学物質の管理の重要性を再認識し、事故・事件の防止が可能となる、化学物質の適切な管理と安全教育の重要性をあらためて把握するとともに、法令改正のポイントを学部教員内で共有するために、法令改正に伴う化学物質の適切な管理及び安全教育に関する研修会を開催した。筑波大等が進めている化学物質管理と安全教育内容を平易に説明して頂けるとともに、そのポイントの法的根拠も理解でき、非常に有用であった。
- 3) メンタルヘルスの重要性、及び、リラックスの必要性とその方法について、実践的に学ぶことができたことなど、予想以上の効果も得たと思われる。

## ④ 評価

いずれの講習会についても、開催後のアンケート調査などから各研修会の到達目標設定について好意的な意見が多く、本研修会の目的がファカルティ内で理解されていると評価できる。

## (2) 学生による授業アンケート

### ① 概要（目的を含む）

授業改善のために、農学部開講科目の担当教員（専任および非常勤講師）に協力を求め、すべての講義科目と実験・実習科目について授業アンケートを実施した。

### ② 到達目標

授業の状況把握により講義技法や情報伝達の仕方、教育設備の向上に活用し、授業改善を達成する。また、大学 HP 上に結果を公開する。

③ 活動内容

授業アンケートを集計後、結果をアンケートの原本とともに各教員に送付した。さらに、大学 HP に学部、学科単位での集計結果を公開した。

④ 評価

令和 6 年度の授業アンケートも、UNITAMA を用いて Web ベースでアンケートを行った。総合評価値は、昨年度とほぼ同様であった。このことは、農学部の教育活動が安定していると評価することが可能であると思われる。ただ、アンケート回収率が、この数年連続して低下している。この傾向は、多くの学部で見られることから、授業アンケートの実施法や設問内容、フィードバックについて教育的な見地での検討も必要と思われる。

なお、農学部の授業アンケート結果は、下記の URL で閲覧可能である。

[https://www.tamagawa.jp/university/introduction/outline/u-fd/questionary/report\\_agr](https://www.tamagawa.jp/university/introduction/outline/u-fd/questionary/report_agr)

(3) 教職員を対象とした公開授業

2 つの科目を秋学期に申請したが、いずれも参加者はいなかった。

4 昨年度（令和 5 年度）に提案された予定・課題の達成度について

令和 6 年度の FD 活動についても、農学部主任会・FD 委員と逐次検証を行うことで、専任教員間の議論が促進され、提案された課題が十分達成された。

5 今後（令和 7 年度以降）の予定・課題について

- ・入試広報（発展的な展開をするためにも入試広報部門を含めた他部門との情報共有）
- ・これからの初年次教育の進め方

## § 工学部

### 1 FD 活動への取組理念・目標

「全人教育の下、人間力を備えたモノづくりの実践的技術者を育成する」という学部の理念・目標に向けて教育内容・教育環境の向上をはかる。

### 2 学部における FD 活動の組織構成と役割

教授会、主任会、教務担当者会、学科会の他に、FD 活動に特化した運営組織として、工学部 FD 研修会、授業評価検討会、授業評価総合検討会、MR (マネジメントレビュー) がある。これらの組織は平成 29 年まで認証継続していた ISO9001 の教育クオリティマネジメントシステムで運用していたものであり、ISO9001 の更新を停止した後も継続的に運用している。

工学部 FD 研修会は全教員で構成される組織である。各学期の終了後に新入生の成績動向や専門科目の受講者動向などの検証を行う。

授業評価検討会は学科ごとに全教員で構成される組織である。各学期の終了後に授業アンケートの結果などをもとに授業改善の検証を行う。

授業評価総合検討会は、教務主任、教務担当、FD 担当で構成される組織である。各学科で実施された授業評価検討会の結果をもとに今年度の検証および次学期以降の方針について検討を行う。

MR は学科ごとに全教員で構成される組織と工学部長、教務主任、学生主任、学科主任で構成される組織である。各学科で実施された MR の結果をもとに今年度の学部の教育活動全般の検証および次学期以降の方針について検討を行う。

### 3 令和 6 年度の活動内容

#### (1) 工学部 FD 研修会

##### ① 概要

各学期の終了後に全教員を対象に実施される研修会である。教務主任、学科主任、教務担当が学期ごとに GPA や単位修得率をもとに成績動向について報告を行う。春学期は数学と物理の教員が入学時に実施するテスト (プレースメントテスト) の結果について報告を行う。秋学期は各学科の教員 1 名が事例報告を行う。

##### ② 到達目標

全教員が全学科の学生成績および学生への対応方針を共有し、各学科の今後の組織的展開と学生への教科指導に効果的に反映できるようになること、そして教員の自己省察に資する内容となることを目標とする。

##### ③ 活動内容

#### ■ 第 1 回工学部 FD 研修会

実施日：令和 6 年 9 月 19 日 (木) 9:00~9:51

場所：Zoom による遠隔会議方式

プログラム：

春学期学習状況分析結果報告

- (1) 情報通信工学科 教務担当 森文彦教授
- (2) ソフトウェアサイエンス学科 教務担当 坂崎尚生教授
- (3) マネジメントサイエンス学科 学科主任 成川康男教授
- (4) デザインサイエンス学科・エンジニアリングデザイン学科  
教務担当 斉藤純准教授
- (5) 数学系 マネジメントサイエンス学科 朝山芳弘講師
- (6) 物理系 デザインサイエンス学科 水野貴敏准教授
- (7) 学部全体の状況 教務主任 佐々木寛教授

■ 第2回工学部 FD 研修会

実施日：令和7年3月21日（金）9：00～10：18

場所：STREAM Hall 2019 313AB 教室

プログラム：

学習状況分析結果報告

- (1) 情報通信工学科 教務担当 森文彦教授
- (2) ソフトウェアサイエンス学科 教務担当 坂崎尚生教授
- (3) マネジメントサイエンス学科 教務担当 高橋宗良准教授
- (4) デザインサイエンス学科・エンジニアリングデザイン学科  
教務担当 斉藤純准教授
- (5) 学部全体の状況 教務主任 佐々木寛教授

事例報告

- (6) 情報通信工学科 「インテリジェントデバイス入門」 早川博章准教授
- (7) ソフトウェアサイエンス学科 「情報処理技術」 坂崎尚生教授
- (8) マネジメントサイエンス学科 「最適化システム」 折登由希子准教授
- (9) デザインサイエンス学科・エンジニアリングデザイン学科  
「スケッチとドラフティング」 長谷川嘉代講師

④ 評価

第1回工学部 FD 研修会は35名、第2回工学部 FD 研修会は35名の教員が参加した。報告者が使用するスライドおよび報告内容をまとめた解説は配付資料としてまとめられ、事前にメールにて全教員に配付された。

(2) アントレプレナーシップに関する FD 研修会

① 概要（目的を含む）

工学部は100周年（2029年）に向けた中長期事業計画で「アントレプレナーシップ教育の強化」を掲げている。工学研究科が計画したアントレプレナーシップに関する FD 研修会に工学部教員も参加する。

② 到達目標

アントレプレナーシップについての理解を深める。

③ 活動内容

実施日：令和6年10月24日（木）17：00

場所：Zoomによる遠隔会議方式

内容：観光学部 鎌田伸尚教授「アントレプレナーシップ教育について」

④ 評価

工学部・工学研究科の教員38名が参加した。

(3) 授業評価検討会・授業評価総合検討会・MR（マネジメントレビュー）

① 概要（目的を含む）

授業評価検討会は、各学期の終了後に学科ごとに「授業実施チェックシート」（様式は平成30年度の活動報告書を参照）や授業アンケートの集計結果などをもとに授業改善を検討する。

授業評価総合検討会は、各学科の授業評価検討会の集計結果や議事録などをもとに今年度の検証および次学期以降の方針について検討を行う。

MRは、各学科で実施された会議の議事録をもとに今年度の学部の教育活動全般の検証および次学期以降の方針について検討を行う。

② 到達目標

授業実施チェックシートや授業アンケートの集計結果などをもとに授業改善を検討する。

③ 活動内容

■ 授業評価検討会

実施日：

春学期

情報通信工学科 令和6年9月12日（木）18：40～19：10

ソフトウェアサイエンス学科 令和6年9月12日（木）13：00～15：00

マネジメントサイエンス学科 令和6年9月5日（金）13：30～14：00

デザインサイエンス学科・エンジニアリングデザイン学科

令和6年9月8日（金）16：30～16：45

秋学期

情報通信工学科 令和7年3月6日（木）18：00～19：00

ソフトウェアサイエンス学科 令和7年3月17日（月）11：40～13：20

マネジメントサイエンス学科 令和7年3月6日（木）14：30～15：00

デザインサイエンス学科・エンジニアリングデザイン学科

令和7年3月14日（金）15：00

～3月17日（月）17：00（審議期間）

## ■ 授業評価総合検討会

実施日：

春学期 令和6年10月10日（木）17：00～18：05

秋学期 令和7年3月19日（水）11：20～12：50

## ■ MR

実施日：

情報通信工学科 令和7年3月19日（水）

ソフトウェアサイエンス学科 令和7年4月17日（木）実施予定

マネジメントサイエンス学科 令和7年4月1日（火）実施予定

デザインサイエンス学科・エンジニアリングデザイン学科

令和7年4月1日（火）実施予定

全体

令和7年4月22日（火）実施予定

## ④ 評価

授業評価検討会では、「授業実施チェックシート」や授業アンケートの集計結果などを用いて議論された。

授業評価総合検討会では、各学科の授業評価検討会の集計結果や議事録を用いて議論された。春学期と秋学期の議事録をそれぞれ図1と図2に示す。

令和6年度のMRは、令和5年度に修正された「人材養成等教育研究に係る目的」および3つのポリシーの妥当性を検討する形式で実施する予定である。学科ごとの会議は令和7年3月から4月にかけて、学部全体の会議は4月に実施する計画である。

## 2024 年度春semester工学部授業評価総合検討会議事録

日時：2024 年 10 月 10 日、17:00～18:05

場所：Zoom ミーティング

(以下、ICT…情報通信工学科、SS…ソフトウェアサイエンス学科、MS…マネジメントサイエンス学科、ED…エンジニアリングデザイン学科、DS…デザインサイエンス学科)

出席者：森 (ICT 教務担当)、坂崎 (SS 教務担当)、高橋 (MS 教務担当)、三林 (ED 教務担当、委任状)、斎藤 (DS 教務担当)、三木 (工学部 FD 担当)、佐々木 (教務主任)

議事録作成：佐々木

資料：2024 年度春学期 授業評価検討会議事録 (ICT, SS, MS, ED, DS)

2024 年度春学期 授業評価集計結果 (ICT, SS, MS, ED, DS)

各学科で実施した授業評価検討会における検討結果に基づき、本semesterにおける各学科の取組みについて報告が行われた。全学科、不満足授業はなかった。

各学科からの報告内容を以下に記す。

- ICT：「成績 B 以上」が 60%未満となった科目は 3 科目であった。「物理学 I」(29%) では入学時の確認テストで成績の悪かった学生を対象としており、多くは C 評価で合格していた。「プログラミング I」(55%) では再履修者が多く基礎を中心に授業をしたが、提出物を出せない学生もいた。センサ工学 (54%) では、中間試験が悪い傾向にあった。授業アンケートで「理解度」3.0 未満の科目は 2 科目であった。「応用電子物性」(2.7) では、対象が 3 年生から 2 年生となっており、内容が難しかった可能性も考えられ、内容について今後検討する。「科学技術英語」(2.8) は B 以上が 90%となっていた。学科で検討の結果、いずれも不満足授業 (改善必要授業) には当たらないと結論された。
- SS：授業アンケートの「理解度」は全て 3.0 以上であった。「成績 B 以上」が 60%未満となった科目は 2 科目であった。「プログラミング I」は学力別に 3 クラスにより開講され、そのうち 2 クラスでは、46%、52%であったが、3 クラス全体では 60%以上であった。「プログラミング II」(52%) は再履修のクラスであり、学力不足の学生が多い。そのような学生を想定し、プログラミング I、II の前にプログラミング入門を開講することを検討する。その際、次年度入学生から「情報 I」を必修としているので、その状況も考慮し再来年度に向けて検討する予定である。以上について学科で検討した結果、不満足授業はなかった。
- MS：授業アンケートの「理解度」で 3.0 未満となった科目は「微分方程式 I」(2.5) であり、成績 B 以上も 43%であった。教職受講者中心だが不合格者が多く、微分積分を高校でしっかり学ばずに大学で教職を希望している傾向にある。そのほかで「成績 B 以上」が 60%に満たない科目は「解析学 I」(37%) であった (C 評価の学生が多かった)。チューター制度を導入しているが、利用率が上がっておらず、授業等で周知を徹底する。「経営情報処理」(必修) の 1 クラスでも「成績 B 以上」が 57%であったが、全体では 60%を超えていた。成績の悪い学生は欠席が多く課題が出せない。全体的に 2 年生の学習態度が悪い傾向にあった。学科での検討の結果、いずれも不満足授業には当たらないと結論された。
- ED, DS：「成績 B 以上」が 60%に満たない科目は、「物理学 I」(50%)、「解析学 I」(38%)、「微分方程式 I」(58%)、「数学科指導法 I」(25%)、「代数学入門」(50%) であった。受講学生の数学の学力を上げていく必要がある。「理解度」で 3.0 未満の科目は「物理学 II B」(2.5) であったが、アンケート回答率が悪く (2/15)、議論が難しかった。数学の基礎力をしっかりつけていく指導をしていくほかないと考えている。学科での検討の結果、不満足授業はなかった。
- 全体：非常勤教員で出席をチェックしていない教員がいる可能性が指摘されたため、当該教員に確認とお願いすることとした。

以上

図 1 令和 6 年度春学期工学部授業評価総合検討会議事録

## 2024 年度秋semester工学部授業評価総合検討会議事録

日時：2025 年 3 月 19 日、11:20～12:50

場所：Zoom ミーティング

(以下、ICT…情報通信工学科、SS…ソフトウェアサイエンス学科、MS…マネジメントサイエンス学科、ED…エンジニアリングデザイン学科、DS…デザインサイエンス学科)

出席者：森 (ICT 教務担当)、坂崎 (SS 教務担当)、高橋 (MS 教務担当)、三林 (ED 教務担当)、斉藤 (DS 教務担当)、三木 (工学部 FD 担当)、山田先生 (2025 年度工学部 FD 担当)、佐々木 (教務主任)

議事録作成：佐々木

資料：2024 年度秋学期 授業評価検討会議事録 (ICT, SS, MS, ED, DS)

2024 年度秋学期 授業評価集計結果 (ICT, SS, MS, ED, DS)

各学科で実施した授業評価検討会における検討結果に基づき、本semesterにおける各学科の取組みについて報告が行われた。全学科、不満足授業はなかった。

各学科からの報告内容を以下に記す。

- ICT：授業アンケートの「理解度」は全て 3.0 以上であった。「成績 B 以上」が 60%未満となった科目は 2 科目であった。「電磁気学」(50%) では、シラバスで説明された必要とされる前提知識のない学生が履修しており、基礎的な内容の説明を中心に解説しても理解が難しいようであった。引き続き工夫を検討する。「電気回路入門」(48%) は 1 年生対象の必修科目であるが、成績の分布は F→C→B..の順に多かった。今年度の 1 年生は学力不足が顕著のようである。学科での検討の結果、不満足授業はなかった。
- SS：「成績 B 以上」が 60%未満となった科目は 2 科目 3 クラスであった。「プログラミング II」の 1 クラス (11%) はほとんどが再履修者で、やる気と能力が少ない学生が多かった。別の 1 クラス (50%) と合わせ、C 評価が多かった。「離散数学」(56%) では、数学の能力が十分でない学生が多くなっているためと考えられた。「理解度」が 3.0 未満の科目に「データ通信」(2.9) があったが、アンケート回答数が少なく十分な検討はできなかった。学科科目全体で、「指示通りに課題を提出したか」という設問と「理解度」の間に相関がみられた。また、次年度は高校で「情報 I」が必修の学年になるため、「情報」の確認試験を実施し指導の参考とする予定である。学科での検討の結果、不満足授業はなかった。
- MS：授業アンケートの「理解度」は全ての科目で 3.0 以上であった。「成績 B 以上」が 60%未満の科目は「微分方程式 II」(29%) のみであった (S 評価の学生はいない)。教職課程受講者の多い科目であるが、履修の段階でこの科目を理解できる学力に達していない学生が多いのかもしれない。学科での検討の結果、全体として不満足授業はなかった。
- ED, DS：授業アンケートの「理解度」は全ての科目で 3.0 以上であった。「成績 B 以上」が 60%に満たない科目は「数学演習 II」(33%) のみであったが、当該学科受講者数が 3 名であったため、改善必要授業とは認められなかった。学科での検討の結果、不満足授業はなかった。
- 全体：教職実践演習 (全学科共通) で担当教員の一人に対し学生から苦情めいたコメントが複数あった。今後の課題として共有された。また、春学期に指摘のあった、出席をカウントしていない教員の科目について、今学期は改善されていたことが確認された。「研究授業」の在り方について意見交換をした。「研究授業」の意義は共有され、次年度も引き続き実施する方針となったが、教員の積極的参加を促進するため周知徹底することとなった。授業外学修の確保について意見交換され、授業外学修が確保されている科目の取り組みの共有、授業アンケートで授業外学修について問う学部独自の設問について次年度教務担当者会で検討することとなった。

以上

図 2 令和 6 年度秋学期工学部授業評価総合検討会議事録

#### (4) 研究授業

##### ① 概要（目的を含む）

春学期と秋学期に各学科 1 名の教員が各自の担当科目に関して参観授業（研究授業）を実施する。科目は学科専門科目でなくてもよい。各学科の教員数は 9～10 名であるため、全教員が 4～5 年に 1 回担当することになる。学生による授業アンケートとは別の視点である参観者からの評価を授業改善につなげることが目的である。

##### ② 到達目標

参観者の評価をもとにした授業改善を検討する。

##### ③ 活動内容

今年度の実施概要を表 1 に示す。

参観者は授業を参観して「工学部研究授業チェックシート」（様式は平成 29 年度の活動報告書を参照）を参観後に授業担当者に提出する。授業担当者は参観者の評価をもとに「研究授業科目担当者票」（様式は平成 29 年度の活動報告書を参照）を作成して、学部長、教務主任、学科主任、教務担当、FD 担当に提出する。

##### ④ 評価

提出された「研究授業科目担当者票」の「今後の対処計画」には下記のようなコメント（原文そのまま）があり、今後の授業改善が期待される。

- 授業時に延長ケーブル、テーブルタップなどを準備し、数名分くらいの学生に関しては、パソコン用の電源を確保できるようにしておく。
- 授業前に PC を充電しておくように、学生に徹底して伝える。
- 発問や実習を増やして、より双方向にしていきたい。
- 授業開始後早い段階で後方まで巡回し、私語などの態度に問題がある学生がいれば注意したい。
- スライドの字を大きくする。PDF は拡大して投影する。
- 説明が早口であること、学生の進捗を見て進行すべきと指摘されたことから、担当する他の授業も含めて、ゆっくりと話すことを心がけ、教室全体に呼びかけながら学生の進捗を把握することを実践していく。
- 適宜黒板に注意を向かせる工夫をする。
- 説明は短く区切り、アウトプットさせる活動を取り入れた。資料の配色を再検討した。指示内容に誤解が生じないように明確化した。

表1 令和6年度研究授業実施概要

	学科	授業 担当者	科目	開催日時限	教室	受講 者数
春 学 期	情報通信工学科	政田元太	データ処理	7月4日(木) 3・4時限	ELF Study Hall 2015 331 教室	2
	ソフトウェア サイエンス学科	塩澤秀和	ユーザインタフェースデザイン	5月21日(火) 5・6時限	STREAM Hall 2019 313AB 教室	3
	マネジメント サイエンス学科	成川康男	数学科指導法 I	6月4日(火) 7・8時限	Consilience Hall 2020 203 教室	3
	エンジニアリング デザイン学科・ デザイン サイエンス学科	平社和也	デザインサイエンス入門	5月30日(木) 7・8時限	STREAM Hall 2019 110 教室	6
秋 学 期	情報通信工学科	宮田成紀	物理学入門	12月20日(金) 1・2時限	Consilience Hall 2020 403 教室	3
	ソフトウェア サイエンス学科	田中昂文	プログラミング II	10月8日(火) 7・8時限	STREAM Hall 2019 212 教室	4
	マネジメント サイエンス学科	日下芳朗	解析学 I	10月2日(水) 7・8時限	ELF Study Hall 2015 327 教室	1
	エンジニアリング デザイン学科・ デザイン サイエンス学科	木村仁	メカトロニクス	12月23日(月) 3・4時限	Consilience Hall 2020 202 教室	4

## (5) 学生による授業アンケート

## ① 概要 (目的を含む)

授業内容・方法・スキルの向上などの授業改善を具体化することを目的として、平成12年度秋学期より学生による授業アンケートを春学期と秋学期の期中および学期末に実施している。

## ② 到達目標

すべての学科専門科目について継続的な授業改善およびカリキュラム改善の検討に役立てる。

## ③ 活動内容

他学部と同様に UNITAMA でアンケートを実施した。学期末のアンケート結果を集計した授業別レポート (PDF ファイル) は Web Notes の「授業アンケート結果一覧」に掲載される。科目担当者は授業別レポートを確認にして「授業アンケート結果一覧」のコメント欄にコメントを記入する。記入されたコメントは授業別レポートに設けられた「今期の総括と今後に向けて」の欄に転載される。授業別レポートを含むすべてのレポート

は『玉川大学 工学部「学生による授業評価」報告書 48』、『玉川大学 工学部「学生による授業評価」報告書 49』と題した冊子としてまとめられ、STREAM Hall 2019 の2階にて閲覧公開した。また、これらは Blakboard@Tamagawa のコミュニティ「工学部 FD」を通じて全教員に配付された。

#### ④ 評価

学期末のアンケートの回答率(回答者数/履修者数)は、春学期が53.7%(2,370名/4,410名)、秋学期が60.0%(2,746名/4,573名)であった。

Web Notes の「授業アンケート結果一覧」のコメント欄へのコメントの記入率は、春学期が80.3%(94科目/117科目)、秋学期が76.8%(106科目/138科目・3月28日(金)時点)であった。

### 4 昨年度(令和5年度)に提案された予定・課題の達成度について

工学部 FD 研修会、授業評価検討会、授業評価総合検討会、研究授業、学生による授業アンケートを予定通り実施した。MR は令和7年3月および4月に実施予定である。

学生による授業アンケートは、例年通り全科目担当者に実施のお願いをしたが、回答率は昨年度より少し増加した。

研究授業は、教務主任、教務担当、FD 担当、新任教員が積極的に参加した。

FD 活動の在り方に関する課題については改善されていない。

### 5 今後(令和7年度以降)の予定・課題について

工学部 FD 研修会、授業評価検討会、授業評価総合検討会、MR、研究授業、学生による授業アンケートは次年度以降も継続的に実施する。ただし、それぞれの実施方法については再検証を行う必要がある。

学生による授業アンケートは、より学生の意見を反映させるためにアンケートの回答率を上げることが望まれる。

研究授業は、より多くの視点から改善案を得るためには参観者数を増やす必要がある。

## § 経営学部

### 1 FD 活動への取組理念・目標

- (1) 質の高い卒業生（経営学部のミッション・ステートメントを体現し得る卒業生）を輩出する。
- (2) 玉川の教育理念を基盤とした経営学教育を実現する。
- (3) 21 世紀社会に生き残ることのできる経営学部—少子化時代・大学全入時代にあつて、運営を維持しうる体力をもった学部を形成する。
- (4) 玉川学園および玉川大学全体の評価を高める学部を構築する。

### 2 学部における FD 活動の組織構成と役割

経営学部長、国際経営学科主任、教務主任、学生主任、FD 担当が中心となって FD 活動を実施する。教務主任と FD 担当は連携して活動計画を取りまとめ、主として研修会の運営にあたる。

### 3 令和 6 年度の活動内容

#### (1) ワークショップ（令和 6 年 7 月 4 日（木））

##### ① 概要（目的を含む）

昨年度 FD 担当が出席した FD フォーラムの内容を基に、アクティブラーニングのあり方を共有する。また、過去 2 年間実施してきたカリキュラム改訂に関して、コース別に具体的な改訂案を構築する。

##### ② 到達目標

各教員がアクティブラーニングのあり方を把握する  
コース別に具体的なカリキュラム改訂案を構築する

##### ③ 活動内容

- ・ FD フォーラムの内容共有
- ・ コース別にカリキュラム改訂の話し合いを行う

##### ④ 評価

コース別の目標と現状を教員間で共有し、令和 7 年度カリキュラム改訂実施に対して、具体的な方向性を議論することができた。コースごとの意見を踏まえて、学部全体でのカリキュラム確定に備えていきたい。

#### (2) ワークショップ（令和 6 年 10 月 3 日（木））

##### ① 概要（目的を含む）

1 年生、3 年生が受験した GPS-Academics の結果から、今後の授業のあり方やカリキュラム改訂の参考とする

##### ② 到達目標

結果を基に今後の授業のあり方やカリキュラム改訂の道筋を整える

##### ③ 活動内容

- ・ GPS-Academics の結果報告（1 年生、3 年生）
- ・ 経営学部生の優れている点、課題の共有

・今後の授業への反映

#### ④ 評価

経営学部 1 年生の GPS-Academics の結果によると、昨年度の学生よりも思考力などが低下した。姿勢態度では、コラボレーションのスコア平均がやや高い傾向だった。また、対人関係経験の達成度平均がやや高く、自己管理の経験がやや低いことがわかった。

3 年生の結果では、思考力で 2 極化が起こっていることが確認できた。これらの結果を基に、今後の指導の方向性を明確にしていきたい。

### (3) 学生による授業アンケート

#### ① 概要（目的を含む）

例年、各科目の継続的な授業改善に役立てることを目的として授業アンケートを実施している。今年度も春学期、秋学期ともに実施した。

#### ② 到達目標

学生の講義に対する要望等を把握するとともに、各教員のさらなる指導方法の充実を図る。

#### ③ 活動内容

今回の授業アンケートは、UNITAMA を活用した Web 形式である。経営学部で開講している全科目で実施した。

#### ④ 評価

すべての開講科目で授業アンケートが実施できている。アンケート結果のまとめを Web 上で公開している。回答率は約 30%であったため、より回答数を増やすために、科目を担当している教員を通して学生へのアナウンスを周知していく。

### (4) 学外セミナー等への教員派遣

大学コンソーシアム京都主催の FD フォーラムに教員を派遣予定であったが、スケジュールの都合により、今年度の派遣をとりやめた。

### (5) 授業参観

秋学期「環境経営」の授業において、授業参観を実施、1 名が参加した。授業の進め方や、学生への意見の聞き方など、今後自身の授業運営への参考になったとの報告を得た。

また、マーケティング戦略コース「産学連携」のグループ演習を令和 6 年 10 月 7 日（月）9・10 限に実施し、授業時間が重複しなかったコース担当教員 5 名が参加した。学生の積極的な意見交換の場を見ることができた。

## 4 昨年度（令和 5 年度）に提案された予定・課題の達成度について

昨年度に予定した活動は、セミナー教員派遣以外実施できている。また、外部有識者を招いて経営学部生の GPS-Academics 受検状況を把握することができた。思考力に関する課題に対応するため、授業内でも思考力を養える授業体制を整えていきたい。

カリキュラム改訂に関しては、来年度より改訂を実施することができた。実施してから起こりうる問題、不明点を一つずつ改善していきたい。

## 5 今後（令和7年度以降）の予定・課題について

これまでのFD活動を地道に継続するとともに、カリキュラム改訂後の状況を明らかにしていく。

授業参観に関しては、各コースで産学連携の授業を実施しているため、その授業での参観を通して、課題抽出、授業改善に努めていきたい。

## § 教育学部

### 1 FD 活動への取組理念・目標

本年度の FD 活動への取組理念・目標は、これまで通りの内容を踏襲した。以下の通りである。

「本学部では学校教育はもとより生涯教育、社会教育の諸分野で貢献できる教育プロフェッショナルの育成を目指し、指導に当たる教員が自らの資質と能力を向上させることにある。」

### 2 学部における FD 活動の組織構成と役割

教育学部長、教育学科・乳幼児発達学科の両主任、教務主任、学生主任、及び FD 担当、通信教育課程主任の 7 名で構成する。

教育学部長を委員長とし、FD 担当が学部における FD 活動計画（企画・運営）の策定、FD 活動の年度総括などを審議する役割を担っている。また委員会決定事項については教授会で議案提起を行い、FD 活動の推進に努めている。

### 3 令和 6 年度の活動内容

#### (1) 研修会等

##### ① 概要（目的を含む）

従来 of FD 活動に引き続き、教員養成における課題や展望を再認識した上で、日常の指導、教育実践に取り組むことを目的とし、対面による研修会を実施した。

なお、令和 6 年度から、FD 活動への取組理念・目標のさらなる実質化を目指して、FD の実施目的として「組織開発」にあらためて注目することとした。教育学部専任教員が自らの専門分野のみならず、広く教育関係全般の動向を理解し、他の教育学部専任教員がどのような文脈のもとで教育研究を実践しているのか相互理解を深める。同時に、研修会への参加を通して、自らの専門分野を追究する機会を持つ。以上の目的を両立しながら実現するための手段として、教育系の答申等の動向を理解する研修会（情報共有・個別最適型の研修会）を中心に順次改編することとした。

##### ② 到達目標

今日の教育実践における先進的な取り組みや課題に触れ、研究活動および日々の授業実践に活かす。また、日本の教育の課題と展望について学び、教員養成における指導や教育実践に活かし、参加者同士のネットワークを築くことを目標とする。

##### ③ 活動内容

令和 6 年度は、学部等改革推進制度に関連した FD 活動、および組織開発を目的とした情報共有・個別最適型の研修会を実施した。加えて、FD 活動としての実施ではないが、FD に準じた学部での研修会の活動として、DTS の活用に関連した研修会、およびメンタルケアに関する研修会を実施した。また、例年通り、オンライン授業における複製・公衆送信・伝達に関する『やってはいけないこと』と『授業の中でやってよいこと』パンフレットを学部の新人教員へ配付した。

一方で、本年度は研修会の目的を情報共有・個別最適型の研修会にあらためる過程で当初の計画から計画を変更一部変更することとなった。

ただし、本年度より千葉工業大学のFDにオンライン参加（7月25日、千葉工業大学長：伊藤穰一氏「生成AI（ジェネレーティブAI）の進化と大学教育の変革」、教育学部より10名参加）できるようになったこともあり、研修会としての情報提供の機会は、全体としてむしろ充実したといえる。

1) 研修名：「オンライン授業における複製・公衆送信・伝達に関する『やってはいけないこと』と『授業の中でやってよいこと』パンフレットの配付」

実施日：令和6年5月29日（水）

方法：新任教員メールボックスへの配付及び学内便による配付

2) 研修名：「DTSの学修支援サービスの内容について」（※学部研修会として実施）

講師：DTS 西垣優氏

実施日：令和6年7月24日（水）

場所：大学研究室棟 B104 会議室

時間：15：15～15：30

3) 研修名：「放射線の健康影響と福島の現状」講習会

講師：公益財団法人 原子力安全研究協会 松原昌平氏

実施日：令和6年10月23日（水） ※8月16日（金）から順延実施

場所：大学研究室棟 B104 会議室

時間：16：00～17：00

4) 研修名：「『授業目的公衆送信保障金制度に関する利用報告』の具体的な入力手続き」（※学部研修会として実施）

講師：学生支援センター

実施日：令和6年12月18日（水）

場所：大学研究室棟 B104 会議室

時間：15：15～15：30

5) 研修名：「令和6（2024）年度に出た教育関係の答申等の情報共有」

講師：教育学部教育学科 濱田英毅教授

実施日：令和6年2月18日（水）

場所：大学研究室棟 B104 会議室

時間：15：00～15：30

#### ④ 評価

「オンライン授業における複製・公衆送信・伝達に関する『やってはいけないこと』と『授業の中でやってよいこと』パンフレットの配付」については、昨年度に続き、新任教員に配付し、オンラインで配信する資料が多いため、参考になったと思われる。「オンライン学修支援の動画」に関しては、教員用 Bb 上に掲載しており、必要に応じて教員が参照できるようにした。

学部等改革推進制度に関連した FD 活動は、玉川学園と教育連携を結んだ福島県川内村の巡検旅行、および川内村の取り組みに関連して放射線被害の影響について学ぶ取り組みを行った。ただ研修を受けるだけでなく、実際にフィールドに出て理解を深めるとともに、研修会で座学を提供する取り組みは今回が初めての実施であったが、ただ見る、ただ聞くだけよりも知見が深まることから、参加者の高い満足感を得ることができた。

なお、ここ数年で学生（および教職員）のメンタルケアに関する研修会を続けてきた。全学で実施する FD 研修（ハラスメント研修等を含む）の受講とも相まって、教育学部専任教員のメンタルケアに関する理解はかなり深まってきた。今後、すべての教育学部専任教員が、得られた知見を教育実践で活用していくことが期待される。

また、今年度から始めた教育関係の答申等の情報共有は、教育学部専任教員といえども、学校経営等の研究者でなければなかなか目を通す機会がないことから、高い評価を得ることができた。今後も引き続きこの研修会のスタイルを続けていきたい。

### (2) 学生による授業アンケート

#### 【通学課程】

##### ① 概要（目的を含む）

学生による授業評価（教育学部では「リフレクションシート」と称す）を全授業で実施する。集計結果は学部全体の平均と比較できる形として各授業担当者にフィードバックされ、新学期に向けて授業改善につなげるものとする。また学部・学科・学年別の集計結果の傾向や課題を学部全体で共有することを目的とする。

##### ② 到達目標

専任教員、非常勤講師が担当するすべての授業において学生によるリフレクションシートを実施する。実施した授業評価の集計はデータ分析と集積を行い、教員の授業改善および学生の傾向や課題の共有につなげる。

##### ③ 活動内容

専任教員、非常勤講師が担当する教育学部すべての授業において、授業アンケート（リフレクションシート）を実施した。

##### ④ 評価

令和 6 年度はほぼ対面授業であったが、授業の中の一部でフルオンラインやオンデマンド方式が用いられることもあった。前年度に引き続いて予習・復習の時間に関しては他項目よりも低くなっているが、フルオンラインやオンデマンド方式の授業などではより多くの時間を内容理解のために費やしている傾向が見えた。ただし、あくまでも平均

であり、個々の授業特性および学生の予習や復習に対する時間的な意識の違いがあることも考慮した上での評価と考えるべきである。この点に関してはアンケート設問内容の改善や設問に対する説明を加えるなど検討したい。また、この項目が高い教員の実施方法などを共有し他の教員の参考にしていきたい。

問題点としては、教育学部の授業アンケート回収率が低い点である。今後、回収率の向上に向けて、学部 FD 委員会を中心に検討する必要がある。

#### 【通信教育課程】

##### ① 概要（目的を含む）

スクーリング授業において、学生による授業評価を全科目において実施し、集計結果は各授業担当者にフィードバックする。目的は、各授業担当者が授業改善につなげることにある。

##### ② 到達目標

- ・専任教員、非常勤講師を問わず、すべてのスクーリング授業において学生による授業アンケートを実施する。
- ・実施した授業評価のデータ分析と集積を試み、教員の授業改善、また学生の傾向や課題を共有する。

##### ③ 活動内容

- ・開講されたスクーリングにおいて、専任教員、非常勤講師の全教員が、担当する全ての授業（科目）について、オンラインでの授業アンケートを実施した。
- ・質問内容は、昨年と同一のものを使用し、自由記述欄も設けた。

##### ④ 評価

授業評価の結果としては、各設問とも概ね高い評価を得た。各授業の評価結果は、担当教員本人に配付し、結果と課題を共有した。

通信教育課程では、対面、オンライン、ブレンディッド（オンライン＋対面）と複数の形態でのスクーリングを提供している。そのような複数の形態を設けている通信教育課程だからこそ、今後、それぞれの形態によるメリット・デメリットについても整理していきたいと考える。

また、生成 AI の普及により、以前とは異なる状況が生じてきた。通信教育課程において、学修を深めるための生成 AI の活用は認めているが、試験における使用は認めていない。この点、学生に方針を周知するため、ICT 教育研究センターと共同で対策を進めているところである。

#### (3) 教職員相互の授業公開と参観

##### 【通学課程】

令和 6 年度は対面授業ではあったが、いまだ新型コロナの影響も多少あり、また FD 担当者の時間的都合により困難となり、先生方に授業公開を依頼するのが難しくなったため実施を見送った。その代わりに、「教育学部の教員養成系の授業に関連した最新の教育答申

に関する情報共有」のFD(※(1)研修会等の5に記載した研修会とは別内容)を実施し、教員各自の授業に最新の教育動向を反映させるための情報共有を行った。

#### 【通信教育課程】

通信教育課程においても同様に授業参観の実施は見送ったが、代わりに上記の授業公開に変わるFDを通学課程と共同実施し、教員各自の授業に最新の教育動向を反映させるよう努めた。

### (4) FD 研修

#### 【通学課程】

##### 1) 「全人教育鹿児島研修」

#### ① 概要

全人教育研究センターが主催する研修旅行として実施。まとめ役は全人教育研究センター長の今尾佳生教授。本学建学の理念であり、また設定される教育課程の根拠でもある全人教育成立の背景を、創立者小原國芳の生涯の軌跡を探访する。本年度は特に創立者の幼少年期から青年前期を過ごした鹿児島の地を実地踏査する。参加者は今尾佳生、杉山倫也、小谷恵津子(何れも教育学部教授)、青木雄子、久保紘子、仁藤喜久子(教育学部准教授)、三橋綾子(教育学部講師)。

#### ② 到達目標

1. 小原國芳の生まれ育った地の歴史・地理的特徴を実際に見聞することを通して、創設者の生涯、及び全人教育の理念の成り立ちに関する理解を深める。
2. 目標1の過程で、全人教育に関する学びと研究のための新たな課題を見出す。

#### ③ 活動内容

令和7年2月27、28日の両日に実施。28日は鹿児島到着後、西南戦争の旧跡、探勝園、鹿児島郵便局や鹿児島師範学校跡を見学した後、甲南の日本基督教団鹿児島教会にて現牧師の先生と面談。29日は國芳が片道10キロ以上の山道を通ったという枕崎市の桜山小学校を訪問。次いで坊津歴史資料センター輝津館に立ち寄り、坊津町の歴史民族的背景について学ぶ。その後國芳の生誕地である久志を探访、玉川学園通りを歩いて生誕地公園へ。さらに國芳の墓所の参拝と関連人物の墓誌を調査。最後に加世田に向かい、國芳養家の旧鱒坂邸跡と周辺の薩摩武士の集住地である「麓」の様子を見学して、旅程を終了。

#### ④ 評価

##### 1. 理解の進化に関して：

- \* 國芳が在籍していた鹿児島師範学校の位置が、これまで想定されていた現名山小学校のあたりではなく、JR鹿児島中央駅を挟んだ海側であったかもしれない可能性が浮上。
- \* 日本基督教団鹿児島教会教会員の鹿島友義氏(社会福祉法人鹿児島いのちの電話協会理事長)の証言により、鹿児島師範生だった國芳が新聞配達のアルバイトをしていたという可能性が浮上。

\*小原國芳「勉学の道」として知られる久志から枕崎の桜山小学校までに山道が南さつま市の助成により整備されたが、その整備事業の任に当たった畑田智明氏に出会えた。

畑田氏は NPO 坊津やまびこ会の会員として歴史観光ボランティアガイドをされている認定山岳ガイドである。畑田氏作成の遊歩マップを入手することもできた。

\*鱒坂家から離縁された國芳の甥で代わりに鱒坂家を継いだ鱒坂二夫市氏とその妻アイ（國芳と前夫人との秋田の娘）の居住した屋敷跡を確認できた。

## 2. 新たな研究課題に関して：

\*鹿児島師範学校生徒時代の小原國芳の生活に関するエピソードについて

\*鹿児島師範学校の正確な位置の特定について

\*小原國芳や玉川学園に言及している学外メディアにおける資料収集について

## 3. その他：

今尾・杉山以外のメンバーは初めての鹿児島探訪であったが、全員大変充実した研修旅行であった旨を事後感想とされていた。

## 2) 「教育学部教育学研究科合同 FD 研修 包括連携協定先訪問 原子力災害を学ぶ」

### ① 概要

教育学研究科との連携による FD として実施。まとめ役は教育学研究科教授の原田真理。玉川大学と包括連携を結んだ福島県川内村との連携を進めるべく、現地を知ると同時に、原発事故の様子を学ぶことを目的とした。学部長佐久間裕之教授、教育学科主任杉山倫也教授、教育学研究科長若月芳浩教授以下、参加希望者が殊の外多く、受け入れ人数の調整に難航したが、研修費は教育学研究科と折半した。

### ② 到達目標

1. 福島県川内村との包括連携を進めるべく、福島県川内村の教育資源を理解し、今後の包括連携の在り方を模索する。
2. 原発事故の様子を学ぶ。

### ③ 活動内容

令和6年7月29日に実施。午前、東日本大震災・原子力災害伝承館を見学し、福島県の原子力災害を伝える最新の施設を見学。また、震災遺構である請戸小学校や、いまだに出入りが厳しく制限されている帰還困難区域を見学。福島県の教育旅行先としての可能性について、実地での見聞をもとに考えることができた。

午後は川内村の天山で休憩の後、川内小中学園（義務教育学校）、同施設に付属するコミュニティハウス「にじいろ」の見学のほか、教育資源としての遠藤きのこ園やワイナリーの見学を実施した。

以上、費用等の諸般の事情もあり、一日で全てをこなす強行軍であったが、参加者からはこうした形式での FD の実施について、高評価をいただいた。

### ④ 評価

今回の FD 研修は、包括連携先の巡検旅行ということもあり、伊従記章教育学部長の同

行を得て実施することができた。今回得られた知見に基づき、教育学部では福島県川内村との包括連携の在り方について模索していくことになる。なお、今回の FD 研修に関する知見や、巡検旅行によって得られた成果は、令和 6 年度学部等改革推進制度の成果報告会で具体的に報告する。

#### 【通信教育課程】

##### ① 概要（目的を含む）

本課程では、教員数が少なく独自の FD 研修を実施するのが難しいため、随時各種の学外 FD 研修に関わる情報を提供する。

##### ② 到達目標

本校の全学で行われる FD 研修のほかに、専任教員の各自の問題意識にあった学外 FD 研修に参加したり、関連する情報を得たりすることで、日々の教育活動の向上を図ることを目的とする。

##### ③ 活動内容

昨年度に引き続き取り組み「夏スク対面授業において工夫していること」を通信教員全員で相互共有することで、通信教員の授業向上に役立てた。また、生成 AI の普及に関連して、レポートの作成や試験の解答で生成 AI が利用されないよう、テキスト内容と紐づけた出題をする等の工夫を取ることが共有された。

##### ④ 評価

今年度の夏スクーリングの授業アンケート結果も、引き続き高い評価を得ることができた。これは各教員の授業向上のための努力の成果であると考えられる。

#### 4 昨年度（令和 5 年度）に提案された予定・課題の達成度について

##### 【通学課程】

教育学部は、学部独自の教育課題を追究する学部企画 FD 研修を行っているが、気候の影響や講師のやむを得ない事情、あるいは状況の変化により、中止または延期となった研修がいくつかあった。また、長時間に及ぶ教授会の前後の時間帯を研修時間にあてているため、教員の負担が大きいと思われる。この点は、昨年度から指摘され続けてきた課題であったが、今年度もまた課題を克服したとは言い難い。今後は無理のない研修会の実施に努めたい。

##### 【通信教育課程】

スクーリングの授業アンケートは、例年通りに実施しており、おおむね高い授業評価を維持することができた。ただし、テキスト学修科目については、学生のニーズを救い上げる方法をまだ模索することができておらず、今後の検討課題となる。

#### 5 今後（令和 7 年度以降）の予定・課題について

##### 【通学課程】

前年度に引き続き、日常の教授内容や方法の更なる検討と研鑽を重ね、本学の建学の理念

に基づき、今日の社会の要求に応じることのできる人材育成に取り組むことが重要である。授業アンケートにおいては、項目内容の改善として全授業に当てはまる項目の設定は困難ではあるものの、実習や演習、アクティブ・ラーニング、少人数の授業など授業体系に応じた項目を加えるなども今後の課題の一つである。また、近年の生成 AI の活用に適応できるように、ChatGTP などの利用や制限等についての研修も必要となるが、そうした教育技術的な内容は全学の FD で実施できるよう働きかけていきたい。

また、全人教育研究センターにおける FD 研修は、引き続き新任教員に優先的に鹿児島研修等を実施していきたい。

最後に、次年度は研修内容をより精査し、教員の負担が少なくニーズに沿った研修を行っていきたい。具体的には、従来の一斉教授型から情報共有・個別最適型の研修会への転換を進めていく。

### 【通信教育課程】

スクーリング科目については引き続き授業アンケートを実施する。令和 7 年度も対面でのスクーリングとオンラインでのスクーリングの双方が予定されていることから、それぞれのスクーリングにおける課題を明らかにするために、スクーリングの形態による比較や同一科目・同一教員の経年経過の分析などを試みたい。また、テキスト学修科目についても、学生のニーズをすくい上げることができ、なおかつ教員の指導方法や授業の改善にもつなげられる何らかの方法を検討したい。

一方で、生成 AI の普及に伴う学習課題の出し方やテストの出し方といった対応と、テキスト履修をむりなく実施するためのオンデマンド教材の制作、そのための研修が課題である。生成 AI の普及に伴う学修指導については、ICT 教育研究センターと合同で対策を検討中である。また、令和 6 年度中に多くの教材を制作することができたが、引き続き、オンデマンド教材の制作に取り組んでいくことが求められる。

## § 芸術学部

### 1 FD 活動への取組理念・目標

先を見通せない VUCA 社会は産業・就業構造などの変化が常に進行する。「芸術による社会貢献の実践力を育成する」をミッションとする芸術学部として、変化する社会の捉え方と貢献の仕方を常に検討して柔軟に対応していくことが望まれている。政府が掲げる Society5.0 社会は「経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会」と定義されており、芸術分野は新産業分野でも期待される感性や創造力などの育成と深くかかわっている。今後、社会の発展や改善に不可欠なニーズとしての芸術学部の人材養成はますます重要となることが予想される。

学部ミッションを達成するためには、常に芸術と産業分野や地域社会とのかかわりを意識しながら、ESTEAM 教育の推進をはじめ教員養成課程の充実など、カリキュラムや教授法の改善・開発を行う必要がある。また、入学生の資質や能力などの動向も踏まえた学修支援体制の構築や、学生を主体とした授業方法の研究および総合的な学修環境を形成するプロジェクト型授業や外部機関との連携授業を推進することも重要である。そのためには柔軟性や機動性をもった組織として教員構成を編成しなければならない。教員たちが目標や課題を共有し、協働して教育活動を推進・改善できるチーム力形成が重要である。

### 2 学部における FD 活動の組織構成と役割

芸術学部長を中心とした主任会の構成員及び芸術学部 FD 担当が FD 活動の中核メンバーである。定期開催の主任会と主任研修会が中心となり教育課題の共有や分析を行い、目標や課題の設定および改善方策などの基本方針を検討する。そして、中核メンバーはもとより、課題ごとの担当教員が報告や成果及び方策等を拡大教授会で報告することなどを通じて、学部全教員が目標や課題を共有し、組織的な取組とする仕組みを構築している。また、各学科の主任は学部 FD の中核メンバーであるので、学科内の取組をまとめることや推進する役割を担い、教授会と学科会が連動して FD 活動を推進させている。主任会構成員および大学 FD 委員会委員は、全学的な課題や情報の収集と伝達及び他学部・他大学における FD 活動の情報収集を行うと共に、学部内の情報共有を図り、FD の組織的活動が円滑に行われる役割を担っている。

### 3 令和 6 年度の活動報告

#### (1) 授業アンケートの実施と授業成果報告書の作成

##### ① 概要・活動内容（目的を含む）

令和 6 年度は、芸術学部で開講されている授業（卒業研究など複数のゼミを同じ授業名でまとめられた科目を除く）について春学期、秋学期それぞれ期中、期末に年 4 回の授業アンケートが UNITAMA による調査方法にて実施された。調査対象とした期末段階での対象者数（延べ数）およびアンケート回答率は、春学期履修者数 4,483 人、回答者数 1,759 人 39.2%、秋学期履修者数 3,746 人、回答者数 1,209 人 32.3%であった。

アンケートの全体概要結果および各科目担当教員の個別アンケート結果詳細の閲覧方法を学部拡大教授会等によって専任教員に周知した。また、総合的な内容については大学のポータルサイトにて公開される。

教員の教育活動の振り返りと成果共有を目的に、学部専任教員・技術指導員（25名）と非常勤教員（3名）が令和5年度の授業成果を文書化し、芸術学部紀要別冊（授業報告書）としてまとめた。302部作成し、令和7年2月中旬に学部全専任教員、全非常勤教員、および教育学的情報図書館に配付した。授業改善と成果を文書として記録化することで長期的かつ広範に活用することが期待できる。令和6年度も引き続き授業成果報告書を作成する。なお、本授業報告書は、教員間の授業参観と同等の効果があるものとして、令和6年度授業参観に替える。

## ② 到達目標

芸術学部FD委員会においては、授業アンケートのデータを分析し、学部運営に活かすと共に今後のFD活動の方向性および学部教育を考える手がかりとする。また、各科目担当者はそれぞれのアンケート結果を参照し、授業の内容と養成人材像との妥当性について点検する。授業成果報告書は各学科の専任・非常勤教員に配付し、全ての教員が専門科目の概要を把握することによって、より緊密な連携を可能とする。

## ③ 評価

UNITAMAによる授業アンケートは個別に結果を確認でき、教員自身が自分の担当する科目を客観的に評価することができるようになった。問題点としてはアンケートに対する回答率の低さがある（春学期39.2%、秋学期32.3%）。2年、3年、4年と上級生になるほど、すべての科目でアンケートに回答する意識が低下してくることが原因である。回答率を上げるためにはアンケートの重要性を周知していく必要がある。

## (2) 講演会・研修会・ワークショップなど

### ① 概要

芸術系教員のためのアカデミックスキル（4月25日）

### ② 到達目標

芸術系教員が研究ノートや実践報告を執筆する際の要点を把握する。

### ③ 活動内容

研究ノートや実践報告を執筆する際の要点について、実際に作成する「芸術学部紀要別冊」をもとに教育研究ノートの位置付けと執筆のための注意事項を示した。

### ④ 評価

前年度に実施した「芸術系教員のためのアカデミックスキル」を継続する形で実施した。参加者は、アート・デザイン学科19名、演劇・舞踊学科13名中12名、音楽学科12名全員であった。以下、アンケート結果をもとに記述する。

研修時間は、拡大教授会前の時間を利用し、30分の予定であったが5分延長となり、35分の研修となった。実施時間に対して、80%程度の教員が適当、20%程度の教員が短いと感じている。

今回の研修を受け、論文や研究ノート等を含めた執筆スキルに関する研究会を今後も参加を希望する教員は75%、希望しない教員は25%である。希望する教員は、テーマの選択、構成の組み方、「よい文献」の判断、研究の深め方や展開の仕方等、基礎的内容の研修を期待している。

芸術学部が発行する『芸術研究』及び『芸術研究 別冊』執筆に関するFD研修会で今後取り上げてほしい内容については、授業報告書執筆に係る執筆の手引きや執筆のコ

ツ、アンケート調査をはじめとした検証材料の扱い方などが挙げられた。そのほか、アカデミックスキルに関する継続的な研修会の開催、論文の発表会の提案等の意見もあった。

学部単位で実施する研修会には、科研等競争的資金獲得の意義とそのノウハウ、ChatGPT等、生成AIを事務系業務に活かせるような講習、Z世代の心理やアタッチメントスタイルごとの対応、学会の種類や学会での発表の仕方などを求める意見があった。

前年度から引き続き、本研修会を受け、各教員のアカデミックスキルに対する個人の認識が意識化され、その向上に向けての積極性が顕在化したと言える。学部として、今後のFD研修を設定する上で大学組織として求めるものはもちろんのこと、教員自身が求める内容に取り組む必須性を考慮した設定が必要であろう。

### (3) 調査・研究など

なし

### (4) 学外セミナー等への教員派遣

#### ① 概要

大学の音楽科教育に関わる情報交換会

#### ② 到達目標

AI活用、鑑賞教育、他校種との教育連携などについて、他大学の教員と意見交換を行い、現状の問題点を把握し、今後の大学における音楽教育授業の実施に活かす方向性を見出す手立てとする。

#### ③ 活動内容

本年度の大学部会大会は大学教員及び大学院生5組による研究発表が行われた。愛知教育大学教授、玉川大学芸術学部音楽学科助手、山梨県立大学講師、日本女子体育大学講師、東京藝術大学教育研究助手がそれぞれの研究領域について発表を行なった。その後質疑応答も実施され、充実した時間となった。本年度は音楽鑑賞におけるAIの活用とクラブ活動の地域移行問題についての発表に注目が集まった。

午後は、公開授業「三味線の実技」と中学校における授業実践報告を文京区第八中学校現職教諭が行った。最後は長崎女子短期大学 福井昭史氏の日本の伝統音楽の講義で幕を閉じた。これからの音楽科の課題である中学校における和楽器指導と校種間の連携、地域連携について活発な意見が出された。

玉川大学からは、発表者の露崎義矢助手、清水宏美教授、長裕二教授、津島圭佑講師、中村岩城教授が参加した。

#### ④ 評価

今年の大学部会は音楽の創作領域に置けるAIの活用方法、クラブ活動の地域連携における提案等、令和の時代に取り組まなければならない分野の内容が盛り込まれており、大変有意義なものであった。次年度、佐賀大学で行われる大学部会大会に期待したい。

## 4 昨年度（令和5年度）に提案された予定・課題の達成度について

昨年度に提案した令和6年度FD活動計画はほぼ達成することができた。次年度に向けて新たに、講演会・研修会・ワークショップや学外セミナー等への教員派遣などFDの取り組みの方法を再度検討することとしたい。

実施された各 FD 活動に関しては逐次、芸術学部拡大教授会により報告された。

## 5 今後（令和 7 年度以降）の予定・課題について

大学生生活もコロナ以前に戻り、学部改組から 4 年が過ぎて新学科の完成年度をむかえた。これからは、新学科での教育活動の成果、課題をもとに、よりよい学部教育をおこなっていくことが重要である。

今後も、専任・非常勤教員全体の意識向上や、各学科・各プロジェクトの横断的な連携はもとより、社会との連携を図り、理論と実践の往還による教育体制を推進し、現代ニーズに適合した人材養成機関と研究機関としての機能を高めるためにも、積極的かつ継続的に教員の資質能力やチーム力の向上努力を一層推進する。

## § リベラルアーツ学部

### 1 FD 活動への取組理念・目標

本学部では、①学士課程教育の質保証、②学部・学科設置の趣旨と教育目標、③実効的なリベラルアーツ教育の実現、という観点から日頃の教育研究活動の改善へ向けた FD 活動を展開することを目標としている。

### 2 学部における FD 活動の組織構成と役割

本学部における FD 活動の組織構成・役割は以下の通りである。

学部長・各主任…学部における FD 活動の方針について提案・助言する。

FD 担当…学部における FD 活動全般をコーディネートする。また大学 FD 委員会で審議・報告された内容を教授会にて報告する。

学部専任教員対象の FD 研修会をコーディネートする。

※この他、所属教員全員が主体的に FD 活動に取り組む体制がとられており、教育内容・方法に関する情報交換は教員間で日常的に行われている。

### 3 令和 6 年度の活動内容

#### (1) 初年次教育の方向性に関する研修

##### ① 概要（目的を含む）

リベラルアーツ学部の人材育成に資する、より効果的な 1 年次研修・初年次教育を実践するために、今年度の実施結果を共有し、その振り返りをもとに次年度以降の 1 年次研修の具体的なプランを検討する。また、研修と連動した初年次教育のあり方についても意見交換を行う。

##### ② 到達目標

次年度以降の 1 年次研修および初年次教育カリキュラムを改善することができる。

##### ③ 活動内容

4 月～翌 3 月に実施した。参加者は 1 年生担任教員で、必要な回には各主任が参加した。具体的には以下の各項目について検討を行った。

- ・「一年次セミナー」のクラス運営と学修・生活に関する早い段階での教育および指導・支援方法
- ・新入生研修代替プロジェクトの内容と指導方法
- ・次年度以降の新入生研修の内容と実施方法
- ・秋学期「一年次セミナー102」の内容と指導方法

##### ④ 評価

入学もない 1 年生が大学での学修に慣れ、自発的な個々の学びを着実に計画・実践していくために、「一年次セミナー」で提供すべき内容について担任教員を中心として丁寧な議論を重ね、1 年生の指導とサポートをきめ細かく行うことができた。コスモス祭学部展などの発表の場を「一年次セミナー」で活用し、学部内の教員と学生のコミュニケーションを促進し、本学部の多様な学問分野についての知識を得、それを学内外へ発信することによって、大学での対面機会が限られていた 1 年生の学部所属意識を高めることにもつながった。以上のように、今年度においても、効果的な初年次教育カリキ

ュラムを整えることができた。

## (2) 「二年次セミナー」の教育内容と方法の改善に関する研修

### ① 概要（目的を含む）

本学部2年生必修科目「二年次セミナー201」および「二年次セミナー202」の教育内容と教育方法を検討し、望ましい2年次教育のあり方を考える。

### ② 到達目標

この科目の教育内容・方法を具体的に改善することができる。

### ③ 活動内容

春・秋学期中に2年生クラス担任会を開催し、「二年次セミナー」の教育内容・方法を改善するためディスカッションを行った。今年度は以下の点を中心に検討を行った。

- ・アカデミックリーディングおよび要約、ディスカッションのさらなるスキルアップの方法
- ・学部での3年生以降のより専門的な学びに向けた指導方法
- ・学内にとどまらない多様な学びや経験に触れるための情報提供のあり方、特に海外留学やキャリアプランニングについて

### ④ 評価

2年次教育のあり方に関して教員間で問題意識を共有し、実際の教育内容と方法の改善を進めることができた。コスモス祭学部展を活用して、「二年次セミナー」春学期での学修内容の整理と補足、プレゼンテーションをグループワークで実施し、学修をさらに発展することができた。

## (3) 令和6年度リベラルアーツ学部FD研修会

### ① 概要（目的を含む）

リベラルアーツ学部教育活動の点検、本学部共同研究報告、新年度教育計画、学部教育の今後の展望に関する意見交換等を行う。学部教育目標や教育内容・方法、研究活動のあり方について教職員間で認識を共有することができる。

### ② 活動内容

令和7年2月19日（水）に玉川大学 大学教育棟 2014 7階会議室にて専任教員による研修会を実施し、以下の項目について集中的に検討した。

(ア) 特別講演 株式会社ナガセ（東進ハイスクール）

「入学者の現状と傾向から考える10年先を見据えた学生募集とは…」

(イ) リベラルアーツ学部のキャリア教育

二年次セミナー、キャリアセンター、キャリア研修

(ウ) 学部等改革研究発表

学部共同研究中間報告

(エ) 学部英語科目に関する検討

(オ) フィールドごとの検討

(カ) 「一年次セミナー」「二年次セミナー」「学際アカデミックスキルズ（リーディング）」の検討

### ③ 評価

- (ア) 株式会社ナガセの特別講演では、目下の入試の現状と傾向について、リアルなデータに基づいてご報告いただき、そうした厳しい状況を踏まえた上で今後の学生募集や入試戦略をどのように考えていくかについてのヒントを得ることができた。
  - (イ) キャリアセンターでのキャリア教育、「二年次セミナー」でのキャリア教育、および3年次のキャリア研修に関して振り返りを行い、リベラルアーツ学部でのキャリア教育の継続性と連携という観点から意見を交換し合い、次年度に向けたキャリア教育の方向性についての具体的なイメージを得ることができた。
  - (ウ) 学部共同研究中間報告では、オフキャンパススタディーズのプログラムに関して報告がなされた。台湾の歴史と文化の背景を理解することの重要性への認識が深まると同時に、アメリカの大学での STEAM 教育の様子を視察した経験が報告されており、今後のオフキャンパススタディーズの推進に当たって大きな示唆を得ることができた。
  - (エ) リベラルアーツ学部の学部英語科目について、そのレベル設定やコンテンツなどについて討議がなされ、今後の英語教育についての具体的なビジョンを得ることができた。
  - (オ) ヒューマンフィールド、カルチャーフィールド、ソサイエティフィールド、STEAM フィールドの4つのフィールドごとにグループ分けを行い、グループごとに本年度のフィールドの運営と次年度の方針とについて討議がなされ、有意義な意見交換の場となった。
  - (カ) 「一年次セミナー」「二年次セミナー」「学際アカデミックスキルズ（リーディング）」に関して、今年度の運営について振り返りを行い、使用する教材やスケジュールだけでなく、授業内容及び方法について忌憚なく話し合うことで、次年度に向けた授業改善の具体的なイメージを得ることができた。
- 以上の点から、きわめて意義深い研修会であったと評価できる。

### (4) 令和6年度リベラルアーツ学部臨時FD研修会

#### ① 概要（目的を含む）

学部教育において生じる直近の問題に対応すべく必要に応じて研修会を開催する。

#### ② 活動内容

今年度は以下の要領で実施した。

令和7年1月16日（木）17:00～19:30 玉川大学 大学教育棟 601 教室にて、ベネッセの講師により、GPS-Academicの結果報告とその解説についてのレクチャーが行われ、それに基づいて専任教員から質疑応答がなされた。

#### ③ 評価

リベラルアーツ学部における GPS-Academic の結果の現状とその傾向についての認識が深まると同時に、活発な意見交換を通じて、今後の対応策についての検討を進めることができた。

#### (5) リベラルアーツ学部防災訓練

##### ① 概要（目的を含む）

大学教育棟 2014 等の防火施設、避難誘導方法等について、実践的に学ぶ。

##### ② 到達目標

教育・研究現場において、災害発生時の迅速かつ的確な対処ができるようになる。

##### ③ 活動内容

令和 6 年 10 月 31 日 (木) 16:00~17:00 玉川大学 大学教育棟 2014 517 教室にて、防災講座が実施された。

##### ④ 評価

キャンパス内で大規模地震が発生した際の対応方法等についての認識が深まった。

#### 4 昨年度（令和 5 年度）に提案された予定・課題の達成度について

- (1) 今年度 FD 研修会で検討された新カリキュラムの実施計画に基づき、令和 6 年度の新カリキュラム実施における具体的運用の結果として明らかになる諸問題について議論を積み重ねる、そのための場を FD 活動で提供する。初年次教育・2 年次教育に関する研修（一年・二年次セミナー担当者会議）も、この点を踏まえて展開する。

上記の予定・課題については、「二年次セミナー」の運営についての検討を行ったことも含めて、全体として効果的に達成することができた。

- (2) 講習会は、防災訓練、ハラスメント講習の他、学部内で共通する問題意識にかかわる内容についての開催を検討する。

上記の予定・課題については、防災訓練を行ったことも含めて、全体として効果的に達成することができた。

#### 5 今後（令和 7 年度以降）の予定・課題について

今年度 FD 研修会で検討された授業改善計画等に基づき、令和 7 年度の新カリキュラム実施における具体的運用の結果として明らかになる諸問題について議論を積み重ねる、そのための場を FD 活動で提供する。初年次教育・2 年次教育に関する研修（一年・二年次セミナー担当者会議）も、この点を踏まえて展開する。

防災訓練の他、学部内で共通する問題意識にかかわる内容についての開催を検討する。

## § 観光学部

### 1 FD活動への取組理念・目標

観光の意義と役割、現状と課題を的確に理解し、適切な情報収集とその分析および異文化に対する理解を基礎に、高度な英語運用力を駆使してグローバル時代の観光ビジネス、地域活性化に貢献できる人材養成の達成を目標にFD活動に取り組むこととする。

### 2 学部におけるFD活動の組織構成と役割

観光学部長、観光学科主任、教務主任、学生主任、FD担当教員が中心となってFD活動を実施する。学部の担当教員と大学FD委員は連携して活動計画を取りまとめ、研修会などのプログラムの実施にあたる。

### 3 令和6年度の活動内容

#### (1) 講演会

「合理的配慮を必要とする学生の対応」

実施日 : 令和6年8月16日(金) 13:00~14:00(質疑応答含)

講師 : 学生支援センター 障害学生支援コーディネーター 安藤正紀氏

場所 : オンラインにて

#### ①概要(目的を含む)

合理的配慮の具体的な実践例を学ぶことで教員の実務能力を向上させる、具体的な合理的配慮の実施例を紹介し、成功事例と課題を共有する。

#### ②到達目標

教員間で合理的配慮に関する情報や事例を共有し、協力して対応できる体制を築くことができる。

#### ③活動内容

観光学部に在籍する合理的配慮が必要とする学生を事例に意見交換を行い対応方法について確認を行った。

#### ④評価

研修を通じて、各教員が合理的配慮の基準や対応すべき範囲を理解し、今後の対応方法の参考となった。

#### (2) 学外セミナーへの教員派遣

派遣先: 芝浦工業大学 教育イノベーション推進センター

令和6年9月18日(水)「学生主体の授業運営手法WS」1名参加

#### ①概要

本ワークショップは、講義における「一般的アクティブラーニング」を効果的に実践するための授業運営手法を習得することを目的とする。学生主体の授業運営を取り入れ

ることで、学習効果を向上させる方法を学ぶ。

## ②到達目標

アクティブラーニングの理論を理解し、学生主体の授業運営手法を習得するとともに、実践的な指導スキルを向上させ、授業改善のための計画を作成することを目標とする。

令和6年10月19日（土）「研究室指導に必要なコーチング技能入門WS」1名参加

## ①概要

コーチング技能を活用することで、学生の考える力や自発性、応用力を高め、その可能性を引き出し、個性を活かすことができる。本研修では、ワークを交えながら、研究室指導に必要なコーチング技能の基本、準備、ティーチングとの使い分けを学ぶ。また、遠隔コーチングのメリットとデメリット、留意点についても解説する。

## ②到達目標

1. 研究室教育の強みと弱みを説明できる。
2. 自身の研究室教育の特徴を分析できる。
3. コーチングの概略について説明できる。
4. コーチングとティーチングを使い分けることができる。
5. コーチングを体験する。

## (3) 学生による授業アンケート

### ①概要（目的を含む）

観光学部観光学科の科目において、授業改善を目的とした授業アンケートを実施した。

### ②到達目標

学生の学修達成度を測り、改善点を踏まえて今後の授業運営に活かす。

### ③活動内容

Web アンケート機能を活用して、学生を対象とした観光学部開講科目の授業アンケートを実施。データの集計結果は UNITAMA で科目担当教員が参照できる。

### ④評価

#### ■回答率

令和6年度春学期	19.7%	(対象者数：1,550名)	回答数：305名	※延べ数
令和6年度秋学期	20.3%	(対象者数：1,213名)	回答数：367名	※延べ数
令和5年度春学期	24.0%	(対象者数：1,650名)	回答数：396名	※延べ数
令和5年度秋学期	18.9%	(対象者数：1,504名)	回答数：285名	※延べ数

※回答率前年比：秋学期が改善するも春学期の回答率が下がる。

#### ■スコア

令和6年度 春学期：4.2 秋学期：4.2

令和5年度 春学期：4.1 秋学期：4.2

※令和6年度春学期が前年度（令和5年度）よりも、0.1ポイント改善した。

#### 4 昨年度（令和6年度）に提案された予定・課題の達成度について

令和6年度のFD活動では、「合理的配慮を必要とする学生の対応」「学生主体の授業運営手法」「研究室指導に必要なコーチング技能」などの研修の実施や講演会の参加を通じて、教員の意識向上と対応力の強化を図った。その結果、合理的配慮に関する知識や学生指導方法について理解を深めることができた。また、教育の質向上に向けた課題の可視化実現を目指して授業アンケートの回答率改善に取り組んだが回答率は依然として低く、十分なデータを得るには改善の余地がある。今後も回答率向上に向けた取り組みを行い、より実効性のあるFD活動を推進していきたい。

#### 5 今後（令和7年度以降）の予定・課題について

令和7年度以降も、合理的配慮を必要とする学生への対応力向上や、学生主体の学びを推進する取り組みを継続していく予定である。特に学生に対する指導方法のさらなる深化や、授業運営の手法を共有する機会を充実させ、教育の質向上を図りたい。

また、授業アンケートの活用については、回答率の向上に向けた教員や学生に対する啓蒙を行い、より多くの学生の意見を収集したい。これらの取り組みを続けながら、学生の学びをより充実させるためのFD活動を継続していきたいと考えている。

### 3. 教師教育リサーチセンターの活動

#### 1 教職課程 FD・SD 活動への取組理念・目標

本センターは、大学における教職課程の運営を目的とし、大学附置機関として設置された。主な業務内容には、「教職課程における学生支援」と「教職に関する研究活動支援」がある。研究活動支援のひとつとして教員養成における教職課程 FD・SD 研修があり、教員養成の質を向上させることを理念・目標としている。

#### 2 教師教育リサーチセンターにおける教職課程 FD・SD 活動の組織構成と役割

センター長、課長及びリサーチフェローを中心に教職課程 FD・SD 活動を計画し、課長補佐以下職員で研修会開催の実務を担当している。

#### 3 令和 6 年度の活動内容

##### (1) 教師教育フォーラム

###### ① 概要（目的を含む）

『教員不足解消のための教員確保と大学の教員養成改革』をテーマとして取りあげ、実施した。

令和 6 年 6 月 17 日の中央教育審議会初等中等教育分科会では、教師不足の現状と対応策が報告された。東京都内の公立小学校では、令和 6 年 4 月 7 日時点で約 20 人の教員が不足している。この問題に対処するため、教員採用試験の早期化（3 年生でも受験可能）、複数回実施などが検討されている。また、特定分野に強みを持つ人材を採用するため、教職課程の法改正や専科指導優先の教員養成特例も実施されている。さらに、教職大学院修了生に対して奨学金返還免除措置が提供されるなど、様々な支援が行われている。

今回の教師教育フォーラムでは、教員不足に関する現状や課題を文部科学省、教育委員会、教育現場、教員養成大学の各視点から共有し、今後の取り組みの方向性を議論した。各自治体の報告から、講演者、出席者がともに考える機会として計画した。

###### ② 到達目標

学内外より 200 名以上の出席者を集客することを目標に掲げた。

###### ③ 活動内容

日時：令和 6 年 10 月 19 日（土）9：30～15：30

於：大学教育棟 2014 よりオンライン（Zoom）配信

テーマ：教員不足解消のための教員確保と大学の教員養成改革

###### 【プログラム】

午前の部

○開会挨拶（5 分） 小原 一仁 玉川大学学長

○講演（40分）

教員確保に関する文部科学省の施策と大学教員養成への期待

文部科学省総合教育政策局 教育人材政策課長 後藤 教至 氏

○ショートレクチャー（10分） 全国私立大学教職課程協会会長 小原 芳明 教授

○シンポジウム（90分） 教員確保の現状と課題

- ・東京都の取り組み（15分） 東京都教育庁 人事部主任管理主事 金木 圭一氏
- ・神奈川県での取り組み（15分） 神奈川県教育委員会 副局長 羽鹿 直樹 氏
- ・横浜市の取り組み（15分） 横浜市教育委員会 教育次長 石川 隆一 氏
- ・教員不足をふまえた大学の教員養成改革の課題（15分）

玉川大学教師教育リサーチセンター リサーチフェロー 森山 賢一 教授

【コーディネーター】玉川大学教師教育リサーチセンター 笠原 陽子 客員教授

午後の部

○分科会：教職大学院 13：00～15：30

- ・国語科教育：学びが活性化する言語活動&話し合い

『教育科学国語教育』グループ連載を受けて

玉川大学教職大学院 松本 修 教授

- ・学びの保障：誰一人取り残さない「教育」とは  
－「生きる力」に繋がる学びの保障について考える－

玉川大学教職大学院 今井 勉 教授

- ・英語科教育：生徒が主体的に取り組む英語の授業について考える  
～5 ラウンドシステムの英語授業の実践から～

玉川大学教職大学院 西村 秀之 准教授

④ 評価

テーマに基づき文部科学省よりご講演いただき、シンポジウムでは、東京都教育長人事部、神奈川県教育委員会教育局、横浜市教育委員会、教員養成大学それぞれの立場からの報告をもとに、意見交換がされた。

午後の部では、本学の教職大学院担当者を中心に分科会を実施し、3つのテーマに分かれて発表を行い、意見を交換した。

また、遠方からの参加者の利便性なども鑑みて、開催方法は、全体会を引き続きオンライン形式、分科会を対面およびオンライン形式（※分科会による）の併用とした。成果として、近隣地域のみならず幅広い地域の現職教員等学校関係者、教員養成に携わる大学教職員、教員志望学生、教育研究者、教育委員会関係者等、教育に携わる方々に参加していただくことができた。

会としては延べ120名の参加者を迎え、盛会のうちに終了した。

## (2) 令和6年度教職課程FD・SD研修会(大学教育力研修分科会)

### ① 概要(目的を含む)

本学では、中央教育審議会答申『『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～』(令和4年12月19日付)にて提言された「理論と実践の往還を重視した教職課程への転換」に基づき、教育実習等の在り方の見直し、特別支援教育の充実に資する学校現場体験の充実、「介護等の体験」の活用の具現化を実施するカリキュラムを、令和6年度より開始した。

実施にあたっては、多くの自治体・学校に学生の現場実習の機会をいただいた。新たなこの取り組みにより、どのような状況が生まれたのか。今年度より開始した「学校体験活動A」「介護等体験」の意義と課題について、建設的な意見交換をする場として、実施初年度を振り返りたいと考え本研修を計画した。今年度より、教学部主催の大学教育力研修の分科会のひとつとして取り扱ってもらうように協力をしていただき、更なる参加者増を目指した。

### ② 到達目標

本取り組みが年を重ねるごとに教員養成と学校現場にとってWin-Winになるために、どのような修正をしていけばよいか。学校と大学で共に教員養成を考える機会とする。

### ③ 活動内容

日時：令和7年2月21日(金)13:30～15:30

場所：大学教育棟2014 605教室

テーマ：新たな取り組み「学校体験活動A」「介護等体験」の初年度振り返り

高橋 博幸氏(町田市立忠生中学校 校長)

木村 典明氏(横浜市立釜利谷中学校 校長)

辰口 直美氏(川崎市立玉川小学校 校長)

沼澤 俊宏氏(相模原市立藤野北小学校 校長)

対象：大学教員、事務職員

内容(目的)：各自自治体(学校)の長より、実際の受け入れ状況をご報告いただくことで、今年度より開始した「学校体験活動A」「介護等体験」の取り組みについて、受け入れ側からの視点を得て今後の指導に生かす。

### ④ 評価

学内教職員より約54名が参加した。「学校体験活動A」および「介護等体験」の取り組みについて、各自自治体(学校)の長から実際の受け入れ状況を直接伺うことで、現状を確認し、教員養成大学として今後の教育活動の改善意識を高める機会となった。

## 4 昨年度(令和5年度)に提案された予定・課題の達成度について

令和6年度は「教師教育フォーラム」及び「教職課程FD・SD研修会」各1回を計画し、

開催した。計画通り実施することができ、それぞれの目標を達成することができた。

#### 5 今後（令和7年度以降）の予定・課題について

「教師教育フォーラム」及び「教職課程 FD・SD 研修会」（大学教育力研修分科会）を計画している。

## 4. ELF センターの活動

### 1 FD・SD 活動への取組理念・目標

ELF センター (CELFL) は、異文化間コミュニケーションにおけるグローバル言語としての英語の活用を推進し、ELF (English as a Lingua Franca) に配慮した教育法および超文化的英語使用の促進に取り組んでいる。令和 6 年度には 20 ヶ国出身の 51 名の多様な教員陣が構成され、各教員が独自の文化的・教育的・言語的背景を授業に反映させることで、ELF に配慮した教育の質を高めている。ELF センター教員の出身国には、オーストラリア、ブラジル、カナダ、フィンランド、ドイツ、イラン、アイルランド、イタリア、日本、マレーシア、フィリピン、ロシア、スロバキア、韓国、スペイン、スリランカ、タイ、英国、米国、ベトナムが含まれ、話される第一言語も多岐にわたる。

令和 6 年度は ELF センター創設 10 周年を迎え、この 10 年間でカリキュラム開発と教育革新が進められてきた。開設当初は四技能を統合した 4 単位制の ELF プログラムとして設計されたが、令和 5 年の大幅なカリキュラム改訂により、2 単位制を導入し、柔軟な学習環境の構築を図るとともに、ELF に対する意識をさらに強化した。この移行を円滑に進めるため、ELF センターでは教員向けの専門研修やワークショップを継続的に実施し、指導の質の向上に努めている。

令和 6 年度には 27 の異なる科目が開講され、春学期には 2,454 名 (171 クラス)、秋学期には 2,125 名 (161 クラス) が履修したほか、夏季・冬季の集中講座も一部開講されている。こうした取り組みを支えるのは 37 名の非常勤講師と 13 名 (秋学期 12 名) の専任講師であり、各教員が拡充されたカリキュラムに対応できるよう、適切な指導スキルと戦略を習得することを重視している。

また、教員がさまざまな言語的・文化的背景を持っているため、共通語としての英語の理解と使用を重視し、言語学習環境を共同で構築している。ELF センターの FD では、教員のニーズに応え、遠隔教育スキルの向上を支援するために様々な FD ワークショップ、講義、特別セミナー、ディスカッションを実施している。

教員研修活動は、教員にとって互いの知識や経験から広く学ぶことができる有意義な機会として位置付けられている。ELF センターの FD 活動は、最高の学習環境を提供し、共通語としての英語の理解と使用を促進することが目的である。

玉川大学の ELF センターは、教員の資質向上と遠隔教育のスキル向上を重視し、教員研修活動を通じてこれらの目標を達成しようとしている。ELF センターは、ELF プログラムの質を高めるため、専任教員だけでなく非常勤講師の資質向上にも取り組んでいる。本報告書では、ELF に配慮した教育実践に関する研究成果や、教員育成への継続的な取り組みについて詳述する。

### 2 ELF センターにおける FD・SD 活動の組織構成と役割

ELF センター (CELFL) の FD 活動の告知や内容は ELF センター会によって決められている。予算やサポート等もこの会議で審議される。FD 活動の内容が決定された後、大学 FD 担当を中心に、ELF センターの作業部会の専任教員がその企画と実施を担当する。指導法、

評価など作業部会内にさまざまな分野に特化した教員のグループが存在し、CELF Forum Journal, CELF Forum, CELF Orientation Meeting, Blackboard や ELF ワークショップなどの FD 活動を担当する。

### 3 令和 6 年度の活動内容

#### (1) 講演会・ワークショップ開催

##### 1. 「CELF フォーラム:ELF センター設立 10 周年を記念して」 CELF FORUM 2024:10th Anniversary of the Founding of the Center for English as a Lingua Franca

###### ①概要

令和 6 年度「CELF フォーラム：ELF センター設立 10 周年を記念して」

開催：令和 6 年 9 月 4 日 10：00～16：45

###### ②達成目標

- ・ ELF 教員が授業で活用できるリソースを共有する。
- ・それぞれの FD 活動において非常勤教員に参加を促す。
- ・ K-16 学園内の英語教員が集う機会を提供する。
- ・ ELF センターと英語教育関係、および教員同士のつながりを強める役割を果たす。
- ・これらの活動により ELF センターの教員が一堂に会し、より良い教育実践に関する考えや研究成果を共有する機会とする。
- ・外部講師を招致し、テーマに関する研究の最新情報を常に更新する。

###### ③活動内容

- ・フォーラムテーマは「ELF 研究と教育の視点：英語教育と言語媒介教育 Perspectives from ELF Research and Pedagogy: English Language Teaching and English-Medium Education」であり、基調講演にはサウサンプトン大学応用言語学部教授およびグローバル・イングリッシュ研究センター (Centre for Global Englishes) Will Baker 博士を迎えた。Baker 博士による 2 つの基調講演と CELF センターの専任教員および非常勤教員等による 7 件の発表が行われ、参加者は K-16 の英語教育に携わる教員が自身の指導実践を再考する契機を得た。
- ・ Baker 博士の基調講演 1 の講演内容は英語が持つ植民地時代の歴史的背景を踏まえ、ELF (English as a Lingua Franca) 研究が多言語・異文化の視点を取り入れた、より包括的な英語教育の可能性を示すことを強調した。また、社会経済的に異なる教育環境における ELF と英語教育の役割についても研究結果を共有した。
- ・ Baker 博士の基調講演 2 では「超文化的な大学：多言語環境における英語教育の課題」について従来の英語による授業 (EMI: English Medium Instruction) の枠を超えた、より包括的な英語教育 (EME: English Medium Education) の必要性が強調された。
- ・他の発表者内容 (CELF と他学部の教員計：8 名)
- ・プレナリー発表「10 年間で振り返って」小田眞幸博士 (玉川学園理事、元 ELF センター長)
- ・発表①「共同グループワークによる言語学習の強化とデジタル時代のアクティブラーニング戦略」ブレーデル, マリア非常勤講師

- ・発表②「情報格差のあるスピーキング課題後の英語学習者の偶発的語彙習得率タスク」  
ミリナー, ブレット准教授
- ・発表③「語彙力向上は感情的犠牲の上に成り立つ：語彙学習における課題前支援の役割」  
レイクセンリング, アンドリュー准教授
- ・発表④「効果的な L2 教師に対する学習者の認識：個人的・職業的資質と技術的スキル」  
中村幸子講師
- ・発表⑤「インクルーシブ教育実践としての ELF 教室における映画制作」  
ノーヴィコヴァ, ナターリア講師
- ・発表⑥「ハリウッドが国際共通語としての英語について教えること」  
スティーブンソン, ロバート アンドル講師
- ・発表⑦「オンライン学習・教育におけるトランスランゲージングを支援する AI ツールの活用」  
ビーバーフォード, カーティス教授（玉川大学大学院教育学研究科）

#### ④講演会・ワークショップ開催の評価

- ・来場者は 50 名の学内の K-16 の教職員、他大学の教員は ELF 視点を活かした英語教育の実践的アプローチについて具体的な事例が紹介され、実践指導を再考する機会を得た。
- ・ELF センター所属教員が研究・教育の成果を発表し、情報共有ができた。
- ・非常勤講師の参加を増やし、発表機会を提供できた。
- ・K-12 英語教育関係者の参加を促し、K-16 全体の連携を強化できた。
- ・協働学習、語彙習得、AI 活用のトランスランゲージング、映画制作を取り入れた授業実践など、多岐にわたる内容を提供できた。
- ・ELF 視点を活かした英語教育の具体的な事例が紹介され、実践指導の見直しの機会となった。
- ・Baker 博士の講演により、ネイティブ英語モデルからの脱却と、多様性を取り入れた教育の重要性を強調できた。
- ・学内外の参加者を増やすため、広報を強化した。大学ホームページや JACET SIG のサイト、メーリングリストを通じて、更なる参加を目指して広報を積極的に行った。
- ・改善点としては、参加者のフィードバックを反映し、次年度のテーマやプログラムを確実に行うこと。
- ・改善点としては、他大学研究者や非常勤講師の参加者の増加と発表者としての参加を目指し積極的に広報を行うこと。

## 2. 「ワークショップ：ELF 専用ループリック研究会：スピーキング（対面用）、スピーキング：ページから読み取るプリズム・リーディングの充実」（Workshop: Getting Reading Off the Page: Enriching Prism Reading）

外部講師：アレン・ダベンポート氏（ケンブリッジ大学出版局プロフェッショナル・ラーニング&アセスメント・マネージャー）

- ①概要 令和 6 年 10 月 25 日（金）17：00～18：00 に実施、ELF Study Hall 2015 210 教室

## ②達成目標

- ・外部講師を招致し、テーマに関する研究の最新情報を常に更新する。
- ・ELF 教員が授業で活用できるリソースを共有する。
- ・それぞれの FD 活動において非常勤教員に参加を促す。

## ③活動内容

- ・CELF の教員を対象に、Prism Reading シリーズをさらに活用するための戦略について、魅力的なワークショップを開催。ダベンポート氏は、自身の豊富な経験から、外部リソースを取り入れてコースブックのアクティビティを拡張する効果的な方法を紹介した。

ダベンポート氏は、生徒の学習意欲と理解力を向上させるために、追加的な読み物や ELF に基づいた教材を統合することを提案した。

- ・教師が教科書を補足し、よりダイナミックで効果的な学習体験を促進するための実践的な教授法を提示した。

## ④講演会・ワークショップ開催の評価

- ・ELF 視点を活かした教科書の実践的アプローチについて具体的な事例が紹介され、参加者にとって有益な示唆をもたらした。
- ・参加者：CELF 教員 8 名、オンライン Zoom で 2 名が参加した。
- ・ELF センターと出版社との共同連携を強化し、最新情報を取り入れる。
- ・ELF センターの教員が一堂に集まり、教育実践の向上に向けた知見や研究成果を共有する場をもたらした。
- ・外部講師を招き、関連テーマの最新研究情報と継続的な勉強会を提供できた。
- ・ELF 視点を取り入れた英語教育の実践事例を紹介し、参加者にとって有益な示唆を提供してきた。

## 3. ワークショップ K-16 講座：玉川学園・国際バカロレアのバイリンガル教育： “Language choice in foreign language immersion classrooms” ELF Roundtable ディスカッションと講演会

①概要：実施日：今年 7 年 2 月 6 日（木）15：00～16：00 ELF Study Hall 2015 313 教室

外部講師：森 聡美氏 立教大学異文化コミュニケーション学部教授

## ②達成目標

- ・英語教育・イマージョンクラスにおける第一言語（L1、日本語）使用の研究紹介。
- ・K-16 全体で英語教員が連携し、他学部の ESTEAM 理解度を強化する。
- ・第一言語（L1、日本語）の教室内での使用と役割について考える場を作る。
- ・K-12 英語教育関係者の参加を促し、各 K-12 ディビジョンに ELF センターの理念を紹介し、理解を深める。

## ③活動内容

- ・L1 使用の複雑性とその影響を言語政策・理論的視点から分析。
- ・日本のバイリンガル教育における言語使用の多様なアプローチとその意義を紹介。

- ・言語習得研究に基づく知見を共有。
- ・参加者は小グループに分かれ、イマージョン教育における最適な言語使用について議論。
- ・学習成果・バイリンガリズム・バイリテラシー・異文化理解を促進するバランスの取り方を検討。

#### ④講演会・ワークショップ開催の評価

- ・来場者：K-16の教員46名（幼稚園・小学校・高等部・大学の教員）が参加した。
- ・生徒・学生のバイリンガル視点と論理に基づき、L1とL2の適切なバランスを示す事例を紹介し、実践的示唆を提供できた。
- ・外部講師を招き、関連テーマに関する最新の研究知見を継続的に共有できた。
- ・K-16全体の連携とバイリンガル理論の理解度を強化できたが、今後はELFとESTEAMの強化を継続するように努める。
- ・改善点としては、小グループでのディスカッション時間が不足したため、ワークショップの時間を拡充する計画をすること。

## (2) 研究会・研修会・ワークショップ

### ①概要

CELFLは、ELF授業とELFを取り入れた教授法を向上させることを目的とし、定期ワークショップに加えて特別ワークショップを企画実施している。教員が最新の知見や実践を探求・共有できる機会を定期的に提供している。更に非常勤講師が令和5年度より、週一回の勤務のため、参加率が下がる可能性を考慮し、令和6年度より、ファカルティ・ディベロップメントの利便性を高めるため、Zoomを活用したハイブリッド形式を導入した。対面およびオンラインのハイブリッド形式を取り入れ、より柔軟な参加を可能にした。さらに、FDのアクセス性向上の一環として、各セッションを同時にZoom上録画し、学内のLMSであるBlackboardを活用して、教員専用のページに掲載し、「オンデマンドビデオ」を視聴できる環境を整備した。これにより、時間や場所に制約されることなく、必要に応じた学習が可能となった。加えて、録画視聴者を対象としたフィードバック調査を実施し、その結果をFDプログラムの継続的な改善に活用することで、本取り組みの有効性をさらに高めている。

### ②達成目標

- ・ELFに関する教育法や教育技術を高め、国際共通語としての英語（ELF）の良い教育実践や研究成果を共有し、互いに学び合う場を提供することを進展させる。
- ・新任非常勤と専任教員の指導支援やアセスメントに関する支援を行い、非常勤教員の参加を促進する。
- ・Blackboard CMS, UNITAMA, Microsoft Teamsの使い方に関する理解を深めるワークショップと個人フォローアップも強化する。
- ・「ELF Introductions A,B,C」（ENG101,102,103）、「ELF Communication for Teachers」（ENG105）、「ELF Foundations A,B,C」（ENG201,202,203）「ELF

Global Leadership A,B」(ENG 301,302)、「ELF Academic Literacy 上級」(ENG 403)「BELF 初級/初中級/中級/上級」(ENG104,204,304,404)の授業を教える教員を対象にシラバス、ELF独自スピーキングとライティンググループブック評価、異文化コミュニケーション論、コミュニケーション戦略・アクティブラーニング・IT活用などのアプローチ、TOEIC®等の情報などを提供する。

- ・専任と非常勤教員とのコラボレーションとコミュニケーションを通じて、ELF指導法のアプローチを探求し、授業内容を向上させる。
- ・ELF教育の最新の進展、IT技術の活用、授業計画や指導活動に関する実践的な知識を深める。
- ・授業向上のためのITツールの紹介(ChatGPT®,Kahoot®,Padlet®,ELLLO®,Quillbot®,SKeLL®,アプリやウェブサイト等)
- ・ELFを取り入れた指導法とELF研究の知識を高める。
- ・専任か非常勤教員かにかかわらず、FDセッションリーダーとして役割を担う場である。
- ・良い教育実践に関する考えや研究成果を共有する機会を増やしていく。
- ・新しく着任した講師に手厚い指導とサポートを提供する。

### ③活動内容

#### 1.研究会・研修会・ワークショップを開催

- ・新任教員のヘルプデスク研修会「Blackboard, UNITAMA, Microsoft Teams」  
実施日：令和6年4月12日(金)17:00~18:00  
参加者：来場者：7名、オンライン：1名  
講師：チャイクル, ラサミ准教授、黒嶋 智美准教授、祐乗坊 由利 ジョディー准教授
- ・ELF新カリキュラムワークショップ「Ideas for Teaching ELF Communication for Teachers (ENG105)」  
実施日：令和6年4月16日(火)17:00~18:00 ハイブリッド  
参加者：オンデマンドビデオ：8名  
講師：祐乗坊 由利 ジョディー准教授
- ・ELF新カリキュラムワークショップ「Sharing Ideas for Teaching ELF 300 Level Classes (ENG301,302,302)」  
実施日：令和6年4月22日(月)17:00~18:00  
参加者：来場者：4名、オンライン：1名、オンデマンドビデオ：13名  
講師：ノーヴィコヴァ, ナターリア講師、スティーブンソン, ロバート アンドル講師、祐乗坊 由利 ジョディー准教授
- ・ELF新カリキュラムワークショップ「Sharing Ideas for Teaching ELF Introduction

A,B,C (ENG 101,102,103) 」

実施日：令和6年5月17日（金）17：15～18：00

参加者：来場者：4名、オンデマンドビデオ：6名

講師：ミリナー、ブレット准教授、祐乗坊 由利 ジョディー准教授

- ・ ELF 新カリキュラムワークショップ「Sharing Ideas for Teaching ELF Foundations A,B,C (ENG 201,202,203) 」

実施日：令和6年5月24日（金）17：15～18：00

参加者：来場者：6名、オンデマンドビデオ：3名

講師：ディモスキ、ブラゴヤ准教授、祐乗坊 由利 ジョディー准教授

- ・ ELF 教員の秋学期オリエンテーション

実施日：令和6年5月24日（金）17：15～18：00

参加者：来場者：6名、オンデマンドビデオ：3名

講師：ディモスキ、ブラゴヤ准教授、祐乗坊 由利 ジョディー准教授

- ・ 成績評価 and UNITAMA 成績評価 and UNITAMA インプット方法の説明

実施日：令和6年7月26日（金）と29日（月）11：00～13：00 オンライン

参加者：オンライン参加者4名

講師：黒嶋 智美准教授、ミリナー、ブレット准教授、岡田 トリシャ准教授、茂木 悠太講師、中村 幸子講師

- ・ ELF 新カリキュラムワークショップ「Sharing Ideas for BELF Classes (ENG104, 204, 304, 404)」

実施日：令和6年10月8日（火）13：15～14：00

参加者：来場者：10名、オンライン参加者：1名、オンデマンドビデオ：7名

講師：祐乗坊 由利 ジョディー准教授

- ・ Online Tools and Strategies for ELF Classes 研修会（オンラインツールと ELF 戦略）

実施日：令和6年10月9日（水）13：15～14：00

参加者：来場者：6名

講師：チャイクル、ラサミ准教授、祐乗坊 由利 ジョディー准教授

- ・ 成績評価 and UNITAMA 成績評価 and UNITAMA インプット方法の説明ヘルプデスク

実施日：令和7年1月27日（月）11：00～13：00 ハイブリッド

参加者：オンライン4名

講師：ミリナー、ブレット准教授、黒嶋 智美准教授、岡田 トリシャ准教授、茂木

悠太講師、中村 幸子講師

- ・ 研究会：「The Integration of Artificial Reality and Gaming Technologies in Foreign Language Learning：外国語学習における人工現実とゲーム技術の統合」  
実施日：令和6年12月6日（金）14：00～14：50  
参加者：来場者：8名、オンデマンドビデオ：2名  
講師：ノーヴィコヴァ、ナターリア講師
- ・ ワークショップ：「Learning Together, Growing Together, Collaborative Learning：共に学び、共に育つ、共同学習ワークショップ」  
実施日：令和7年1月29日（水）14：30～15：15  
参加者：来場者：12名、オンライン2名  
講師：チャイクル、ラサミ准教授、中村 幸子講師
- ・ ワークショップ：「What is ESTEAM? Taking a collaborative and multidisciplinary thinking approach to ELF：ESTEAMとは？ELFへの協調的かつ学際的な思考アプローチ」  
実施日：令和7年2月10日（月）オンデマンドビデオ  
参加者：オンデマンドビデオ講座：10名  
講師：祐乗坊 由利 ジョディー准教授
- ・ ELF 教員次年度春学期オリエンテーション  
実施日：令和7年3月26日（水）10：00～16：00（新任非常勤10：00～11：30、  
全員13：00～15：30）  
内容：令和7年度に向け、CELFLは3月26日に新任教員向けオリエンテーションを実施した。午前はBlackboardの概要、ELF研究、評価方法、ルーブリック、教科書など授業運営に関する研修を行い、ELF Study Hall 2015の見学で締めくくられた。午後は新任・既存教員を対象に、ELF研究や、昨年度のフィードバックを基にしたカリキュラム改訂の説明を実施し、最後に5つのテーマ別のディスカッション討議が行われた。  
参加者：来場者：CELFL教員全員（非常勤・専任）  
講師：専任教員全員

#### ④評価

CELFLは、教員の専門能力を向上させ、学生の学習を促進するために継続的な専門能力開発の機会を提供している。FD活動には、新カリキュラムの導入とAIの登場も伴い、ELF教育、評価、研究に関連する様々なトピックを取り上げたワークショップやトレーニングプログラムが含まれていた。これらの活動を通じて、教員は英語教育分野の最新動向を把握し、学生に効果的で魅力的な学習環境を構築するために必要なツールや

リソースを得ることができた。今年度の FD 活動を通じて、教員と学生の両方をサポートし、ELF 教育および学習の卓越性を促進することができた。

また、新プログラムの導入に伴い、非常勤講師のキャンパス出勤日数が週 1 日に削減された。このため、従来の対面型 FD セッションでは多くの教員に対応することが難しくなり、1 つのセッションを週 4 回実施しなければならない状況となった。しかし、これは現実的に実施困難であったため、令和 6 年度より FD セッションを Zoom で提供し、ハイブリッド形式で参加できるようにした。これにより、学外の教員も遠隔で参加することが可能となったが、リアルタイムでの参加が難しい教員にとっては依然として課題が残ることが判明した。さらなる対策として、Zoom セッションを録画し、セキュリティが確保された Blackboard (Bb) サーバー上でオンデマンド配信する仕組みを導入した。この取り組みにより、令和 6 年度はより多くの教員を支援することができた。

### (3) 学生による授業アンケート

#### ①概要

令和 6 年度の春秋学期の期末に、ELF センター独自のオンライン授業アンケートを実施し、学生はスマートフォンまたはパソコンを使用してアンケートに回答するように授業で指導された。学生は教科書、教授方法、Blackboard システム、TOEIC、ELF 教育に関する意識、チューター制度、マルチリンガルカフェなどについて評価した。調査結果は教育プログラム策定の基礎資料となり、それぞれの教員にも自身の授業運営改善のために共有された。

#### ②達成目標

授業アンケート調査の目的は学生の ELF プログラムや教員の教授アプローチに対する観点や評価を得ることである。また、調査結果はそれぞれの教員に自分の教授法に対する学生の評価をフィードバックするという目的もある。

#### ③活動内容

春学期授業アンケートは、2,454 名の 171 クラスを対象に実施し評価回答を得た。秋学期授業アンケートは、2,125 名の 161 クラスを対象に実施し評価回答を得た。

#### ④評価

これらのアンケート結果は ELF プログラムに対する評価として使用され、令和 6 年度の教育プログラム構築のために使用される。大半の学生は授業に対してとても満足しているという結果であった。令和 6 年度は授業アンケート調査を春学期と秋学期（年 2 回）に行い、それぞれの教員に学生からの評価を配付し、自身の指導の改善に役立ててもらおう。

### (4) 教員による授業内容アンケート

#### ①概要

令和 6 年度の春学期および秋学期の期末に、ELF センターは独自のオンラインアンケートを実施し、授業内容に関する評価を行った。専任・非常勤教員は、教科書、指導方法、新カリキュラム、Blackboard システム、TOEIC、ELF に対する認識、および ELF

センターが提供する支援の質について意見を寄せた。収集されたアンケート結果は、教育プログラムの向上や研究活動の資料として活用される。

#### ②達成目標

多様な教員のニーズにどのように応え、より効果的にサポートを行うかについての情報を収集することとカリキュラムを改革すること。

#### ③活動内容

春学期と秋学期のアンケートから回答を得た。

#### ④評価

新カリキュラム実施の2年目として、カリキュラムの内容、教科書の難易度、授業形態に関するフィードバックを収集することで、今後のFD活動計画の策定が可能となり、教員支援の効果的な実施方法を検討するうえで有益な資料となった。

### (5) ELFセンターの出版物

ジャーナルを出版することは、ジャーナルの論文が数多く引用をされた場合、玉川大学が世界におけるランキングをアップグレードするのに役立つため、大学名を国内および国際レベルで宣伝するための重要なツールとなる。今年度から、**The Center for ELF Forum** オンラインジャーナルを発行した。

#### Englishes In Practice (EIP)

##### ①概要

2014年にサウサンプトン大学グローバル・イングリッシュ・センターによって創設された **Englishes in Practice** は、現在、玉川大学 CELF のワーキングペーパーとして発行されている。本誌は、CELFの研究者および他の学者が、ELFを含むグローバル・コミュニケーションに関する研究を發表し、議論を深める場を提供する。実証的研究の成果を報告する論文、または本分野に関連する理論的・概念的・方法論的考察を展開する論文の投稿を広く提供している。

##### ②達成目標

- ・先駆的研究論文をスピーディーに発信する。
- ・全教員に高い学識を探究し、ダブルブラインドピアレビュー
- ・ELFに対する学識を共有する。
- ・ELFセンター所属の教員に効果的な研究発表の場を設ける。

##### ③活動内容

- ・ **Englishes In Practice (EIP)** 第7号の出版に向けて準備している。
- ・ **Englishes In Practice (EIP)** ELFセンターのホームページにもリンクを掲載する。

##### ④評価

- ・ **Englishes in Practice** は今後も世界各地の研究者に読まれることが期待される。

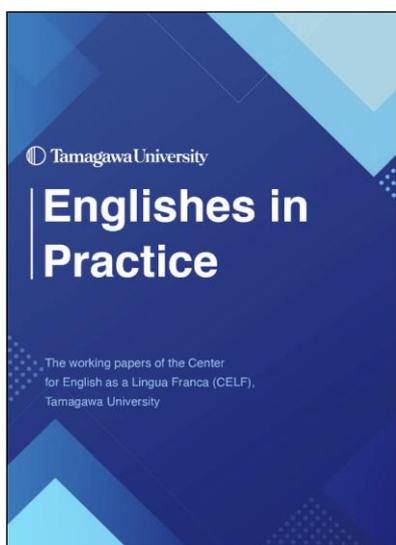


図 1. Englises In Practice (EIP) 第 7 号出版予定

## The Center for ELF Forum

### ①概要

CELF フォーラムは、英語教育専門家の批判的思考を促進する査読付き学術誌である。本誌では、研究論文、教育実践論文、フォーラム論文、書評、ELF 授業実践報告など、幅広い分野の投稿を募集し、多様な教育現場に携わる教員の省察的实践を奨励している。投稿論文は編集委員会による初審査を経た後、複数名の査読者によるブラインドレビューを受け、掲載の可否が決定される。The Center for ELF Forum 第 4 号は令和 6 年度 4 月に出版した。The Center for ELF Forum 第 5 号の発行を予定しており、編集長はミリナー、ブレット准教授、編集者は中村 幸子講師が担当している。

<http://www.tamagawa.ac.jp/celf/research/>

### ②達成目標

- ・ 言語教育の批判的意識と省察的思考を促進する。
- ・ 実践と理論の統合を推進する。
- ・ 授業のベストプラクティスを紹介し、授業改善につなげる。
- ・ 教員自身の専門性向上を支援し、学習者のエンパワーメントにつなげる。
- ・ CELF 教員間の ELF 教育手法の共有を促進する。
- ・ ELF センター教員の専門的成長を FD として支援する。

### ③活動内容

- ・ The Center for ELF Forum 第 4 号は ELF センターのホームページにも PDF 版を掲載している。さらに、教員のアカデミックポータル (academia.edu, REAP, Google Scholar, Research Gate など) にも掲載している。
- ・ The Center for ELF Forum 第 5 号は令和 7 年度 4 月の出版に向けて準備していて、ELF センターのホームページに PDF 版を掲載する予定。

#### ④評価

The Center for ELF Forum は各教員に配付され、投稿者自身も満足度が高いものとなった。このジャーナルをオンラインで閲覧できるようにすることで、より多くの研究者が我々の論文を手にとることができ、他の論文にも引用されるようになると思われる。



図 2. The Center for ELF Forum 第 4 号

#### ・ CELF の専任教員の研究活動

CELF の研究者は、多様なテーマに関して個人および共同研究に多くの時間を費やしている。以下の表は、研究発表、学術論文の出版数、および JSPS 研究助成金受給者数を示している。これらの数値は、CELF の研究活動に対する強い取り組みを示すとともに、教員の高い専門性と献身性を裏付けるものである。表 1 は令和 6 年度の ELF 専任教員の研究活動をまとめたものである。表 2 は令和 6 年度の CELF 専任教員の著書・論文や本の出版内容である。

表 1. 令和 6 年度 4 月-3 月の CELF 専任教員の研究活動

発表・出版	数
国外学会発表	19
国内学会発表	18
論文を投稿・出版	10
科学研究費助成事業	3

表 2. 令和 6 年度の CELF 専任教員の論文を投稿・出版

査読の有無	論文・著書	著者
有	Research article ○ Mishina-Mori, S., Nakano, Y., Yujobo, Y. J., & Kawanishi, Y. (2024). Is Referent Reintroduction More Vulnerable to Crosslinguistic Influence? An Analysis of Referential Choice among Japanese–English Bilingual Children. <i>Languages</i> , 9(4), 120. <a href="https://doi.org/10.3390/languages9040120">https://doi.org/10.3390/languages9040120</a>	Satomi Mishina-Mori, Yuki Nakano, Yuri Jody Yujobo and Yumiko Kawanishi
有	Journal Article ○ Milliner, B., & Dimoski, B. (2024). Effects of a metacognitive intervention on lower-proficiency EFL learners' listening comprehension and listening self-efficacy. <i>Language Teaching Research</i> , 28(2), 679-713. <a href="https://doi.org/10.1177/13621688211004646">https://doi.org/10.1177/13621688211004646</a>	Brett Milliner & Blagoja Dimoski
有	Book chapter McLean et al., (2024). Listening and lexical knowledge. In E. Wagner, A. Batty, & E. Galaczi (Eds.), <i>The Routledge Handbook of Second Language Acquisition and Listening</i> . <a href="https://www.taylorfrancis.com/chapters/edit/10.4324/9781003219552-13/listening-lexical-knowledge-stuart-mclean-joshua-matthews-brett-milliner?context=ubx&amp;refId=a27f572f-d3b7-4609-b3e3-d20b5b6b7c6b">https://www.taylorfrancis.com/chapters/edit/10.4324/9781003219552-13/listening-lexical-knowledge-stuart-mclean-joshua-matthews-brett-milliner?context=ubx&amp;refId=a27f572f-d3b7-4609-b3e3-d20b5b6b7c6b</a>	Stuart McLean, Joshua Matthews, & Brett Milliner
有	Journal Article ○ Aoyama, T., Yamazaki, J. S., Nakamura, S., Vuogan, A., An, H., Kim, C. J., & Al-Hoorie, A. H. (2024). Conceptualization and operationalization in L2 task engagement research: Taking stock and moving forward. <i>Language Teaching</i> , 1–5. <a href="https://doi.org/10.1017/s026144482400020x">https://doi.org/10.1017/s026144482400020x</a>	Takumi Aoyama, Joseph S. Yamazaki, Sachiko Nakamura, Alyssa Vuogan, Hyejin An, Claudia J. Kim, & Ali H. Al-Hoorie
有	Journal Article ○ Mogi, Y. (2024). The use of Book Creator for multimodal textbook composition: CELF Forum, 12–27.	Yuta Mogi
有	Journal Article ○ Milliner, B., & Dimoski, B. (2024). The effects of communication strategy training on speaking task performance. <i>RELC Journal</i> , 55(2), 344-363. <a href="https://doi.org/10.1177/00336882221085781">https://doi.org/10.1177/00336882221085781</a>	Brett Milliner & Blagoja Dimoski
有	Edited book ○ Mindsets in language education Leis, A., Haukås, Å., Lou, N. M., & Nakamura, S. (2025). Mindsets in language education. <i>Multilingual Matters</i>	Adrian Leis, Åsta Haukås, Nigel Mantou Lou, & Sachiko Nakamura
有	Book chapter ○ Nakamura, S., & Leis, A. (2025). Language learning emotions and goal orientations from the perspective of mindsets. In A. Leis, Å. Haukås, N. M. Lou, & S. Nakamura (Eds.), <i>Mindsets in language education</i> . <i>Multilingual Matters</i> . <a href="https://www.multilingual-matters.com/page/detail/Mindsets-in-Language-">https://www.multilingual-matters.com/page/detail/Mindsets-in-Language-</a>	Sachiko Nakamura, & Adrian Leis

	<a href="#">Education/?k=9781800418301</a>	
有	Online newsletter ○ McBride, P. (2025, January). Understanding English as a Lingua Franca. The University Grapevine for University English Language Teachers, (25). www.theuniversitygrapevine.com	Paul McBride
有	Journal Article ○ Nakamura, S. (2025). Engagement, <i>ELT Journal.ccaf002</i> . <a href="https://doi.org/10.1093/elt/ccaf002">https://doi.org/10.1093/elt/ccaf002</a>	Sachiko Nakamura

#### 4 昨年度（令和5年度）に提案された予定・課題の達成度について

令和5年度末において、CELFは計13回のファカルティ・ディベロップメント（FD）セッションおよび3回のプロフェッショナル・ディベロップメントワークショップを実施し、全ての計画を達成した。また、9回の授業観察を提案したものの、申込者はなかった。FD活動の実施回数が多かった背景として、令和5年度に導入された新プログラムに向け、50名以上の教員に対する準備が必要であったことが挙げられる。本プログラムでは、カリキュラム、評価方法、教材、授業単位数に大幅な変更があり、大規模な教育改革の一環として実施された。

令和6年度のFD活動は、新プログラムへの円滑な移行を支援するとともに、本学の教育理念であるEnglish as a Lingua Franca（ELF）およびESTEAMに関する理解を深めることを目的として実施した。特に、他大学でも教鞭をとる非常勤講師への対応が課題となったが、一方で、CELFの特徴である多言語主義およびトランスランゲージングの実践を維持することができた。

参加者数の分析では、前年と比較して大幅な増加が見られた。さらに、オンデマンド形式の導入により、必要とする教員に対し適切なタイミングで研修を提供することが可能となり、FDの目的を達成した。一方で、動画のさらなる活用を促進するためには、より積極的な広報活動が必要である。また、オンデマンド動画を視聴した教員にはGoogleフォームの提出を求めたが、視聴回数と提出件数に乖離が見られ、記録された数値を上回る教員が実際に視聴していた可能性が示唆された。

オンデマンドFDセッションは令和7年度以降も継続・発展させる予定である。特に、本年度がオンデマンド形式のFD導入初年度であることを踏まえ、令和7年度の教員向けオリエンテーションを3月26日に実施し、FD活動についての説明や、Blackboard LMSシステム上におけるオンデマンドのビデオ教材保存場所を明確に案内し、さらなる活用を促進できた。

#### 5 今後（令和7年度以降）の予定・課題について

令和7年度のCELFフォーラムでは、令和6年度の記念CELFフォーラムに続き、国際的に著名な講演者を招聘する予定である。ELFに関する情報発信、ELFに基づく教育実践の議論、そして英語教育における効果的かつ適切なアプローチの確立を目的として、玉川学

園 K-12 部門との協力を重視する。令和 7 年度は引き続き、新任および現在の教員を対象に、授業運営に関するテーマで毎月定期的に FD セッションを実施する。タイムリーなトピック（ChatGPT 活用、ESTEAM を取り入れた授業、ELF リスニング向上、TOEIC 勉強法、教員の ELF 研究発表、K-16 バイリンガル教育又は、IB 教育（国際バカロレア）の探求型問題解決学習、等）を取り入れる予定である。さらに、ELF 400 レベル科目では、英語による専門教育（EME: English Medium Education）を重点分野とし、教員は各自の専門領域および学生のニーズ・関心に基づいたカリキュラムの開発を進めていく。FD 研修は引き続き、ハイブリッド、そして、オンデマンドビデオ講座を予定し、さらに参加人数を増やすことに努めたい。

## 5. 授業アンケート

### 1. アンケート実施概要

#### (1) 概要

FD活動の一環として授業の改善に資するため、令和6年度春学期・秋学期の期中・期末及び特別学期（サマーセッション、ウィンターセッション）において、学内ポータルサイト「UNITAMA」にて学生に対し授業アンケートを実施した。対象科目は、全科目（ユニバーシティ・スタンダード科目（US科目）、学部学科専門科目）である（ただし、一部の集中講義科目を除く）。

回答者数・履修者数（いずれも延べ数）及び回答率は次のとおりであった。

	春学期		秋学期		特別学期	
	期中	期末	期中	期末	サマーセッション	ウィンターセッション
回答者数	21,231名	20,476名	14,504名	17,197名	157名	145名
履修者数	49,892名	49,076名	47,535名	48,055名	514名	648名
回答率	42.6%	41.7%	30.5%	35.8%	30.5%	22.4%

#### (2) 実施時期

春学期…期中：5月29日（水）～6月11日（火）＊第8回授業前後

期末：7月10日（水）～8月5日（月）

秋学期…期中：11月12日（火）～11月28日（木）＊第8回授業前後

期末：1月14日（火）～2月7日（金）

特別学期…サマーセッションⅠ期：8月13日（火）～8月19日（月）

Ⅱ期：9月3日（火）～9月9日（月）

ウィンターセッションⅠ期：2月20日（木）～2月26日（水）

Ⅱ期：3月7日（金）～3月13日（木）

※上記期間中であれば学生は回答を修正し、再提出することができる。

#### (3) 実施方法

「UNITAMA」の Web アンケートにて実施した。学生には事前に「UNITAMA」掲示板において周知を行った。

#### (4) アンケート様式

期中及びUS科目（期末・特別学期）の授業アンケート様式は、参考資料3のとおりである。学部学科専門科目（期末）の設問は、大学ホームページ内で公開されているレポートに掲載している。

## 2. 集計結果及び公表

集計は前年度及び今後のデータの比較分析を考慮し、授業別及び次の分類別に行った。

US 科目：

US 科目全体、玉川教育・FYE 科目群、人文科学科目群、社会科学科目群、  
自然科学科目群、学際科目群、言語表現科目群、教職関連科目群、資格関連科目群

学部学科科目\*：

学部全体、学科別

\*一部、分類が異なる学部がある。詳細は各学部のレポートを参照のこと。

集計結果は授業担当者及び各学部にフィードバックしている。アンケート回答は各授業担当者が UNITAMA 上で随時確認でき、期中の結果においては開講中の科目の授業改善へリアルタイムに活用されている。また、期末及び特別学期の結果は、授業別及び分類別にレポートにまとめ、授業担当者及び各学部に提供しており、授業担当者が次学期以降の授業改善に活用するほか、各学部で結果の分析が行われたり、次年度以降のカリキュラム改善のための資料として用いられたりするなど、各学部の FD 活動のなかでも活用されている。

なお、期末の分類別のレポートは大学ホームページ内でも公表している。

<https://www.tamagawa.jp/university/introduction/outline/u-fd/questionary/>

US科目全体

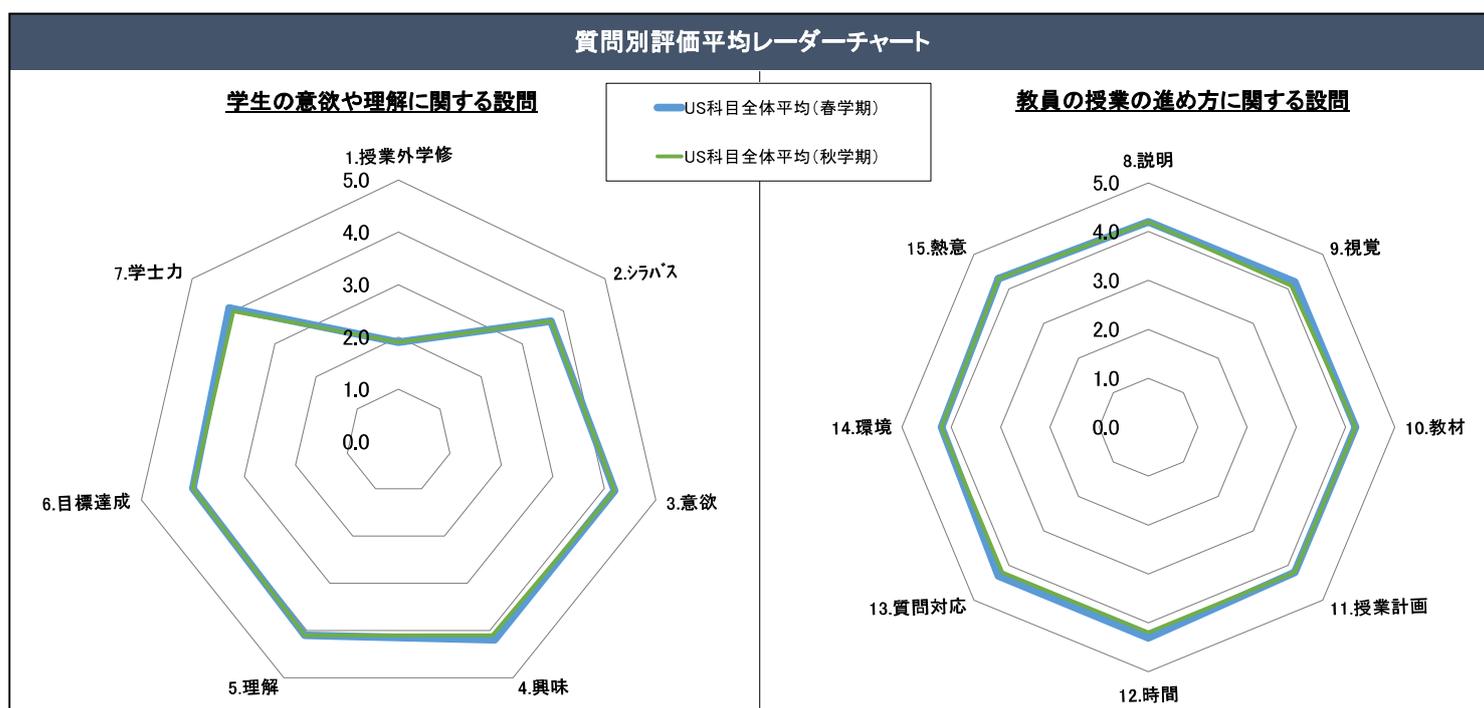
履修者数：20,273名

回答者数：10,123名

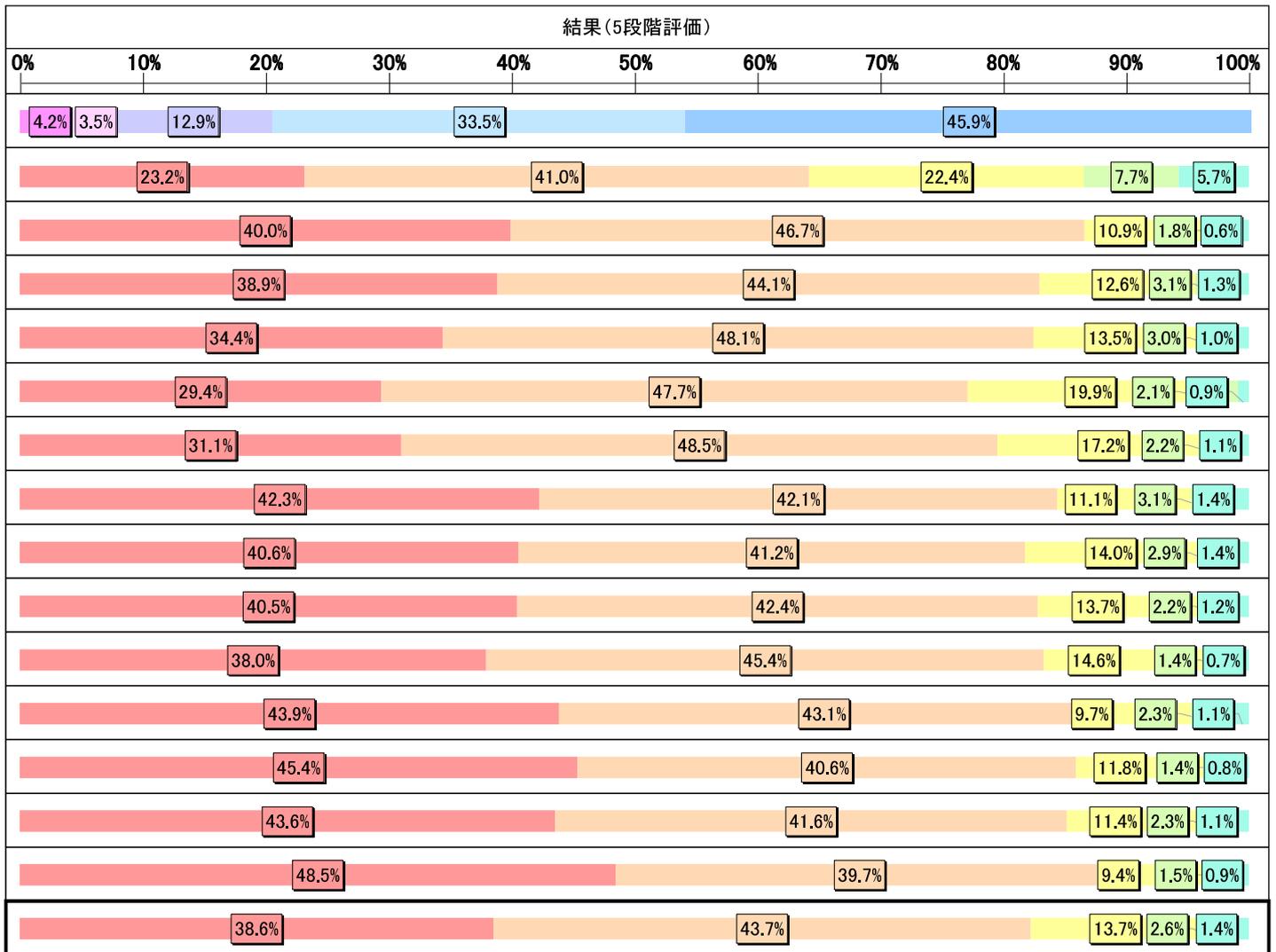
回答率：49.9%

設問			US科目 全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修 授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	1.9
	2	シラバス 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.7
	3	意欲 授業に意欲的に取り組みましたか	4.2
	4	興味 授業の内容に興味は持てましたか	4.2
	5	理解 授業の内容を十分に理解できましたか	4.1
	6	目標達成 シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.0
	7	学士力 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.1
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明 話し方や説明は分かりやすかったですか	4.2
	9	視覚 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.2
	10	教材 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.2
	11	授業計画 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.2
	12	時間 授業時間を有効に使っていましたか	4.3
	13	質問対応 質問に適切に対応してくれましたか	4.3
	14	環境 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.2
	15	熱意 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.3
総合評価			4.0

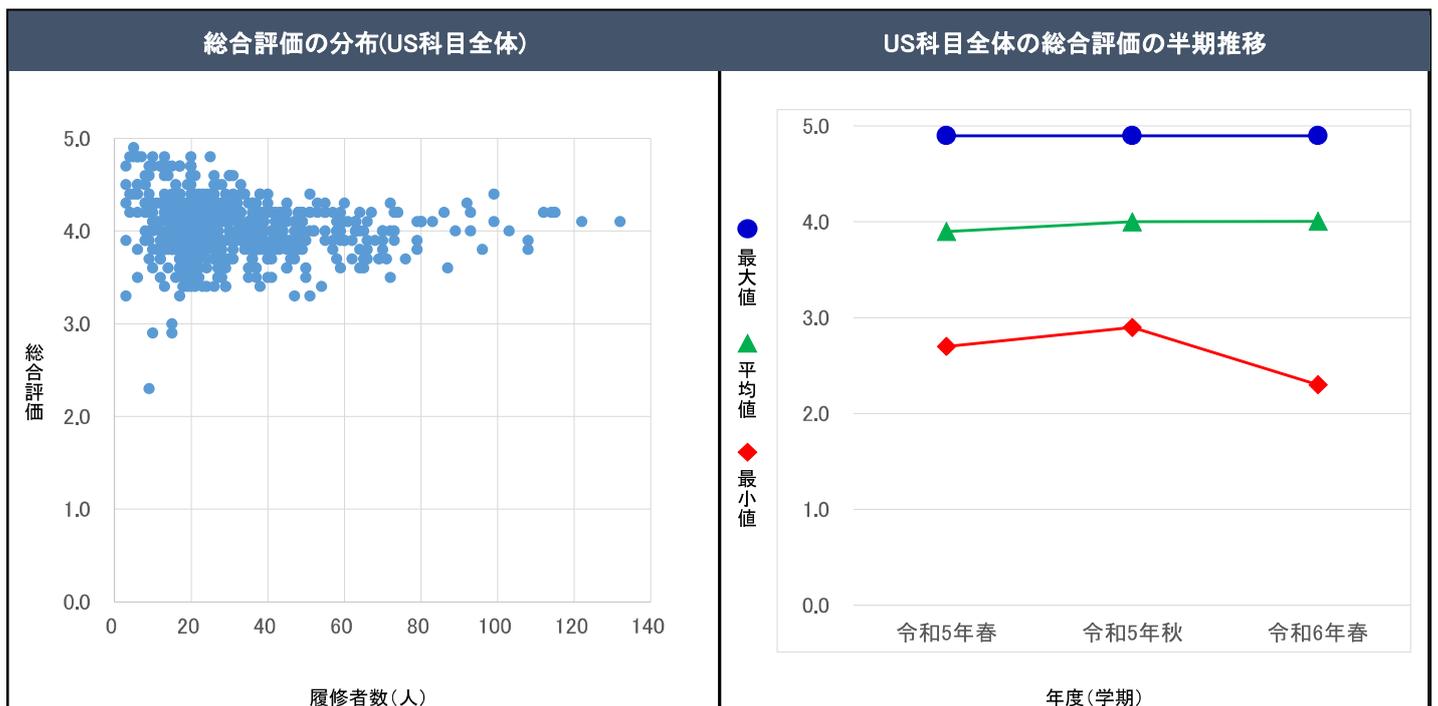
平均値 = (「5」回答数×5 + 「4」回答数×4 + 「3」回答数×3 + 「2」回答数×2 + 「1」回答数×1) / 回答数(小数点第2位を四捨五入)



5 : 4時間以上    4 : 3時間～4時間未満    3 : 2時間～3時間未満    2 : 1時間～2時間未満    1 : 1時間未満



5 : とてもそう思う    4 : そう思う    3 : どちらともいえない    2 : そう思わない    1 : 全くそう思わない



US科目 玉川教育・FYE科目群

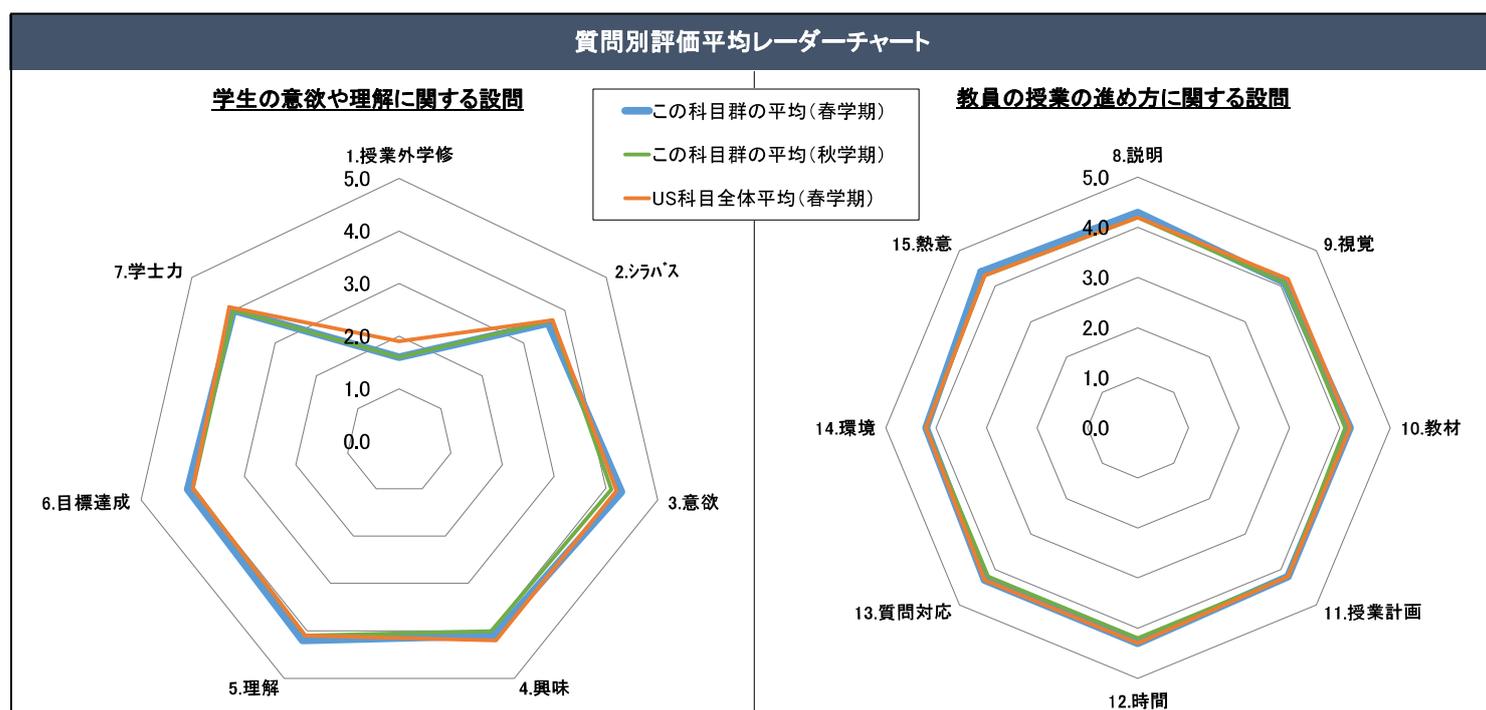
履修者数：4,897名

回答者数：3,192名

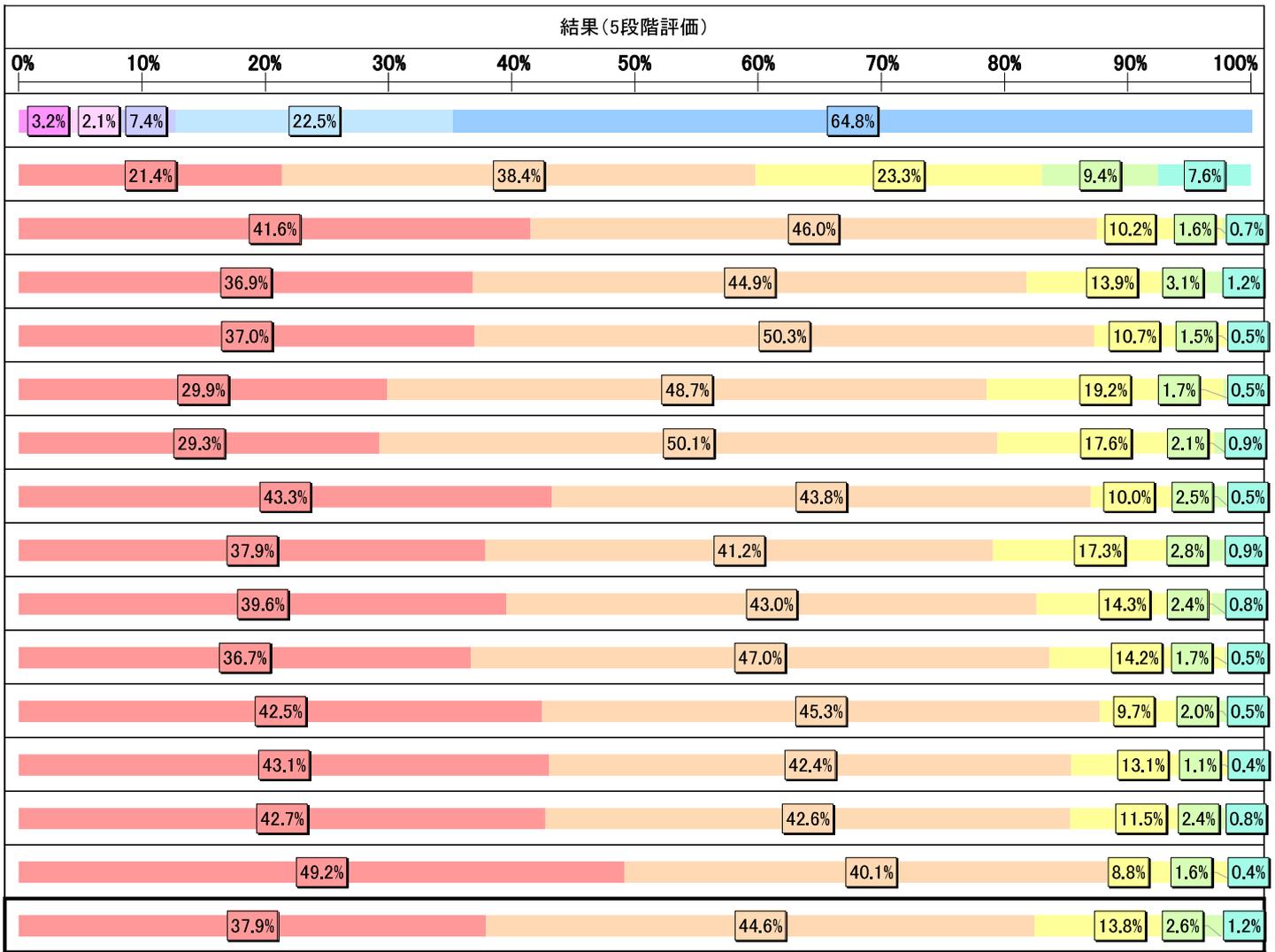
回答率：65.2%

設問			科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修 授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	1.6	1.9
	2	シラバス 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.6	3.7
	3	意欲 授業に意欲的に取り組みましたか	4.3	4.2
	4	興味 授業の内容に興味は持てましたか	4.1	4.2
	5	理解 授業の内容を十分に理解できましたか	4.2	4.1
	6	目標達成 シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.1	4.0
	7	学士力 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.0	4.1
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明 話し方や説明は分かりやすかったですか	4.3	4.2
	9	視覚 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.1	4.2
	10	教材 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.2	4.2
	11	授業計画 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.2	4.2
	12	時間 授業時間を有効に使っていましたか	4.3	4.3
	13	質問対応 質問に適切に対応してくれましたか	4.3	4.3
	14	環境 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.2	4.2
	15	熱意 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.4	4.3
総合評価			4.0	4.0

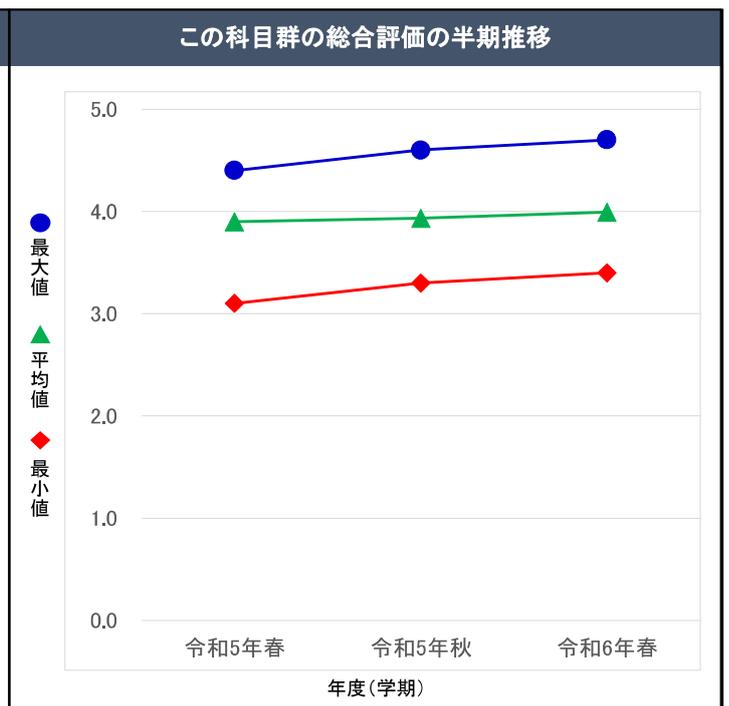
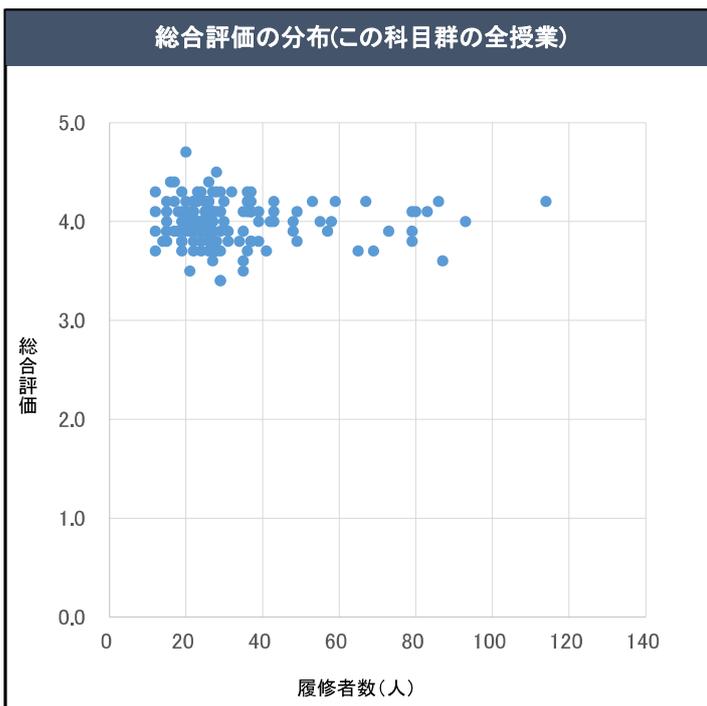
平均値 = (「5」回答数×5 + 「4」回答数×4 + 「3」回答数×3 + 「2」回答数×2 + 「1」回答数×1) / 回答数(小数点第2位を四捨五入)



5 : 4時間以上    4 : 3時間～4時間未満    3 : 2時間～3時間未満    2 : 1時間～2時間未満    1 : 1時間未満



5 : とてもそう思う    4 : そう思う    3 : どちらともいえない    2 : そう思わない    1 : 全くそう思わない



US科目 人文科学科目群

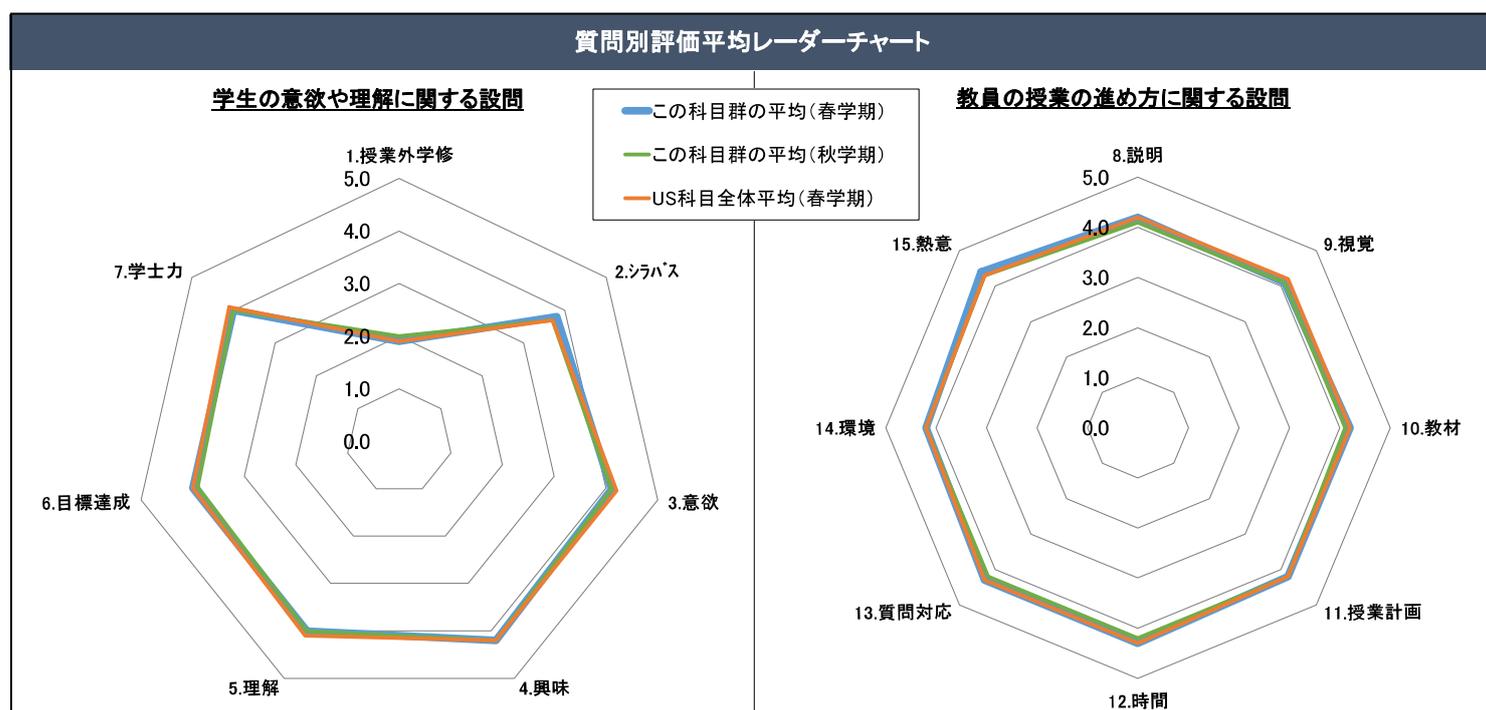
履修者数： 2,216 名

回答者数： 689 名

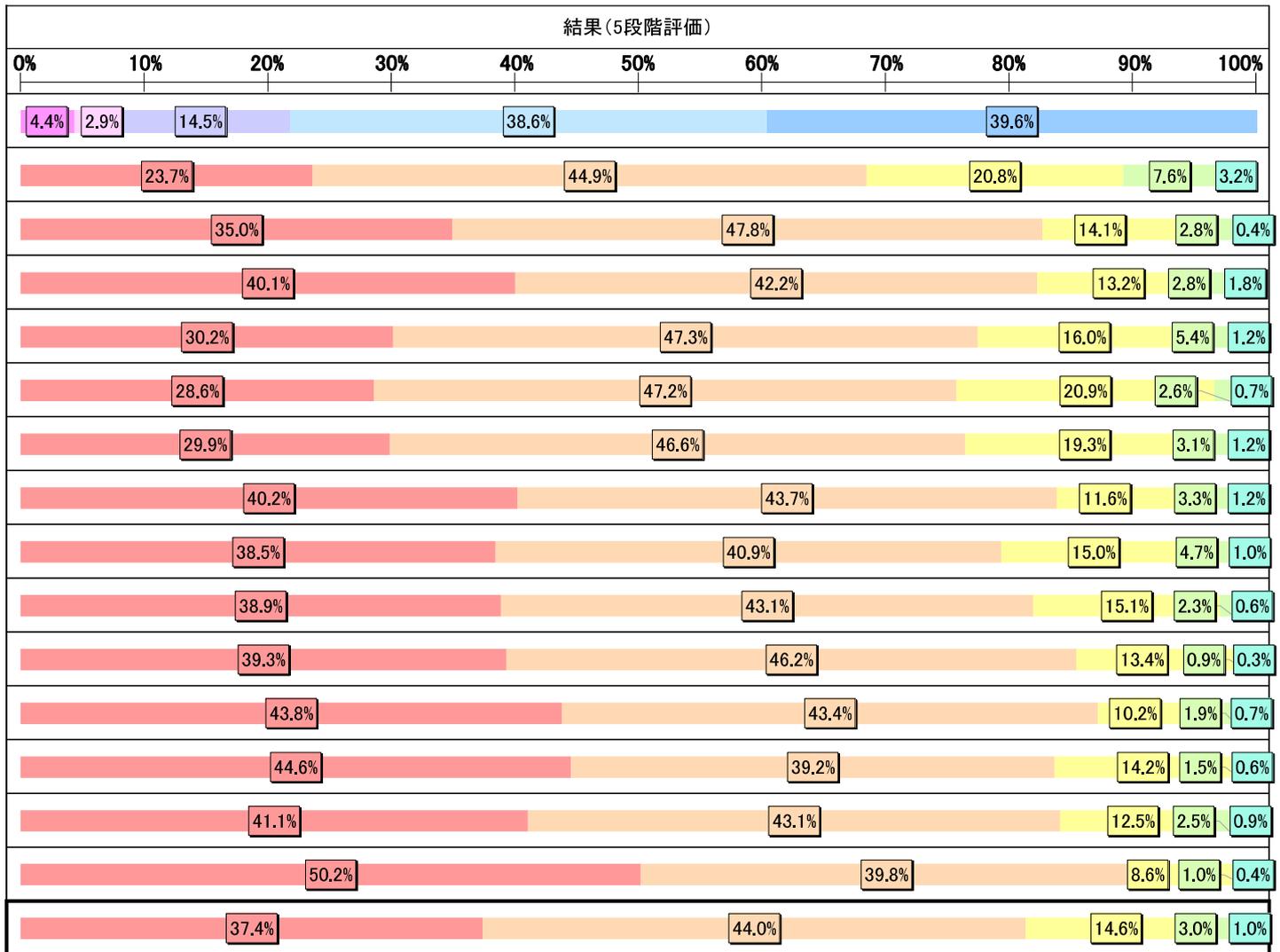
回答率： 31.1 %

設問			科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修 授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	1.9	1.9
	2	シラバス 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.8	3.7
	3	意欲 授業に意欲的に取り組みましたか	4.1	4.2
	4	興味 授業の内容に興味は持てましたか	4.2	4.2
	5	理解 授業の内容を十分に理解できましたか	4.0	4.1
	6	目標達成 シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.0	4.0
	7	学士力 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.0	4.1
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明 話し方や説明は分かりやすかったですか	4.2	4.2
	9	視覚 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.1	4.2
	10	教材 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.2	4.2
	11	授業計画 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.2	4.2
	12	時間 授業時間を有効に使っていましたか	4.3	4.3
	13	質問対応 質問に適切に対応してくれましたか	4.3	4.3
	14	環境 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.2	4.2
	15	熱意 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.4	4.3
総合評価			4.0	4.0

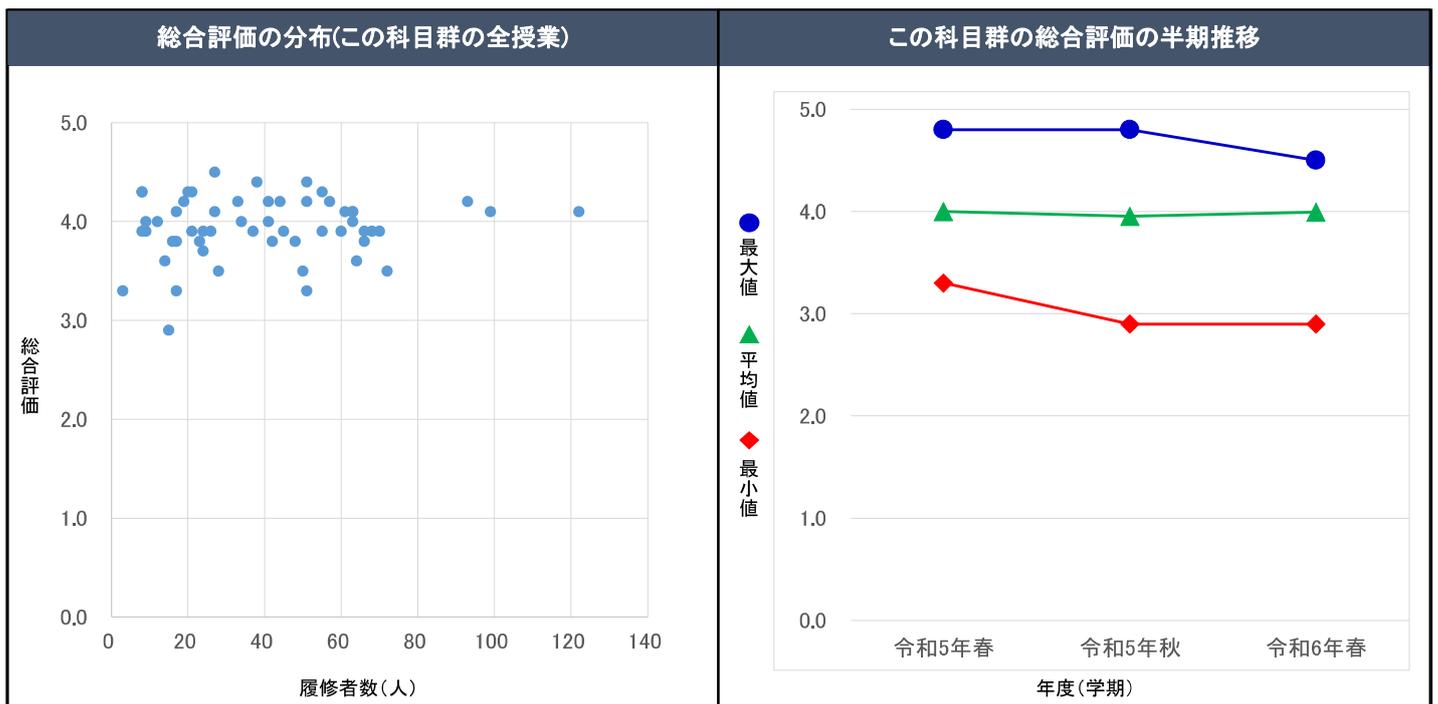
平均値 = (「5」回答数×5 + 「4」回答数×4 + 「3」回答数×3 + 「2」回答数×2 + 「1」回答数×1) / 回答数(小数点第2位を四捨五入)



5 : 4時間以上    4 : 3時間～4時間未満    3 : 2時間～3時間未満    2 : 1時間～2時間未満    1 : 1時間未満



5 : とてもそう思う    4 : そう思う    3 : どちらともいえない    2 : そう思わない    1 : 全くそう思わない



US科目 社会科学科目群

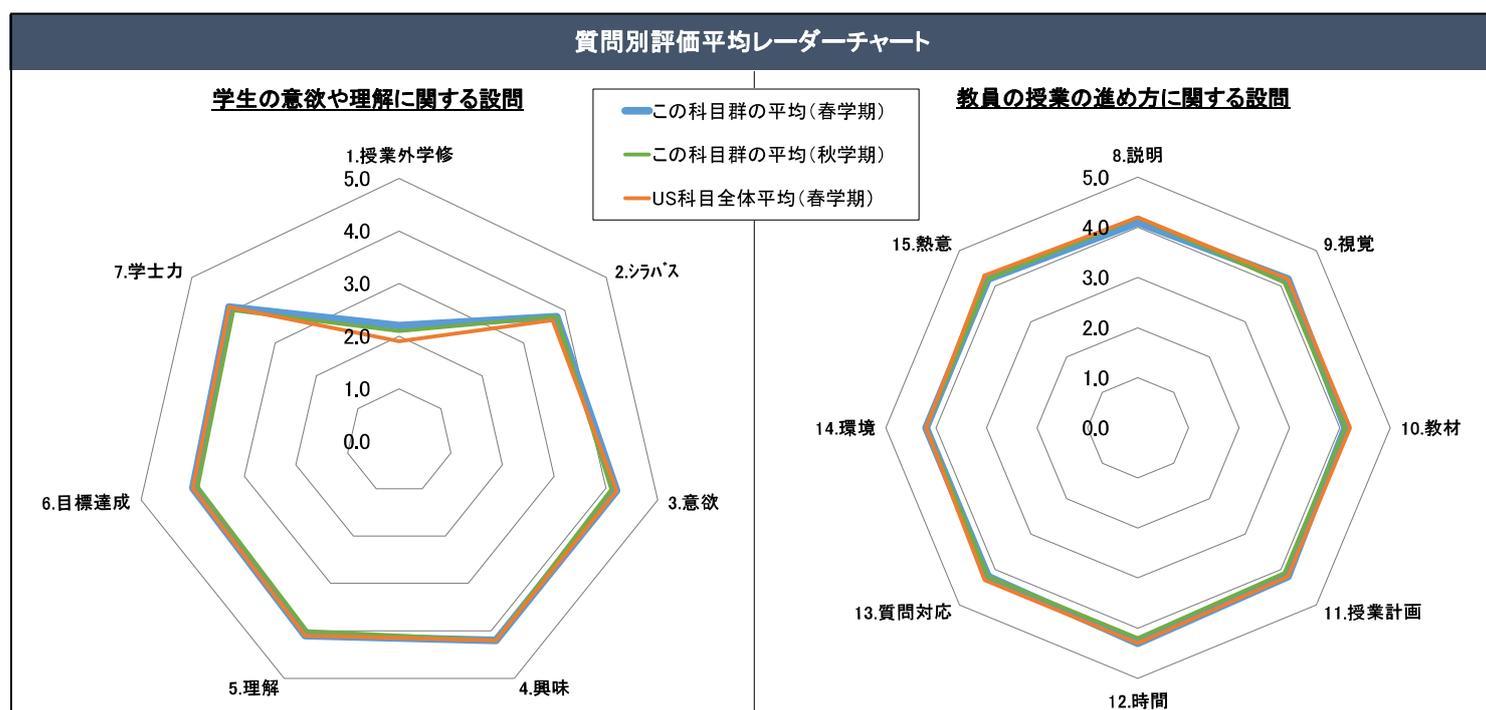
履修者数：1,930名

回答者数：674名

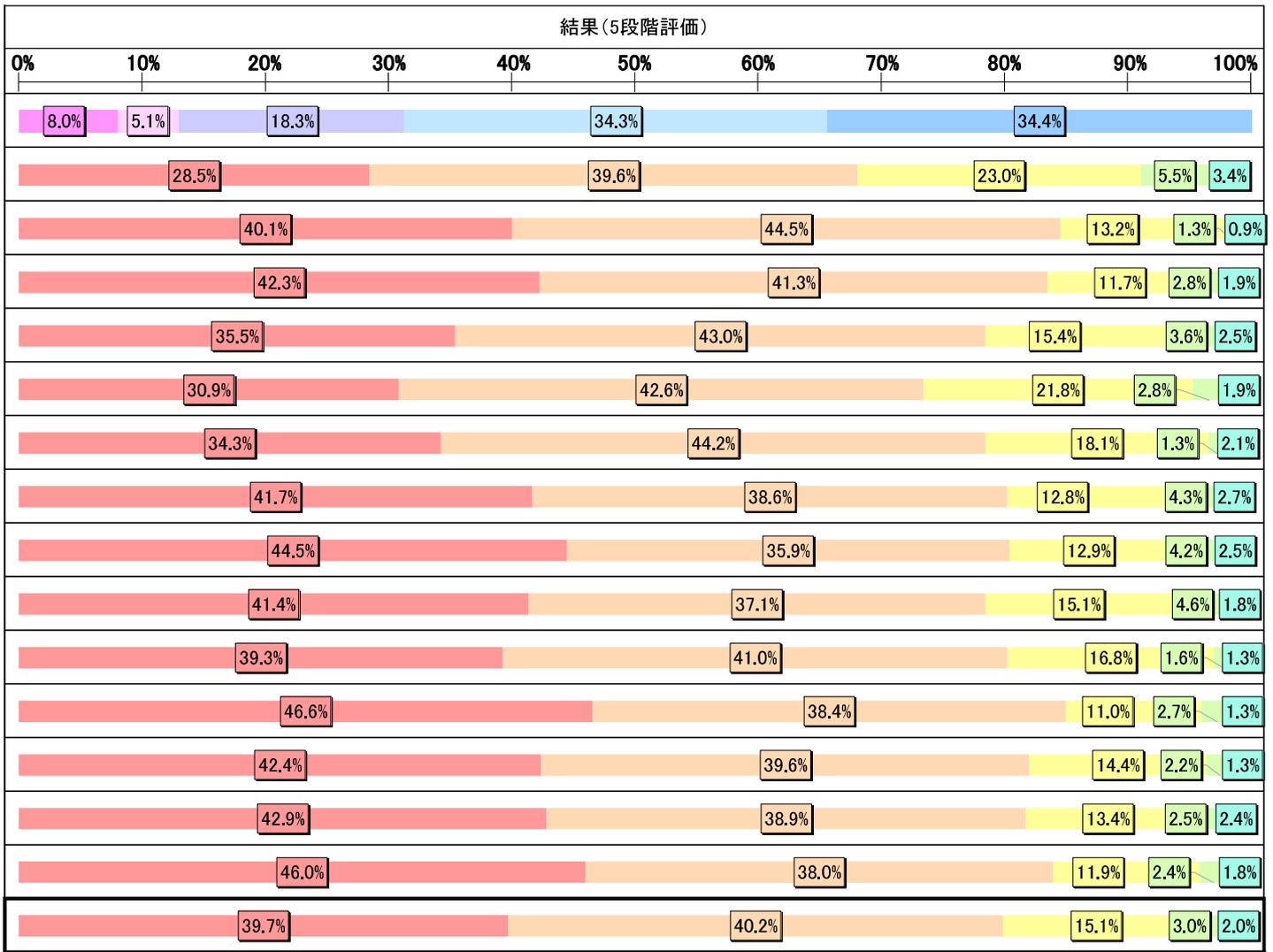
回答率：34.9%

設問			科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修 授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	2.2	1.9
	2	シラバス 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.8	3.7
	3	意欲 授業に意欲的に取り組みましたか	4.2	4.2
	4	興味 授業の内容に興味は持てましたか	4.2	4.2
	5	理解 授業の内容を十分に理解できましたか	4.1	4.1
	6	目標達成 シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.0	4.0
	7	学士力 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.1	4.1
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明 話し方や説明は分かりやすかったですか	4.1	4.2
	9	視覚 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.2	4.2
	10	教材 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.1	4.2
	11	授業計画 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.2	4.2
	12	時間 授業時間を有効に使っていましたか	4.3	4.3
	13	質問対応 質問に適切に対応してくれましたか	4.2	4.3
	14	環境 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.2	4.2
	15	熱意 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.2	4.3
総合評価			4.0	4.0

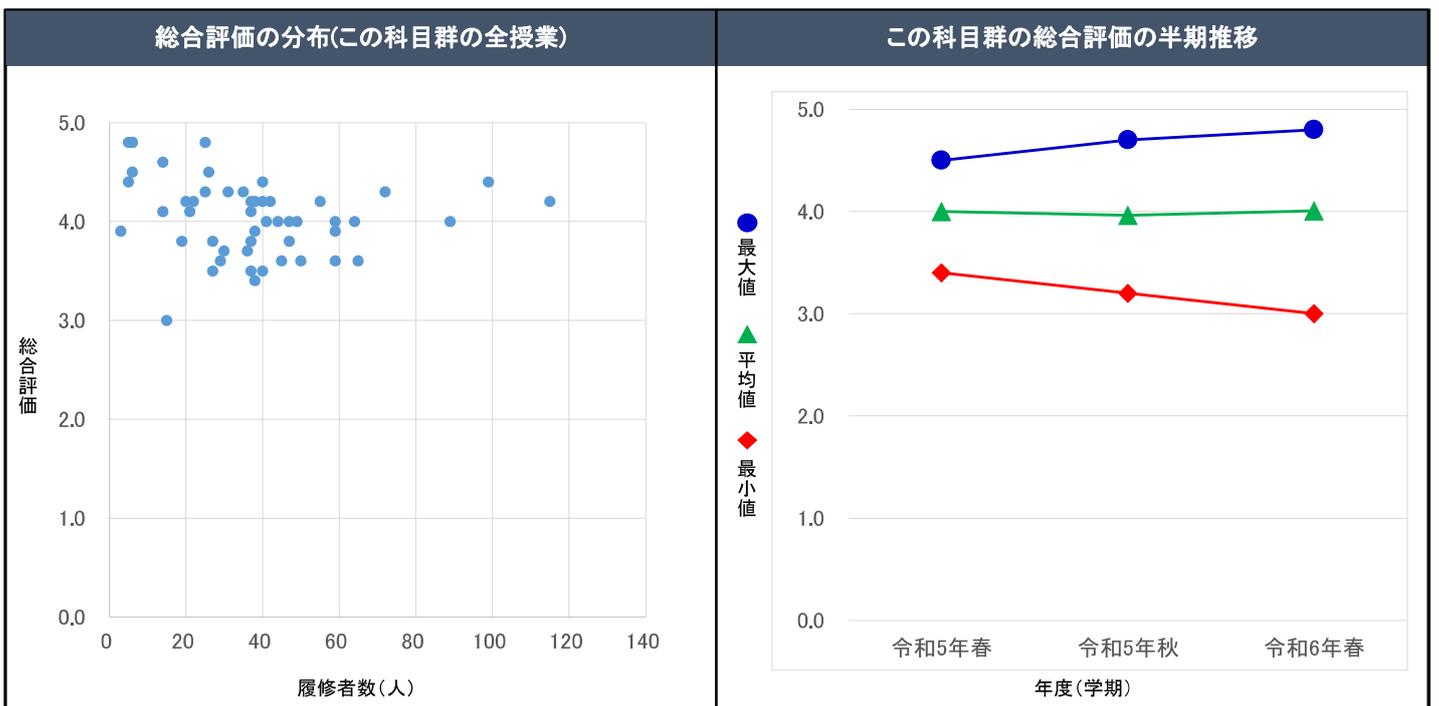
平均値 = (「5」回答数×5 + 「4」回答数×4 + 「3」回答数×3 + 「2」回答数×2 + 「1」回答数×1) / 回答数(小数点第2位を四捨五入)



5 : 4時間以上    4 : 3時間～4時間未満    3 : 2時間～3時間未満    2 : 1時間～2時間未満    1 : 1時間未満



5 : とてもそう思う    4 : そう思う    3 : どちらともいえない    2 : そう思わない    1 : 全くそう思わない



US科目 自然科学科目群

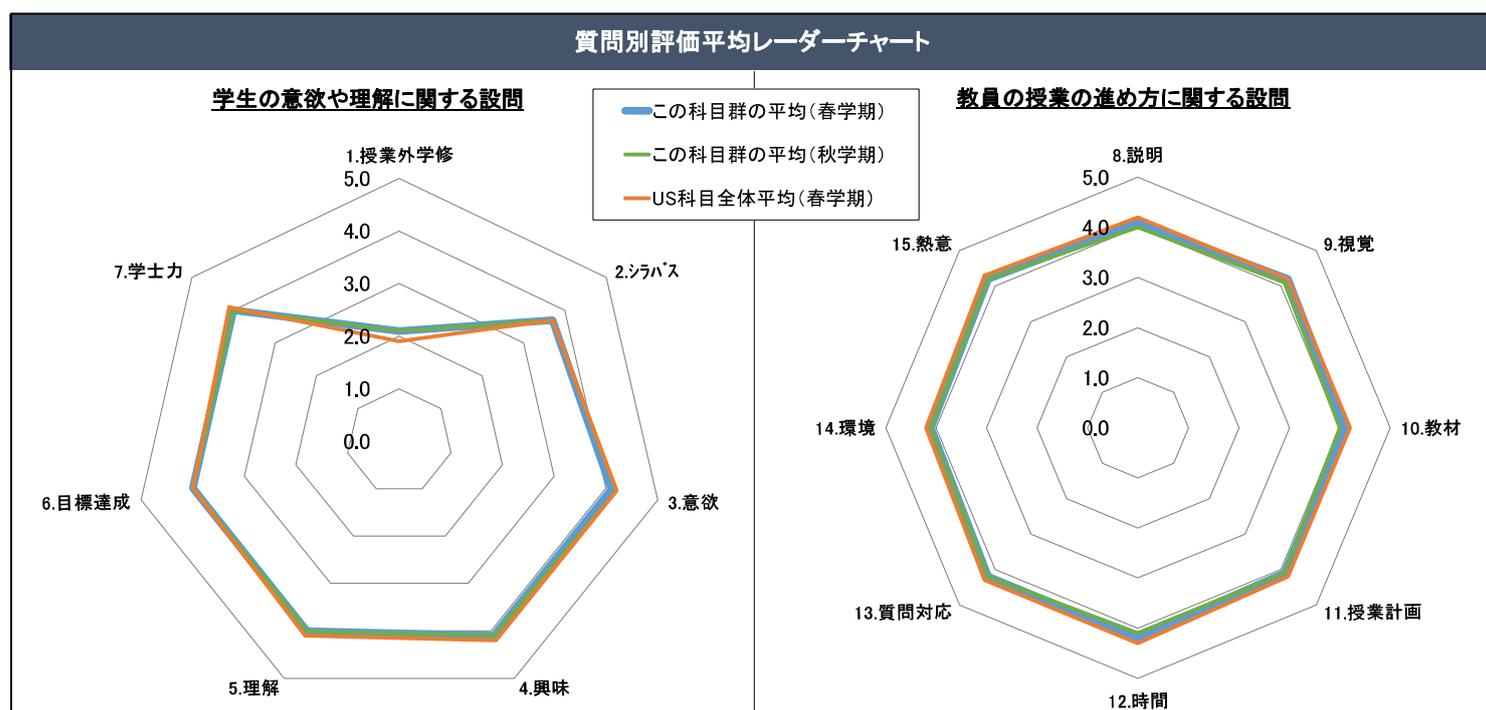
履修者数：3,033名

回答者数：1,652名

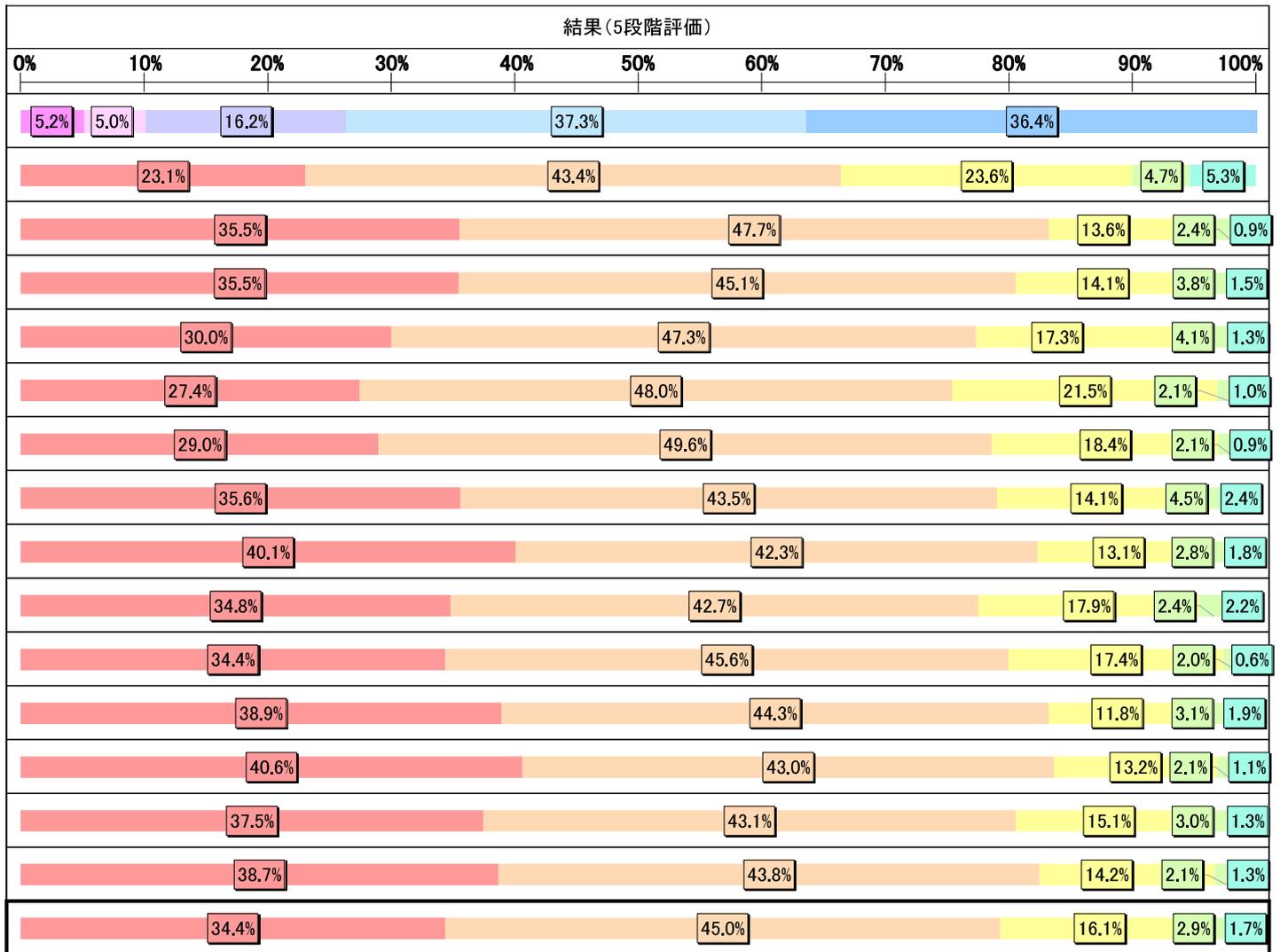
回答率：54.5%

設問			科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修 授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	2.1	1.9
	2	シラバス 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.7	3.7
	3	意欲 授業に意欲的に取り組みましたか	4.1	4.2
	4	興味 授業の内容に興味は持てましたか	4.1	4.2
	5	理解 授業の内容を十分に理解できましたか	4.0	4.1
	6	目標達成 シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.0	4.0
	7	学士力 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.0	4.1
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明 話し方や説明は分かりやすかったですか	4.1	4.2
	9	視覚 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.2	4.2
	10	教材 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.1	4.2
	11	授業計画 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.1	4.2
	12	時間 授業時間を有効に使っていましたか	4.2	4.3
	13	質問対応 質問に適切に対応してくれましたか	4.2	4.3
	14	環境 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.1	4.2
	15	熱意 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.2	4.3
総合評価			3.9	4.0

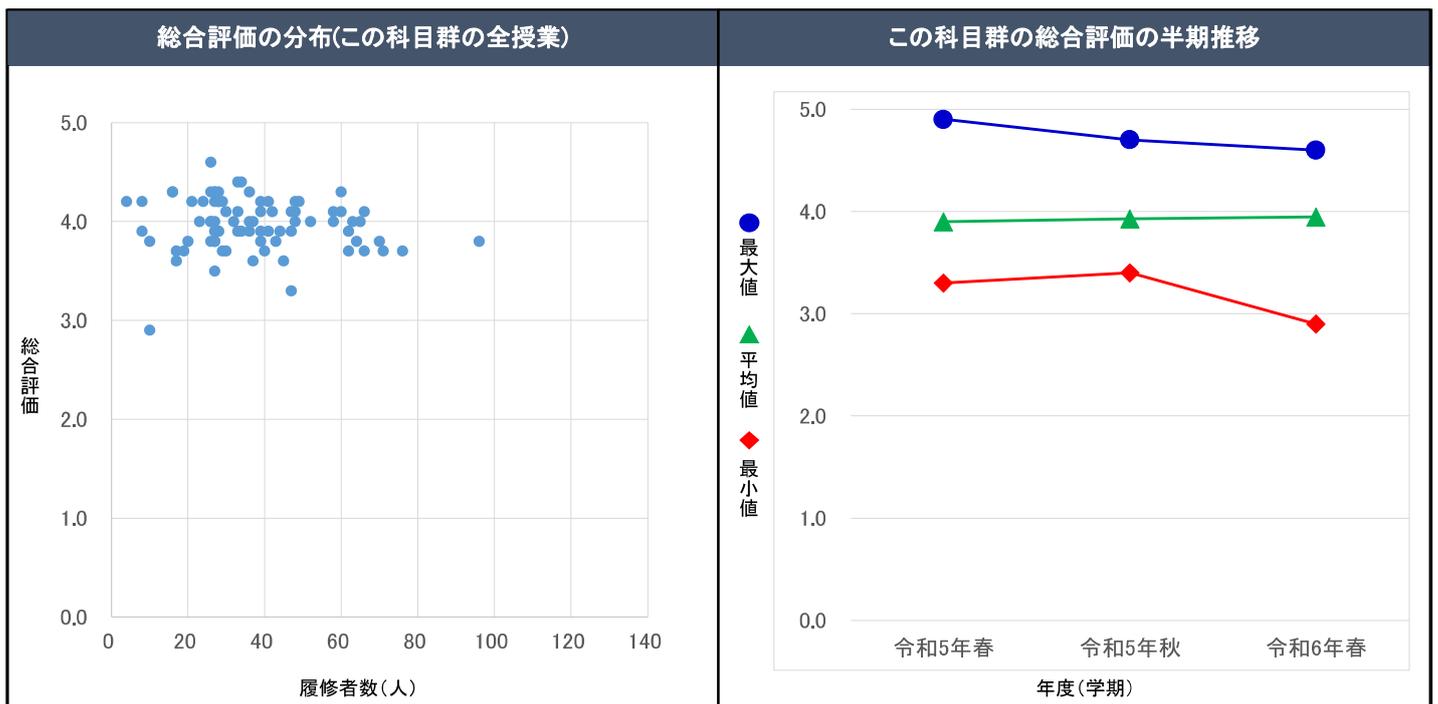
平均値 = (「5」回答数×5 + 「4」回答数×4 + 「3」回答数×3 + 「2」回答数×2 + 「1」回答数×1) / 回答数(小数点第2位を四捨五入)



5 : 4時間以上    4 : 3時間～4時間未満    3 : 2時間～3時間未満    2 : 1時間～2時間未満    1 : 1時間未満



5 : とてもそう思う    4 : そう思う    3 : どちらともいえない    2 : そう思わない    1 : 全くそう思わない



US科目 学際科目群

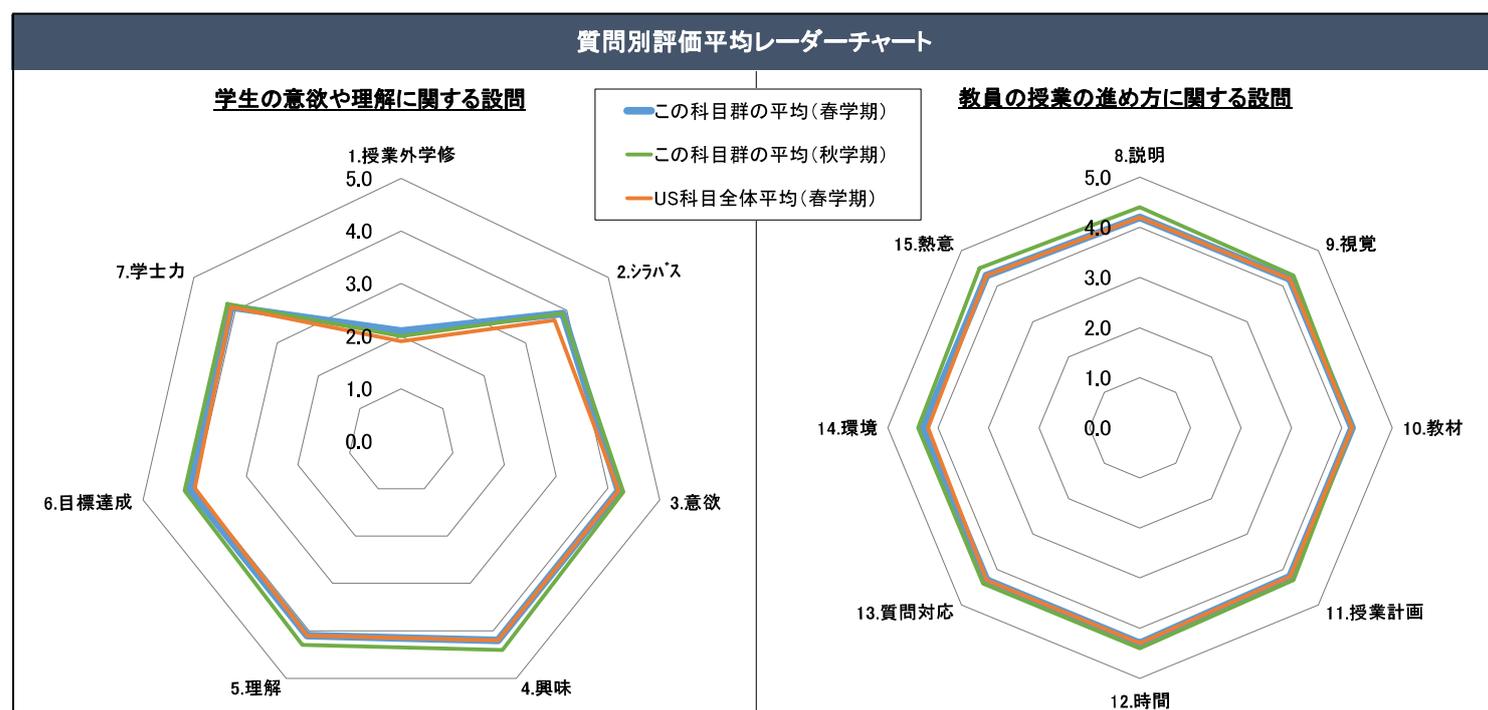
履修者数：1,768名

回答者数：563名

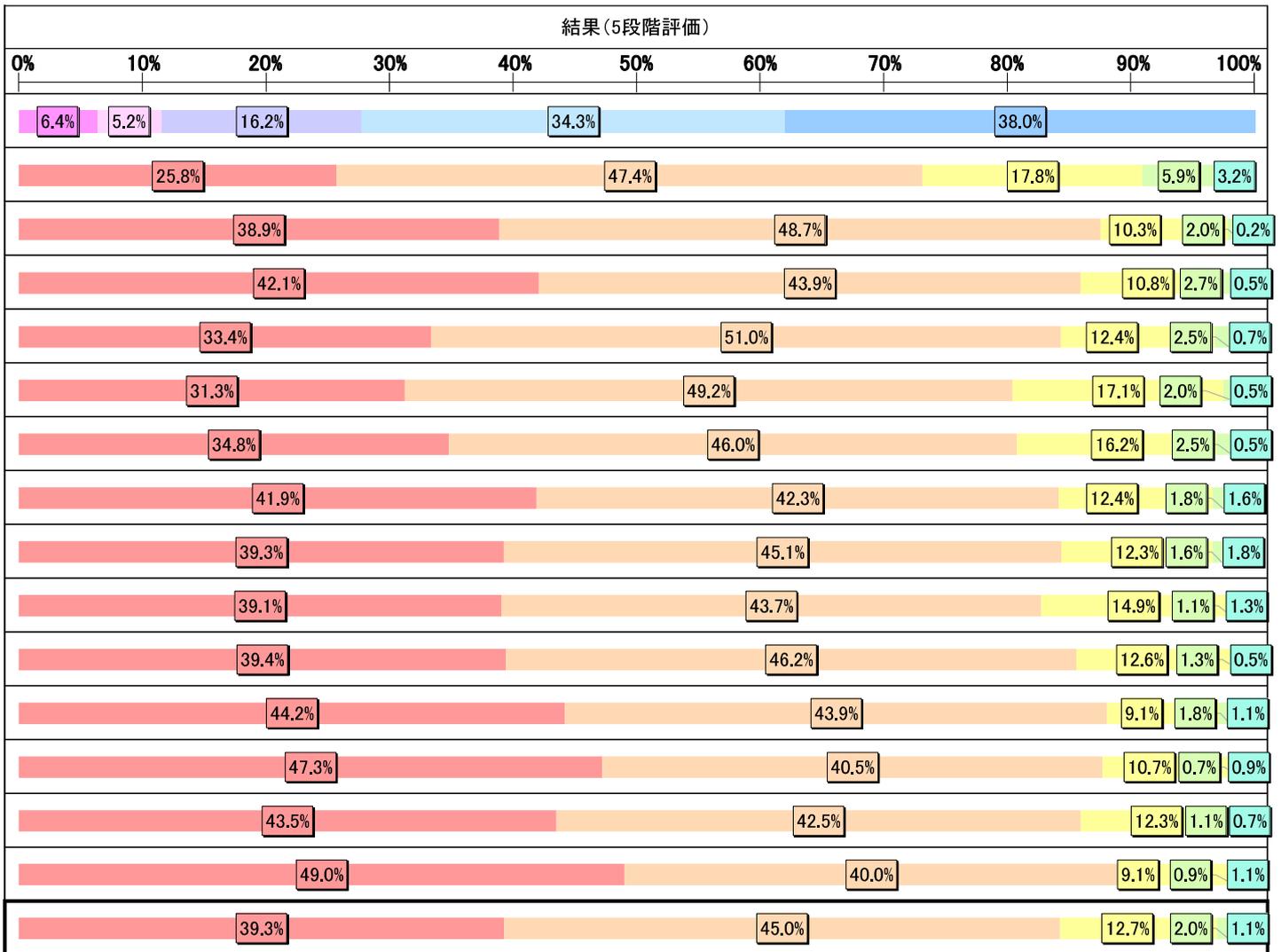
回答率：31.8%

設問			科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修 授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	2.1	1.9
	2	シラバス 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.9	3.7
	3	意欲 授業に意欲的に取り組みましたか	4.2	4.2
	4	興味 授業の内容に興味は持てましたか	4.2	4.2
	5	理解 授業の内容を十分に理解できましたか	4.1	4.1
	6	目標達成 シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.1	4.0
	7	学士力 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.1	4.1
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明 話し方や説明は分かりやすかったですか	4.2	4.2
	9	視覚 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.2	4.2
	10	教材 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.2	4.2
	11	授業計画 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.2	4.2
	12	時間 授業時間を有効に使っていましたか	4.3	4.3
	13	質問対応 質問に適切に対応してくれましたか	4.3	4.3
	14	環境 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.3	4.2
	15	熱意 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.3	4.3
総合評価			4.0	4.0

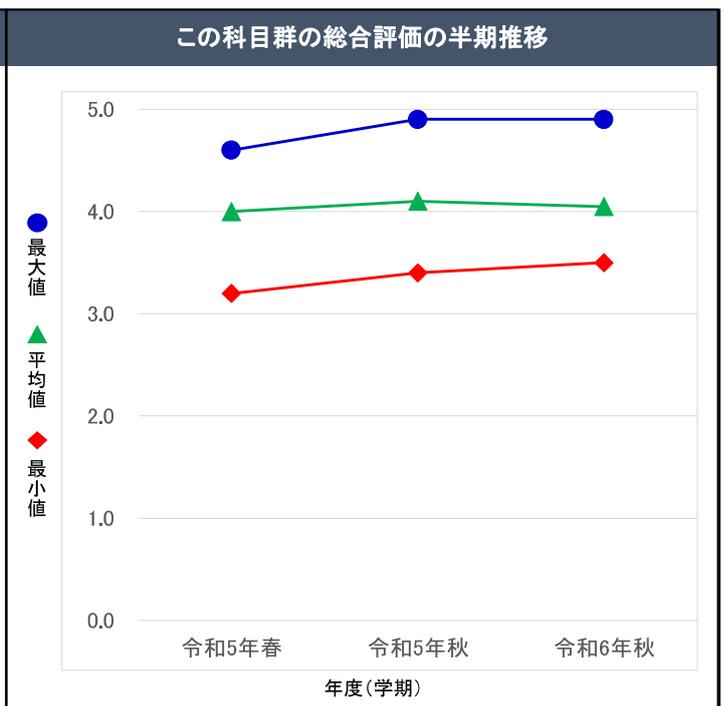
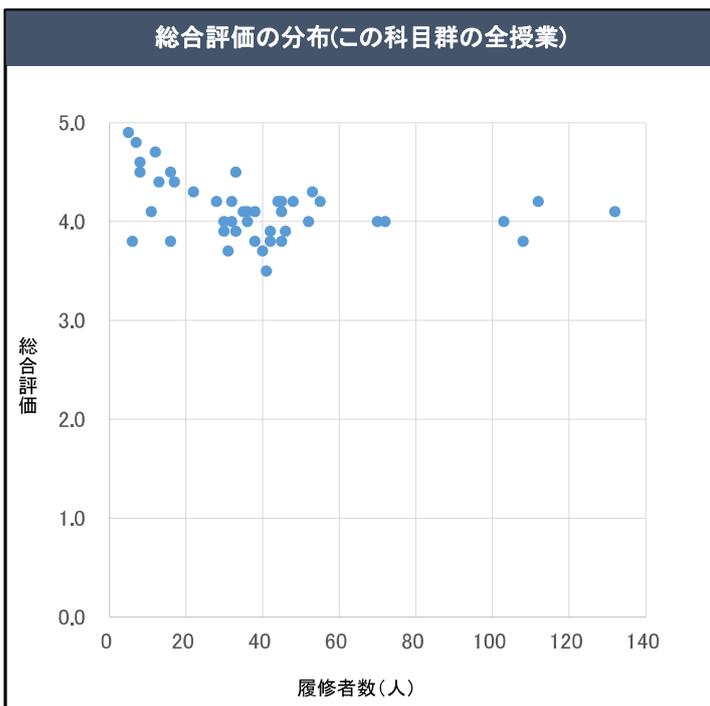
平均値 = (「5」回答数×5 + 「4」回答数×4 + 「3」回答数×3 + 「2」回答数×2 + 「1」回答数×1) / 回答数(小数点第2位を四捨五入)



5 : 4時間以上    4 : 3時間～4時間未満    3 : 2時間～3時間未満    2 : 1時間～2時間未満    1 : 1時間未満



5 : とてもそう思う    4 : そう思う    3 : どちらともいえない    2 : そう思わない    1 : 全くそう思わない



US科目 言語表現科目群

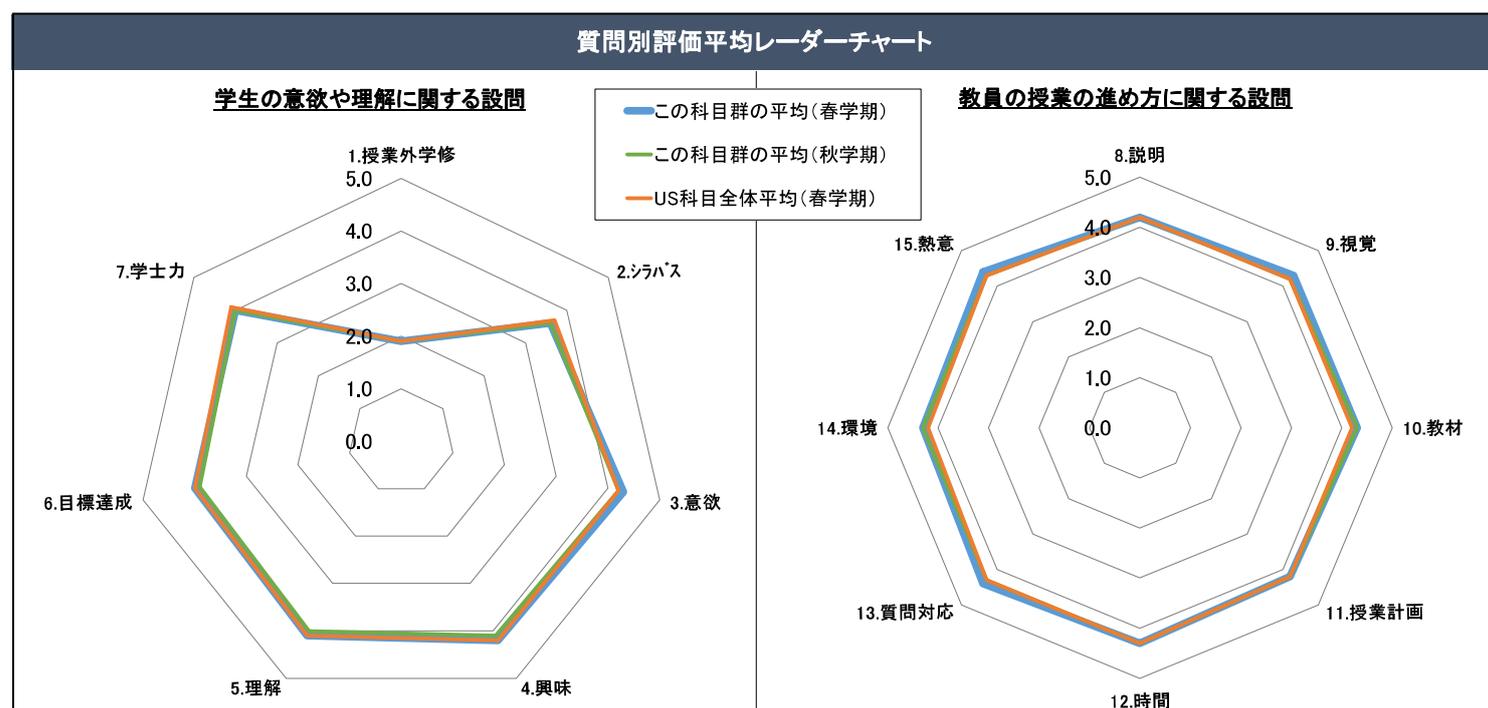
履修者数：3,656名

回答者数：2,222名

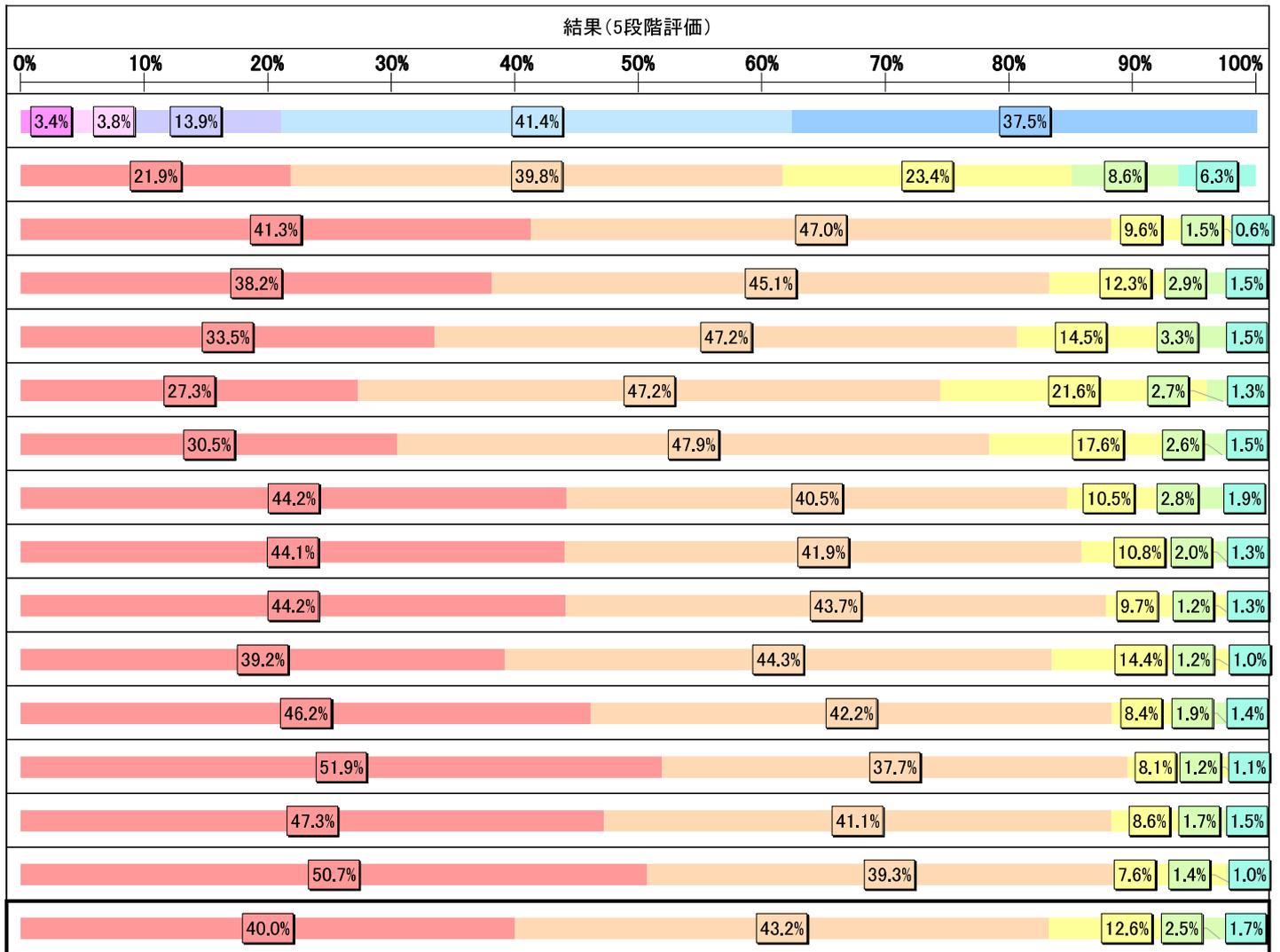
回答率：60.8%

設問			科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修 授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	1.9	1.9
	2	シラバス 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.6	3.7
	3	意欲 授業に意欲的に取り組みましたか	4.3	4.2
	4	興味 授業の内容に興味は持てましたか	4.2	4.2
	5	理解 授業の内容を十分に理解できましたか	4.1	4.1
	6	目標達成 シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.0	4.0
	7	学士力 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.0	4.1
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明 話し方や説明は分かりやすかったですか	4.2	4.2
	9	視覚 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.3	4.2
	10	教材 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.3	4.2
	11	授業計画 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.2	4.2
	12	時間 授業時間を有効に使っていましたか	4.3	4.3
	13	質問対応 質問に適切に対応してくれましたか	4.4	4.3
	14	環境 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.3	4.2
	15	熱意 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.4	4.3
総合評価			4.0	4.0

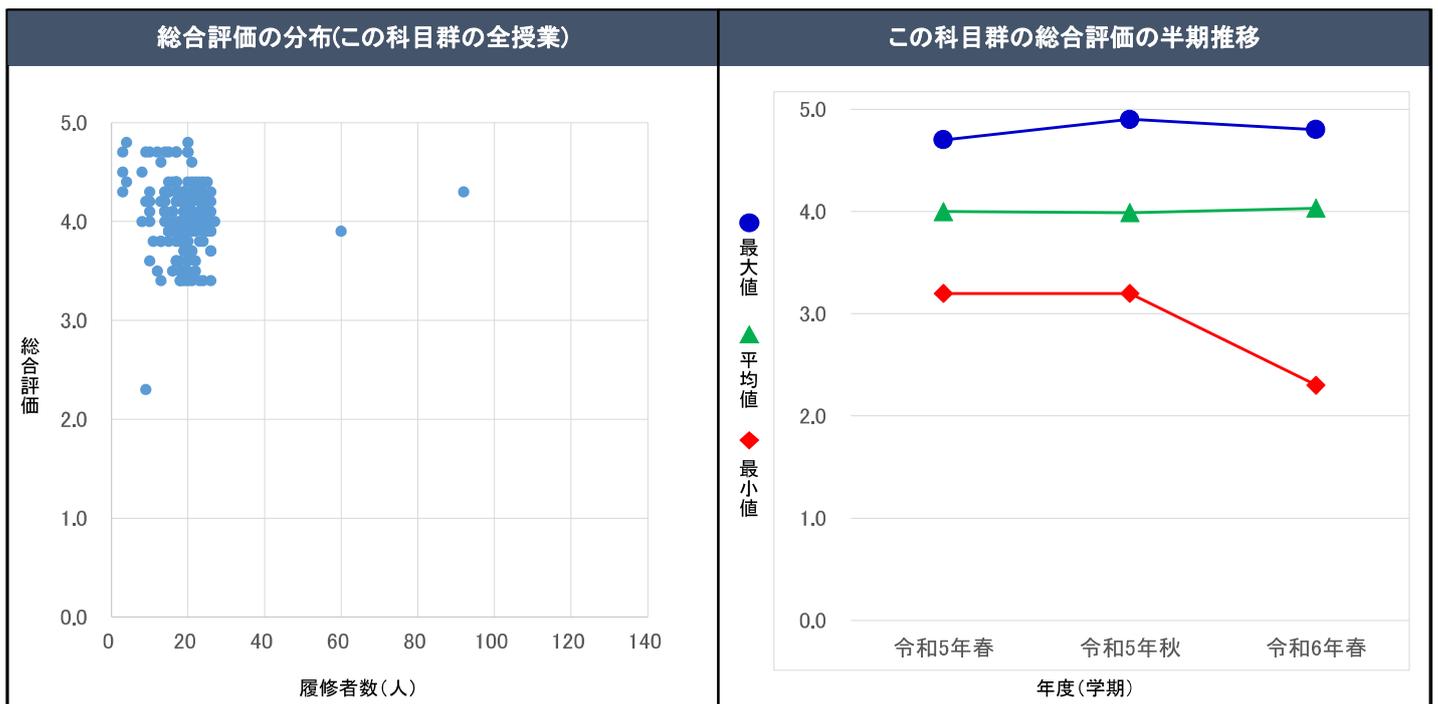
平均値 = (「5」回答数×5 + 「4」回答数×4 + 「3」回答数×3 + 「2」回答数×2 + 「1」回答数×1) / 回答数(小数点第2位を四捨五入)



5 : 4時間以上    4 : 3時間～4時間未満    3 : 2時間～3時間未満    2 : 1時間～2時間未満    1 : 1時間未満



5 : とてもそう思う    4 : そう思う    3 : どちらともいえない    2 : そう思わない    1 : 全くそう思わない



US科目 教職関連科目群

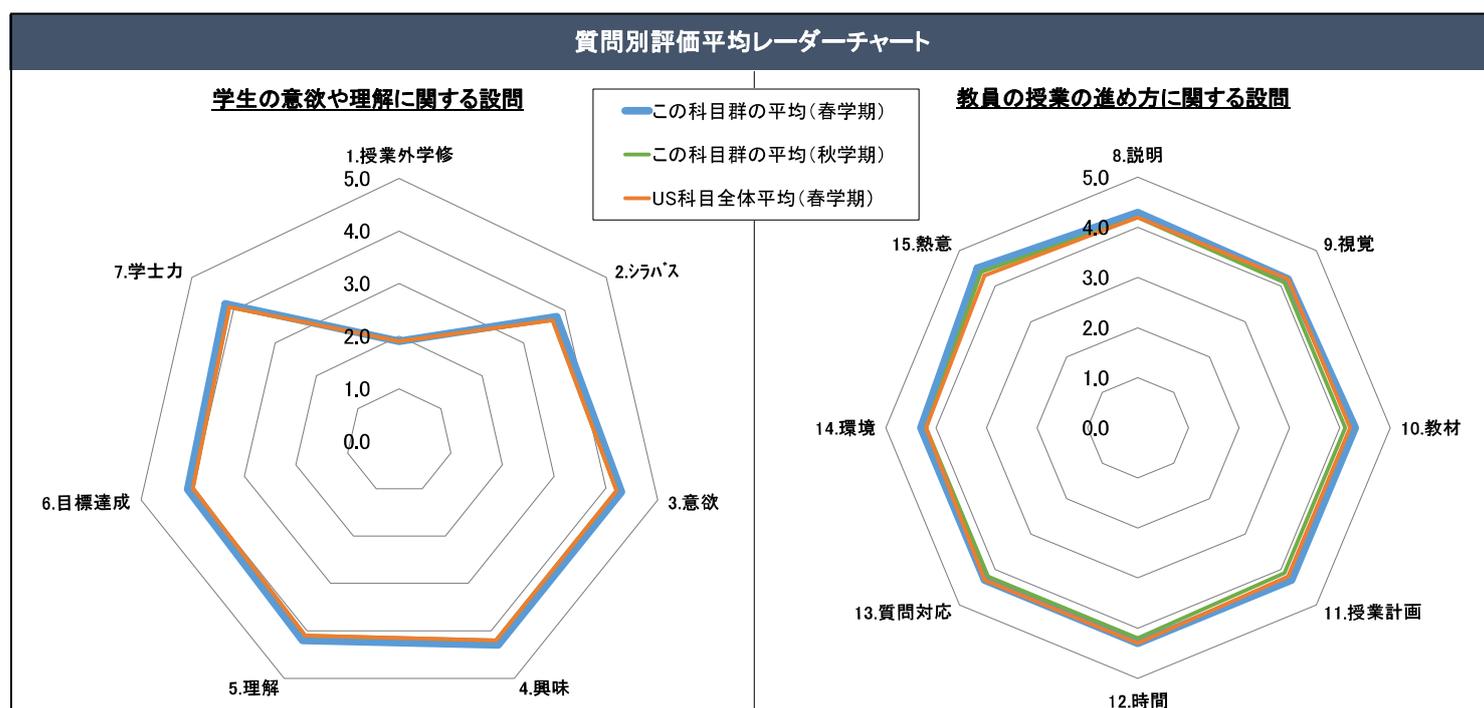
履修者数：2,376名

回答者数：1,027名

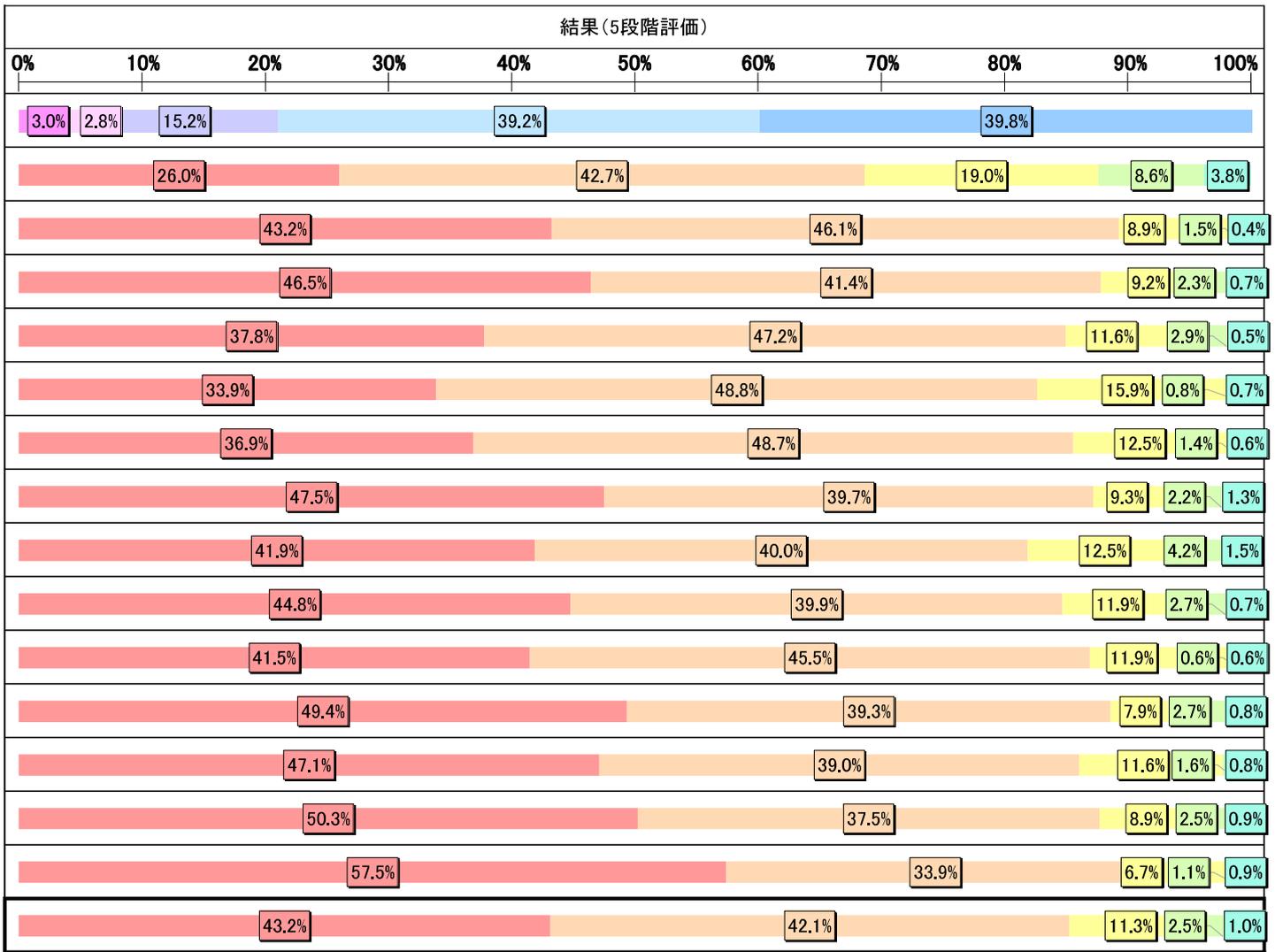
回答率：43.2%

設問			科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修 授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	1.9	1.9
	2	シラバス 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.8	3.7
	3	意欲 授業に意欲的に取り組みましたか	4.3	4.2
	4	興味 授業の内容に興味は持てましたか	4.3	4.2
	5	理解 授業の内容を十分に理解できましたか	4.2	4.1
	6	目標達成 シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.1	4.0
	7	学士力 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.2	4.1
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明 話し方や説明は分かりやすかったですか	4.3	4.2
	9	視覚 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.2	4.2
	10	教材 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.3	4.2
	11	授業計画 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.3	4.2
	12	時間 授業時間を有効に使っていましたか	4.3	4.3
	13	質問対応 質問に適切に対応してくれましたか	4.3	4.3
	14	環境 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.3	4.2
	15	熱意 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.5	4.3
総合評価			4.1	4.0

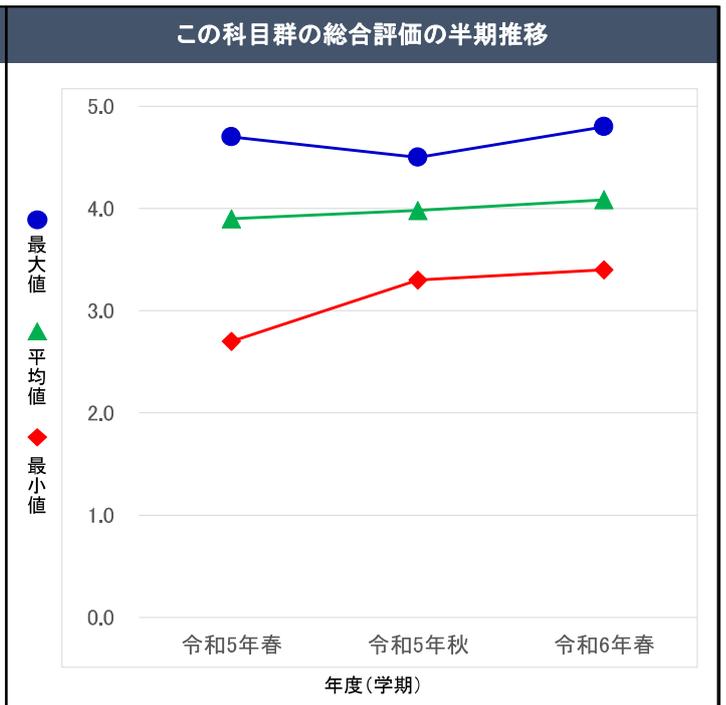
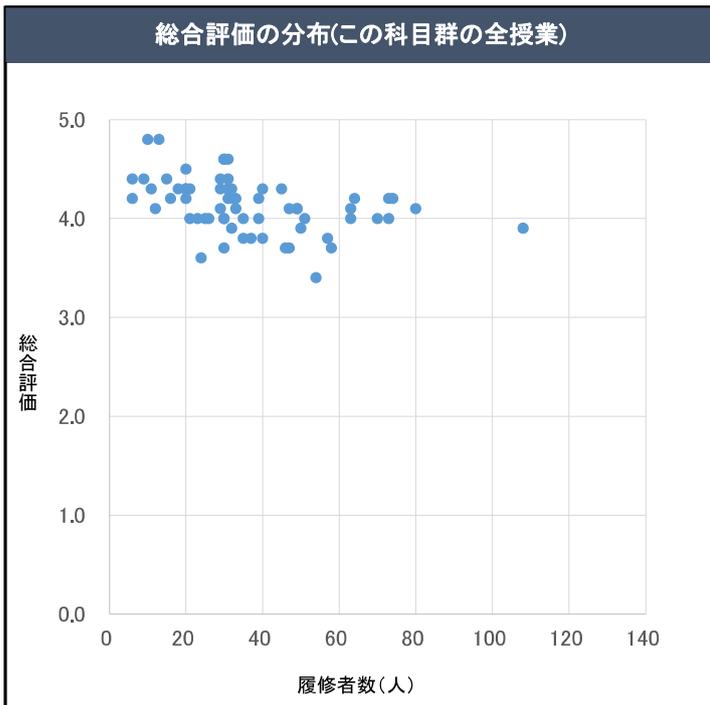
平均値 = (「5」回答数×5 + 「4」回答数×4 + 「3」回答数×3 + 「2」回答数×2 + 「1」回答数×1) / 回答数(小数点第2位を四捨五入)



5 : 4時間以上    4 : 3時間～4時間未満    3 : 2時間～3時間未満    2 : 1時間～2時間未満    1 : 1時間未満



5 : とてもそう思う    4 : そう思う    3 : どちらともいえない    2 : そう思わない    1 : 全くそう思わない



US科目 資格関連科目群

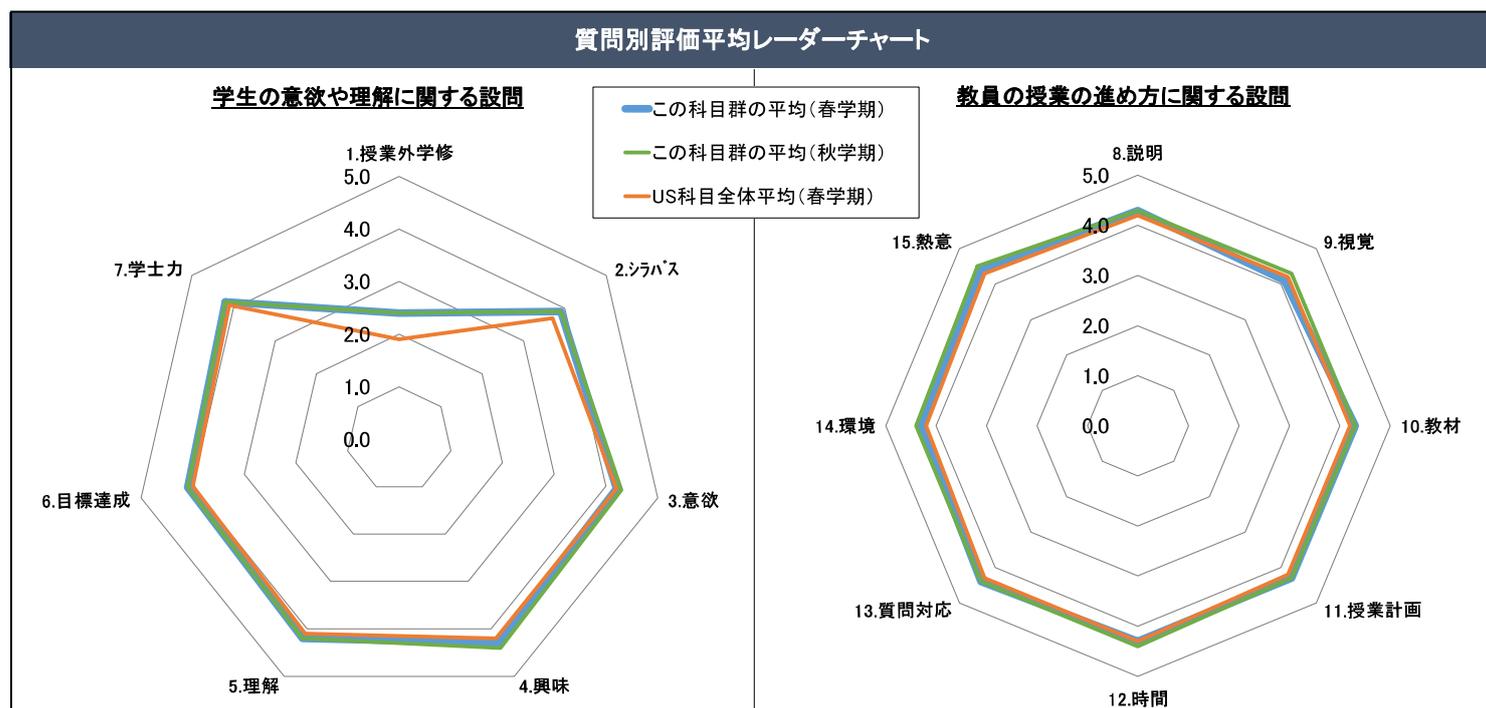
履修者数： 397 名

回答者数： 104 名

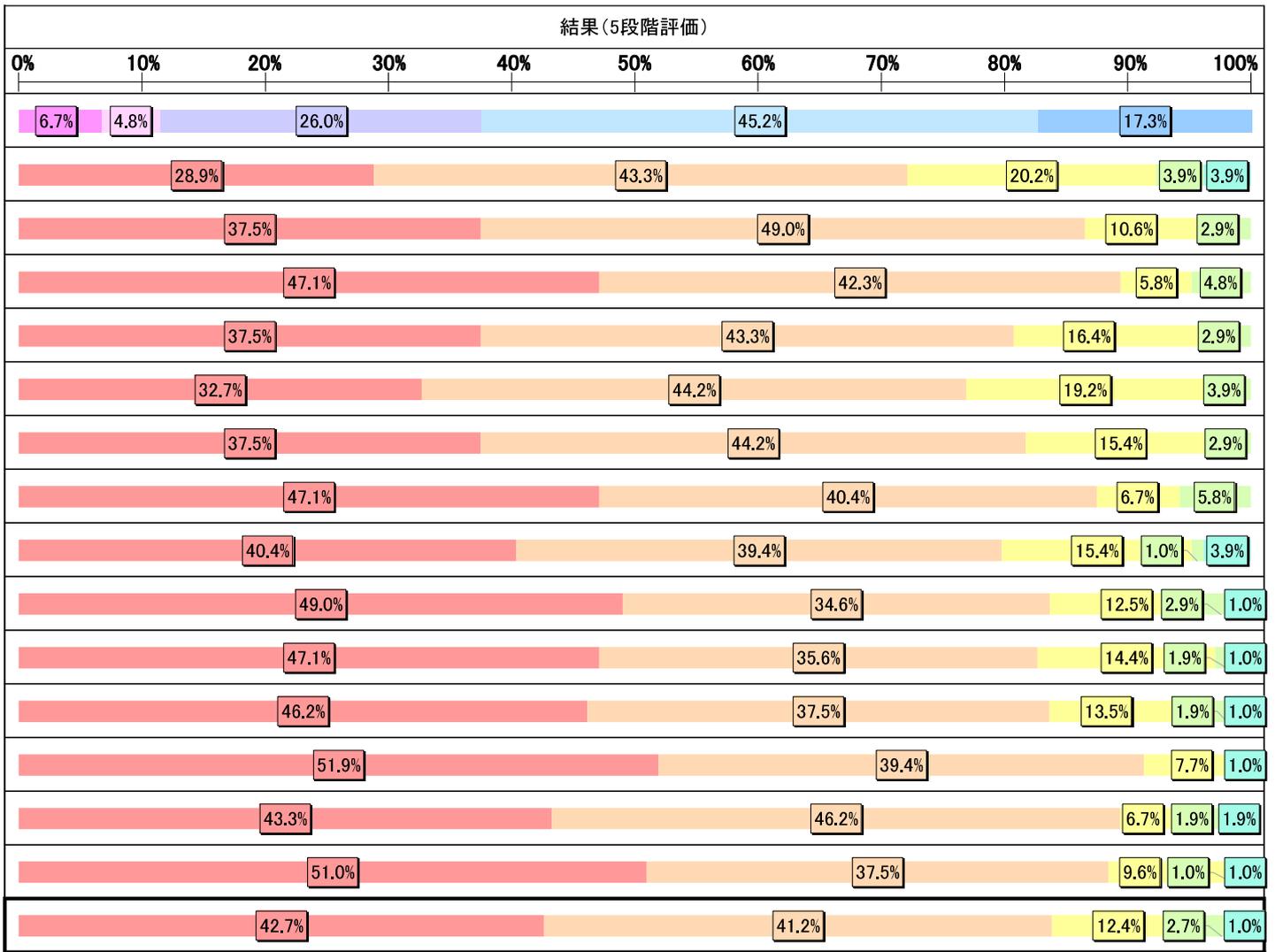
回答率： 26.2 %

設問			科目群平均	US科目全体平均	
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	2.4	1.9
	2	シラバス	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.9	3.7
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.2	4.2
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.3	4.2
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.2	4.1
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.1	4.0
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.2	4.1
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.3	4.2
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.1	4.2
	10	教材	教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.3	4.2
	11	授業計画	授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.3	4.2
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.3	4.3
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.4	4.3
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.3	4.2
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.4	4.3
総合評価			4.1	4.0	

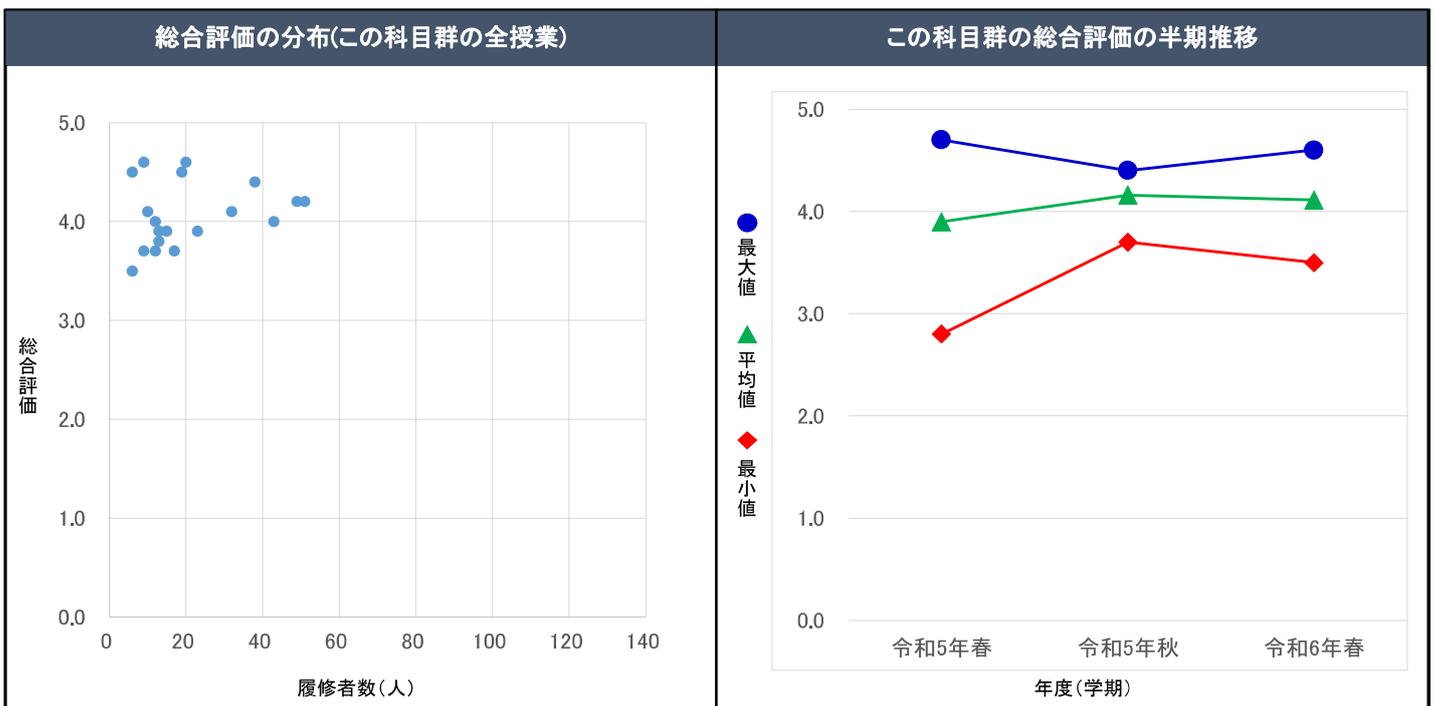
平均値 = (「5」回答数×5 + 「4」回答数×4 + 「3」回答数×3 + 「2」回答数×2 + 「1」回答数×1) / 回答数(小数点第2位を四捨五入)



5 : 4時間以上    4 : 3時間～4時間未満    3 : 2時間～3時間未満    2 : 1時間～2時間未満    1 : 1時間未満



5 : とてもそう思う    4 : そう思う    3 : どちらともいえない    2 : そう思わない    1 : 全くそう思わない



授業アンケート一覧 > 授業アンケート結果参照

戻る

期間：2024/08/13（火）09:05～2024/08/19（月）23:59

対象者数(延べ数)：213人 回答者数(延べ数)：60人 回答率 28.2%

### 2024\_授業アンケート【サマーセッションⅠ期】

このアンケート調査は、学生の皆さんの視点から授業の状況を確認し、授業の改善に結びつけることを目的として実施するものです。入力にあたっては、この授業を振り返り、責任ある回答をしてください。なお、このアンケートの回答は匿名化して処理するため、教員が回答から個人を特定することはできません。また、回答内容は授業改善のみに活用し、成績評価等には一切影響しませんので、率直に回答してください。

#### あなたの意欲や理解について

1. 授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか（必須）		比率	人数
4時間以上		8.3%	5人
3時間～4時間未満		10.0%	6人
2時間～3時間未満		15.0%	9人
1時間～2時間未満		41.7%	25人
1時間未満		25.0%	15人
2. 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか（必須）		比率	人数
とてもそう思う		23.3%	14人
そう思う		50.0%	30人
どちらともいえない		18.3%	11人
そう思わない		8.3%	5人
全くそう思わない		0.0%	0人
3. 授業に意欲的に取り組みましたか（必須）		比率	人数
とてもそう思う		56.7%	34人
そう思う		31.7%	19人
どちらともいえない		10.0%	6人
そう思わない		1.7%	1人
全くそう思わない		0.0%	0人
4. 授業の内容に興味は持てましたか（必須）		比率	人数
とてもそう思う		61.7%	37人
そう思う		25.0%	15人
どちらともいえない		11.7%	7人
そう思わない		0.0%	0人
全くそう思わない		1.7%	1人
5. 授業の内容を十分に理解できましたか（必須）		比率	人数
とてもそう思う		45.0%	27人
そう思う		40.0%	24人
どちらともいえない		13.3%	8人
そう思わない		1.7%	1人
全くそう思わない		0.0%	0人
6. シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか（必須）		比率	人数
とてもそう思う		41.7%	25人
そう思う		43.3%	26人
どちらともいえない		10.0%	6人
そう思わない		3.3%	2人
全くそう思わない		1.7%	1人
7. 総合的にみてこの授業で学術力がつきましたか *各授業の学術力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載（必須）		比率	人数
とてもそう思う		48.3%	29人
そう思う		36.7%	22人
どちらともいえない		11.7%	7人
そう思わない		3.3%	2人
全くそう思わない		0.0%	0人

## 教員の授業の進め方について

質問	回答	比率	人数
8. 話し方や説明は分かりやすかったですか (必須)	とてもそう思う	53.3%	32人
	そう思う	35.0%	21人
	どちらともいえない	8.3%	5人
	そう思わない	1.7%	1人
	全くそう思わない	1.7%	1人
9. 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか (必須)	とてもそう思う	46.7%	28人
	そう思う	38.3%	23人
	どちらともいえない	11.7%	7人
	そう思わない	1.7%	1人
	全くそう思わない	1.7%	1人
10. 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか (必須)	とてもそう思う	51.7%	31人
	そう思う	36.7%	22人
	どちらともいえない	10.0%	6人
	そう思わない	1.7%	1人
	全くそう思わない	0.0%	0人
11. 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか (必須)	とてもそう思う	38.3%	23人
	そう思う	50.0%	30人
	どちらともいえない	10.0%	6人
	そう思わない	0.0%	0人
	全くそう思わない	1.7%	1人
12. 授業時間を有効に使っていましたか (必須)	とてもそう思う	53.3%	32人
	そう思う	33.3%	20人
	どちらともいえない	10.0%	6人
	そう思わない	1.7%	1人
	全くそう思わない	1.7%	1人
13. 質問に適切に対応してくれましたか (必須)	とてもそう思う	60.0%	36人
	そう思う	31.7%	19人
	どちらともいえない	6.7%	4人
	そう思わない	1.7%	1人
	全くそう思わない	0.0%	0人
14. 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか (必須)	とてもそう思う	53.3%	32人
	そう思う	33.3%	20人
	どちらともいえない	10.0%	6人
	そう思わない	1.7%	1人
	全くそう思わない	1.7%	1人
15. 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか (必須)	とてもそう思う	58.3%	35人
	そう思う	30.0%	18人
	どちらともいえない	8.3%	5人
	そう思わない	0.0%	0人
	全くそう思わない	3.3%	2人

## 自由記述欄

その他、意見、感想等があれば記述してください【200字以内】

**授業改善につながる建設的な意見をお願いします。授業と直接関連しない意見は控えてください。特に、教員個人への誹謗中傷や差別的な記述は絶対にしないでください。**

アンケートは以上です。最後に右下の「回答」ボタンをクリックしてください。  
 なお、回答期間中は修正して再提出が可能です。  
 ご協力ありがとうございました。

集計結果CSV出力

授業アンケート一覧 > **授業アンケート結果参照**

[戻る](#)

期間：2024/09/03（火）09:00～2024/09/09（月）23:59

対象者数(延べ数)：301人 回答者数(延べ数)：97人 回答率 32.2%

### 2024\_授業アンケート【サマーセッションⅡ期】

このアンケート調査は、学生の皆さんの視点から授業の状況を確認し、授業の改善に結びつけることを目的として実施するものです。入力にあたっては、この授業を振り返り、責任ある回答をしてください。なお、このアンケートの回答は匿名化して処理するため、教員が回答から個人を特定することはできません。また、回答内容は授業改善のみに活用し、成績評価等には一切影響しませんので、率直に回答してください。

#### あなたの意欲や理解について

1. 授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか（必須）		比率	人数
4時間以上		3.1%	3人
3時間～4時間未満		2.1%	2人
2時間～3時間未満		22.7%	22人
1時間～2時間未満		41.2%	40人
1時間未満		30.9%	30人
2. 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか（必須）		比率	人数
とてもそう思う		24.7%	24人
そう思う		48.5%	47人
どちらともいえない		21.6%	21人
そう思わない		3.1%	3人
全くそう思わない		2.1%	2人
3. 授業に意欲的に取り組みましたか（必須）		比率	人数
とてもそう思う		53.6%	52人
そう思う		36.1%	35人
どちらともいえない		9.3%	9人
そう思わない		1.0%	1人
全くそう思わない		0.0%	0人
4. 授業の内容に興味は持てましたか（必須）		比率	人数
とてもそう思う		54.6%	53人
そう思う		38.1%	37人
どちらともいえない		6.2%	6人
そう思わない		1.0%	1人
全くそう思わない		0.0%	0人
5. 授業の内容を十分に理解できましたか（必須）		比率	人数
とてもそう思う		48.5%	47人
そう思う		39.2%	38人
どちらともいえない		9.3%	9人
そう思わない		2.1%	2人
全くそう思わない		1.0%	1人
6. シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか（必須）		比率	人数
とてもそう思う		35.1%	34人
そう思う		48.5%	47人
どちらともいえない		16.5%	16人
そう思わない		0.0%	0人
全くそう思わない		0.0%	0人
7. 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか		比率	人数
* 各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載（必須）			
とてもそう思う		48.5%	47人
そう思う		42.3%	41人
どちらともいえない		9.3%	9人
そう思わない		0.0%	0人
全くそう思わない		0.0%	0人

## 教員の授業の進め方について

8. 話し方や説明は分かりやすかったですか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		60.8%	59人
そう思う		34.0%	33人
どちらともいえない		4.1%	4人
そう思わない		1.0%	1人
全くそう思わない		0.0%	0人
9. 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		60.8%	59人
そう思う		33.0%	32人
どちらともいえない		4.1%	4人
そう思わない		2.1%	2人
全くそう思わない		0.0%	0人
10. 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		57.7%	56人
そう思う		33.0%	32人
どちらともいえない		8.2%	8人
そう思わない		1.0%	1人
全くそう思わない		0.0%	0人
11. 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		52.6%	51人
そう思う		39.2%	38人
どちらともいえない		8.2%	8人
そう思わない		0.0%	0人
全くそう思わない		0.0%	0人
12. 授業時間を有効に使っていましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		63.9%	62人
そう思う		26.8%	26人
どちらともいえない		8.2%	8人
そう思わない		1.0%	1人
全くそう思わない		0.0%	0人
13. 質問に適切に対応してくれましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		66.0%	64人
そう思う		24.7%	24人
どちらともいえない		9.3%	9人
そう思わない		0.0%	0人
全くそう思わない		0.0%	0人
14. 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		62.9%	61人
そう思う		28.9%	28人
どちらともいえない		7.2%	7人
そう思わない		1.0%	1人
全くそう思わない		0.0%	0人
15. 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		71.1%	69人
そう思う		23.7%	23人
どちらともいえない		5.2%	5人
そう思わない		0.0%	0人
全くそう思わない		0.0%	0人

## 自由記述欄

その他、意見、感想等があれば記述してください【200字以内】

**授業改善につながる建設的な意見をお願いします。授業と直接関連しない意見は控えてください。特に、教員個人への誹謗中傷や差別的な記述は絶対にしないでください。**

アンケートは以上です。最後に右下の「回答」ボタンをクリックしてください。

なお、回答期間中は修正して再提出が可能です。

ご協力ありがとうございました。

集計結果CSV出力

US科目全体

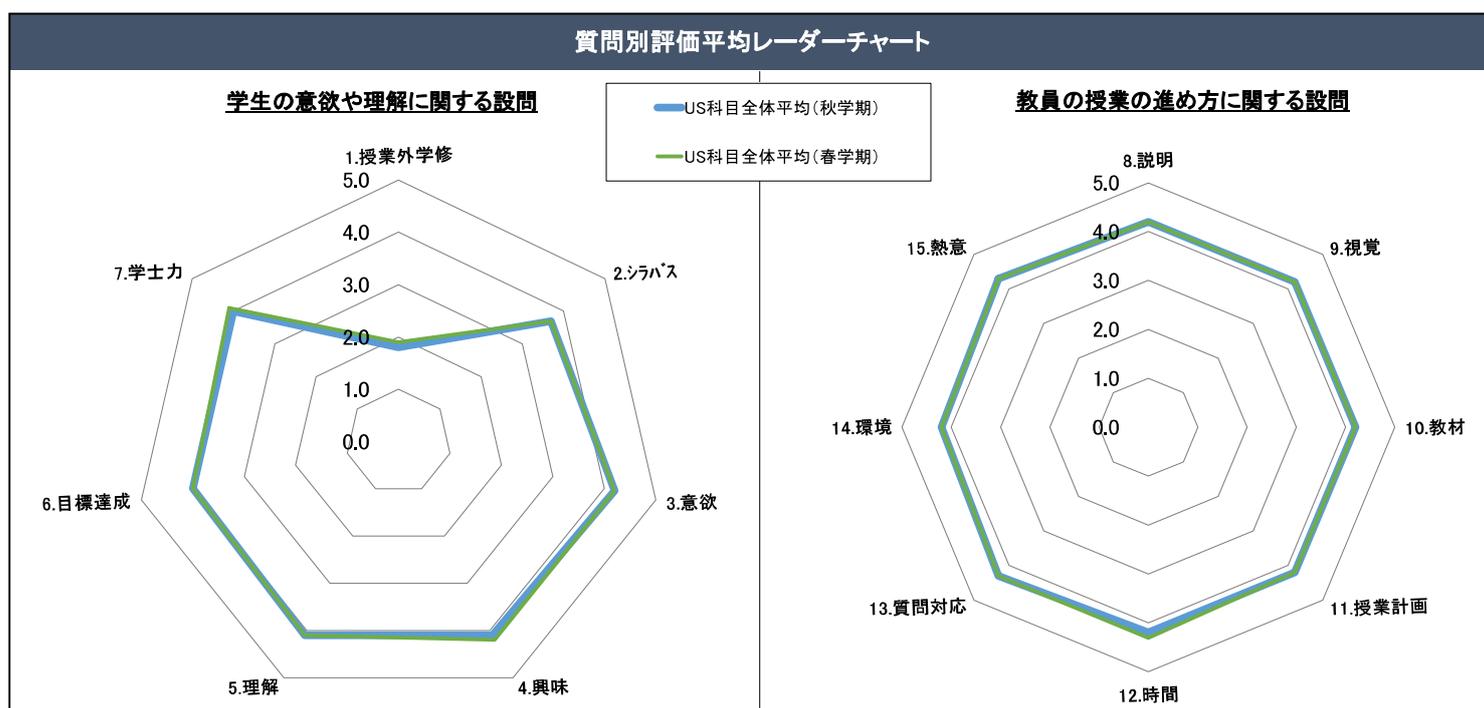
履修者数：18,368名

回答者数：7,744名

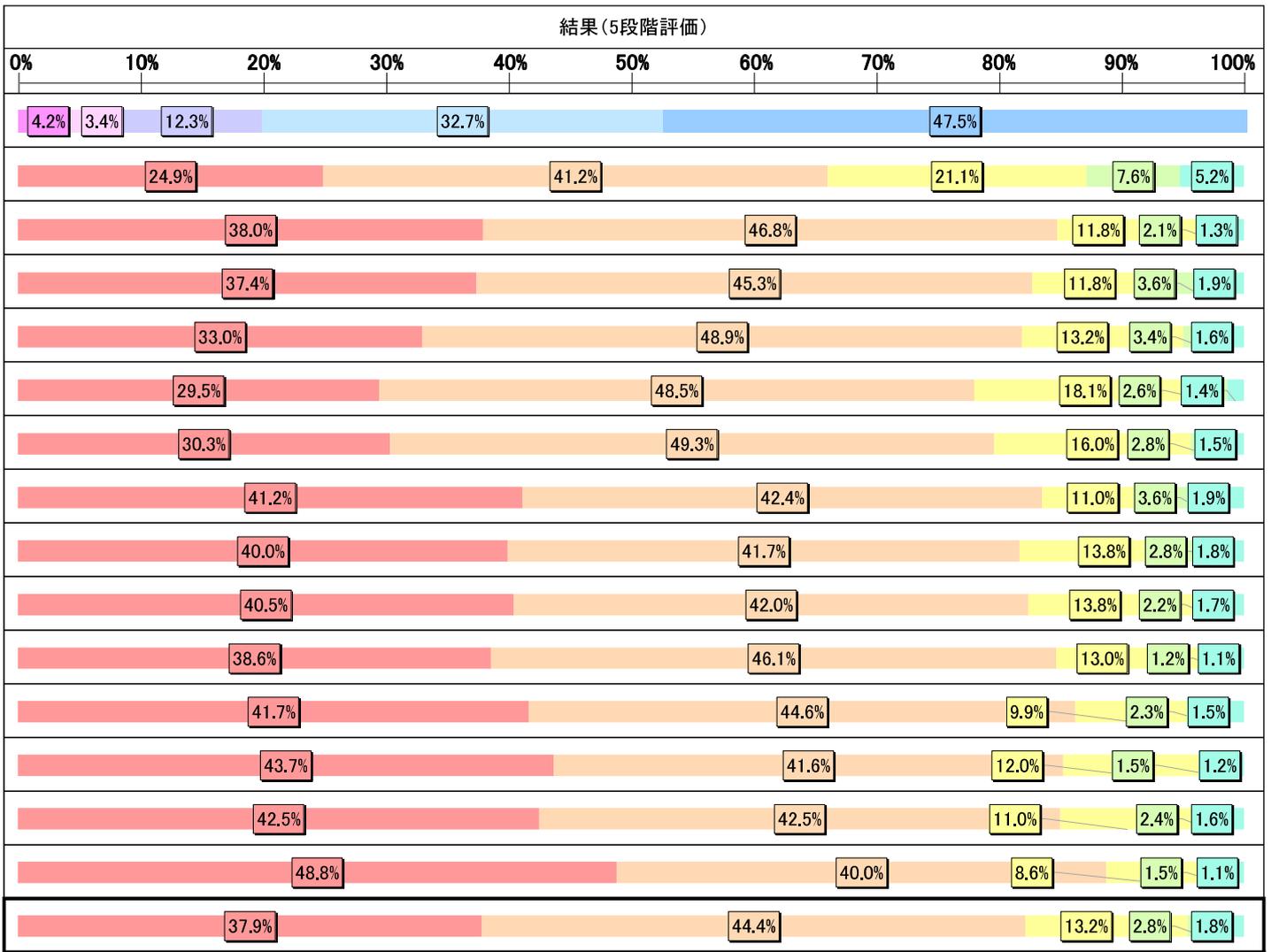
回答率：42.2%

設問			US科目 全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修 授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	1.8
	2	シラバス 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.7
	3	意欲 授業に意欲的に取り組みましたか	4.2
	4	興味 授業の内容に興味は持てましたか	4.1
	5	理解 授業の内容を十分に理解できましたか	4.1
	6	目標達成 シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.0
	7	学士力 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明 話し方や説明は分かりやすかったですか	4.2
	9	視覚 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.2
	10	教材 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.2
	11	授業計画 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.2
	12	時間 授業時間を有効に使っていましたか	4.2
	13	質問対応 質問に適切に対応してくれましたか	4.3
	14	環境 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.2
	15	熱意 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.3
総合評価			4.0

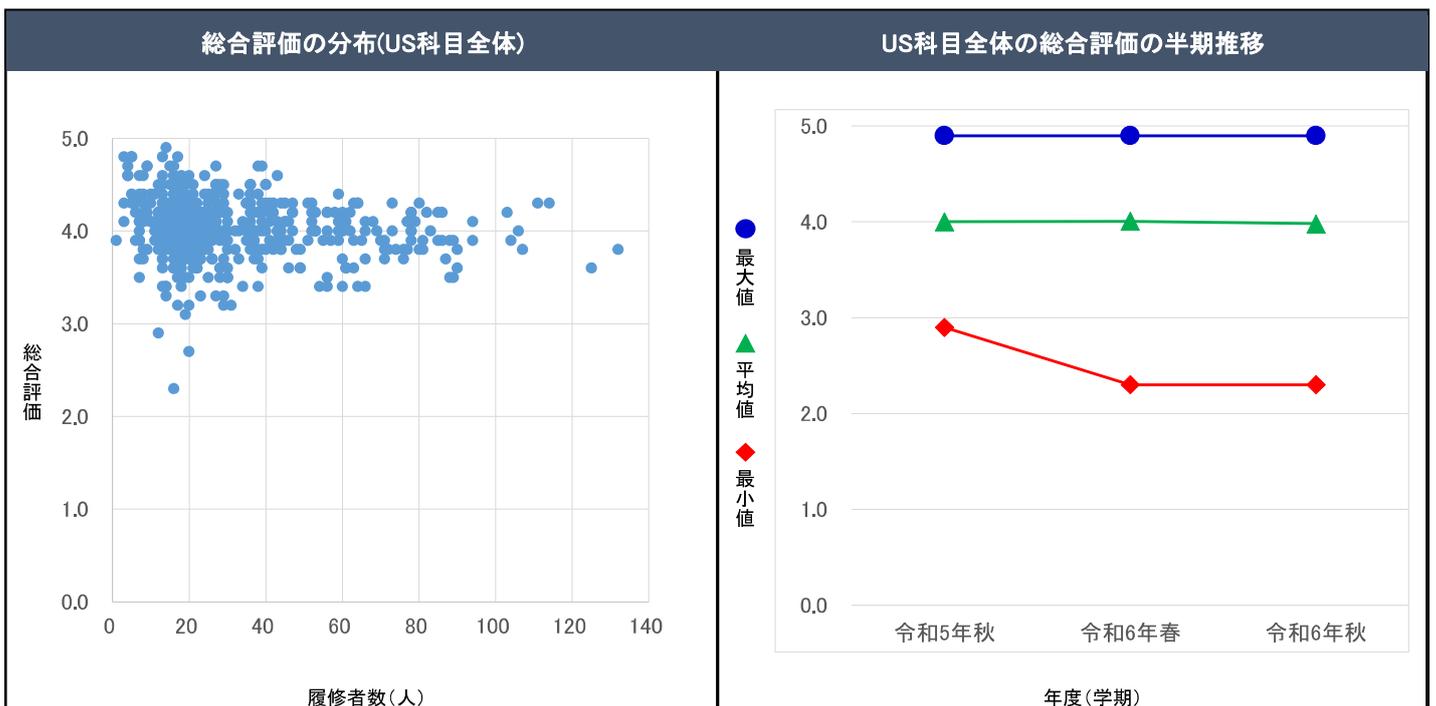
平均値 = (「5」回答数×5 + 「4」回答数×4 + 「3」回答数×3 + 「2」回答数×2 + 「1」回答数×1) / 回答数(小数点第2位を四捨五入)



5 : 4時間以上    4 : 3時間～4時間未満    3 : 2時間～3時間未満    2 : 1時間～2時間未満    1 : 1時間未満



5 : とてもそう思う    4 : そう思う    3 : どちらともいえない    2 : そう思わない    1 : 全くそう思わない



US科目 玉川教育・FYE科目群

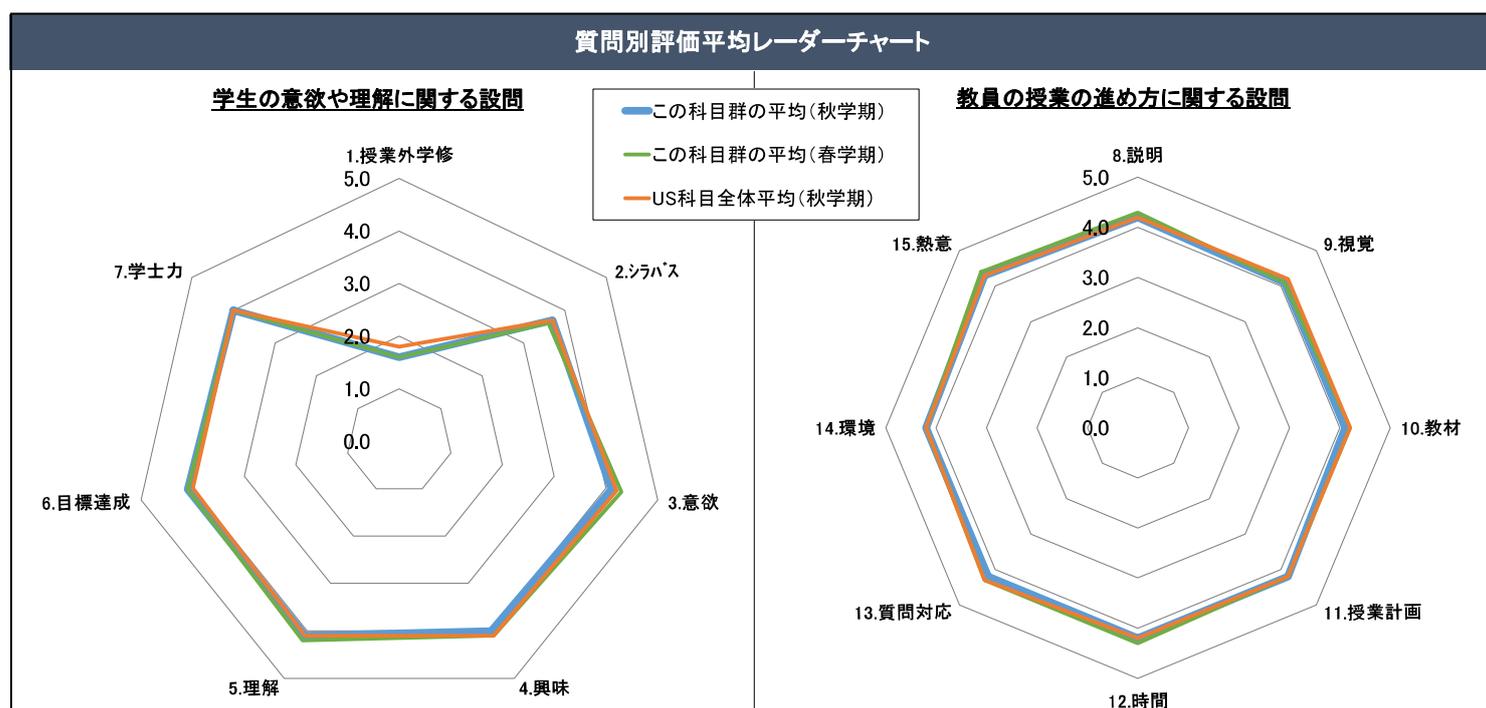
履修者数：4,853名

回答者数：2,354名

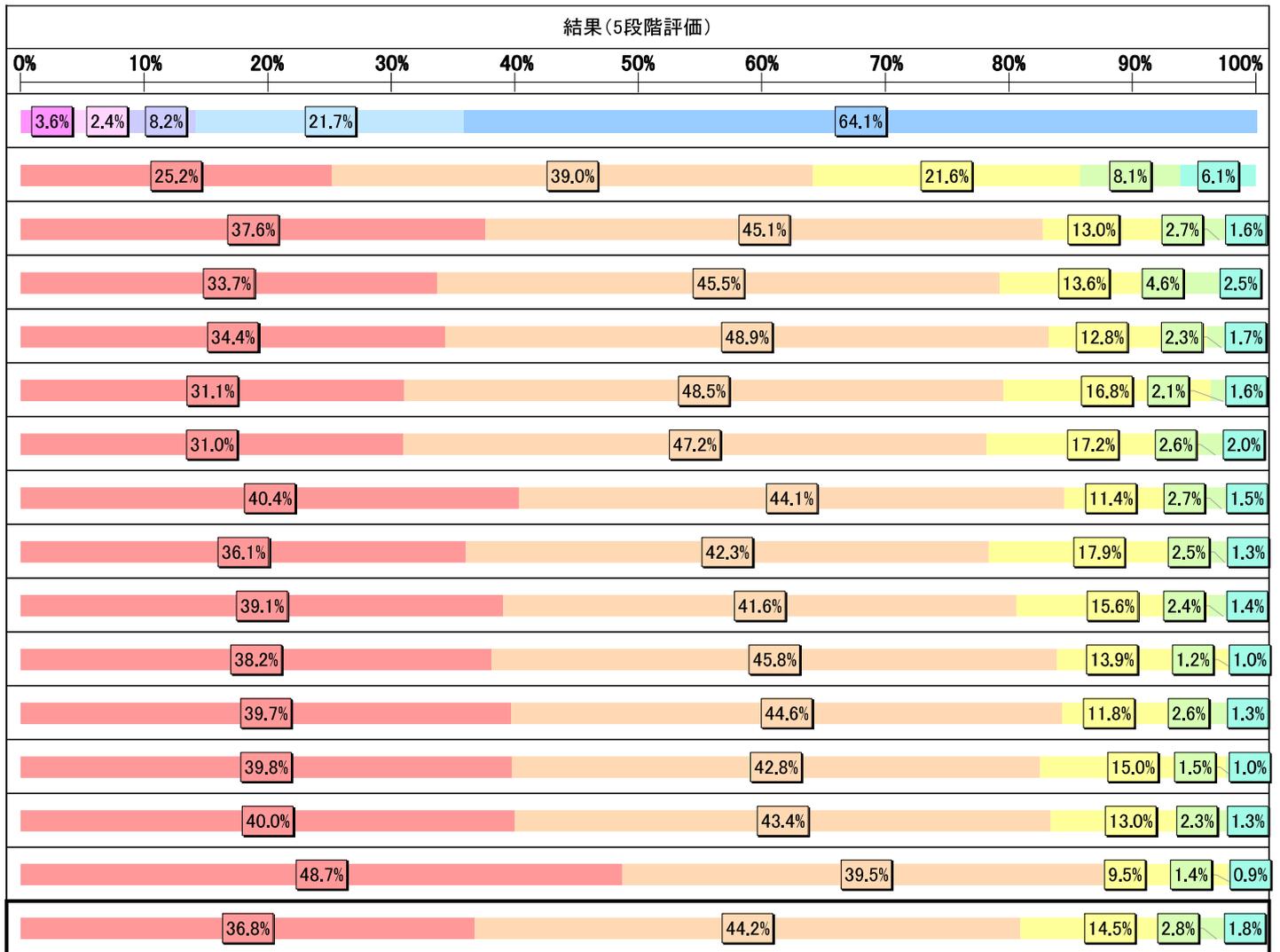
回答率：48.5%

設問			科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修 授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	1.6	1.8
	2	シラバス 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.7	3.7
	3	意欲 授業に意欲的に取り組みましたか	4.1	4.2
	4	興味 授業の内容に興味は持てましたか	4.0	4.1
	5	理解 授業の内容を十分に理解できましたか	4.1	4.1
	6	目標達成 シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.1	4.0
	7	学士力 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.0	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明 話し方や説明は分かりやすかったですか	4.2	4.2
	9	視覚 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.1	4.2
	10	教材 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.1	4.2
	11	授業計画 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.2	4.2
	12	時間 授業時間を有効に使っていましたか	4.2	4.2
	13	質問対応 質問に適切に対応してくれましたか	4.2	4.3
	14	環境 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.2	4.2
	15	熱意 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.3	4.3
総合評価			3.9	4.0

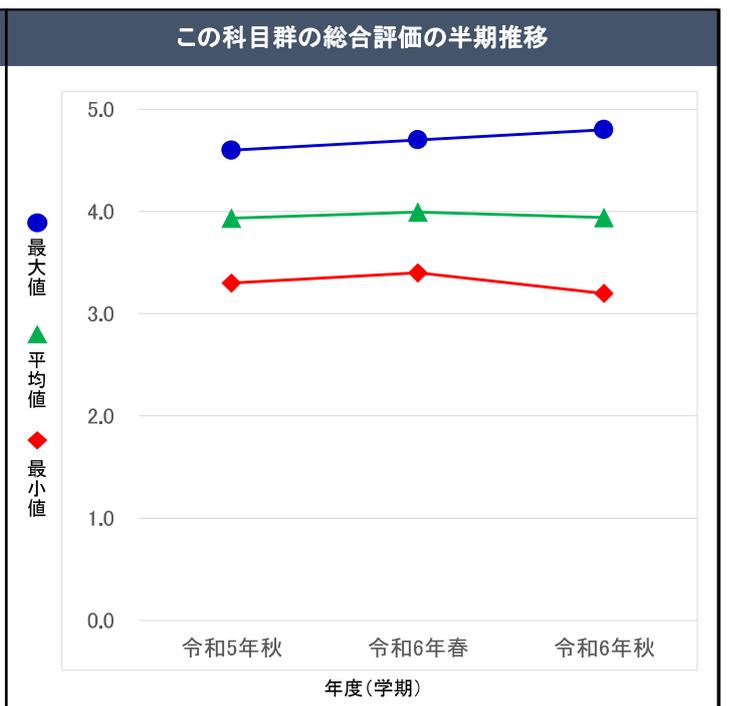
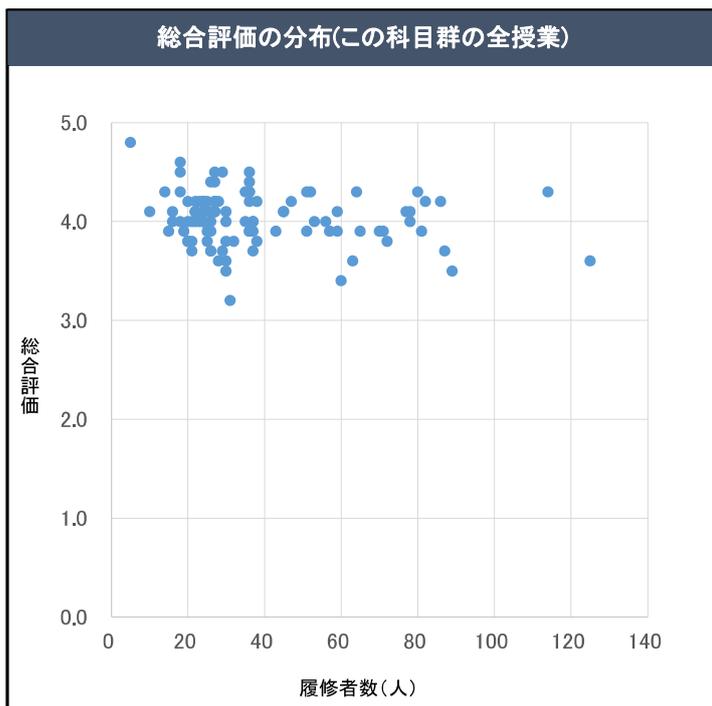
平均値 = (「5」回答数×5 + 「4」回答数×4 + 「3」回答数×3 + 「2」回答数×2 + 「1」回答数×1) / 回答数(小数点第2位を四捨五入)



5 : 4時間以上    4 : 3時間～4時間未満    3 : 2時間～3時間未満    2 : 1時間～2時間未満    1 : 1時間未満



5 : とてもそう思う    4 : そう思う    3 : どちらともいえない    2 : そう思わない    1 : 全くそう思わない



US科目 人文科学科目群

履修者数：2,566名

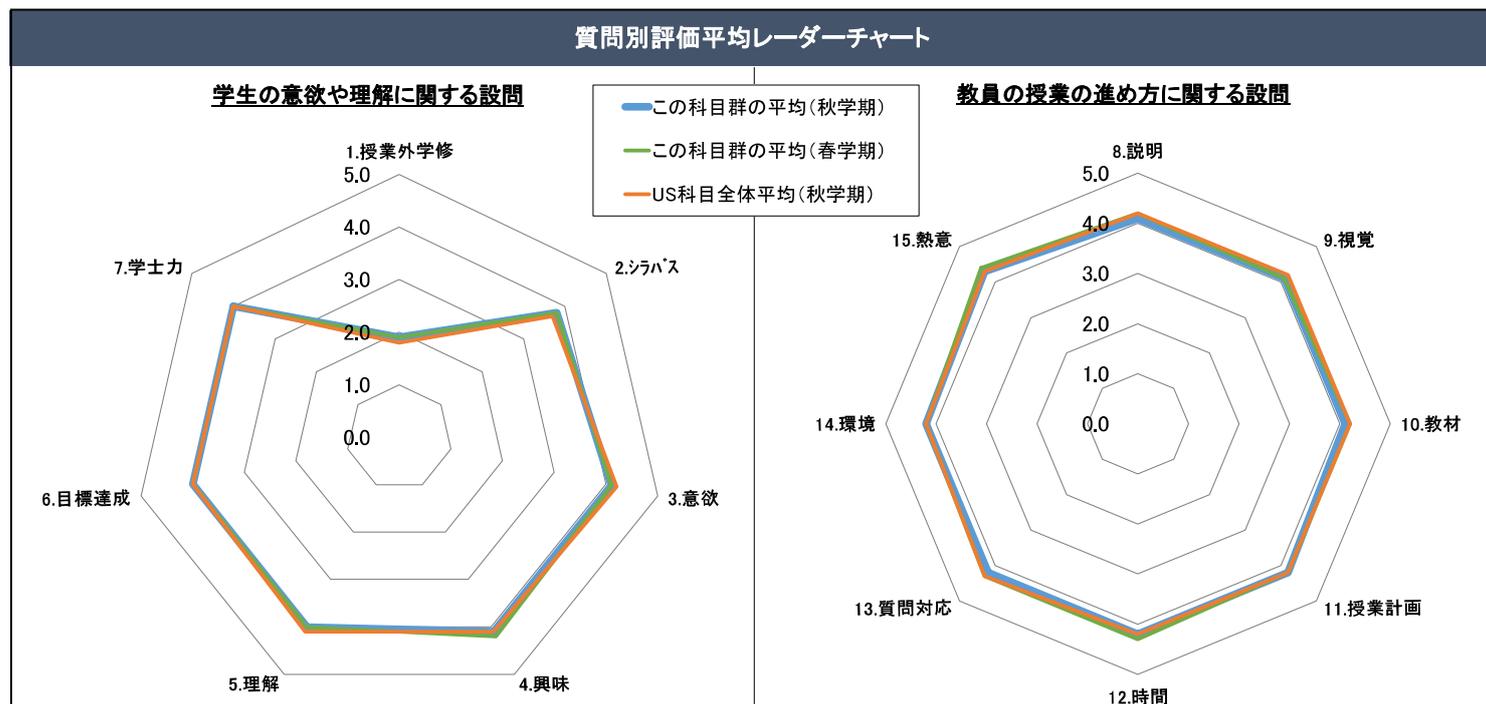
回答者数：839名

回答率：32.7%

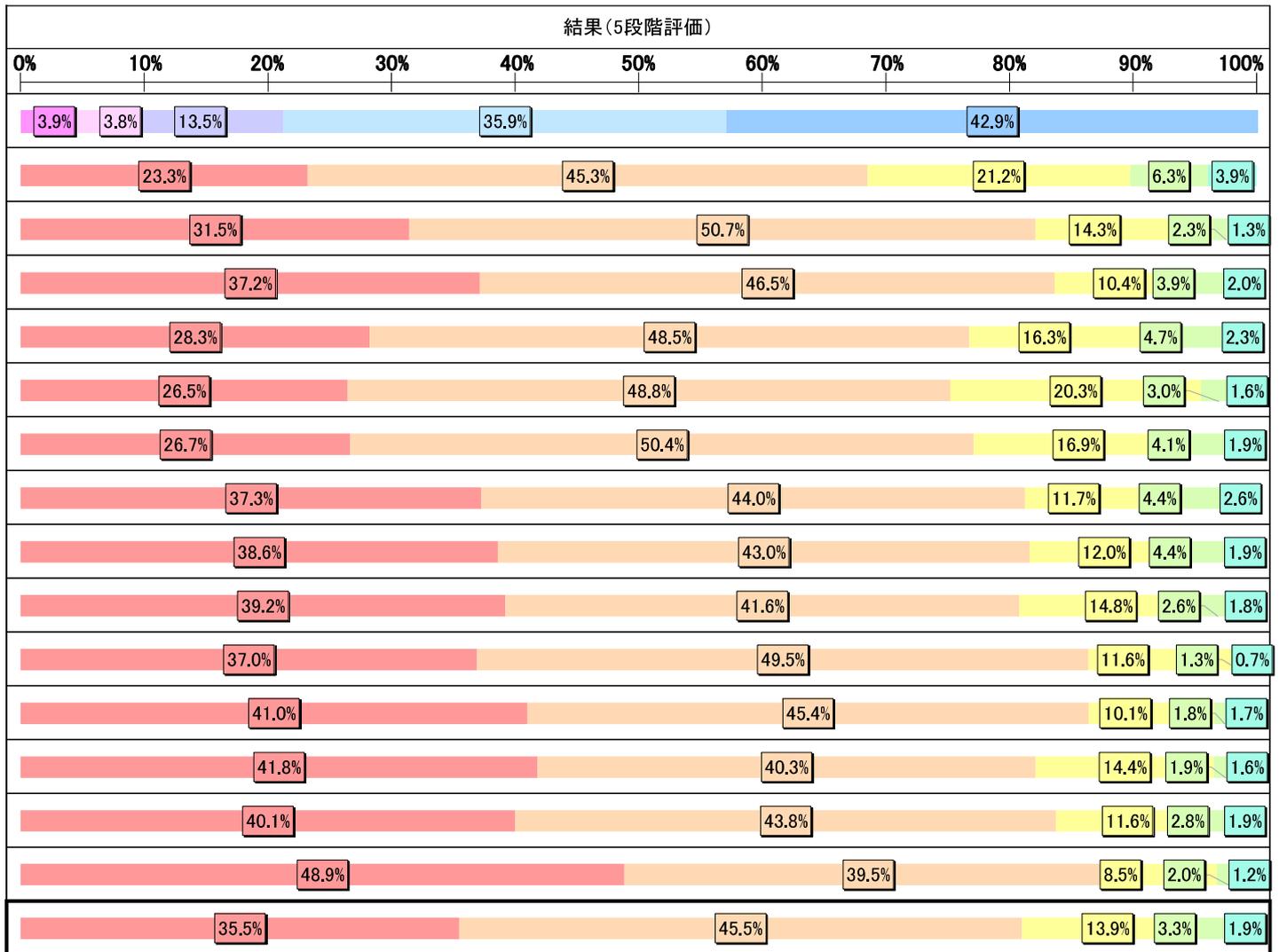
設問			科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修 授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	1.9	1.8
	2	シラバス 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.8	3.7
	3	意欲 授業に意欲的に取り組みましたか	4.1	4.2
	4	興味 授業の内容に興味は持てましたか	4.1	4.1
	5	理解 授業の内容を十分に理解できましたか	4.0	4.1
	6	目標達成 シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.0	4.0
	7	学士力 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.0	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明 話し方や説明は分かりやすかったですか	4.1	4.2
	9	視覚 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.1	4.2
	10	教材 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.1	4.2
	11	授業計画 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.2	4.2
	12	時間 授業時間を有効に使っていましたか	4.2	4.2
	13	質問対応 質問に適切に対応してくれましたか	4.2	4.3
	14	環境 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.2	4.2
	15	熱意 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.3	4.3
総合評価			4.0	4.0

平均値 = (「5」回答数×5 + 「4」回答数×4 + 「3」回答数×3 + 「2」回答数×2 + 「1」回答数×1) / 回答数(小数点第2位を四捨五入)

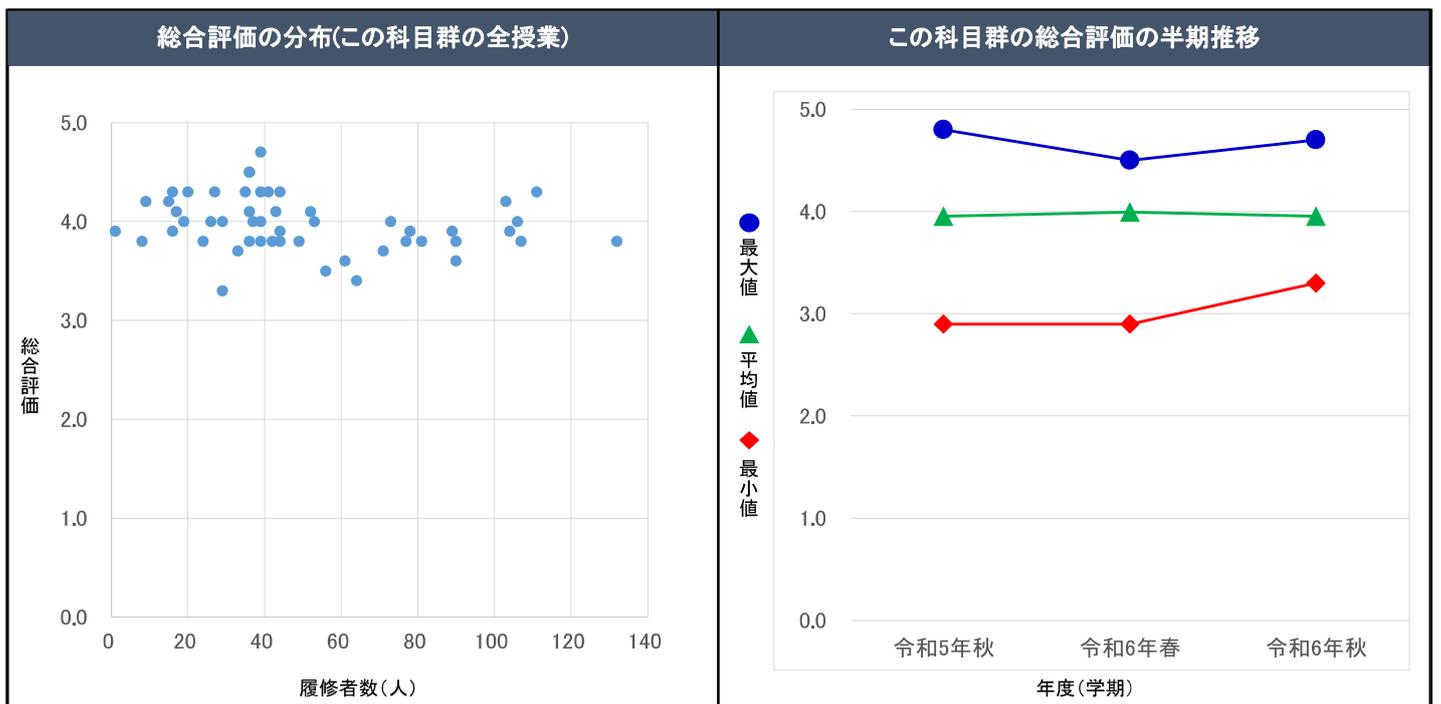
質問別評価平均レーダーチャート



5 : 4時間以上    4 : 3時間～4時間未満    3 : 2時間～3時間未満    2 : 1時間～2時間未満    1 : 1時間未満



5 : とてもそう思う    4 : そう思う    3 : どちらともいえない    2 : そう思わない    1 : 全くそう思わない



US科目 社会科学科目群

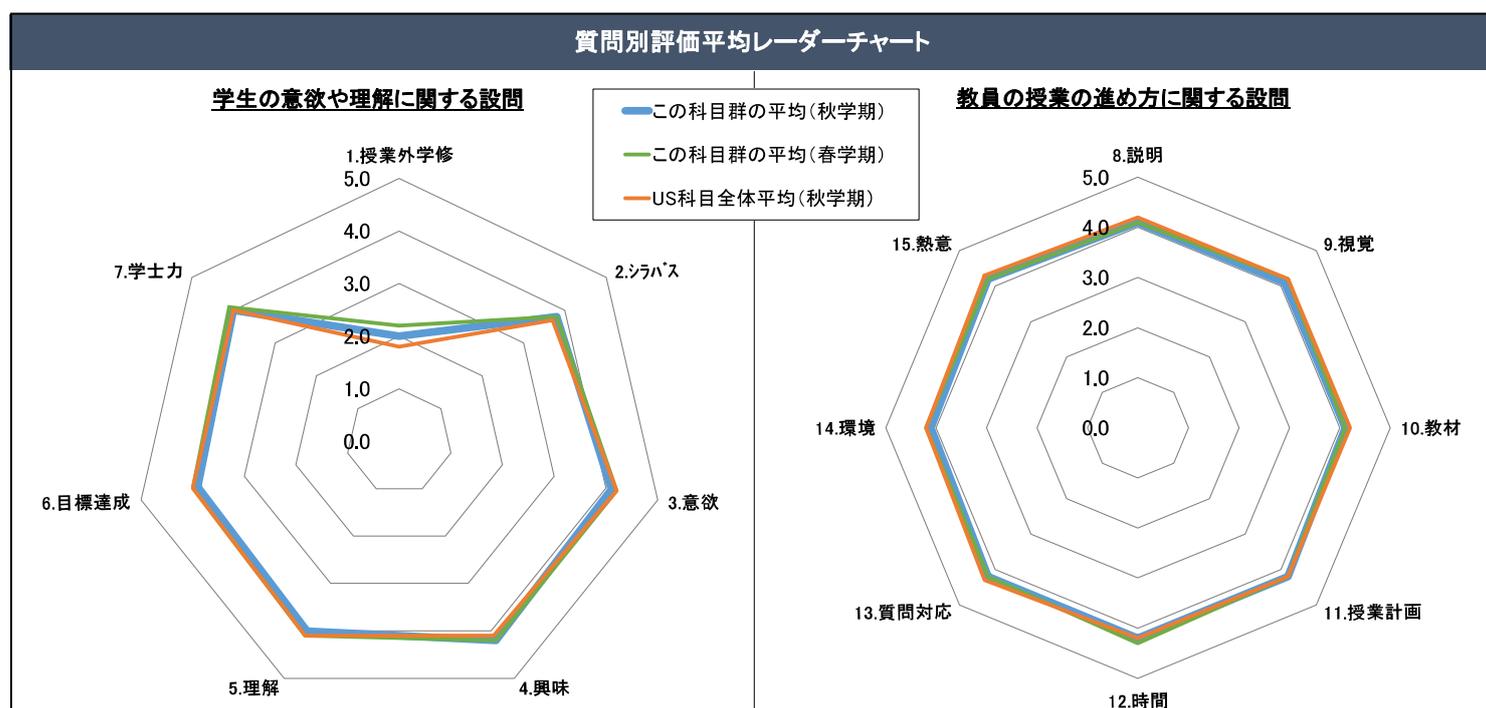
履修者数：1,958名

回答者数：696名

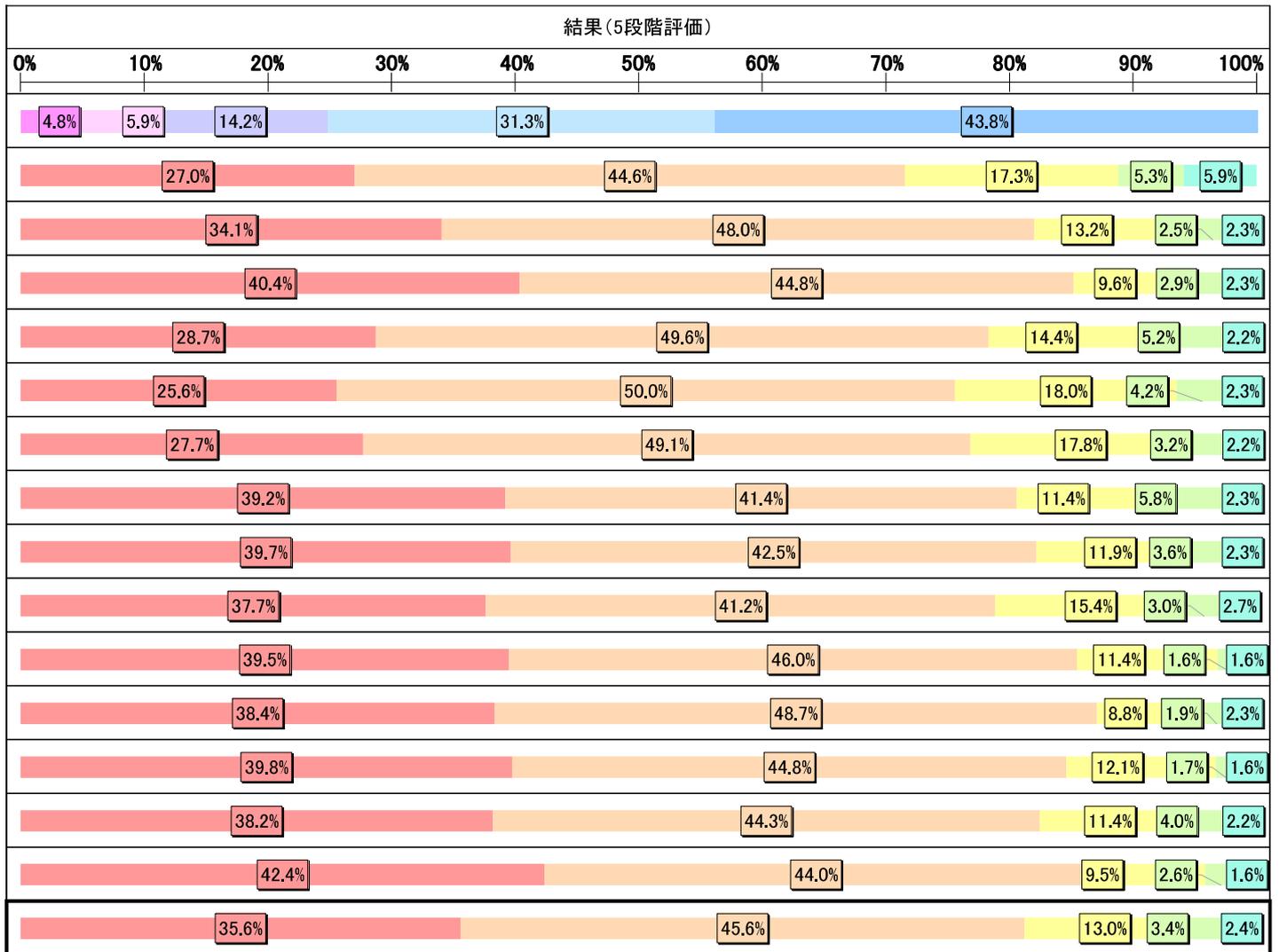
回答率：35.5%

設問			科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修 授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	2.0	1.8
	2	シラバス 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.8	3.7
	3	意欲 授業に意欲的に取り組みましたか	4.1	4.2
	4	興味 授業の内容に興味は持てましたか	4.2	4.1
	5	理解 授業の内容を十分に理解できましたか	4.0	4.1
	6	目標達成 シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.9	4.0
	7	学士力 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.0	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明 話し方や説明は分かりやすかったですか	4.1	4.2
	9	視覚 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.1	4.2
	10	教材 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.1	4.2
	11	授業計画 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.2	4.2
	12	時間 授業時間を有効に使っていましたか	4.2	4.2
	13	質問対応 質問に適切に対応してくれましたか	4.2	4.3
	14	環境 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.1	4.2
	15	熱意 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.2	4.3
総合評価			3.9	4.0

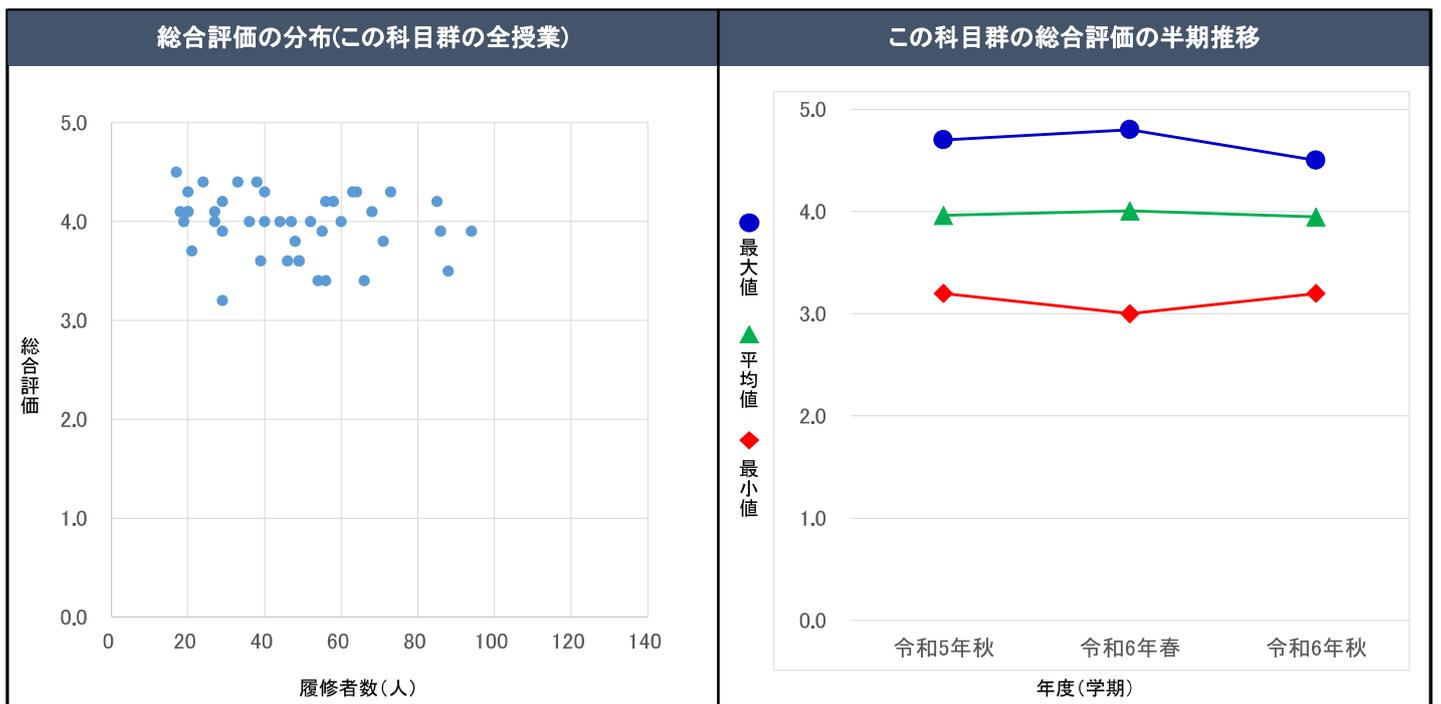
平均値 = (「5」回答数×5 + 「4」回答数×4 + 「3」回答数×3 + 「2」回答数×2 + 「1」回答数×1) / 回答数(小数点第2位を四捨五入)



5 : 4時間以上    4 : 3時間～4時間未満    3 : 2時間～3時間未満    2 : 1時間～2時間未満    1 : 1時間未満



5 : とてもそう思う    4 : そう思う    3 : どちらともいえない    2 : そう思わない    1 : 全くそう思わない



US科目 自然科学科目群

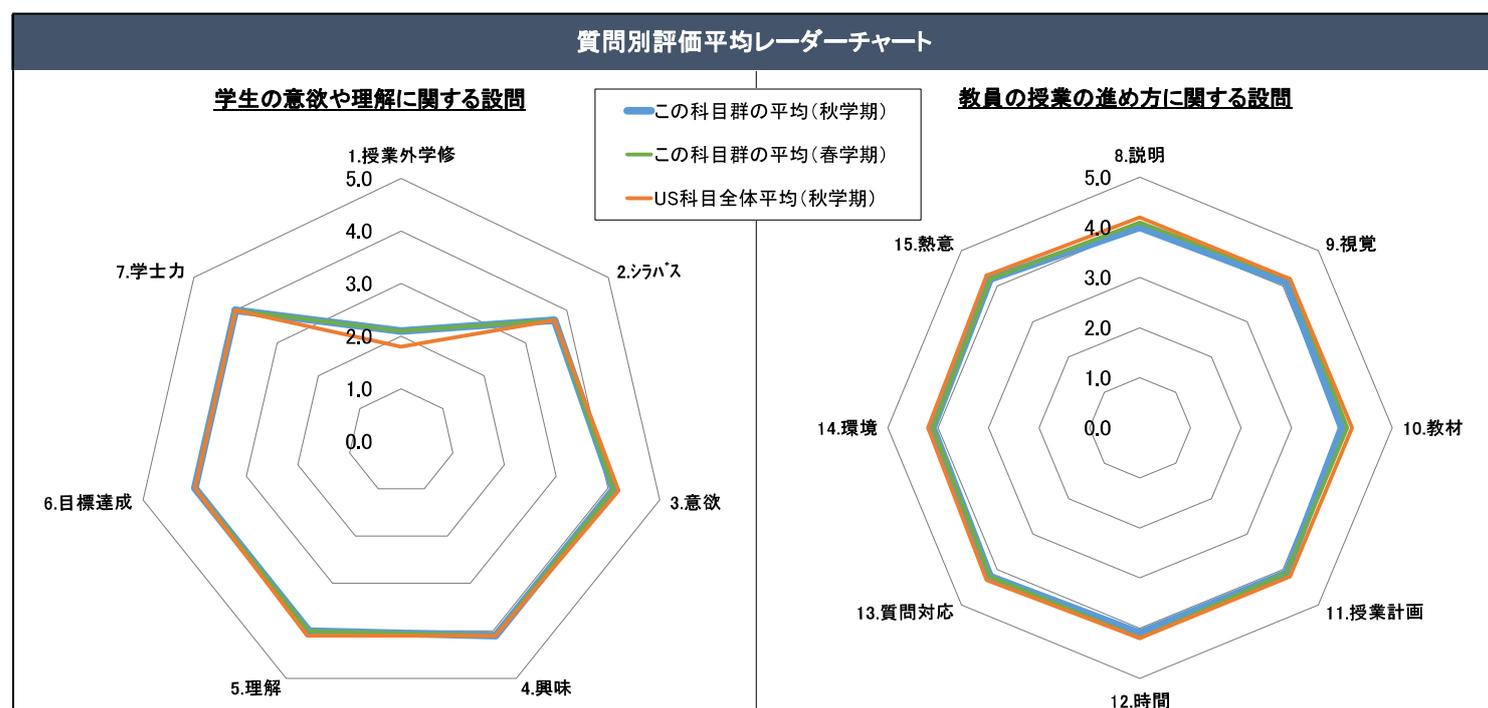
履修者数：1,782名

回答者数：806名

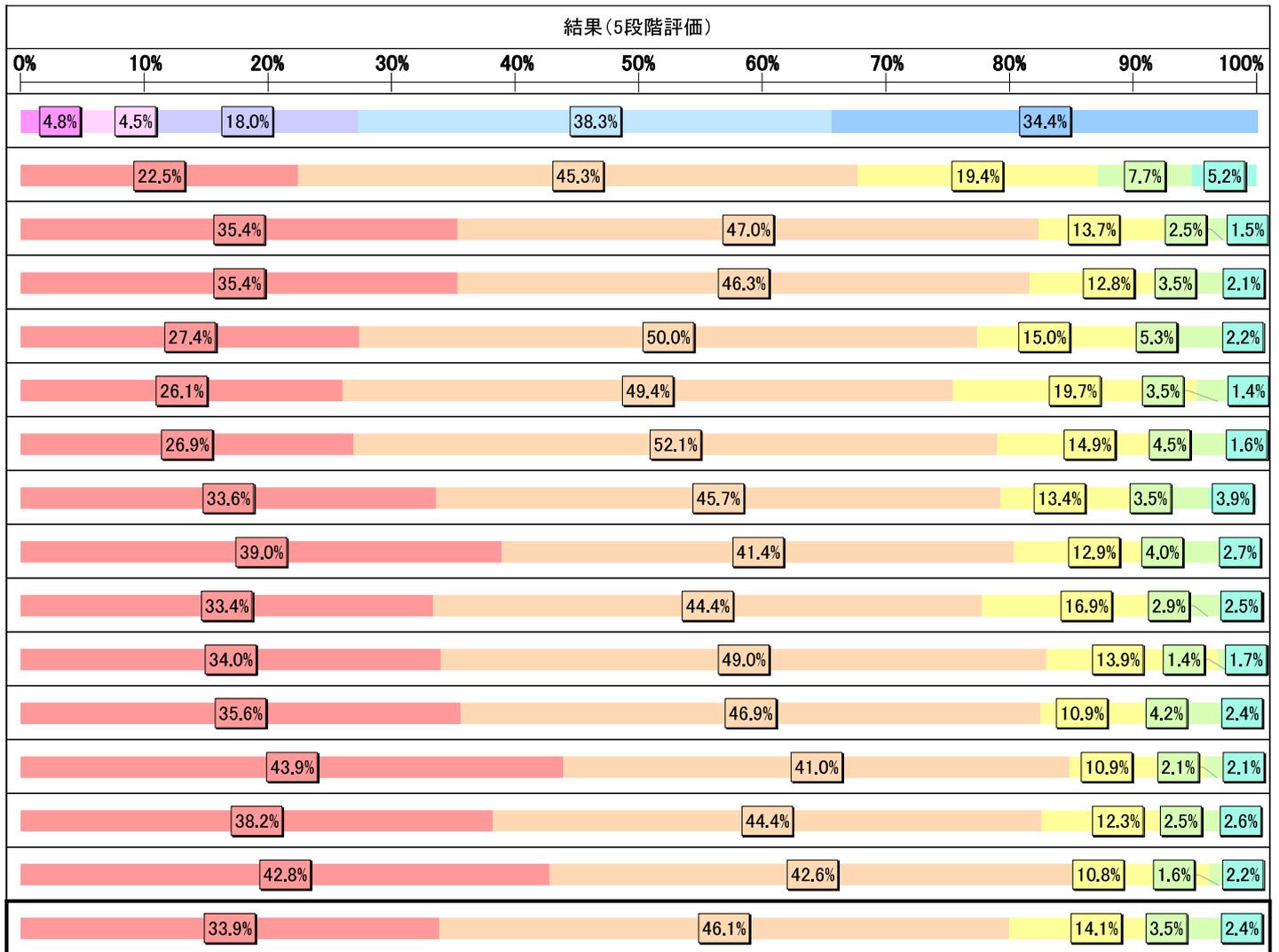
回答率：45.2%

設問			科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修 授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	2.1	1.8
	2	シラバス 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.7	3.7
	3	意欲 授業に意欲的に取り組みましたか	4.1	4.2
	4	興味 授業の内容に興味は持てましたか	4.1	4.1
	5	理解 授業の内容を十分に理解できましたか	4.0	4.1
	6	目標達成 シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.0	4.0
	7	学士力 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.0	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明 話し方や説明は分かりやすかったですか	4.0	4.2
	9	視覚 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.1	4.2
	10	教材 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.0	4.2
	11	授業計画 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.1	4.2
	12	時間 授業時間を有効に使っていましたか	4.1	4.2
	13	質問対応 質問に適切に対応してくれましたか	4.2	4.3
	14	環境 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.1	4.2
	15	熱意 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.2	4.3
総合評価			3.9	4.0

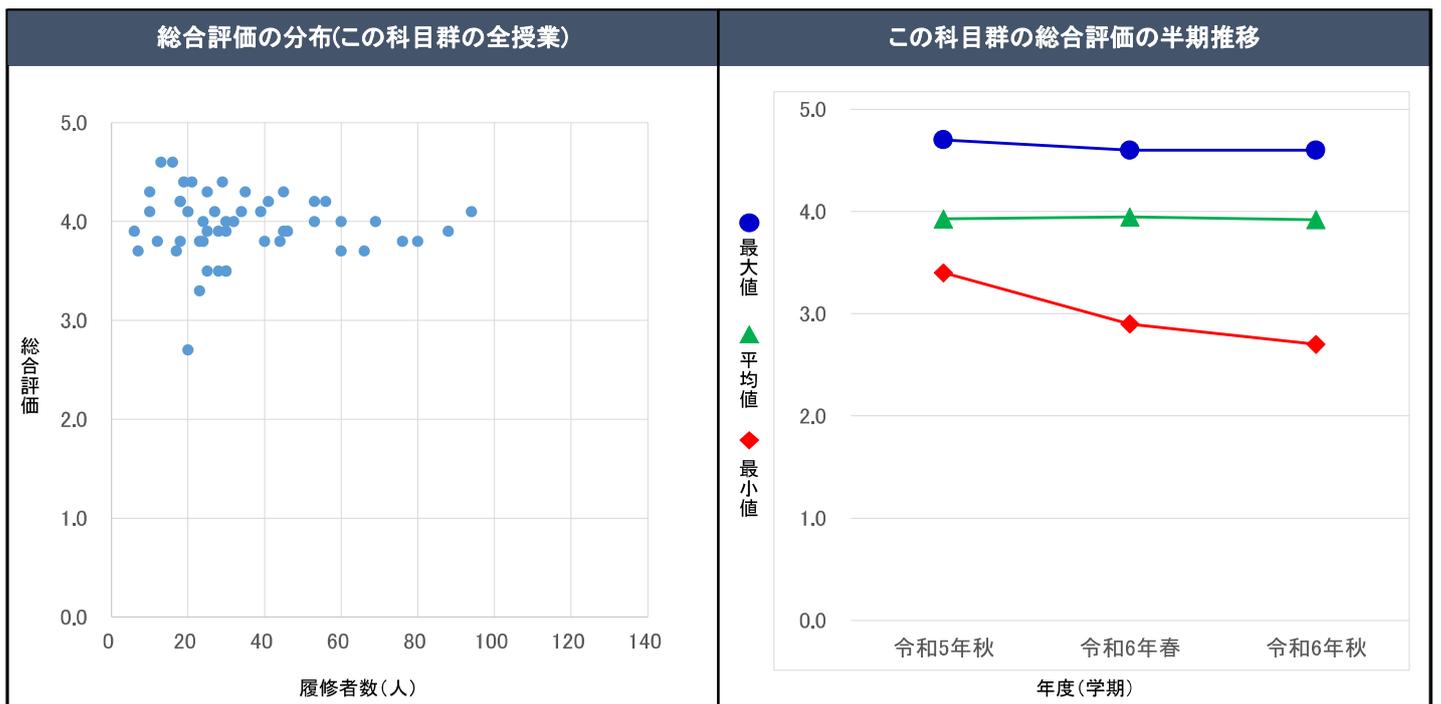
平均値 = (「5」回答数×5 + 「4」回答数×4 + 「3」回答数×3 + 「2」回答数×2 + 「1」回答数×1) / 回答数(小数点第2位を四捨五入)



5 : 4時間以上    4 : 3時間～4時間未満    3 : 2時間～3時間未満    2 : 1時間～2時間未満    1 : 1時間未満



5 : とてもそう思う    4 : そう思う    3 : どちらともいえない    2 : そう思わない    1 : 全くそう思わない



US科目 学際科目群

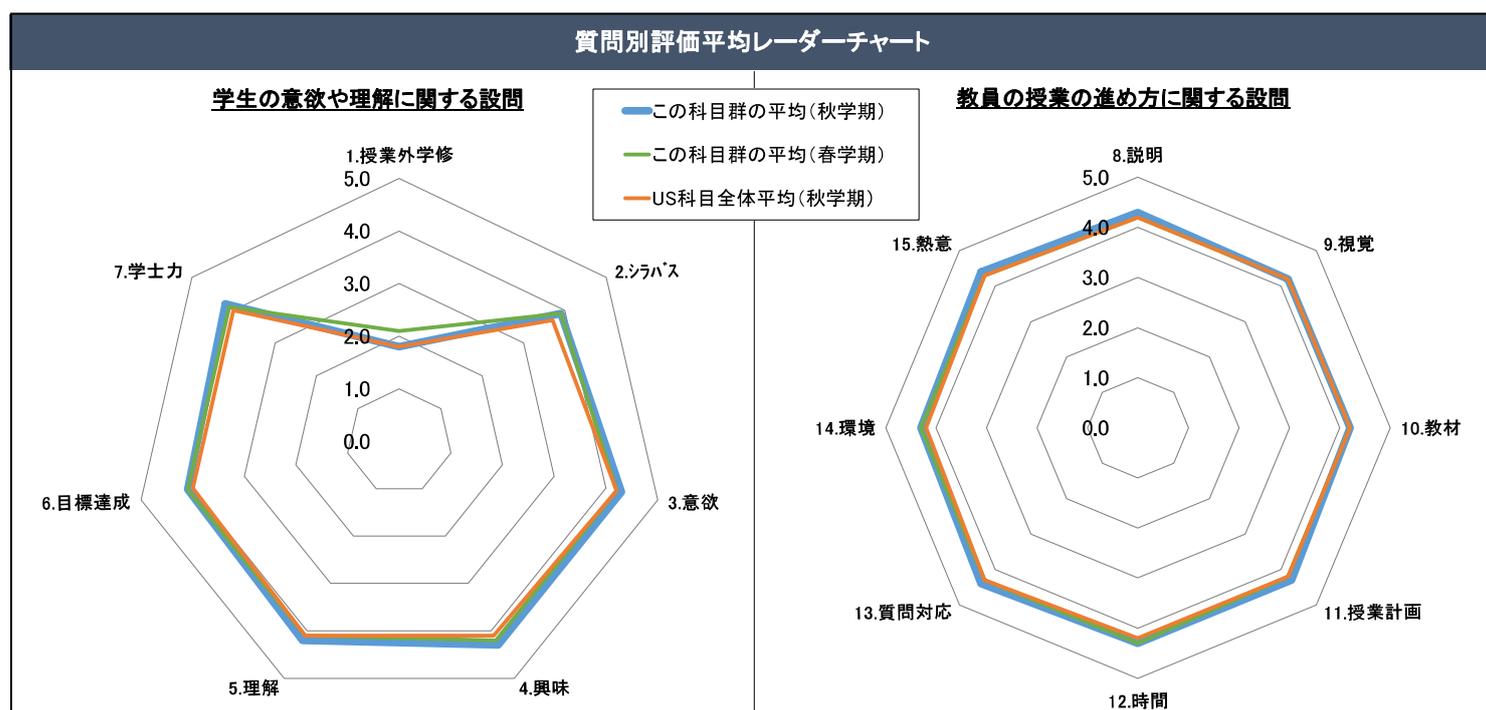
履修者数： 1,383 名

回答者数： 380 名

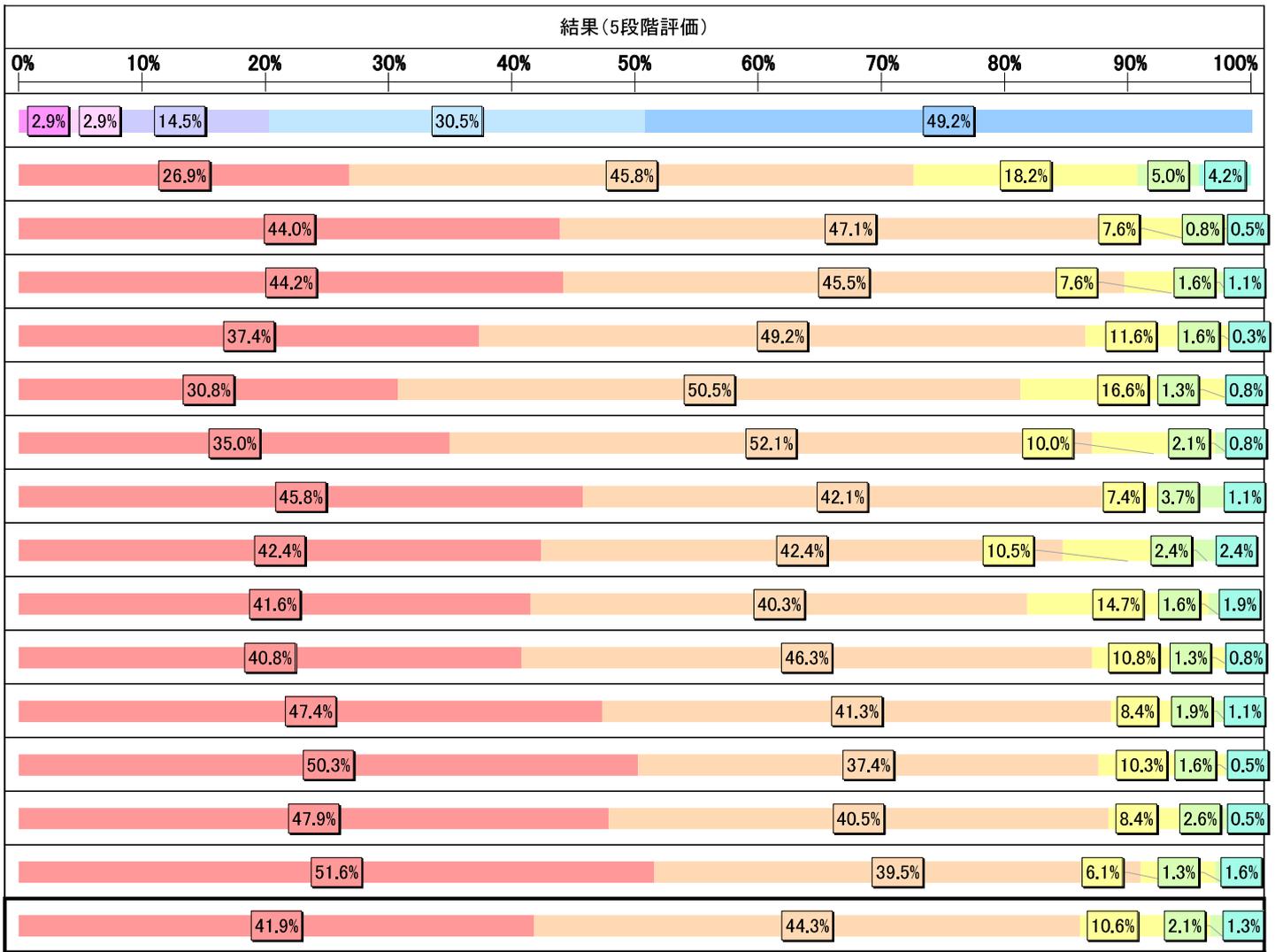
回答率： 27.5 %

設問			科目群平均	US科目全体平均	
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	1.8	1.8
	2	シラバス	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.9	3.7
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.3	4.2
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.3	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.2	4.1
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.1	4.0
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.2	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.3	4.2
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.2	4.2
	10	教材	教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.2	4.2
	11	授業計画	授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.3	4.2
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.3	4.2
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.4	4.3
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.3	4.2
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.4	4.3
総合評価			4.1	4.0	

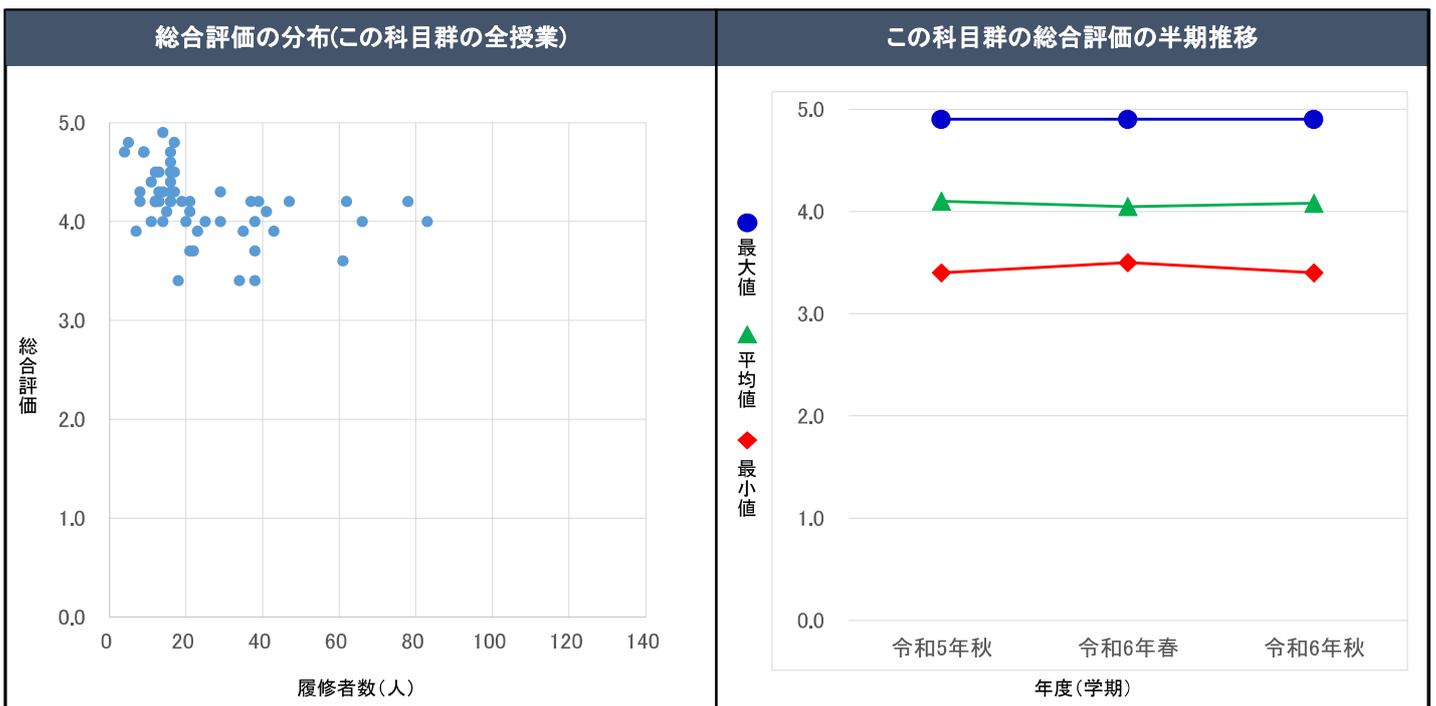
平均値 = (「5」回答数×5 + 「4」回答数×4 + 「3」回答数×3 + 「2」回答数×2 + 「1」回答数×1) / 回答数(小数点第2位を四捨五入)



5 : 4時間以上    4 : 3時間～4時間未満    3 : 2時間～3時間未満    2 : 1時間～2時間未満    1 : 1時間未満



5 : とてもそう思う    4 : そう思う    3 : どちらともいえない    2 : そう思わない    1 : 全くそう思わない



US科目 言語表現科目群

履修者数：3,093名

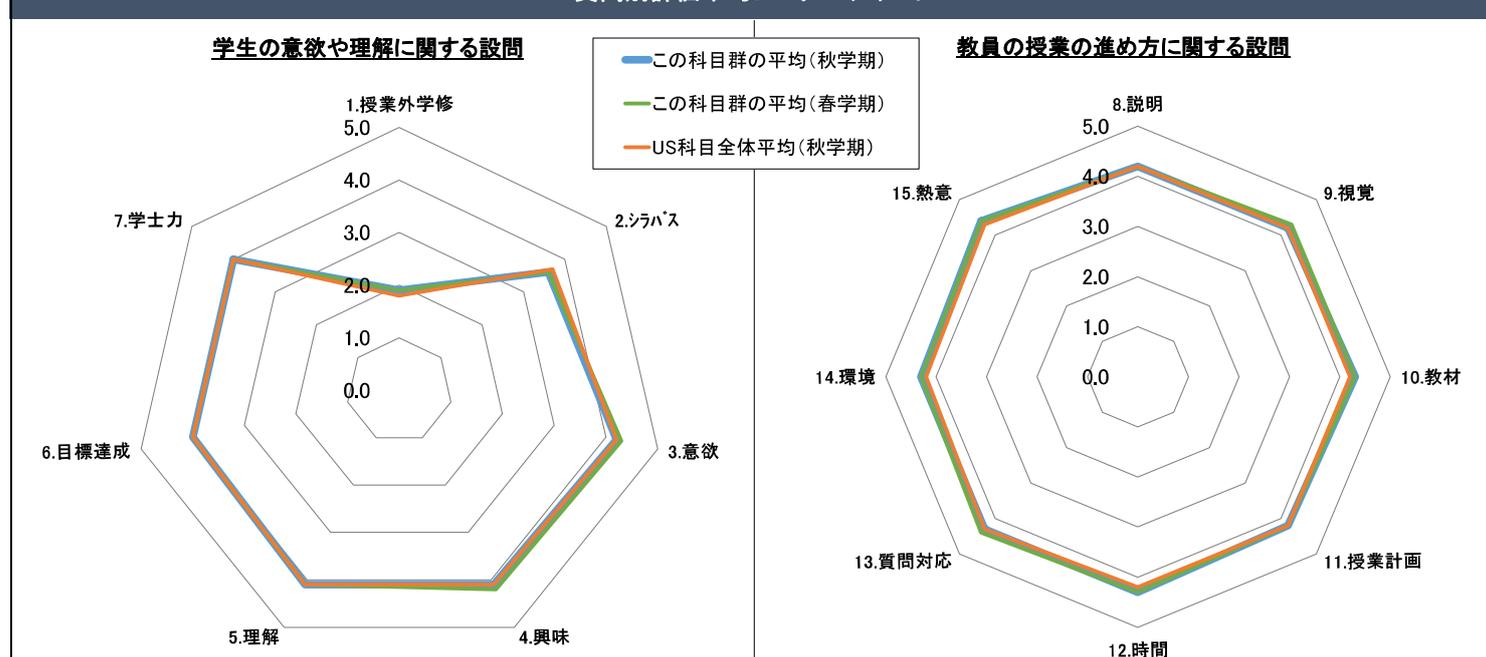
回答者数：1,724名

回答率：55.7%

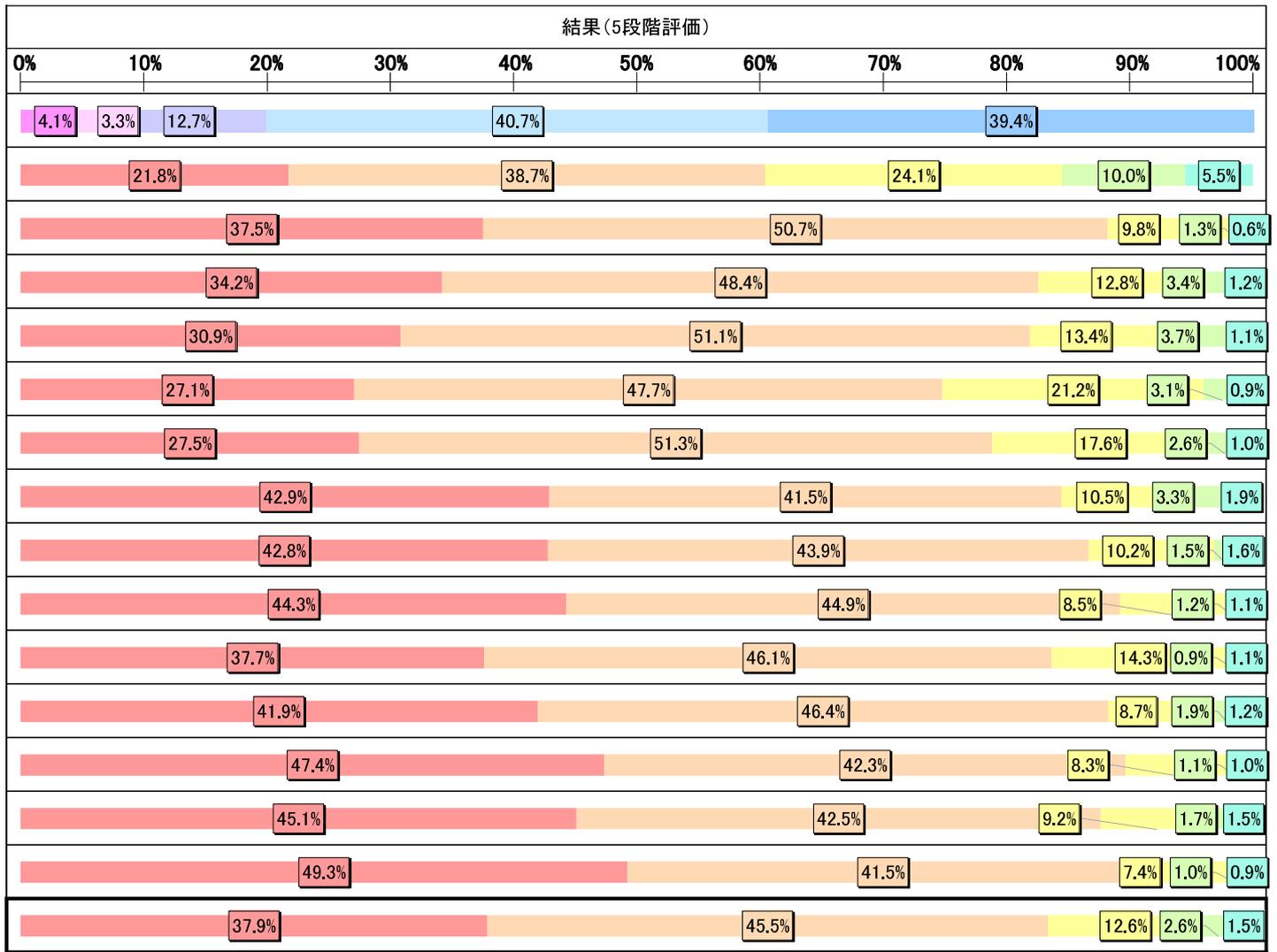
設問			科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修 授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	1.9	1.8
	2	シラバス 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.6	3.7
	3	意欲 授業に意欲的に取り組みましたか	4.2	4.2
	4	興味 授業の内容に興味は持てましたか	4.1	4.1
	5	理解 授業の内容を十分に理解できましたか	4.1	4.1
	6	目標達成 シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.0	4.0
	7	学士力 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.0	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明 話し方や説明は分かりやすかったですか	4.2	4.2
	9	視覚 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.2	4.2
	10	教材 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.3	4.2
	11	授業計画 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.2	4.2
	12	時間 授業時間を有効に使っていましたか	4.3	4.2
	13	質問対応 質問に適切に対応してくれましたか	4.3	4.3
	14	環境 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.3	4.2
	15	熱意 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.4	4.3
総合評価			4.0	4.0

平均値 = (「5」回答数×5 + 「4」回答数×4 + 「3」回答数×3 + 「2」回答数×2 + 「1」回答数×1) / 回答数(小数点第2位を四捨五入)

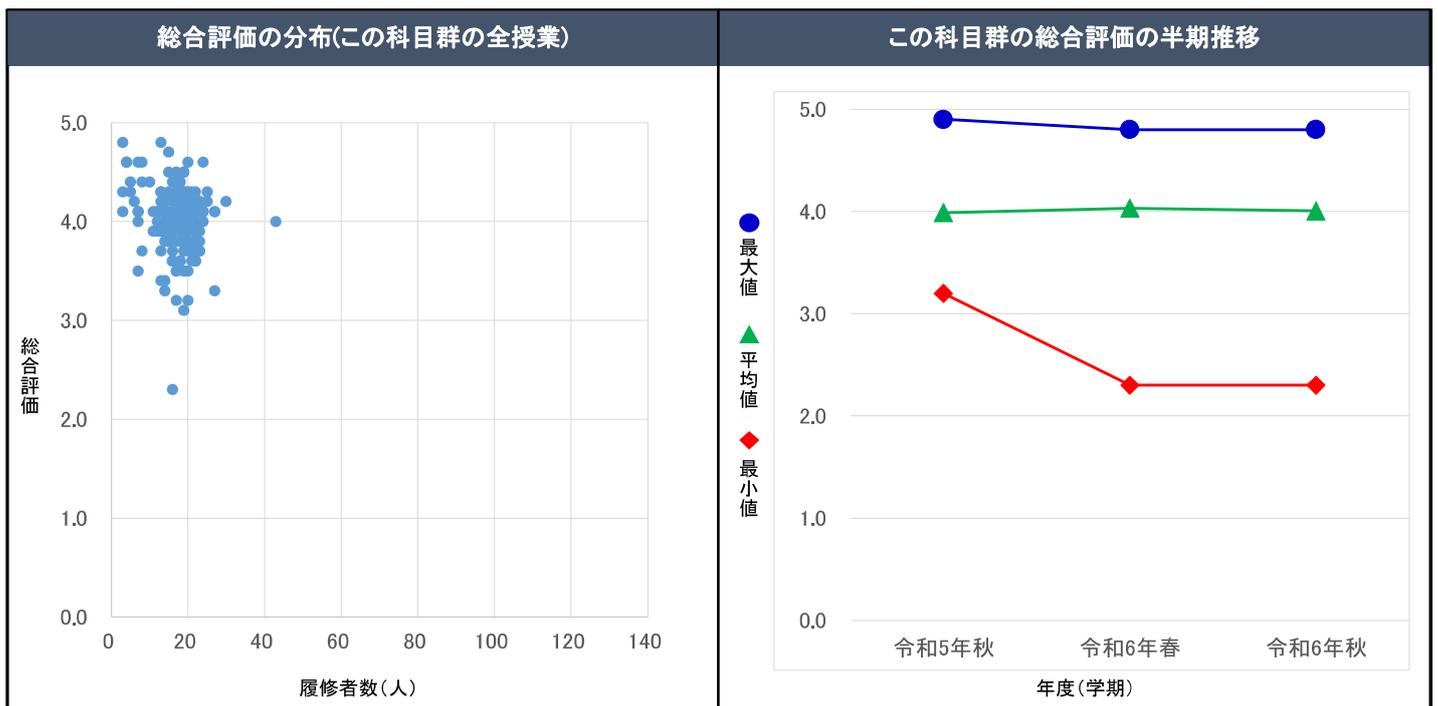
質問別評価平均レーダーチャート



5 : 4時間以上    4 : 3時間～4時間未満    3 : 2時間～3時間未満    2 : 1時間～2時間未満    1 : 1時間未満



5 : とてもそう思う    4 : そう思う    3 : どちらともいえない    2 : そう思わない    1 : 全くそう思わない



US科目 教職関連科目群

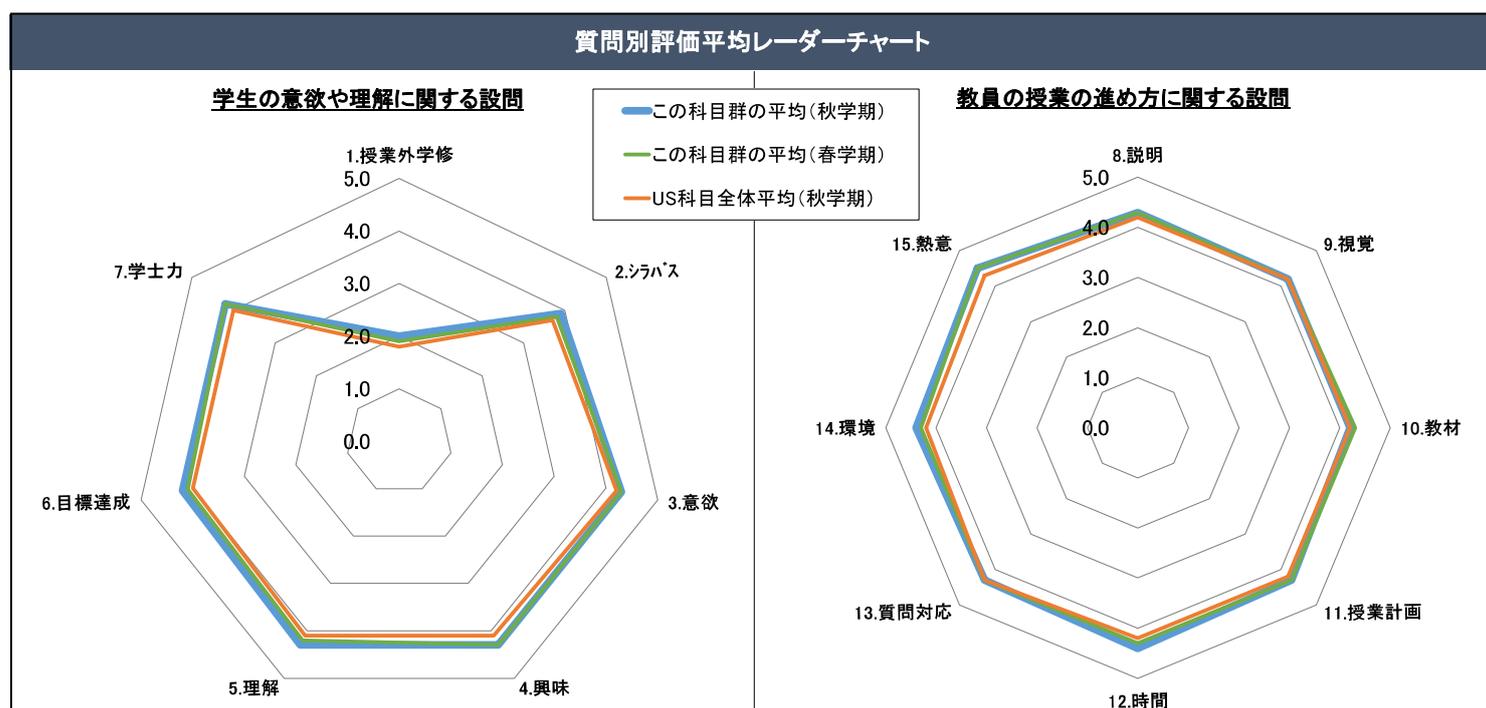
履修者数：2,270名

回答者数：831名

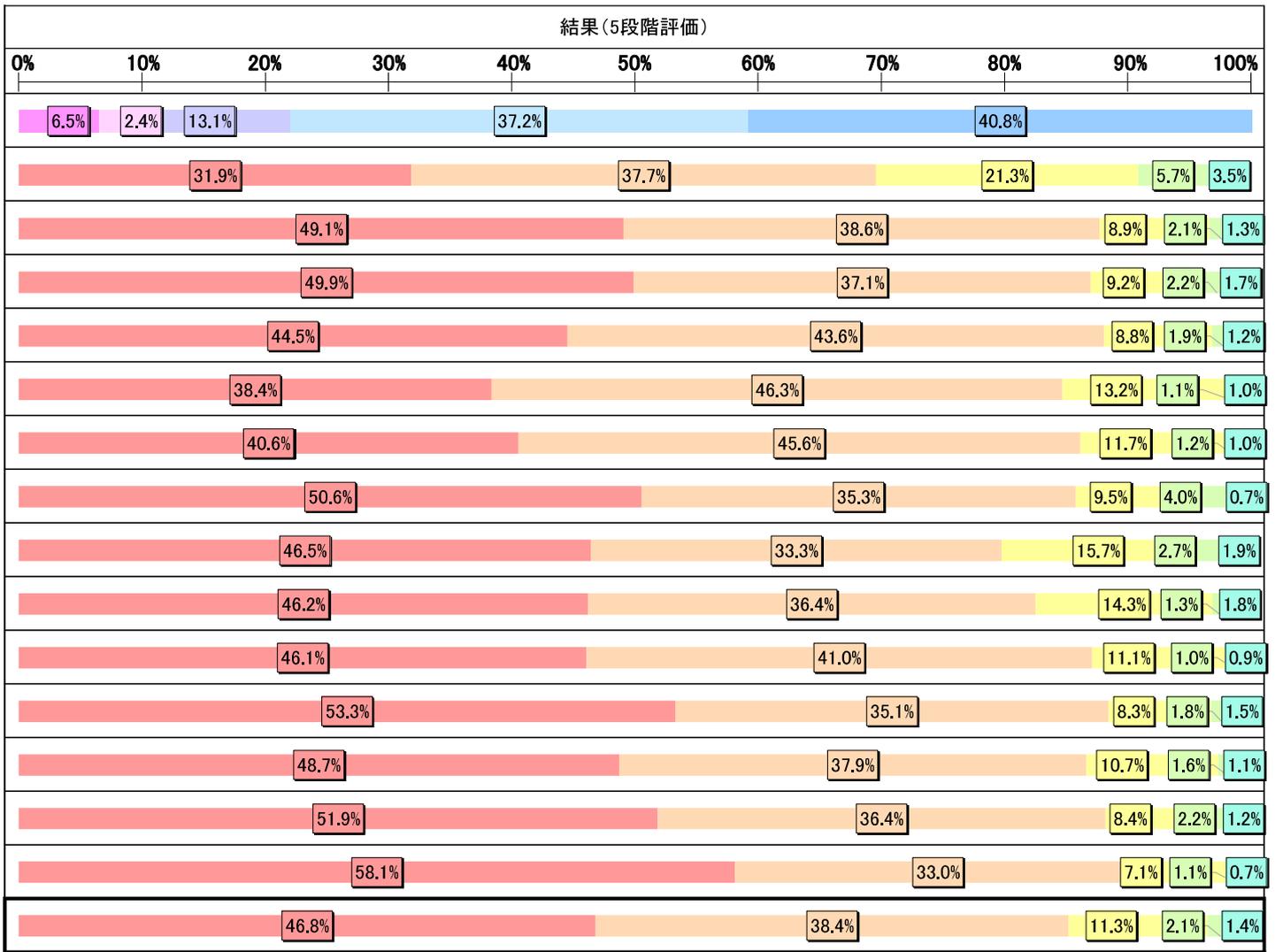
回答率：36.6%

設問			科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修 授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	2.0	1.8
	2	シラバス 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.9	3.7
	3	意欲 授業に意欲的に取り組みましたか	4.3	4.2
	4	興味 授業の内容に興味は持てましたか	4.3	4.1
	5	理解 授業の内容を十分に理解できましたか	4.3	4.1
	6	目標達成 シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.2	4.0
	7	学士力 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.2	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明 話し方や説明は分かりやすかったですか	4.3	4.2
	9	視覚 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.2	4.2
	10	教材 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.2	4.2
	11	授業計画 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.3	4.2
	12	時間 授業時間を有効に使っていましたか	4.4	4.2
	13	質問対応 質問に適切に対応してくれましたか	4.3	4.3
	14	環境 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.4	4.2
	15	熱意 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.5	4.3
総合評価			4.1	4.0

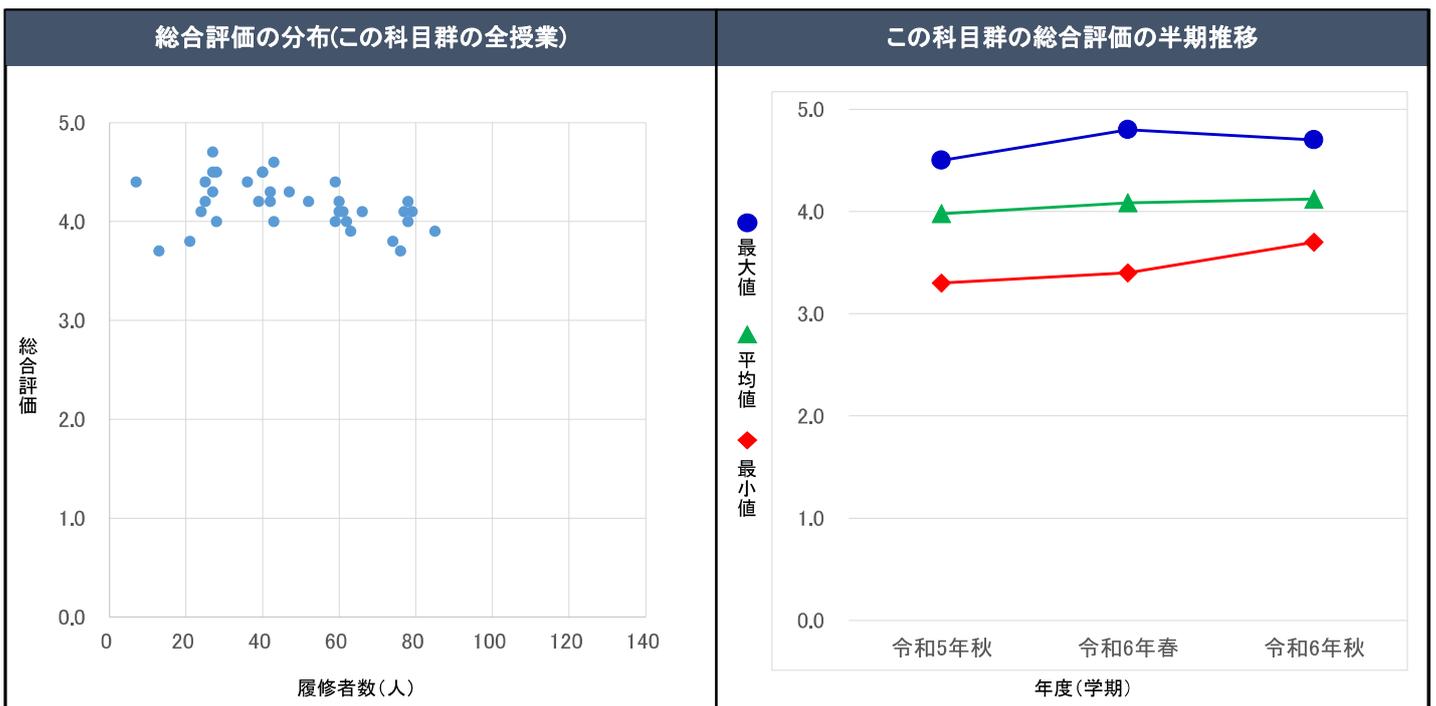
平均値 = (「5」回答数×5 + 「4」回答数×4 + 「3」回答数×3 + 「2」回答数×2 + 「1」回答数×1) / 回答数(小数点第2位を四捨五入)



5 : 4時間以上    4 : 3時間～4時間未満    3 : 2時間～3時間未満    2 : 1時間～2時間未満    1 : 1時間未満



5 : とてもそう思う    4 : そう思う    3 : どちらともいえない    2 : そう思わない    1 : 全くそう思わない



US科目 資格関連科目群

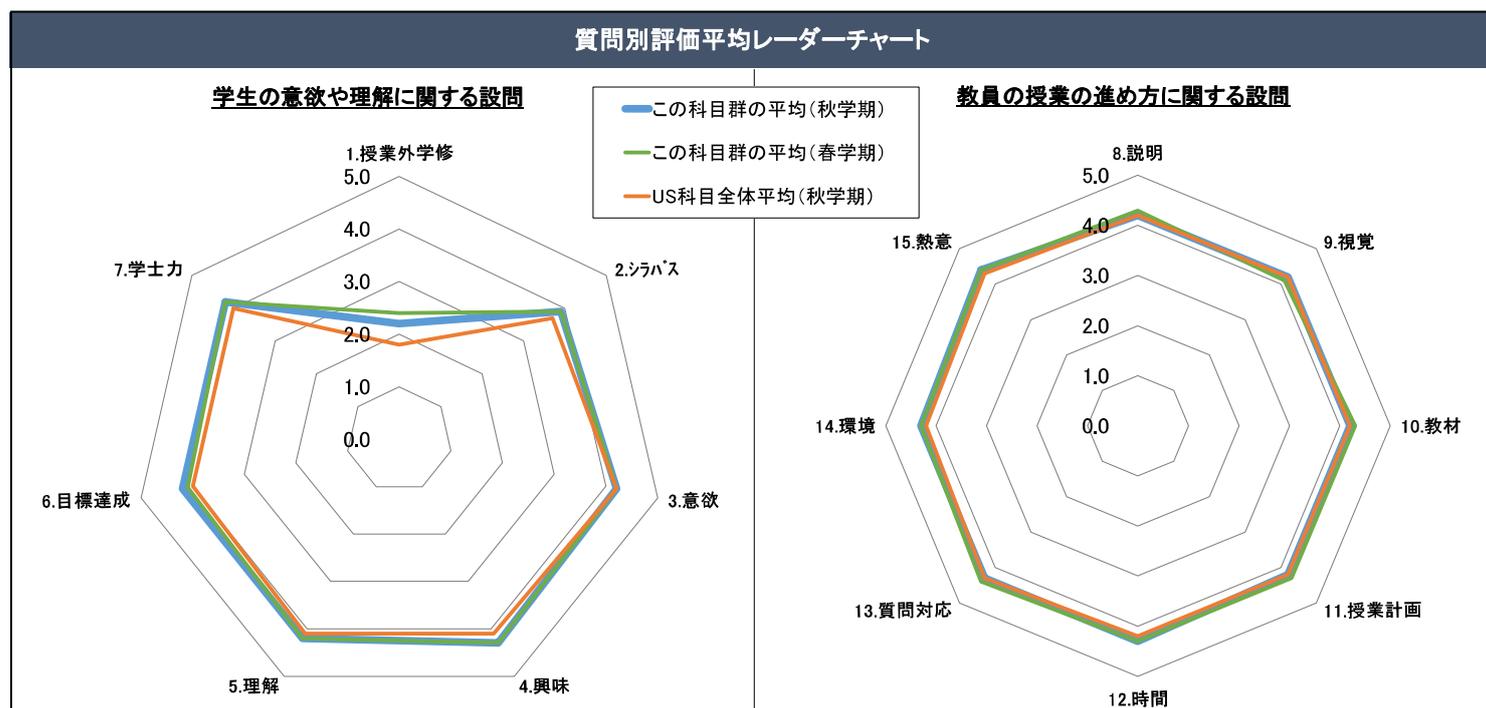
履修者数： 463 名

回答者数： 114 名

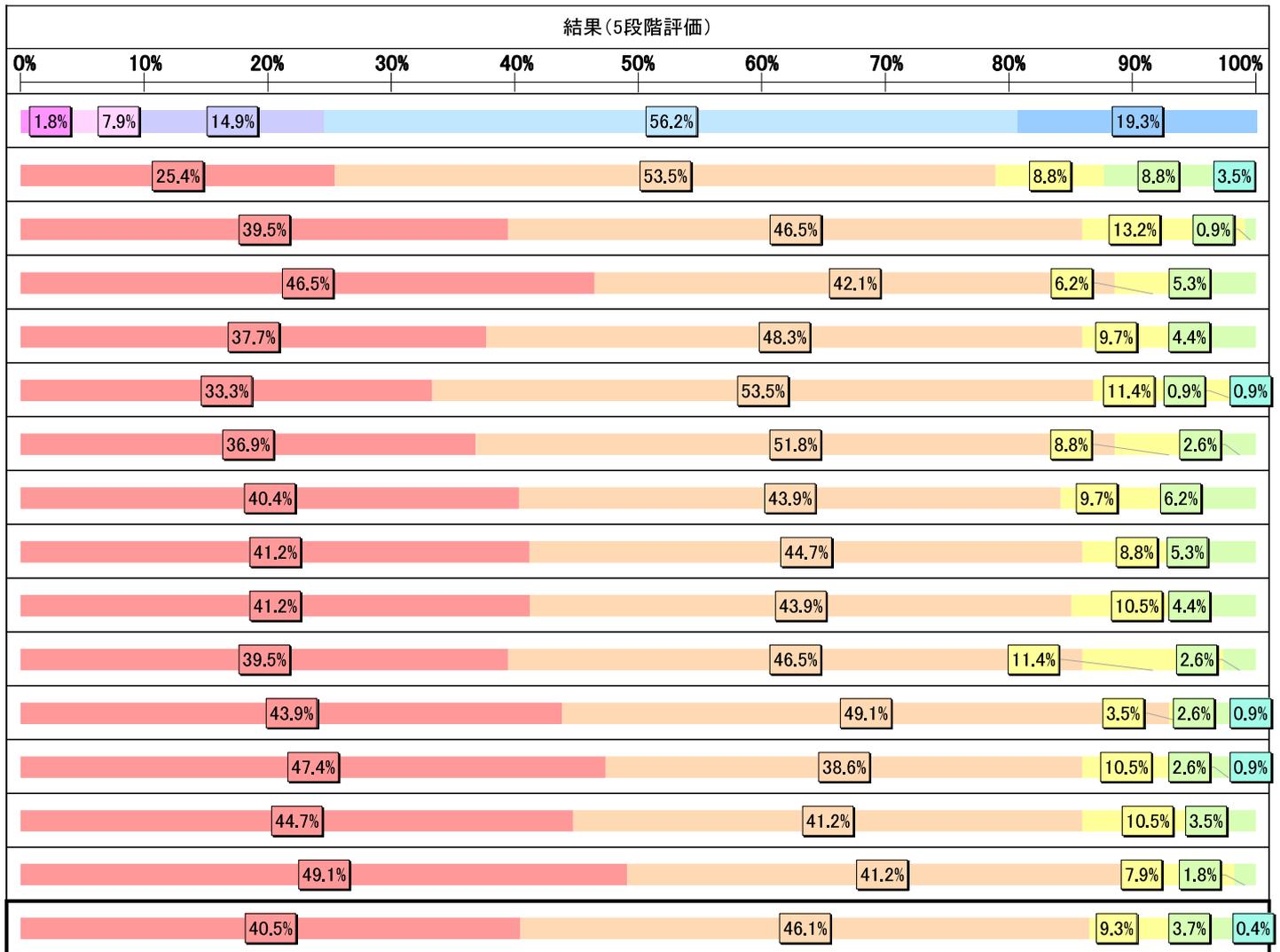
回答率： 24.6 %

設問			科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修 授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	2.2	1.8
	2	シラバス 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.9	3.7
	3	意欲 授業に意欲的に取り組みましたか	4.2	4.2
	4	興味 授業の内容に興味は持てましたか	4.3	4.1
	5	理解 授業の内容を十分に理解できましたか	4.2	4.1
	6	目標達成 シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.2	4.0
	7	学士力 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.2	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明 話し方や説明は分かりやすかったですか	4.2	4.2
	9	視覚 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.2	4.2
	10	教材 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.2	4.2
	11	授業計画 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.2	4.2
	12	時間 授業時間を有効に使っていましたか	4.3	4.2
	13	質問対応 質問に適切に対応してくれましたか	4.3	4.3
	14	環境 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.3	4.2
	15	熱意 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.4	4.3
総合評価			4.1	4.0

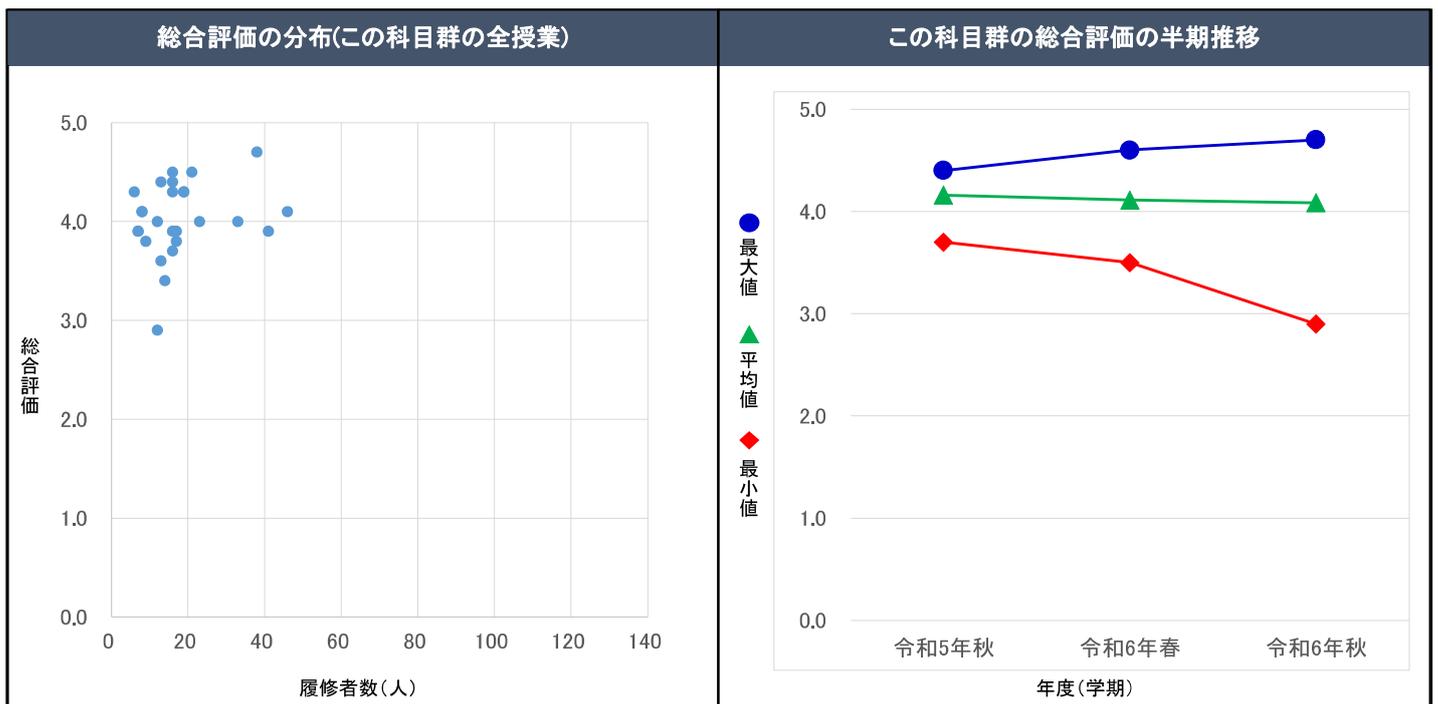
平均値 = (「5」回答数×5 + 「4」回答数×4 + 「3」回答数×3 + 「2」回答数×2 + 「1」回答数×1) / 回答数(小数点第2位を四捨五入)



5 : 4時間以上    4 : 3時間～4時間未満    3 : 2時間～3時間未満    2 : 1時間～2時間未満    1 : 1時間未満



5 : とてもそう思う    4 : そう思う    3 : どちらともいえない    2 : そう思わない    1 : 全くそう思わない



授業アンケート一覧 > 授業アンケート結果参照

戻る

期間：2025/02/20（木）09:00～2025/02/26（水）23:59

対象者数(延べ数)：352人 回答者数(延べ数)：80人 回答率 22.7%

### 2024\_授業アンケート【ウィンターセッションI期】

このアンケート調査は、学生の皆さんの視点から授業の状況を確認し、授業の改善に結びつけることを目的として実施するものです。入力にあたっては、この授業を振り返り、責任ある回答をしてください。なお、このアンケートの回答は匿名化して処理するため、教員が回答から個人を特定することはできません。また、回答内容は授業改善のみに活用し、成績評価等には一切影響しませんので、率直に回答してください。

#### あなたの意欲や理解について

1. 授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか（必須）		比率	人数
4時間以上		10.0%	8人
3時間～4時間未満		3.8%	3人
2時間～3時間未満		22.5%	18人
1時間～2時間未満		46.3%	37人
1時間未満		17.5%	14人
2. 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか（必須）		比率	人数
とてもそう思う		37.5%	30人
そう思う		42.5%	34人
どちらともいえない		12.5%	10人
そう思わない		5.0%	4人
全くそう思わない		2.5%	2人
3. 授業に意欲的に取り組みましたか（必須）		比率	人数
とてもそう思う		48.8%	39人
そう思う		41.3%	33人
どちらともいえない		8.8%	7人
そう思わない		1.3%	1人
全くそう思わない		0.0%	0人
4. 授業の内容に興味は持てましたか（必須）		比率	人数
とてもそう思う		56.3%	45人
そう思う		33.8%	27人
どちらともいえない		8.8%	7人
そう思わない		1.3%	1人
全くそう思わない		0.0%	0人
5. 授業の内容を十分に理解できましたか（必須）		比率	人数
とてもそう思う		37.5%	30人
そう思う		46.3%	37人
どちらともいえない		15.0%	12人
そう思わない		1.3%	1人
全くそう思わない		0.0%	0人
6. シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか（必須）		比率	人数
とてもそう思う		33.8%	27人
そう思う		48.8%	39人
どちらともいえない		15.0%	12人
そう思わない		2.5%	2人
全くそう思わない		0.0%	0人
7. 総合的にみてこの授業で学力がつかえましたか *各授業の学力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載（必須）		比率	人数
とてもそう思う		38.8%	31人
そう思う		46.3%	37人
どちらともいえない		15.0%	12人
そう思わない		0.0%	0人
全くそう思わない		0.0%	0人

## 教員の授業の進め方について

8. 話し方や説明は分かりやすかったですか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		48.8%	39人
そう思う		35.0%	28人
どちらともいえない		10.0%	8人
そう思わない		3.8%	3人
全くそう思わない		2.5%	2人
9. 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		47.5%	38人
そう思う		35.0%	28人
どちらともいえない		13.8%	11人
そう思わない		3.8%	3人
全くそう思わない		0.0%	0人
10. 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		47.5%	38人
そう思う		37.5%	30人
どちらともいえない		13.8%	11人
そう思わない		1.3%	1人
全くそう思わない		0.0%	0人
11. 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		46.3%	37人
そう思う		45.0%	36人
どちらともいえない		7.5%	6人
そう思わない		0.0%	0人
全くそう思わない		1.3%	1人
12. 授業時間を有効に使っていましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		46.3%	37人
そう思う		37.5%	30人
どちらともいえない		11.3%	9人
そう思わない		5.0%	4人
全くそう思わない		0.0%	0人
13. 質問に適切に対応してくれましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		51.3%	41人
そう思う		33.8%	27人
どちらともいえない		12.5%	10人
そう思わない		2.5%	2人
全くそう思わない		0.0%	0人
14. 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		46.3%	37人
そう思う		40.0%	32人
どちらともいえない		12.5%	10人
そう思わない		1.3%	1人
全くそう思わない		0.0%	0人
15. 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		50.0%	40人
そう思う		41.3%	33人
どちらともいえない		7.5%	6人
そう思わない		1.3%	1人
全くそう思わない		0.0%	0人

## 自由記述欄

その他、意見、感想等があれば記述してください【200字以内】

**授業改善につながる建設的な意見をお願いします。授業と直接関連しない意見は控えてください。  
特に、教員個人への誹謗中傷や差別的な記述は絶対にしないでください。**

アンケートは以上です。最後に右下の「回答」ボタンをクリックしてください。  
なお、回答期間中は修正して再提出が可能です。  
ご協力ありがとうございました。

集計結果CSV出力

授業アンケート一覧 &gt; 授業アンケート結果参照

戻る

期間：2025/03/07（金）09:00～2025/03/13（木）23:59

対象者数(延べ数)：296人 回答者数(延べ数)：65人 回答率 22.0%

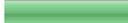
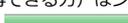
## 2024\_授業アンケート【ウィンターセッションⅡ期】

このアンケート調査は、学生の皆さんの視点から授業の状況を確認し、授業の改善に結びつけることを目的として実施するものです。

入力にあたっては、この授業を振り返り、責任ある回答をしてください。

なお、このアンケートの回答は匿名化して処理するため、教員が回答から個人を特定することはできません。また、回答内容は授業改善のみに活用し、成績評価等には一切影響しませんので、率直に回答してください。

## あなたの意欲や理解について

1. 授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか（必須）		比率	人数
4時間以上		9.2%	6人
3時間～4時間未満		0.0%	0人
2時間～3時間未満		16.9%	11人
1時間～2時間未満		35.4%	23人
1時間未満		38.5%	25人
2. 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか（必須）		比率	人数
とてもそう思う		29.2%	19人
そう思う		41.5%	27人
どちらともいえない		13.8%	9人
そう思わない		9.2%	6人
全くそう思わない		6.2%	4人
3. 授業に意欲的に取り組みましたか（必須）		比率	人数
とてもそう思う		35.4%	23人
そう思う		47.7%	31人
どちらともいえない		13.8%	9人
そう思わない		3.1%	2人
全くそう思わない		0.0%	0人
4. 授業の内容に興味は持てましたか（必須）		比率	人数
とてもそう思う		41.5%	27人
そう思う		41.5%	27人
どちらともいえない		10.8%	7人
そう思わない		4.6%	3人
全くそう思わない		1.5%	1人
5. 授業の内容を十分に理解できましたか（必須）		比率	人数
とてもそう思う		33.8%	22人
そう思う		56.9%	37人
どちらともいえない		6.2%	4人
そう思わない		3.1%	2人
全くそう思わない		0.0%	0人
6. シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか（必須）		比率	人数
とてもそう思う		33.8%	22人
そう思う		46.2%	30人
どちらともいえない		18.5%	12人
そう思わない		0.0%	0人
全くそう思わない		1.5%	1人
7. 総合的にみてこの授業で学力がつかえましたか *各授業の学力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載（必須）		比率	人数
とてもそう思う		35.4%	23人
そう思う		50.8%	33人
どちらともいえない		13.8%	9人
そう思わない		0.0%	0人
全くそう思わない		0.0%	0人

## 教員の授業の進め方について

8. 話し方や説明は分かりやすかったですか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		38.5%	25人
そう思う		47.7%	31人
どちらともいえない		9.2%	6人
そう思わない		1.5%	1人
全くそう思わない		3.1%	2人
9. 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		40.0%	26人
そう思う		43.1%	28人
どちらともいえない		9.2%	6人
そう思わない		4.6%	3人
全くそう思わない		3.1%	2人
10. 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		46.2%	30人
そう思う		44.6%	29人
どちらともいえない		7.7%	5人
そう思わない		1.5%	1人
全くそう思わない		0.0%	0人
11. 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		40.0%	26人
そう思う		49.2%	32人
どちらともいえない		7.7%	5人
そう思わない		1.5%	1人
全くそう思わない		1.5%	1人
12. 授業時間を有効に使っていましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		46.2%	30人
そう思う		38.5%	25人
どちらともいえない		10.8%	7人
そう思わない		3.1%	2人
全くそう思わない		1.5%	1人
13. 質問に適切に対応してくれましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		46.2%	30人
そう思う		43.1%	28人
どちらともいえない		7.7%	5人
そう思わない		1.5%	1人
全くそう思わない		1.5%	1人
14. 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		43.1%	28人
そう思う		41.5%	27人
どちらともいえない		10.8%	7人
そう思わない		3.1%	2人
全くそう思わない		1.5%	1人
15. 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか (必須)		比率	人数
とてもそう思う		50.8%	33人
そう思う		38.5%	25人
どちらともいえない		6.2%	4人
そう思わない		3.1%	2人
全くそう思わない		1.5%	1人

## 自由記述欄

その他、意見、感想等があれば記述してください【200字以内】

**授業改善につながる建設的な意見をお願いします。授業と直接関連しない意見は控えてください。  
特に、教員個人への誹謗中傷や差別的な記述は絶対にしないでください。**

アンケートは以上です。最後に右下の「回答」ボタンをクリックしてください。  
なお、回答期間中は修正して再提出が可能です。  
ご協力ありがとうございました。

集計結果CSV出力

## Ⅱ 大学院 FD 活動報告

---

### <文学研究科>

#### ■講演会・研修会・ワークショップなど

FD 活動計画のとおり、カリキュラムや学生の研究指導などに関して、文学研究科の教員が集まって実践や意見を交換し合う機会（意見交換会「文学研究科のカリキュラムおよび指導体制等について」）を以下のとおり、2回設定した。

- ・令和6年9月19日（木）13時00分～14時40分
- ・令和7年3月27日（木）13時30分～15時00分

この話し合いの中で確認した課題等を次年度以降に解決していく予定である。

#### ■調査・研究など

(1) FD 活動計画のとおり、文学研究科の修了生および現役の大学院生に対して、「大学院での学修はどのように役に立っているか」と題したインタビュー調査を行い、文学研究科のカリキュラム等の改善のための資料を得ることを試みた。人間学専攻の修了生1名に対しては対面で、英語教育専攻の修了生1名に対しては、オンラインミーティング（Zoom）でのインタビューを行った。

人間学専攻の修了生インタビューの中では、主として以下のような質問を行った。

- ・修士課程在籍中には何を学んだと感じているか。
- ・現在の職業において修士課程での学びが役立っている点はあるか。
- ・修士課程在籍中に、これは学んでおきたかったという点はあるか。
- ・修士課程在籍中に、学び以外の点で、この点をサポートしてほしかった、という点はあるか。あるいはサポートがあってよかったという点はあるか。
- ・職業生活以外で、修士課程での学びが役立っている点はあるか。

文学研究科の教員はインタビューに参加、または、後日録画動画を視聴した後に、次の項目について、各自がレポートを提出した。

- ・今後の大学院の授業で、新しく取り組みたいことや、より意識していきたいこと
- ・入学者を増やすための取り組みの案
- ・英語教育専攻においては、現職の学校教員が何らかの形で大学院において学ぶニーズを把握し、それに応えるための案

これらの点について、インタビューを視聴した教員から次のような報告も寄せられた。

- ・大学院での学びが「人間とは何か」ということをより深く掘り下げるための絶好の機会となるように、今後とも大学院での授業を工夫していきたい。
- ・修了生 A さんのお話を伺い、学生・院生にとっての大学・大学院での学びは、その分野をアカデミックに取り組んできた教員とは異なる立ち位置にあることが理解できた。特に修了生 A さんにとっては、バレエ、あるいは、人とかかわるという主軸があり、そこに深みや豊かさをもたらすのが大学・大学院でも学びであったように窺えた。  
大学院ではあえて学問分野を専門的に追求したいという学生もいるし、修了生 A さん自身も教員と 1 対 1 で専門的に学んだこともよい経験であったと述べておられ、だからこそ大学院修了後も「人間学が役立った」と感じるところもあると思われるので、今後ともあえて専門性を押しだしながら教育活動をしつつも、一方で、院生のその後の豊かさにどう貢献できるかも配慮していきたい。
- ・これまで、大学院修了者のお話を伺うときには、大学院での（アカデミックな）学びとその後の企業あるいは学校での働きがどう結びついているか、ということに関心をもってきました。今回、修了生 A さんはご自身の生い立ちを振り返るノートをご準備くださったようで、それを見ながらライフ・ヒストリーを語ってくださいました。中心に「バレエ」という軸がしっかりと通っていて、バレエのために様々なジャンルの芸術に触れるよう努めてきたこと、さらに日本文化への関心をもち、大学では比較文化学科に進学したこと……すべてがバレエを中心につながっていました。大学院生について、在学中と修了後ばかり見ていて、これまでの人間形成のプロセスに思いをいたすことがあまりなかったもので、学生とゆっくりと対話する機会をもっと持ちたいと思いました。
- ・修了生 A さんへのインタビューでは、ご本人が小学校時代から大切にしてきた人生の軸との関連で、大学院での学びの関心などについて聴くことができた。今後の授業のみならず、研究テーマの選択指導においても、院生個人のリアルな人生における関心という視点から指導するよう、より意識していきたい。
- ・仮に今後大学院の授業を担当するとすれば、やはり、古典的なテキストを原書で読み解く作業に大きな意味があることをより強く学生に伝えていきたいと思いました。

英語教育専攻は、公立学校教員 1 名の修了生へのインタビューを 3 月末に実施した。オンライン・インタビューに参加した 2 名以外の教員の視聴が終わっていないため、各教員のフィードバックを本 FD 活動報告に含めることができなかった。現職の学校教員が何らかの形で大学院において学ぶ可能性について示唆を得るインタビュー内容であったため、全員が視聴できるよう視聴の機会を令和 7 年度に延長し、今後の計画に生かしたい。

なお、両専攻のインタビューは Microsoft Teams で全教員が視聴できるようにする予定である。

## (2) 学会発表の成果の検証

今年度は、学生の学会参加が活発に行われた。在籍する 6 名のうち 5 名が「大学院学生学会発表・参加報告および旅費助成申請書」を提出して、助成制度の適用を受けた。これは、全研究科で最も高い適用率である。8 月には 3 名が全国英語教育学会大会（福岡市）に参加、うち 1 名は自律的学習者の育成に関する指導教員との共同研究を発表した。学会参加によって新たな知見を

得られたのみならず、規模の小さい本研究科の学生にとって同じ分野の研究者との交流は貴重な経験であり、研究への意欲を高める効果があった。11月には2年生1名と1年生1名が Asia TEFL (タイ、チェンマイ・ラチャパット大学) で研究発表を行った。

令和5年度は、学会参加後の参加報告・旅費助成申請の手続きが遅れたケースがあり、指導に課題が残ったが、令和6年度は同様の問題が起きないように留意し、改善することができた。

このように、学会参加が活発に行われたことは今年度の大きな成果である。次年度への課題として、大学院生の研究活動を学部生が知る機会を設けるよう計画し、進学者増につなげていきたい。

#### ■学生による授業アンケート

FD活動計画のとおり、学生による授業アンケートを行った。対象となった授業は文学研究科が提供しているすべての授業であった。全授業において、おおむね評価が高かった。「2. この授業で学修したことを、自分の研究課題に関連付けることができた。」の項目について、平均値が他の項目と比べてやや低くなっている。これは例年の傾向であり、履修するすべての科目が各学生の研究課題と直接関係するわけではないことから、特に改善を要する点があると捉える必要はないと考えられる。項目2. の値が高くない科目についても、「5. この授業を通して、自分の研究課題に関する新たな視点を発見することができた。」については一定以上の値が示されており、受講した学生が視野を広げることができたと考えられる。履修者が少ない授業、特に履修者が1名の授業においては、回答した学生の匿名性が確保されないが、学生からは特にその点の指摘がなかったことから、今後も、すべての科目で同様のアンケートを実施する予定である。

令和6年度も、前年度に続き Blackboard 上にアンケートを掲示し、回答を得る方式をとった。アンケートの配布時期を早め、未回答の学生への促しも行ったが、特に春学期は回答率が低かったため、令和7年度の改善課題としたい。

授業ごとの結果は以下の表のとおりだが、各授業における数値は、以下の4段階の尺度の(小数点第2位を四捨五入した)平均値である。

- 4 とても当てはまる                      3 やや当てはまる  
2 あまり当てはまらない              1 まったく当てはまらない

春学期		アカデミック・リテラシー	英語科 コース デザイン 研究	ELF 500	応用言語 学研究	英語教 育研究	研究 指導 I	英語授業 演習
	回答者数	2名	4名	1名	1名	1名	2名	1名
1	この授業の専門分野に関する知識やスキルが高まった。	4.0	3.5	3.0	4.0	3.0	4.0	4.0
2	この授業で学修したことを、自分の研究課題に関連付けることができた。	4.0	3.5	3.0	4.0	3.0	3.5	4.0
3	この授業を通して、自分の研究を遂行するための論理的思考力が高まった。	4.0	3.3	3.0	4.0	3.0	3.5	4.0

4	この授業を通して、自分の研究を遂行するために必要な知識やスキルを身に付けることができた。	4.0	3.3	3.0	4.0	3.0	4.0	4.0
5	この授業を通して、自分の研究課題に関する新たな視点を発見することができた。	4.0	3.5	3.0	4.0	3.0	4.0	4.0

秋学期		ELF 研究	言語使用研究	研究入門	研究指導 II	英語教育総合
	回答者数	3 名	2 名	2 名	1 名	3 名
1	この授業の専門分野に関する知識やスキルが高まった。	3.3	4.0	4.0	4.0	3.7
2	この授業で学修したことを、自分の研究課題に関連付けることができた。	2.7	2.5	4.0	4.0	3.7
3	この授業を通して、自分の研究を遂行するための論理的思考力が高まった。	3.7	3.5	4.0	4.0	4.0
4	この授業を通して、自分の研究を遂行するために必要な知識やスキルを身に付けることができた。	3.3	3.0	4.0	4.0	3.7
5	この授業を通して、自分の研究課題に関する新たな視点を発見することができた。	3.3	3.5	4.0	4.0	3.7

## ■その他

### (1) 院生に対する研究倫理教育の実施

例年と同じく、文学研究科の全学生に eL-CoRE の受講を義務づけた。年度初めの 4 月中に全学生が受講を終え、受講証明書を提出した。令和 5 年度は、2 回目の受験となった 2 年生がログインできないという問題が生じて未受講に終わったが、令和 6 年度は 100% 受験を達成し、改善することができた。

また、学生自身が実際にデータ収集を行う際に適切なプロセスを踏んでいるかどうかを確認するため、eL-CoRE の学習内容、および関連学会の研究倫理ガイドラインを参考にしながら作成した研究倫理チェックリストを学生に配付した。2 年生は、修士論文の提出の際に、チェックを入れたものを一緒に提出した。提出したリストを教員が確認したところ、すべての学生が適切な手順で研究を行っていた。今後は、研究倫理チェックリストを必要があれば改良し、引き続き、学生に配付した上で、研究を行う際に活用していく予定である。

### (2) 令和 5 年度英語教育専攻修了生アンケート結果

昨年（令和 5 年）度文学研究科 FD 活動報告書に含めることができなかった英語教育専攻修了生インタビュー（2024 年 3 月実施）のアンケート結果を以下に掲載し、昨年度の活動報告内容を補完しておきたい（「令和 5 年度 FD 活動報告書」文学研究科 > ■調査研究など > 英語教育専攻修了生インタビュー 参照）。

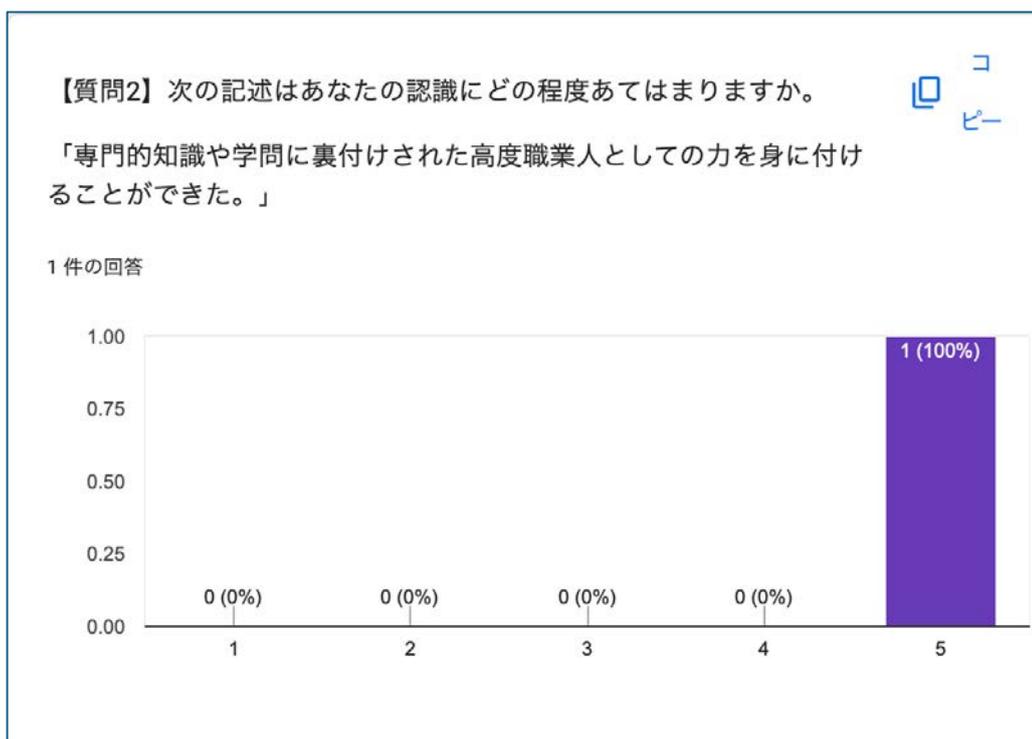
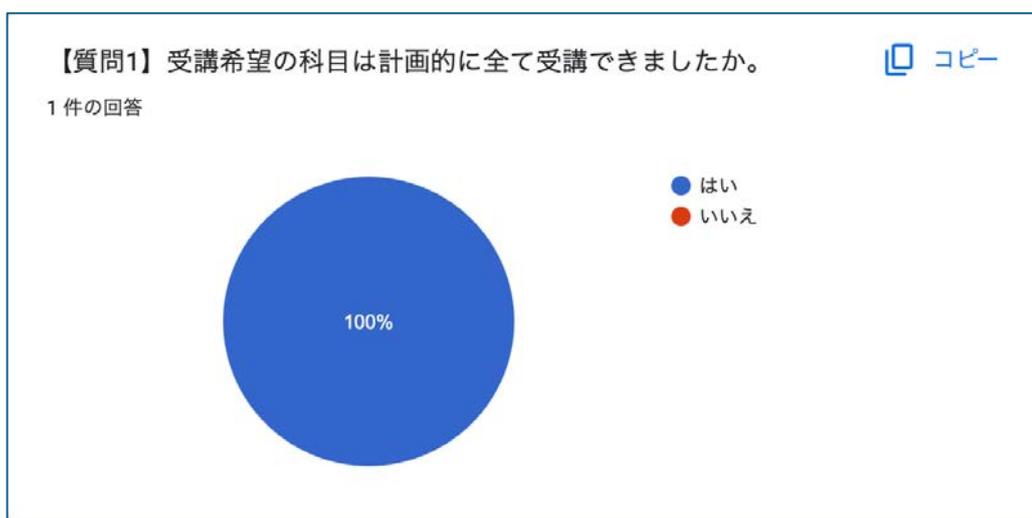
文学研究科 令和5年度修了生アンケート  
結果

1. 概要（回答数）

- 英語教育専攻：1名（対象となる在籍者（2年生）3名中）

2. 詳細

I. 文学研究科での学修および研究について



【質問2-1】上の【質問2】の回答について、なぜそう思いますか。

1件の回答

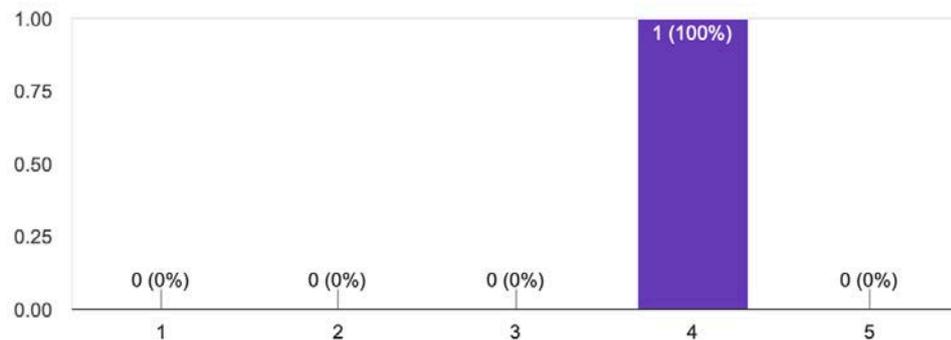
2年間学修を深めた結果として専修免許を取得し、高等学校教諭になることが出来たため。

【質問3】 次の記述はあなたの認識にどの程度あてはまりますか。



「英語教育専攻 修士論文評価観点」で示された評価基準を満たす修士論文を執筆することができた。」

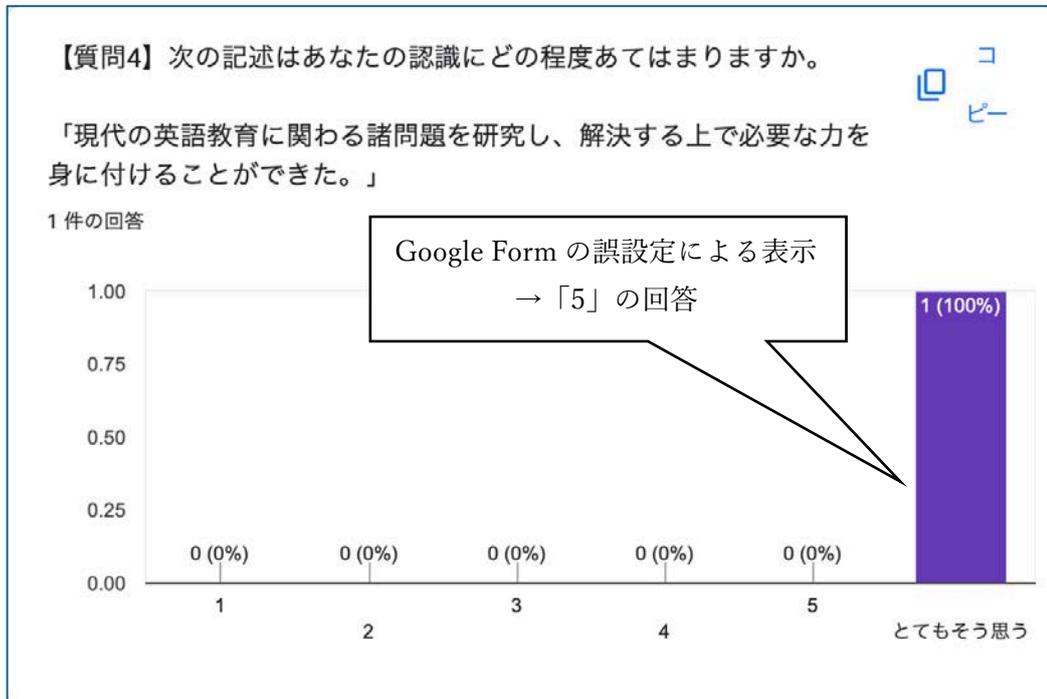
1件の回答



【質問3-1】上の【質問3】の回答について、なぜそう思いますか。

1件の回答

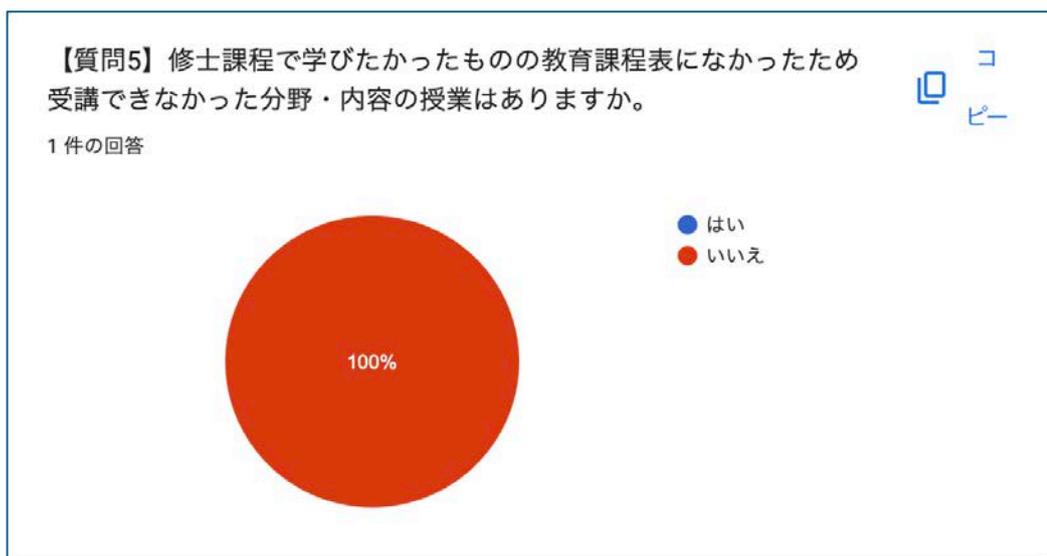
考察の方法や考察の論文内での言葉の表現については浅さや粗さのあるものであった。時間的都合もあったかもしれないが、そもそもの自身の文作能力が備わっていればもっと改善できる点があったと思う。



**【質問4-1】** 上の【質問4】の回答について、なぜそう思いますか。

1件の回答

文部科学省のYouTubeや英語教育に関する記事などを目にした際、研究科の授業で扱った内容や観点から自分なりの考えを持つことができるようになったと実感している。

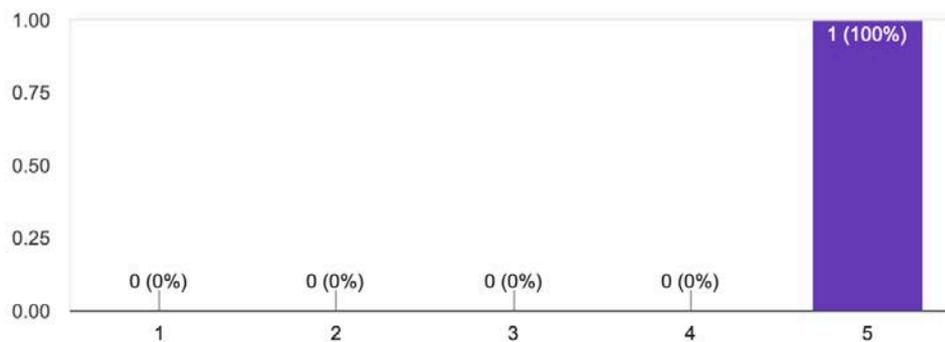


【質問6】 次の記述はあなたの認識にどの程度あてはまりますか。



「修士論文の研究指導は充実していた。」

1件の回答



【質問6-1】 上の【質問6】の回答について、なぜそう思いますか。

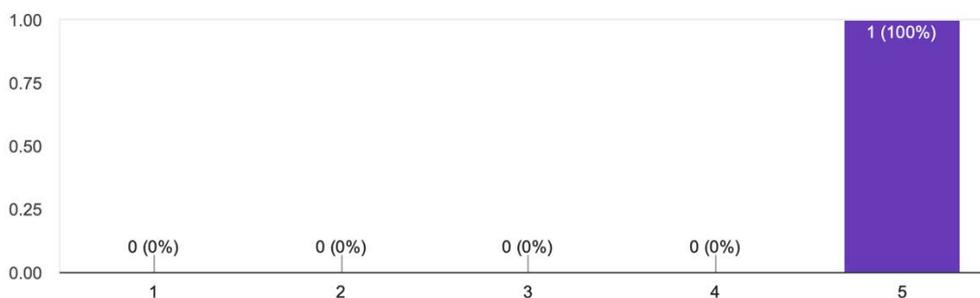
1件の回答

毎時間非常に多くのことを学ばせて頂いた。拔かりなく準備を進めること、事象を慎重に見極めること、視野を広げること、柔軟に対応する手立てを用意しておくことの重要性を痛感した。

## II. 文学研究科での学生生活について

【質問7】 次の記述はあなたの認識にどの程度あては...助成・TAといった学生支援は充実していた。」

1件の回答



【質問7-1】上の【質問7】の回答について、なぜそう思いますか。

1件の回答

2年間学内奨学金を活用させて頂いた。私の修士生活において非常に支えとなる存在だった。

### Ⅲ. 進路（就職・進学）について

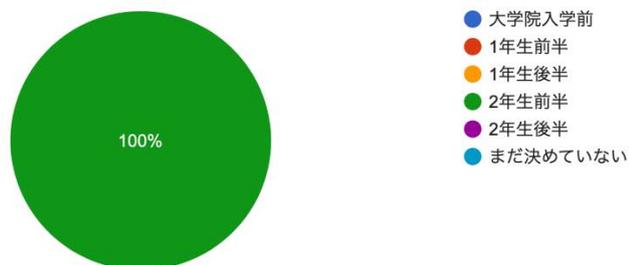
【質問8】進路（就職先・進学先等）を具体的に教えてください。未定の場合は「未定」と記入してください。

1件の回答

就職(英語科教員：神奈川県立上溝南高等学校)

【質問9】上の【質問8】で回答した進路の方向性...合は「まだ決めていない」を選択してください。

1件の回答



【質問9-1】上の【質問8】について、なぜその方向性に決めたか教えてください。また、その方向性に決めるまでに迷った場合は、具体的に他のどのような方向性との間で迷ったかを教えてください。

1件の回答

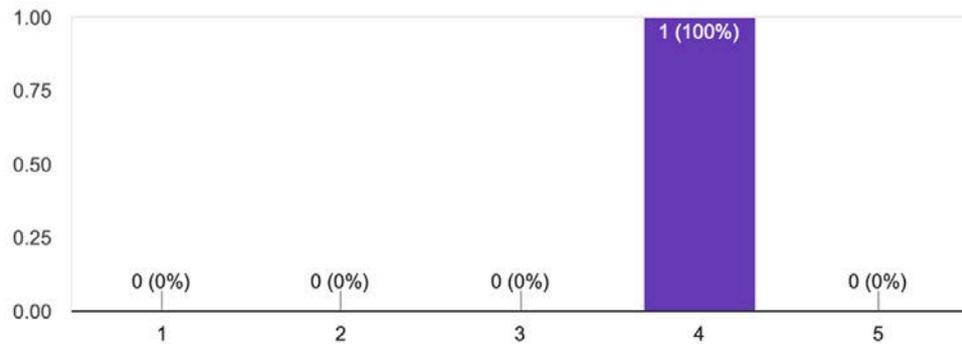
教壇に立つという前提は崩さずに、幼少期からの夢であった小学校教諭を目指し続けるかどうかで迷ったが、大学院での学びを直接的に活用出来る高等学校教諭への志望に切り換えた。

【質問10】 次の記述はあなたの認識にどの程度あてはまりますか。



「自分の進路（就職先・進学先等）に満足している。」

1件の回答

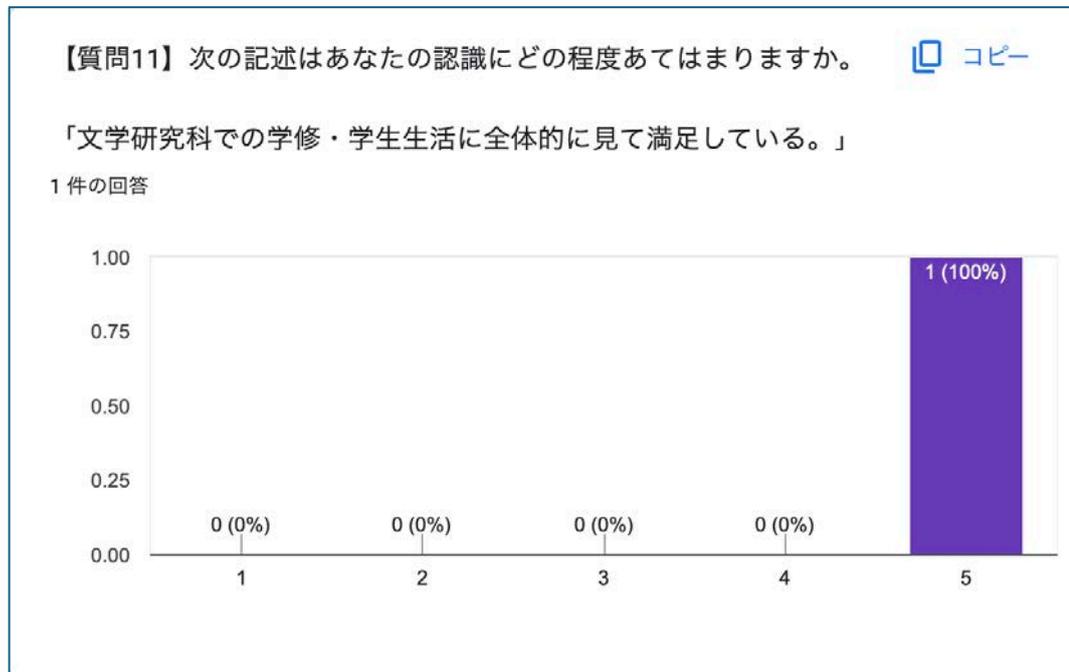


【質問10-1】 上の【質問10】の回答について、なぜそう思いますか。

1件の回答

教員採用試験に合格しての進路決定であるため、満足度は5(とてもそう思う)であるが、現状その中に拭いきれない不安や緊張がある。1年間がむしゃらに働き続けて、自分の進路が間違っていなかったと来年の今頃自信を持てるように頑張りたい。

#### IV. 総合他



**【質問11-1】** 上の【質問11】の回答について、なぜそう思いますか。

1件の回答

非常に濃密な時間を過ごさせて頂いた。多くの先生方にお力添えを賜り、学修においても、人間としても大きく成長させて頂いた。

**【質問12】** 文学研究科での学修・学生生活について要望があれば教えてください。特になし場合は「特になし」と記入してください。

1件の回答

特になし

<以 上>

## <農学研究科>

### 活動計画

- (1) 研修会（研究談話会）の開催
- (2) 研修会（大学院研究セミナー）の開催
- (3) 講演会「身体を通したセルフケアの実践」
- (4) 研究成果についての検証および満足度調査

### 活動計画（1）研究談話会の開催

大学院教育は教員の研究活動が教育の質に直結するため、教員の研究レベルの向上が FD 活動には不可欠である。高い評価を受けている研究や最先端の技術を取り込んだ研究の紹介は教員にとって大いに参考になり、研究に対する動機付けも高まる。農学研究科では「研究談話会」を企画して、そのような機会を教員や大学院生に提供している。

令和 6 年度は「加工・保蔵における食品の品質」（講師：先端食農学科 李潤珠講師 8 月 8 日開催）、「発生生物学研究とその応用」（講師：生産農学科 原本悦和教授 11 月 4 日開催）、および「野生動物の生態研究 20 年の道のり ～学内外施設の研究事例を添えて」（講師：環境農学科 關義和教授 12 月 9 日開催）という 3 演題で講演をしていただいた。最初の 2 回については、農学研究科教員をはじめ、農学部教員、大学院生、学部生から 20 名以上の参加があり、活発な質疑応答が行われた。最後の講演は時期が遅かったため、参加者数が少なめとなった。来年度はもう少し早めの開催を検討する必要があると思われる。

### 活動計画（2）大学院研究セミナーの開催

「一本鎖環状 RNA からなる最小の植物病原体 ～ウイロイド～」という演題で農業・食品産業技術総合研究機構の松下陽介氏に講演をいただいた（2 月 26 日開催）。参加者数は少なかったものの、非常に興味深い内容の講演であり、質問も大変多くあり充実したセミナーとなった。開催日が 2 月下旬であったため学会参加等で聴衆が集まらなかった可能性があり、開催時期を検討する必要があると思われる。

### 活動計画（3）講演会の開催

「身体を通したセルフケアの実践」（講師：保健センター健康院カウンセラー 佐藤紀代子氏）という演題で、教職員のための心のケアに関する研修を行った（3 月 12 日開催）。本計画は農学部 FD 計画と共催という形をとったものである。神経系を通した安心・安全な感覚を身に付ける方法についてはすぐに取り組める内容であり、自分の体の声に耳を傾ける習慣を付けることという点を教えていただき、非常に有用な研修となった。

### 活動計画（4）研究成果についての検証

農学研究科所属の大学院生には、積極的に自身の研究成果を学会で発表するように促している。学会発表では、研究成果の発表および質疑応答を通して研究内容の充実を図ることやより発展的なアイデアの創造が可能であるが、それだけに留まらず他の研究者の発表を聴講することで視野が広がることも期待できる。指導教員としては、参加学生からこれらの「成果」を聞き出すこと

で、研究指導上の改善点などを抽出することが重要となる。

今年度は成果報告が 11 件あり、そのすべてから学会に参加し自身の研究を発表することで得るものが多かったという報告を得た。国際会議への参加も数件あり、英語での発表および質疑応答の経験は非常に有意義であったという声が聞かれた。農学研究科のカリキュラムにある「科学英語表現」および「ELF501」の履修による効果が表れたものと考えている。学会に参加し発表することは、指導教員とは異なる視点を持つ他の研究者の意見を聞くことができる貴重な場であり、今後も積極的に参加するように促していきたい。

アセスメント・ポリシーに関わる「満足度調査」結果からは概ね良好な回答を得ている。ただし、「研究指導について満足しているか」に対して「満足していない」が 1 名おり、その理由は「十分に相談する時間がなかった」と答えている。この件について、農学研究科会で共有し改善できるように図りたい。「学修研究活動全般に対する意見・要望」では、学外、とくに野外における研究をしている学生から「車両の運転を許可してほしい」旨の回答があった。この件は難しい問題かと思われるが、可能性を探ってみる必要はあるように思う。また、上述の通り近年の傾向として国際会議で発表をする学生が増加しているが、その際の補助金支給額の増額を希望する声もあった。

## <工学研究科>

令和 6 年度工学研究科 FD 活動として、大学院生による授業アンケートの実施と授業改善の推進、「専門演習 I」の実施と効果分析による実践的技術力指導の改善および大学院教育活動の質向上を目的とした「アントレプレナーシップに関する講義」と題する FD 研修会を計画に沿って実施した。大学院生によるアンケートについては、各科目の授業アンケートを実施したほか、令和 5 年度修了予定者を対象として令和 6 年 3 月に実施したアンケートを分析した。以下に活動の報告とその成果および課題についてまとめた。

### (1) 大学院生による授業アンケートの実施と授業改善の推進

春学期および秋学期において大学院生による授業アンケートを実施した。対象科目は、工学研究科の大学院生が受講している全科目である。アンケートは Microsoft Forms を用いて作成し、全面的に実施した。大学院生には PC やスマートフォンを用いてオンラインで回答を入力してもらい、その回答は匿名性を確保した上で収集した。

各科目の授業アンケートの結果は、教務担当者会で各科目の結果および全体の集計結果について議論したのち、全体の集計結果は工学研究科会で全教員に報告した。また、授業改善に活用してもらうため、細かなアンケート項目についても授業担当教員にフィードバックした。なお、春学期の集計結果については、令和 6 年度 第 6 回 工学研究科会（令和 6 年 8 月 16 日（金））で報告し、秋学期の集計結果については、令和 6 年度 第 12 回 工学研究科会（令和 7 年 2 月 18 日（火））で報告した。

この活動の成果として、授業アンケートの実施から評価、公表、改善への活用までの一連のプロセスを実施することができた。アンケートの回答率は、春学期が 65%、秋学期が 85%であった。集計結果から、回答があった授業科目においては特に問題は見出されず、良好であることが確認された。設問に対するポイントは平均で春学期が 4.65、秋学期が 4.89 ポイント（最大 5 ポイント、高いほどポジティブな回答）と非常に高かったことが確認された。しかし、授業外学修時間の項目で、1 回の授業あたりの平均が 2.98 ポイント（5：4 時間以上、4：4 時間未満 3 時間以上、3：3 時間未満 2 時間以上、2：2 時間未満 1 時間以上、1：1 時間未満）とやや低い値となっていた。平均的な学生を 3 ポイントと仮定すると、3 時間未満 2 時間以上の授業外学修時間は十分とは言えず、授業外学修に取り組むための課題などを用意する必要がある結果となった。

次年度も授業アンケートを実施し、授業の改善活動を継続していく。アンケート実施の際には回答開始時期の前倒し、Blackboard でのアナウンスや授業担当教員への協力の呼びかけなど、複数回にわたりお願いをした。その結果、回答率を大幅に改善できたため、来年度以降も同様の対応をしていく予定である。

### (2) 大学院生による修了生アンケートの実施

令和 5 年度修了予定者を対象として、令和 6 年（令和 5 年度）3 月に「修了予定者を対象としたアンケート」を匿名で実施した。対象者は修士課程の機械工学専攻および電子情報工学専攻の 12 名であり、そのうち 10 名が回答した（回答率 83%）。

このアンケートは、工学研究科のアセスメント・ポリシーで定める「修了時の学生へのアン

ケート」に基づき実施されたもので、ディプロマ・ポリシーの評価の役割も担っている。質問項目は前年と同様であり、工学研究科が人材育成を目的とした教育研究活動を通じて目指す人物像との一致を評価するために設計されている。

回答内容は、まず教務担当者会で検討され、その分析が令和6年度第1回工学研究科会（令和6年4月1日（月））で報告された。また、令和6年度第4回工学研究科会（令和6年6月27日（木））では、アセスメント・ポリシーに基づく研究教育活動の点検結果とともに、このアンケートの基本統計も改めて報告された。

回答からは、研究指導教員への信頼の高さや、今後の生活への意欲の高さなど、多くの修了生が満足感を持って玉川を旅立つことが例年同様に確認された。一方で、工学研究科の教育内容や手法に関する質問（質問1～3）、学修成果の自己評価（質問4、7～9）、就職関連（質問12、13）、総合評価（質問18）に否定的な回答も見られた。特に質問2（研究指導に対する評価）では、前年に現れた、強い否定を示す回答はなかったものの、弱い否定を示す回答が複数見られた。さらに、専門性やスキル獲得、自信、成長実感、就職満足度などについても課題が示された。

研究指導への不満が示されたため、工学研究科会を通じて研究指導教員に対し点検を促し、適切な指導が行われるよう注意喚起を行うこととした。また、学位論文に係る評価基準を周知徹底するため、修士論文発表審査会や中間発表会の要旨集に掲載し、教員と学生双方への理解を促した。これに加え、研究指導計画についても次年度の研究科会で再確認する予定である。

このような取り組みが、工学研究科の教育品質向上と学生満足度の向上に寄与することを期待している。

### （3）「専門演習 A」の実施と効果分析による実践的技術力指導の改善

工学研究科の必修科目である「専門演習 A」は、修士課程1年生を対象とし、工学研究科の全教員が成果物の発表会（技術発表会）を通じて評価に関与する科目である。この科目の目的は、装置の製作など実践的な課題を通じてプロジェクトの遂行経験、工学の基礎的な知識および技術の修得をし、また「大学院技術発表会」における発表および質疑応答を通じて、技術者および研究者として必要なコミュニケーション能力を向上させることである。

技術発表会は令和6年9月19日（木）14時から、STREAM Hall 2019 313AB 教室にて対面形式で開催された。大学院生による4件の発表が行われ、参加者との間で質疑応答が行われた。また、Microsoft Forms を利用した投票方式による審査が実施され、教員15名、大学院生11名の計26名の投票結果に基づき、上位3名に大学院技術賞が授与された。さらに、会場では各発表に対する質問やコメントを記載するシートを配布し、発表会後の回収を経て、発表者へと引き渡した。記載された質問については後日一括して回答を行う取り組みを令和5年度に引き続き実施した。発表会の審査結果および質問への回答内容は、第8回第1工学研究科会（令和6年10月24日（木））にて全教員へ報告された。

シートに記載された質問は、学生自身が分類および整理を行うことを求められており、4人の学生がそれぞれ12項目、9項目、7項目、6項目に整理している。各項目については、学生全員が漏れなく回答している。回答内容に不適切なものは見られなかったが、学生がこの仕組みによる学修効果をどのように実感しているかについては直接問われていない。このため、質

問シートの整理・分類および回答を行う仕組みの学修効果を把握するために、次年度以降、この仕組みを通じた学修成果の実感を問うアンケート調査を実施することとした。次年度の技術発表会に先立って、同様の仕組みを活用している修士論文中間発表会でもこのアンケート調査を実施することとした。

実際に、令和7年（令和6年度）3月2日（日）に実施された中間発表会において、このアンケート調査が行われた。このアンケート調査では、仕組みの評価に加え、発表準備や当日の発表に対する自己評価、他の学生の発表から得た学び、自身の研究に対する認識についても質問がなされている。このアンケート調査の分析および評価結果は、次年度の工学研究科会を通じて共有される予定である。

#### （4）大学院教育活動の質向上を目的としたFD研修会の実施

アントレプレナーシップに関する講義

- ・実施日：令和6年10月24日（木） 17：00～18：00
- ・場所：オンライン（Zoom）
- ・講師：鎌田 伸尚 教授（玉川大学 観光学部観光学科）
- ・概要

工学研究科では、Tamagawa Vision 100 で、「アントレプレナーシップ（起業家精神）醸成のための取り組み」を重点課題として掲げている。そこで、経営管理学がご専門の観光学部の鎌田伸尚教授をお招きし、工学研究科の教員のアントレプレナーシップに関する理解を深めることを目的としてご講演いただいた。

#### ・活動内容

以下の項目に分けて講義が進められた。

- ① スタートアップ支援について
- ② 我が国におけるアントレプレナーシップ醸成の現状と課題
- ③ AI時代の大学教育におけるアントレプレナーシップの必要性
- ④ 英国MBAのアントレプレナーシップ教育の紹介

#### ・評価

教授会の前に実施され、工学部・工学研究科の教員38名が参加した。

アントレプレナーシップについての理解を深め、自ら社会課題を見つけ、その課題解決に向けた挑戦や、他者との協働によって解決策を探求することのできる知識、能力、態度を身に付けることができた。

#### （5）アセスメント・ポリシーに基づく点検情報の共有

令和6年度第4回工学研究科会（令和6年6月27日（木））において、令和5年度の工学研究科の活動に対する点検結果を報告した。

前年度から点検結果のフォーマットにいくつか改善を加えた。ディプロマ・ポリシーおよびアセスメント・ポリシーの改訂を反映し、点検結果の各項目にディプロマ・ポリシー記載の3項目10要素のどれに対応するかを明示する形式とした。また、これまでキャリアセンターに任せていた就職先の把握について、工学研究科の教員全体で共有する観点から、点検結果に就職

先情報を掲載することとした。TOEIC®に関する項目では、令和 5 年度で終了した英語勉強会の効果を把握するため、匿名化した学生のスコア推移を掲載した。

アセスメントの全体的な基調としては、研究発表や論文の件数など研究活動に関わる学修成果はおおむね良好な水準にあると考えられる。就職率も 100%を維持している。数値化可能な指標が良好な結果を示している。令和 5 年度修了生アンケートの分析（上掲）によれば、研究指導の質的な面においても、多くの学生が自身の成長を実感していると認識している。しかし一方で、一部の学生が学修成果に対する量的（発表数・論文数）および質的（成長の実感）な満足感を得られていない現状も存在している。

この状況に対応するため、工学研究科の定める研究指導計画および学位論文に係る評価基準を再確認するよう、工学研究科会を通じて教員に要請することとしている。また、例年実施している特別講義「研究、論文、発表について」および「研究倫理講習」を通じて、学生に対して、自身が望む研究指導を指導教員に求めることや、教務担当など指導教員以外の助言を求めることができる旨を指導する取り組みを強化する予定である。

## <マネジメント研究科>

### (1) コースのカリキュラムや授業改善に関する検証

#### 【報告】

例年、課題研究中間報告会の後、学生と教員の参加によるFD会を実施している。グローバル・マーケティング研究コースおよび会計学研究コースの学生とは、主に研究を今後どのように進めるべきかについて議論を交わした。また、社会人学生であるスクール・マネジメント研究コースの学生からは、業務と並行しての研究活動への取り組みの難しさなどを聴取することができた。

FD会の声を踏まえて、研究科所属教員の参加によるFDワークショップを開催し、カリキュラムのデザインや運営などの教務関連内容、指導法やアドバイスの仕方といった具体的な教授法などを議論した。

#### 【成果・課題】

各コースに共通して、学生の理解度に合わせた指導が必要であることを確認した。特にスクール・マネジメント研究コースについては、学生が経営学やマネジメントをこれまでに専門的に学んでいないため、基礎から体系的に学び、2年次の課題研究に備える必要があることを確認した。一方で社会人としても1年目であるため、時間の使い方や意識の持ち方などの工夫が必要である。大学院1年目からのマインドに関わる部分は、4月の教務ガイダンスにおいても実施はしているが、今後どのような方法で対応していけばよいかについて、関係部署と継続的に議論し検討をしていきたい。

### (2) 「文献研究セミナーⅠ・Ⅱ」および「課題研究セミナーⅠ・Ⅱ」の指導方法検証

#### 【報告】

グローバル・マーケティング研究コースの学生が履修している「文献研究セミナーⅠ・Ⅱ」では、学生が設定した研究テーマに対する指導方針について意見を交換した。

スクール・マネジメント研究コースの学生が履修している「課題研究セミナーⅠ・Ⅱ」では、担当者決定後、1年という期間でテーマの設定から報告書の作成までを指導する必要がある。限られた時間の中での指導法の工夫について議論した。

#### 【成果・課題】

「文献研究セミナーⅠ・Ⅱ」については、修士論文の執筆に向けた指導方針について情報共有がなされた。今後は、指導方針のさらなる明確化に加え、研究の進捗管理やフィードバックの充実を図る必要があることを確認した。

スクール・マネジメント研究コースでは、学生が研究と社会人としての業務を両立させるかたちで「課題研究セミナーⅠ・Ⅱ」を履修する。その意味で、職場の理解を得ながらの研究活動となる。この状況を指導教員が理解した上で、適切なアプローチで課題研究を進めていく必要があることを確認した。

### (3) 学生による授業アンケートの実施

#### 【報告】

春学期および秋学期終了後に授業に対する記述式アンケートを実施した。回収したアンケートは授業改善のための資料として担当教員へフィードバックしている。

#### 【成果・課題】

全体として、学生は授業に対して大きな不満を抱えていることはなく、問題がないことを確認した。授業アンケートについては次年度も継続して実施し、学生からの要望を定期的に把握したい。

## <教育学研究科>

### (1) 【活動計画】 研修会 (FD 委員会) の開催

- ・教育学研究科会後に FD 委員会を 7 回開催。(4/24、5/29、6/26、10/23、11/27、12/18、2/18)

#### 【成果・課題】

- ・授業開講期間中、上記の日程で「授業および研究指導体制の改善について」の研修会 (FD 委員会) を行うことで授業改善の意識を教員全体で共有することができた。
- ・気になる学生の情報共有などをして、早期に研究指導体制の見直しや改善を討論することができた。
- ・大学院 HP のニュースやコラムの内容や執筆者について討論を行い、院生や入学検討者に伝えたいことが伝わるようにできた。

### (2) 【活動計画】 研修会「原子力災害—放射線の基礎知識と福島の実況」

(講師：松原 昌平氏 (公益財団法人原子力安全研究協会) 令和 6 年 10 月 23 日 (水)) の開催

- ・放射線の基礎知識、および福島第一原発事故の経緯と現在の影響について、さらに包括連携協定先の福島県川内村の状況についての講義。サーベイメーターを持参いただき、教室内で線量の測定なども行った。

#### 【成果・課題】

- ・教育学研究科の教員が包括連携協定先の福島県川内村への知見を深めると同時に、今後学生の引率や指導の際の予備知識を学ぶことができた。
- ・放射線の線量について、東京都の比較、医療被ばくとの比較などができ、自分なりのものさし (基準) を身につけることができた。

### (3) 【活動計画】 研修会「教育学研究科の運営について」

(講師：教育学研究科・坂野慎二教授・令和 6 年 12 月 18 日 (水)) の開催

- ・大学院の運営について理解を深める。時間割編成、夜間授業はじめ、今後の教育学研究科について解説をし、教員の理解を深める。

#### 【成果・課題】

- ・教育学研究科の運営について、教員が共通意識をもち、問題点や改善点などについて、理解を深めることができた。

### (4) 【活動計画】 調査「M1 対象の入学 1 ヶ月の学習及び生活調査」(期間：令和 6 年 5 月)

- ・研究科に入学して 1 ヶ月経過した頃に、学習への取り組み及び生活状況についてのアンケートを行い、学生の状況を理解する。学習についての意見は授業改善に役立てる。生活についての意見は困っていることの改善を手伝う。

#### 【成果・課題】

- ・結果は全ての教員に配付し、研究科全体として討論をした。今後の大学院生としての

生活が円滑に進むよう、全体及び個人の意見を抽出し、生活の改善点および授業改善など初期に討論をすることができた。

- ・夜間コースの学生の学習と仕事の両立の状況を把握した。学生から希望があるものについては迅速に改善を試み、学習環境の改善をすることができた。

(5) 【活動計画】 調査「包括連携協定先を訪問 原子力災害を学ぶ」の開催

(令和6年7月29日(月))

- ・福島県川内村との包括連携協定を締結したため、教員が今後学生を引率するにあたり、現地を知ったうえで授業準備をし、授業内容を充実させるため。
- ・複合災害といわれる福島県を視察したあとに、協定先の福島県川内村を訪問し、村の施設を見学。今後協定先との授業の展開の可能性を考える。

【成果・課題】

- ・東日本大震災・原子力災害伝承館、請戸小学校、川内村諸施設などを震災当時川内村役場復興対策課長だった井出寿一氏に解説をしていただきながら見学し、原子力災害の現在に至るまでの影響を学んだ。
- ・川内村の村長と対談し、さらに複数の施設を見学することにより、今後の授業等の展開や可能性について、意見交換をすることができた。

(6) 【活動計画】 学期終了後の授業アンケートの実施及び分析

- ・全開講科目を対象 春学期末、秋学期末の実施及び分析。

【成果・課題】

- ・集計の結果は全ての教員に配付し、研究科全体として授業改善に取り組み、学生にも必要な部分はフィードバックをした。学生の意見から、全体及び個人の意見を抽出し、授業改善を討論することができた。
- ・アンケート内容を「授業方法に関する意見・要望」と「大学に関する意見・要望」に分けて分析し、希望があるものについては迅速に改善を試み、学習環境の改善をすることができた。
- ・授業への要望については、教員間で話し合いを行い、改善につながるよう討議した。

## <教職大学院>

### (1) 教職大学院 OB・OG フォローアップ研修について

本年度は、対面で6月22日(土)、11月23日(土)の2回と令和7年2月22日(土)に公開FD・研修会を実施した。

#### ◆令和6年6月22日(土)参加者58名

高岡 麻美教授による研究報告  
教職大学院 OB・OG による実践報告  
報告者：現職15期：増田 佳佑氏  
SM14期：中西 郁氏

#### ◆令和6年11月23日(土)参加者57名

松本 修教授による研究報告  
教職大学院 OB・OG による実践報告  
報告者：現職14期：上原 孝枝氏  
SM11期：鎌田 綾香氏

#### ◆令和7年2月22日(土)(公開FD・研修会)参加者80名

松本 修教授による講演  
修了生による実践研究発表  
発表者：SM7期：佐藤 麻野氏  
SM11期：鈴木 真樹氏  
ワークショップ  
提案者：現職6期：西田 太郎氏  
座談会  
司会：SM5期：橋本 祐樹氏

### 1) 成果

6月22日(土)に第1回フォローアップ研修を対面で行った。

修了生プレゼンテーションでは、増田 佳佑氏と中西 郁氏に近況報告やSMへのアドバイス等をいただいた。

現職14期の増田氏からは、「つながりとひろがり」をテーマに、現在の職務や玉川での学びからワークライフバランスやキャリアプランを考え、ご縁とタイミングを大切に自分の可能性を広げる活動について報告していただいた。

SM14期の中西氏からは、「SMとしての学びと勤務校での経験」をテーマに、現在の勤務校での実践をもとに、教職大学院での学びと現場での取組や悩みについて実践報告をしていただいた。

グループディスカッションでは9グループに分かれ、SM・現職・修了生・教職大学院の教員等の立場から様々な意見が出て、活発な意見交換が行われた。

高岡 麻美教授からは、「北方領土教育について」をテーマに、研究報告がなされた。北方領土教育の概要と授業実践について紹介していただき、教員自身が正しく知ることの大切さと学校の授業でどんなことを教えるかを考えることの大切さについて研究報告をしていただいた。

本フォローアップ研修については教職大学院の HP でも紹介している。

[https://www.tamagawa.jp/graduate/teaching\\_pro/voice/detail\\_23469.html](https://www.tamagawa.jp/graduate/teaching_pro/voice/detail_23469.html)

11月23日(土)に第2回フォローアップ研修を対面で行った。

修了生プレゼンテーションでは、上原 孝枝氏と鎌田 綾香氏に近況報告や SM へのアドバイス等をいただいた。

現職 14 期の上原氏からは、「教職の道—挑戦と成長—」をテーマに、教員生活の経験・指導主事としての経験・海外派遣研修について、仕事内容やそこで得た印象的な言葉等について報告していただいた。

SM11 期の鎌田氏からは、「5 年間の道のりとこれから目指すもの」というテーマで、図書館指導・学校での取組・授業づくりと実践から、現在の課題とこれから目指すものについて報告していただいた。

グループディスカッションでは 8 グループに分かれ、SM・現職・修了生・教職大学院の教員等の立場から様々な意見の活発な意見交換が行われた。

松本 修教授からは、「墓石名」をテーマに、著名な墓石名について話されるとともに、参加者が考えた墓石名を活用した学びについて研究報告をしていただいた。

本フォローアップ研修については教職大学院の HP でも紹介している。

[https://www.tamagawa.jp/graduate/teaching\\_pro/voice/detail\\_24099.html](https://www.tamagawa.jp/graduate/teaching_pro/voice/detail_24099.html)

令和 7 年 2 月 22 日(土)に公開 FD・研修会を行った。

修了生実践研究発表では、佐藤氏と鈴木氏に発表していただいた。

SM7 期の佐藤 麻野氏は、「第 6 学年での実践『海のいのち』」について「海のいのち」における読みの交流の分析から、「語り手」に着目した読みを促す学習デザインについて発表していただいた。

SM11 期の鈴木 真樹氏は、「第 3 学年での実践『ちいちゃんのかげおくり』」について素朴な疑問をつなげ、探究の質を高める工夫から、自己の「問い」を追求できる学習者の育成を目指す学習デザインについて発表していただいた。

ワークショップでは、西田 太郎氏が提案者となり「これからの読みの交流・実践と研究」について、文学の読みの学習が抱える課題から意見交換が行われた。

松本教授からは、「私の研究・教育史」をテーマにこれまでの研究をたどって、講演していただいた。

座談会では、SM5 期の橋本 祐樹氏による司会のもと松本教授へのインタビューと参加者からの質問を受ける形で進められた。

本公開 FD・研修会については教職大学院の HP でも紹介している。

[https://www.tamagawa.jp/graduate/teaching\\_pro/voice/detail\\_24462.html](https://www.tamagawa.jp/graduate/teaching_pro/voice/detail_24462.html)

毎年のフォローアップ研修が、教職大学院 OB・OG の学びの継続として、また年次の異なる大学院生のつながりを作る場として機能していることが、本年度も引き続き確認された。日頃の課

題を交流しあうグループディスカッションも好評であった。

また、今年度は新たな取組として、2月に公開FD・研修会を行った。リーフレットを作成してHPに掲載したこともあり、参加者が増加した。

教職大学院の教員による研究報告は、報告後に意見交換を実施することで、本学の講義の質を高めるFDとしての効果も引き続きねらっている。

教職大学院OB・OGの実践報告は、現場に出てからの修了生たちが教職大学院での学びをどのように活かしているのか、またどういった点に悩み克服しようとしているのかを、教職大学院の教員が知るができる貴重な場となっている。グループディスカッションにおいても、教職大学院の講義がOB・OGたちのその後の仕事にどのように役立っているか、また今後どのような講義が求められているか等を確認することのできる貴重な機会となっている。この場の議論をもとに、各教員も自分たちの講義の内容と方法との改善に努めている。

また、OB・OGからのアンケートについては、昨年度からGoogleフォームを利用して意図的に蓄積していく取組を開始した。

## 2) 課題

OB・OGの参加者がやや少ない点が引き続き課題となっている。Googleドメインによるメール連絡網や、有用リソースの整備等によって、修了した院生とのつながりが保てる工夫をしていくことが必要である。

## (2) FD 授業研究について

5月30日(木)(成川 敦子教授)、11月28日(木)(小泉 晋一教授)の2回の授業研究を実施した。

### 1) 成果

◆令和6年5月30日(木)15:00~16:40(担当:成川 敦子教授)

「教育相談と特別支援教育の実践と課題」

行動問題への理解と支援～行動の随伴性の視点から～

学校には様々な支援の必要な子どもたちがいる。これらの子どもたちへの対応法として、応用行動分析を学び、具体的な事例に基づき、事例の客観的把握、対応策の案の作成ができるように、学校における教育相談を実践的に学んだ。

今回の授業では、「問題行動への支援」について具体的な事例に基づいて発表し、お互いに検討・考察する形で展開された。

授業後には、教員による事後検討会が実施され、次のような意見交換がなされた。

- ・「行動問題」という点から、表出する行動について考えさせることは教育現場で様々な児童生徒に寄り添う立場の教員にとって、特別支援教育の枠に限らず大切な視点である。
- ・しっかりとした理論に基づき、解説をし、そのあと具体的な事例研究をしていたので、理論と実践の往還ができていた。
- ・重度の事例ではあったが、通常の学級でも似たようなケースはいくらでもあるので、教壇に立った時に応用が利くと考えられる。

- ・事例を検討してみることで、対応が十分に可能であることを実感できた。練習問題としていくつか模擬事例を検討することによって、ABAのやり方が身についていくように思った。

◆令和6年11月28日（木）15:00~16:40（担当：小泉 晋一教授）

「学校カウンセリングの技法」—学校危機対応と学校カウンセリング—

現職院生からの事例報告をもとに、2名の院生でのロールプレイをとおして具体的にカウンセリングを学ぶ展開であった。

ロールプレイ後は小泉教授の豊富な知識と経験をもとにした指導が行われ、具体的に技法が検討された。

授業後には、教員による事後検討会が実施され、次のような意見交換がなされた。

- ・授業では、ロールプレイ後の振り返りが印象的だった。学生は、自分の行為をしっかりと振り返り、思考の深まりもあった。
- ・前期の理論をベースに、後期はロールプレイングを用いて実践的な対応を経験できる機会として、学生らにとっては学びが多いのではないかと思われた。
- ・受講者2名（当日の欠席1名を除く）という限られた状況の中で、対話的な環境が整えられ、意義ある交流がなされていた。

例年通り、協議会においては、①「理論と実践の往還」のための授業づくりや教材開発の具体的な方策について、②SMの実践経験不足を補う指導法について、③現職院生の実践経験を活用した指導法、等々についての議論が一層活発になされた。

## 2) 成果と課題

- ・教員が毎年、授業の研鑽に努めていることが、院生たちに良い印象を与えている。
- ・対面での授業が実施できて良かった。今後も定期的に継続していく予定である。

## (3) 各教員に対する調査について

FDの一環として、SMや現職院生の学修理解等に関して、各教員に対する所感を調査した。調査結果は教職大学院会で公表され、データをもとに議論がなされた。

### 1) 相互授業参観について

- ・各教員の授業を可能な範囲で相互に自由に参観し、その際の学びや感想等を記録として残すようにした。互いの学びを蓄積することによって次年度へ活かしている。

## (4) FD委員会における情報交換

毎月の教職大学院会終了後にFD委員会を開催し、院生に関する諸問題と指導方針、教員間の連携、カリキュラムや組織のあり方について検討している。

### 1) 成果

例年、課題をかかえている院生への教員の対応、学校課題研究の進捗状況やその適切な指導

のあり方、院生が学修しやすい環境の構築、課題の出し方についての基本的な考え方の確認等々についての情報交換がなされ、それぞれの場面での方策についてよりよいあり方を検討することができているが、今年は特に大きな問題は見当たらなかった。

## 2) 課題

特に大きな課題はない。今後も定期的に継続していく予定である。

## <脳科学研究科>

### (1) 玉川大学脳科学ワークショップの開催

令和7年3月2日から4日にかけて、小田原市の天成園 小田原別館にて「玉川大学脳科学ワークショップ2024」を開催した。脳科学研究科および関連研究科の教員17名、脳科学研究科の大学院生7名、脳科学研究所の研究員19名、外部講師2名の計45名が参加した。

ワークショップの1日目は、教員による研究室紹介、研究員による研究発表が行われ、その後、ポスター発表が実施された。2日目は大学院生による口頭発表（発表15分、質疑応答15分）が行われ、午後には再び教員による研究室紹介に続き、理化学研究所ユニットリーダー・豊川航氏による講演「多本腕バンディット問題を用いた社会的学習、集合知、文化進化の研究」が行われた。その後、脳科学研究所の松元健二教授がプロジェクトマネージャーを務める「ムーンショット9」のプロジェクト（『脳指標の個人間比較に基づく福祉と主体性の最大化』）に関する企画ワークショップが開催された。最終日には、慶應義塾大学の牧野浩史氏による講演「知能を支える脳の動作原理」が行われ、最後にワークショップにおける発表に対する授賞式を実施して閉会した。

昨年度と同様に同会場での開催となったが、小田原駅直結というアクセスの良さに加え、会場設備も充実していることから、今後も継続して本会場での開催を検討している。

### (2) ピアレビューの実施

令和6年度中（令和7年3月4日～6日）に実施した「玉川大学脳科学ワークショップ2024」および令和6年8月9日に実施した中間発表における大学院生の研究発表をもとに、擬似ピアレビューを実施した。本レビューでは、各大学院生の発表内容に対し、脳科学研究科の教員1名をエディターとして割り当て、個別に対応した。レビューは以下の手順で行われた。まず、大学院生自身が発表時に寄せられた質問を整理し、それに対する返答を文章として作成する。次に、担当エディターがその内容を確認し、必要に応じて追加の質問を行うことで、研究内容への理解をさらに深めることを促した。本年度のピアレビューは、令和7年6月中の完了を予定している。

この取り組みにより、ワークショップや中間発表における質疑を記録として残し、時間をかけて再考する機会を設けることができた点は、大学院生の研究理解の深化において有意義であった。また、ワークショップや中間発表が一過性の発表機会にとどまらず、継続的な教育的効果をもたらす点においても重要な取り組みである。さらに、ピアレビューの内容は研究科会にて共有されるため、他の教員の指導力向上にも資するものと考えられる。

一方で、大学院生によってレビューの進捗に差が生じていることが課題として挙げられた点については、ピアレビュー内容に時間をかけるのではなく、期日を守ってそれまでにまとめることを重視した方がよいという意見があったため、ワークショップ終了後3ヶ月以内に完了することに決めた。

### (3) 研究環境整備に関する需要の調査と整備

研究センター棟および Human Brain Science Hall の大学院生環境の整備を行った上で、今後の環境整備計画にフィードバックした。

(4) 研究科評価アンケート

履修者が1～2名である科目が多いため、匿名性を確保するために、研究科全体に対する研究科評価アンケートを実施した。

### Ⅲ 教員研修

#### 新任教員研修会

令和7年度採用の新任教員（助教以上）13名に対し、大学FD委員会の主催により、関係各部の協力・連携のもと研修会を実施した。この研修会は、今年度で23回目の開催となった。

日 時：令和7年3月14日（金）9：30～17：10

場 所：大学教育棟 2014 610教室

対 象：令和7年度採用教員

研修目的：玉川学園の建学精神、玉川大学の教育理念・目的を理解する。

専任教員としての業務に必要な知識を得る。

到達目標：玉川学園の建学精神、玉川大学の教育理念・目的を他者に説明することができるようになる。

専任教員としての業務を理解し、遂行することができるようになる。

#### （1）研修プログラム内容

09:30	開始／研修説明	教学部教務課
09:35	新任教員自己紹介	新任教員
09:50	講演「これからの大学教員に必要なこと」	伊従 記章 教学部長
10:40	休憩	
10:55	大学教員の勤務について	人事部人事課
11:15	教学事項について	教学部教務課・授業運営課・学務課
12:00	昼食	
13:00	本学の ICT を活用した教育	ICT 教育研究センター
13:40	教学システム（UNITAMA）について	教学部 授業運営課・教務課
14:00	Notes システムと Notes 掲示板の活用	総務部情報基盤システム課
14:30	休憩	
14:40	講演「玉川大学の教育理念」	小田 眞幸 高等教育担当理事
15:30	学生支援について	学生支援センター
15:50	休憩	
16:00	コンプライアンスについて	監査室
16:20	研究公正の取組について	研究推進事業部
16:40	質疑応答	
16:50	各種事務手続き	教学部教務課
	①写真撮影（キャンパスカード用）	人事部人事課
	②契約内容の説明等（講師および助教の方のみ）	
17:10	研修会終了	

- 【動画視聴】 個人情報保護方針 総務部 総務課  
 ハラスメント防止研修 人事部 人事課（顧問弁護士）
- 【任意研修】 キャンパス・ツアー 3月26日（水）13：00～15：30

（２）配付資料・参考資料

資料	担当
令和7年度新任教員研修会<研修プログラム>	教学部 教務課
令和7年度新任教員研修会 名簿	
これからの大学教員に必要なこと	伊従 記章 教学部長
大学教員の勤務について Web 勤怠操作ガイド 私学共済制度 新規加入者向けリーフレット	人事部 人事課
学校法人玉川学園組織機構、玉川大学の概要、担当業務等について 学校法人玉川学園組織機構図(令和7年4月1日施行) 教学部の役割(学校法人玉川学園組織事務分掌細則) 教員ハンドブック『学部運営組織』抜粋資料	教学部 教務課
令和7年度 新任教員研修会 教務事項 「授業を通して修得できる力」のコモン・ルーブリック 令和7年度 年間授業計画 令和7年度授業実施について 高等教育機関所属教員対象 4月1日教授会・研究科会	教学部 授業運営課
ご着任にあたって 研究室・内線番号 各種事務手続きについて 令和7年度 個人研究費説明会について	教学部 学務課
情報倫理－教員としての責任－ 玉川大学の ICT を活用した教育	ICT 教育研究センター
教学システム UNITAMA について － 掲示、担当授業、履修、出欠管理、シラバス、学生ポートフォリオ－ UNITAMA 教員業績について ～目的と操作方法～	教学部 授業運営課・教務課
WebNotes について	総務部 情報基盤システム課
玉川大学の教育理念	小田 眞幸 高等教育担当理事
学生支援について	学生支援センター

資料	担当
学校法人玉川学園のコンプライアンス方針と教職員の行動について	監査室
令和7年度研究公正の取り組みについて	研究推進事業部

### (3) 実施の成果

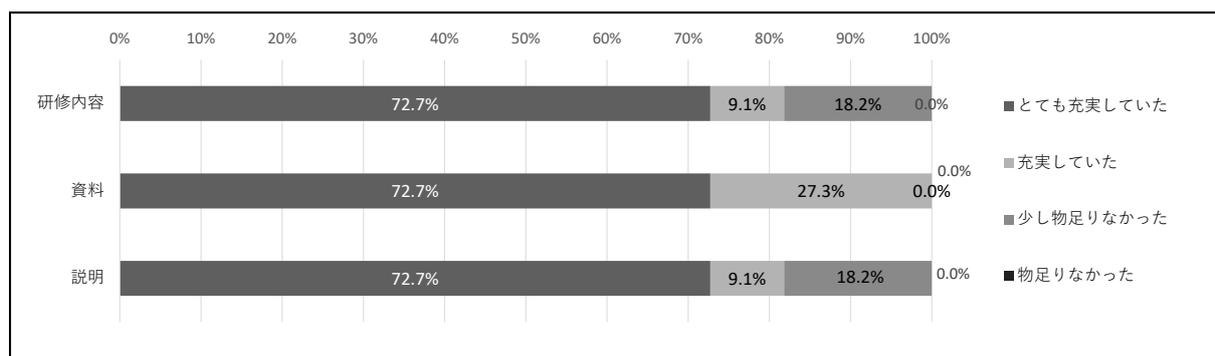
本学における教育について参加者に理解を促すため、2つの講演「玉川大学の教育理念」、「これからの大学教員に必要なこと」を実施した。これにより、専任教員としての業務に必要な教学事項や学生指導だけではなく、大学で働く教員に期待されていること、本学で求められる教育が何かを伝えることができた。

また、大学教員の勤務や教学事項、ICT等について担当部署より説明し、勤務や業務について採用後に必要となる知識を提供することができた。なお、「学校法人玉川学園における個人情報保護の取組みについて」、「ハラスメント防止研修」は動画視聴による研修を実施し、教育・研究機関に勤務する教職員としての自覚を促すことができた。

キャンパス・ツアーについては、任意参加の研修であったため、13名中1名のみでの参加であった。約2時間半をかけて、大学教育棟2014等の校舎やSci Tech Farm TN Produce (LED農園)、Human Brain Science Hall、DTS (ドキュメントテックステーション)などを巡り、本学の理念や教育に関わる施設への理解を深めた。

受講者から提出された研修受講報告書では、以下のとおり研修内容と説明の肯定回答は81.8%、資料の肯定回答が100%であり、参加者のニーズに沿った充実した内容の研修を実施することができたと考えている。

#### ＜研修受講報告書 —内容、資料、説明について—＞



「本研修について、受講して良かった点がありましたら、ご記入ください」という受講報告書での質問に対しては、以下の回答があった。

- ・玉川大学の雰囲気について知ることができてよかった。
- ・高等教育担当理事の講演が良かった。
- ・各説明及び資料が簡潔にまとめられており、受講者への配慮を感じた。
- ・事務的な内容から実際の授業の内容まで、細かく具体的に紹介いただき、大変勉強になった。

- ・高等教育担当理事のお話を通して、玉川学園の理念をより理解できたと同時に、理事ご自身の玉川に対する熱い思いも感じ、玉川学園で勤務する覚悟を新たにすることができた。
- ・全体的なシステムなどの確認や今までとの違う点を理解できたことと、高等教育担当理事のお話を聞いたことがよかった。
- ・入職前に必要な情報と入職してからどこへ問い合わせれば良いのかが、とても分かりやすく提示されていたことで、満足感のある研修だった。
- ・理路整然と凝縮していただき、感謝しかない。
- ・玉川学園や大学の全体像がわかり、Notesの重要性など、これまで理解が不足していた点を補うことができた。資料も大変丁寧に作っていただき、とても役立った。

受講報告書の回答結果からも本研修会の目的・到達目標は、達成できたと評価できる。次年度に向けて、より本研修会の質が向上するよう改善に努める。



## 参 考 资 料

## 参考資料 1. 大学 FD 委員会の議事内容

---

### 第 1 回大学 FD 委員会

- 日 時 : 令和 6 年 5 月 16 日 (木) 17:00~17:22
- 場 所 : 大学研究室棟 B107 会議室
- 議 案 : (1) 年間開催日程に関する件  
(2) FD 研修会等計画に関する件
- 報 告 : (1) FD 活動計画の提出について  
(2) 令和 5 年度 特別学期 (ウィンターセッション) の授業アンケート結果について  
(3) 学生による授業アンケート (春学期) の実施について  
(4) 「令和 5 年度 ファカルティ・ディベロップメント活動報告書」の配付について

### 第 2 回大学 FD 委員会

- 日 時 : 令和 6 年 7 月 11 日 (木) 17:00~17:51
- 場 所 : 大学研究室棟 B107 会議室
- 議 案 : (1) 各学部 FD 研修会等計画に関する件
- 報 告 : (1) 全学部対象の授業参観の周知方法について  
(2) 学生による授業アンケートの期中の集計結果について  
(3) 学生による授業アンケート (期末) の実施について  
(4) 学生による授業アンケート (特別学期) の実施について  
(5) 令和 5 年度 大学教育力研修受講アンケート  
(今後研修会で取り上げてほしいテーマ) 回答について  
(6) FD 研修会等計画の変更について

### 第 3 回大学 FD 委員会

- 日 時 : 令和 6 年 9 月 11 日 (水) 14:58~15:10
- 場 所 : 大学教育棟 2014 793 会議室
- 議 案 : (1) 春学期授業アンケート結果ならびに授業改善の取組みに関する件
- 報 告 : (1) 春学期授業アンケートの集計結果レポート (授業別) の全学部配付について  
(2) 特別学期の授業アンケート結果について

## 第4回大学FD委員会

- 日時 : 令和6年11月15日(金) 17:00~17:45  
場所 : 大学教育棟 2014 793 会議室  
議案 : (1) 大学教育力研修実施計画に関する件  
(2) 令和7年度 授業アンケートに関する件  
報告 : (1) 大学FD研修会「非常勤教員対象研修会」の実施について  
(2) 秋学期 授業アンケートの実施について

## 第5回大学FD委員会

- 日時 : 令和7年1月24日(金) 17:00~17:20  
場所 : 大学教育棟 2014 793 会議室  
議案 : (1) 新任教員研修会実施計画に関する件  
報告 : (1) 大学教育力研修実施計画について  
(2) 学生による授業アンケート(期中)の集計結果について  
(3) 学生による授業アンケート(特別学期)の実施について  
(4) 令和6年度 ファカルティ・ディベロップメント活動報告書作成スケジュールについて

## 第6回大学FD委員会

- 日時 : 令和7年3月3日(月)~7日(金)  
場所 : メール審議  
議案 : (1) 各学部FD研修会等計画の変更に関する件【農学部】

## 第7回大学FD委員会

- 日時 : 令和7年3月26日(水) 10:04~11:04  
場所 : 大学教育棟 2014 793 会議室  
報告 : (1) 令和6年度 各学部FD活動報告について【各学部】  
(2) 令和6年度秋学期 授業アンケートの実施結果について【教学部】  
(3) 令和6年度大学FD研修会「非常勤教員対象研修会」の実施報告について【教学部】  
(4) 令和6年度 大学教育力研修(2月21日)の実施報告について【教学部】

## 参考資料 2. 大学院 FD 委員会の議事内容

### 第 1 回大学院 FD 委員会

- 日時 : 令和 6 年 5 月 22 日 (水) 17:00~17:11  
場所 : オンライン (Microsoft Teams)  
議案 : (1) 年間会議開催日程に関する件  
(2) FD 研修会等計画に関する件  
報告 : (1) 各研究科FD 活動計画の提出について  
(2) 「令和5年度 ファカルティ・ディベロップメント活動報告書」の配付について

### 第 2 回大学院 FD 委員会

- 日時 : 令和 6 年 7 月 17 日 (水) 17:00~17:27  
場所 : オンライン (Microsoft Teams)  
議案 : (1) 各研究科 FD 研修会等計画に関する件  
報告 : (1) 令和5年度 大学教育力研修受講アンケート  
(今後研修会で取り上げてほしいテーマ) 回答について

### 第 3 回大学院 FD 委員会

- 日時 : 令和 6 年 12 月 11 日 (水) 9:30~10:04  
場所 : オンライン (Microsoft Teams)  
議案 : (1) 各研究科 FD 研修会等計画の中間報告に関する件  
(2) 大学教育力研修実施計画に関する件  
報告 : (1) 大学 FD 研修会「非常勤教員対象研修会」の実施について  
(2) 令和6年度 ファカルティ・ディベロップメント活動報告書作成スケジュール  
について

### 第 4 回大学院 FD 委員会

- 日時 : 令和 7 年 3 月 24 日 (月) 10:30~11:09  
場所 : オンライン (Microsoft Teams)  
議案 : なし  
報告 : (1) 令和6年度 各研究科FD活動報告について  
(2) 令和6年度 大学FD研修会「非常勤教員対象研修会」の実施報告について  
(3) 令和6年度 大学教育力研修 (2月21日) 実施報告について

## 参考資料3. ユニバーシティ・スタンダード科目「授業アンケート」様式

123456789 科目A(教員B)

### 授業アンケート

このアンケート調査は、学生の皆さんの視点から授業の状況を確認し、授業の改善に結びつけることを目的として実施するものです。入力にあたっては、この授業を振り返り、責任ある回答をしてください。

なお、このアンケートの回答は匿名化して処理するため、教員が回答から個人を特定することはできません。また、回答内容は授業改善のみに活用し、成績評価等には一切影響しませんので、率直に回答してください。

#### あなたの意欲や理解について

1. 授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか (必須)  
 4時間以上  3時間~4時間未満  2時間~3時間未満  1時間~2時間未満  1時間未満
2. 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか (必須)  
 とてもそう思う  そう思う  どちらともいえない  そう思わない  全くそう思わない
3. 授業に意欲的に取り組みましたか (必須)  
 とてもそう思う  そう思う  どちらともいえない  そう思わない  全くそう思わない
4. 授業の内容に興味は持てましたか (必須)  
 とてもそう思う  そう思う  どちらともいえない  そう思わない  全くそう思わない
5. 授業の内容を十分に理解できましたか (必須)  
 とてもそう思う  そう思う  どちらともいえない  そう思わない  全くそう思わない
6. シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか (必須)  
 とてもそう思う  そう思う  どちらともいえない  そう思わない  全くそう思わない
7. 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか  
\*各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載 (必須)  
 とてもそう思う  そう思う  どちらともいえない  そう思わない  全くそう思わない

#### 教員の授業の進め方について

8. 話し方や説明は分かりやすかったですか (必須)  
 とてもそう思う  そう思う  どちらともいえない  そう思わない  全くそう思わない
9. 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか (必須)  
 とてもそう思う  そう思う  どちらともいえない  そう思わない  全くそう思わない
10. 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか (必須)  
 とてもそう思う  そう思う  どちらともいえない  そう思わない  全くそう思わない
11. 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか (必須)  
 とてもそう思う  そう思う  どちらともいえない  そう思わない  全くそう思わない
12. 授業時間を有効に使っていましたか (必須)  
 とてもそう思う  そう思う  どちらともいえない  そう思わない  全くそう思わない

13. 質問に適切に対応してくれましたか (必須)

- とてもそう思う  そう思う  どちらともいえない  そう思わない  全くそう思わない

14. 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか (必須)

- とてもそう思う  そう思う  どちらともいえない  そう思わない  全くそう思わない

15. 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか (必須)

- とてもそう思う  そう思う  どちらともいえない  そう思わない  全くそう思わない

#### 自由記述欄

その他、意見、感想等を記述してください【200字以内】

**授業改善につながる建設的な意見をお願いします。授業と直接関連しない意見は控えてください。  
特に、教員個人への誹謗中傷や差別的な記述は絶対にしないでください。**

アンケートは以上です。最後に右下の「回答」ボタンをクリックしてください。

なお、回答期間中は修正して再提出が可能です。

ご協力ありがとうございました。

[回答](#)

---

※ 期中は設問1～7および自由記述のみ実施した。

## 参考資料 4. 玉川大学 FD 委員会規程

(平成 15 年 4 月 1 日 制定)

(平成 21 年 4 月 1 日 改正)

(平成 31 年 4 月 1 日 改正)

(目的)

**第 1 条** 玉川大学（以下「本大学」という。）教員の教育研究活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的として、大学FD（ファカルティ・ディベロップメント）（以下「FD」という。）委員会（以下「本委員会」という。）を置く。

(組織)

**第 2 条** 本委員会は、委員長、委員、事務担当をもって構成する。

- 2 前項の委員長は教学部長とする。
- 3 委員は、各学部のFD担当があたる。
- 4 委員等は、毎年度当初、学長がこれを委嘱する。
- 5 委員長が必要と認めたときは副委員長を置くことができる。
- 6 本委員会には学部ごとの分科会を設けることができる。
- 7 前項による分科会のまとめ役及び委員は学部長が選任する。

(任期)

**第 3 条** 委員の任期は 1 か年とする。ただし、再任を妨げない。

(運営)

**第 4 条** 本委員会は、委員長が招集・開会し、議長となる。

2 委員長が必要と認められた場合は、委員以外の教職員の出席を求め、意見を聴取することができる。

(審議事項)

**第 5 条** 本委員会は、次の事項を審議する。

- (1) 教育研究活動改善の方策に関する事項
- (2) 初任者及び現任者の研修計画の立案・実施に関する事項
- (3) 学生による授業評価の実施、結果分析及びフィードバックに関する事項
- (4) FDに関する教員への各種コンサルティングに関する事項
- (5) 教員のFD活動の指針に関する冊子及びFD活動報告書の刊行
- (6) 部会からの報告・審議に関する事項
- (7) その他FDに関連する事項

(分科会)

**第 6 条** 各分科会は、FD担当が取りまとめ、本委員会に検討・実施事項を報告しなければならない。

- 2 各分科会にはFD活動を円滑に進めるため、FDer（ファカルティ・ディベロッパー）（以下、「FDer」）を置く。FDerはFD担当が兼ねることができる。

(答申)

**第7条** 委員長は、本委員会の審議結果を学長に答申しなければならない。

(実施事項の決定)

**第8条** 前条の答申内容の実施については、大学部長会の議を経て学長が決定する。

(実施事項の運用)

**第9条** 前条により決定した実施事項に関する実際の運用に関しては、教務委員会及び教育研究活動等点検調査委員会との調整を図りながら検討、実施するものとする。

(事務主管)

**第10条** 本委員会に係る事務主管は、教学部が行う。

附 則

この規程は、平成 15 年 4 月 1 日から施行する。

附 則

この規程は、平成 21 年 4 月 1 日から施行する。

附 則

この規程は、平成 31 年 4 月 1 日から施行する。

## 参考資料 5. 玉川大学大学院 FD 委員会規程

(平成 19 年 4 月 1 日 制定)

(平成 29 年 4 月 1 日 改正)

(令和 4 年 4 月 1 日 改正)

(目的)

**第 1 条** 玉川大学大学院（以下「本大学院」という。）教員の研究教育活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的として大学院FD（ファカルティ・ディベロップメント）（以下「FD」という。）委員会（以下「本委員会」という。）を置く。

(組織)

**第 2 条** 本委員会は、委員長、委員、事務担当をもって構成する。

2 前項の委員長は教学部長とする。

3 委員は、各研究科のFD担当があたる。

4 委員は、毎年度当初、学長がこれを委嘱する。

5 委員長が必要と認めたときは副委員長を置くことができる。

6 本委員会には研究科（専門職学位課程は専攻）ごとの分科会を設けることができる。

7 前項による分科会のまとめ役及び委員は研究科長（教職大学院科長含む）が選任する。

(任期)

**第 3 条** 委員の任期は 1 か年とする。ただし、再任を妨げない。

(運営)

**第 4 条** 本委員会は、委員長が招集・開会し、議長となる。

2 委員長が必要と認められた場合は、委員以外の教職員の出席を求め、意見を聴取することができる。

(審議事項)

**第 5 条** 本委員会は、次の事項を審議する。

(1) 教育研究活動改善の方策に関する事項

(2) 初任者及び現任者の研修計画の立案・実施に関する事項

(3) 学生による授業評価の実施、結果分析及びフィードバックに関する事項

(4) FDに関する教員への各種コンサルティングに関する事項

(5) 教員のFD活動の指針に関する冊子及びFD活動報告書の刊行

(6) 分科会からの報告・審議に関する事項

(7) その他FDに関連する事項

(分科会)

**第 6 条** 各分科会は、本委員会に検討・実施事項を報告しなければならない。

(答申)

**第 7 条** 委員長は、本委員会の審議結果を学長に答申しなければならない。

(実施事項の決定)

**第8条** 前条の答申内容の実施については、大学院研究科長会の議を経て学長が決定する。

(実施事項の運用)

**第9条** 前条により決定した実施事項に関する実際の運用に関しては、研究科会及び教育研究活動等点検調査委員会との調整を図りながら検討、実施するものとする。

(事務主管)

**第10条** 本委員会に係る事務主管は、教学部が行う。

附 則

この規程は、平成19年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成29年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、令和4年4月1日から施行する。



令和6年度 ファカルティ・ディベロップメント活動報告書

玉川大学 大学FD委員会・大学院FD委員会

令和7年6月 発行

〒194-8610 東京都町田市玉川学園 6-1-1